大正八年六月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十四年第六號
第三百七十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

島村博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

腦病治すは今此時!!

此頃の氣候は腦神經病の重くなる時。

腦病良藥 健腦丸で確治する時。

特長

平素から腦の惡い人腦を過勞する人々は本劑を必ず常用あれ逆上を下げ便通をよくし恐る可き腦充血を治し、中風卒中を未發に防ぎ記憶力を増進する特効あり、

主効

▲腦充血 ▲頭痛
▲腦膜炎 ▲耳鳴
▲逆上症 ▲中風
▲神經痛 ▲眩暈
▲腦貧血 ▲健忘
▲憂鬱 ▲便秘
▲卒中 ▲癲癇

藥價

半週分 四十錢
一週分 七十錢
二週分 一圓卅錢
三週分 一円八十錢
五週分 二円八十錢
十週分 五圓

本舖 大阪 東京 丹平商會

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

!!天地有情の姉妹篇出づ!!

土井晩翠先生著

最新刊

詩集 曙光

洋装函入
天金装釘美
定價壹圓貳拾錢
郵税四錢

祖國の天職を歌ひ青春の意氣を讃し英雄を弔し天才を痛み現時の活題目を捕へて著者滿腔の磊塊を吐くもの……

血あり情あり涙ある青年の心絃に共鳴を起すこと疑なきもの……

東亞詩壇の名作として發行以來二十年の今日益々讀者の數を増す

・・・・・・・天地有情の姉妹篇

東京日本橋 金港堂
仙臺大町 藤原金港堂
振替東京一〇六四四

◎新刊發賣！(六月五日)◎

▼有島武郎著作集▲

第九輯 或女 後編

有島生馬氏装幀

寫眞版一葉
四六判三百餘頁
定價 金壹圓
送料八錢

畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。若しその底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢てこの冒險を企てた……………著者

◆ジャック、ロンドン著◆堺利彦譯◆有島武郎跋

野性の呼聲

第四版
定價八拾錢
送料六錢

◆柳宗悦著

宗教とその眞理

再版
定價貳圓參拾錢
送料八錢
滿鮮拾四錢

■有島武郎著作集■

第八輯 或女 前編

第十六版
定價九拾五錢
送料八錢

第七輯 小さき者へ

第十六版
定價五拾五錢
送料六錢

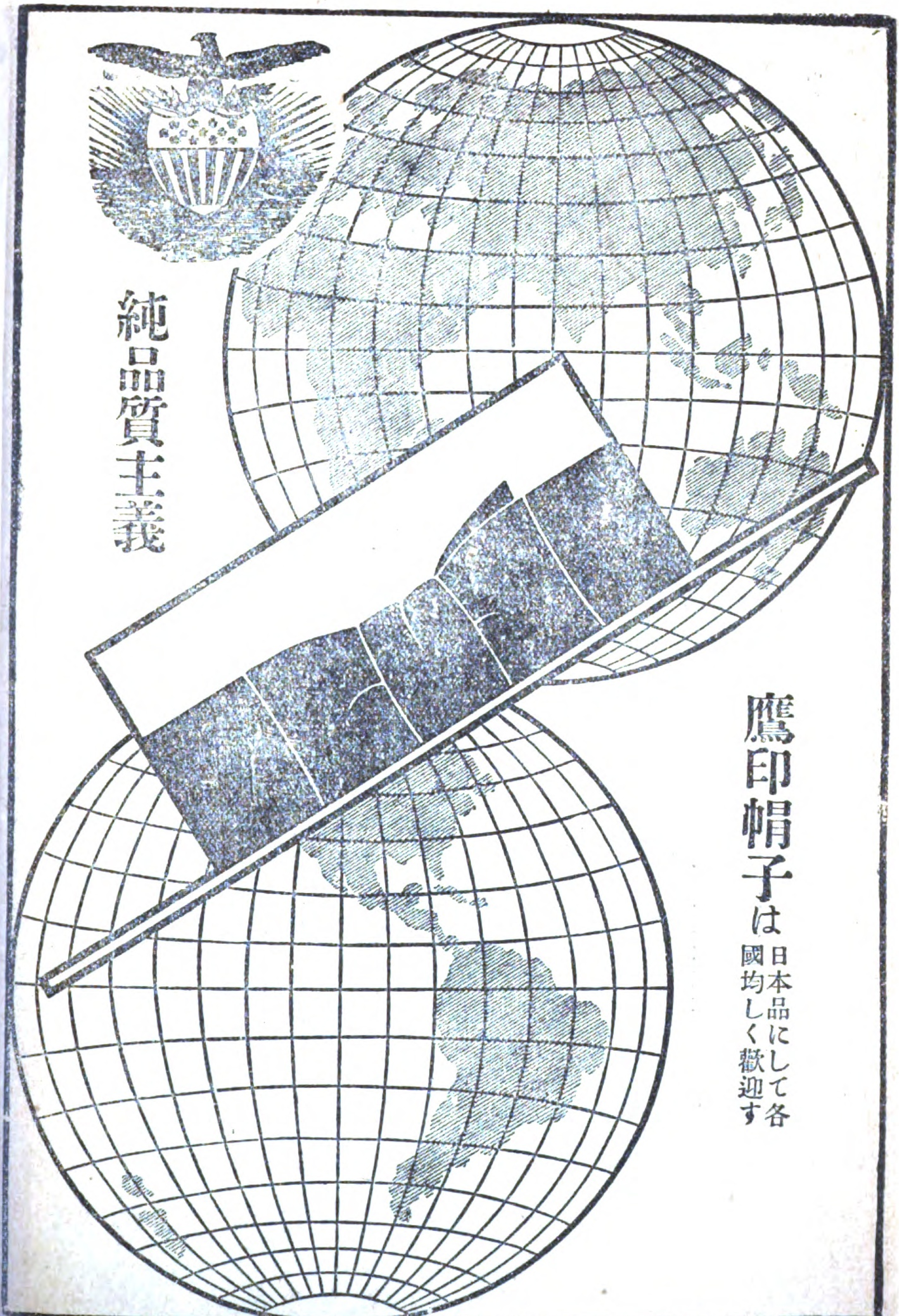
第六輯 生れ出る惱み

第二十一版
定價八拾錢
送料六錢

東京牛込區神樂町二丁目二十一番地
叢文閣
振替貯金口座東京四二八八九番



中央公論第卅四年六月號目次


純品質主義
鷹印帽子は
日本品にして各國均しく歡迎す



LES PARAPLUIES,
BY RENOIR

北京學生團の行動を漫罵する勿れ

去月四日、北京大學を始め高等諸學校の學生團が、巴里に於ける山東問題の失敗に激し、賣國の罪を數へて、曹汝霖君の私邸を焚き章宗祥君に重傷を負はしたと云ふ一大珍事は、他處事ながら吾人の太だ遺憾とする所である。

但だ彼等が曹章諸君の罪を鳴らすの餘、山東の直接收回を叫び、延いて排日の聲を高むるの故を以て、我國の新聞などの頻に之等學生諸君の行動を漫罵する者あるに至ては、吾輩不幸にして之に與みすることが出來ぬ。

吾人は決して彼等の行動を許す可らざるの暴擧でないとは云はない。併し乍ら吾人は彼等の行動を評するに方つて、次の二點に誤つては不可いと思ふ。一は曹章一派の青年政客を親日派と觀ることである。二は學生に依つて代表せらるる中華民衆の排日を目して日本國民共者に對する不拔の反感と爲すことである。

曹章諸君は成程從來親日派として知られて來た。併し彼等の所謂親日的行動は、どれだけ日本國民の眞の要求を充たしたか。彼等が我が官僚軍閥乃至財閥の親友であつたことは疑ないが、更に日本國共者の友人であつたかどうかは尙ほ攻究の餘地はあらう。若し夫れ中華民衆一般の排日に至ては、官僚軍閥乃至財閥に依て代表せらるゝ日本に對する反感に過ぎずして、之が爲に如何に多數の國民が迷惑したかは、吾人が多年内に在て彼等の對支政策を事毎に攻擊批難し來つたことに觀ても明であらう。隣邦の一般民衆は、恐く我國に「侵略の日本」と「平和の日本」とあることを知るまい。若し知つたら彼等は直に排日の聲を潛むる筈である。

故に支那に於ける排日の不祥事を根絕するの策は、曹章諸君の親日派を援助して民間の不平を壓迫する事ではない。我々自ら軍閥財閥の對支政策を拘制して、日本國民の眞の平和的要求を隣邦の友人に明白にする事である。之が爲に吾人は多年我が愛する日本を官僚軍閥の手より解放せんと努力して來た。北京に於ける學生團の運動は亦此點に於て全然吾人と共志向目標を同じうするものではないか。

願くは我等をして速に這の解放運動に成功せしめよ。又隣邦民衆の同じ運動の成功をも切に祈る所あらしめよ。官僚軍閥の手より解放されて始めて茲に兩國間の鞏固なる國民的親善は築かるべきである。從來の所謂親善は、實は却て本當の親善を妨ぐる大障礙であつた。

暴行の形を執つたからとて、吾人は彼等を難じたくない。左ればとて固より彼等の暴行を是認せんとする意思は毛頭ない。

中央公論



第卅四年第六號
六月號
第三百七拾號

對獨講和條約案を讀む

エム、エー、エル、エル、ビー　米田實

一

對獨講和條約案は完了した。ウエルサイユに入つた獨逸全權ランツオウ伯(外相)との今後の協議が如何に發展するにしても、誰か萬難を排して此處まで漕ぎ付けた三十國全權六十六名の多大なる勞苦を感謝せざるものがあらう。

顧みれば、豫備講和會議が巴里ケードルセイの外務省時計の間に開かれたのは一月十八日で、早や一百餘日を經過したのである。其間、難問蝟集し、到る所に盤根錯節を見たのであつた。此等は遂に兎も角も解決の途を得たのである。

尤も此解決に對して六十六全權が均等に其功罪を頒ち得ると言ふのでは無い。實を言ふと、時計の間の所謂「三十國參

列の最高會議」は形式的、儀式的のものとなつて、會合度數も稀少であつた。會議の全部は成る可く之を「報告會」化せんとし、討論やら、議論やらは能ふ限り之を制止する方針を執つて居た。之が爲めに、「會議を形式上に止めて、實際諸問題を、喫煙室、客間、カッフェの密談凝議に定めた」と言ふ彼の一九一三年巴爾幹戰講和のブカレスト會議の儀式外交を此大會議も學ふでは無い乎との非難さへ一部言論界に起つたのである。然らば實際の仕事は何者がやつた乎と言ふと、第一には五國會議があり、第二に十數箇の委員會があり、第三にウエルサイユの最高軍事會議があつた。右の內ウエルサイユの軍事會議は、獨墺土等の休戰條約履行監視、同休戰條約延期協議、洪牙利、巴爾幹、露西亞等の軍事的形勢研究及之に對する處置等を掌つたもので、講和條約其者には割合に關係も深くなかつた。之に重大な關係を持つたのは諸委員會と五國會議である。何分にも問題の範圍が全世界に亘り、且つ複雜を極めて居る爲め、之が取調決定には特殊の委員會が必要であつた。ソコデ開會より一週間の後に八箇の委員會が設置せられ、次で漸次增加せられたのである。其中には國際聯盟委員會あり、國際勞働立法委員會あり、國際河川委員會あり、國際經濟委員會あり、諸種の領土問題に關する委員會あり、戰爭責任調査委員會あり、戰爭損害委員會等もあつた。併し乍ら最も重要な地位を占めたのは英米佛伊日五國全權より成る會議であつた。此會議は委員會經由と否とを問はず、結局の處一切の重要問題を決定する機關で、卽ち講和會議の支配者であつた。而して此會議は問題の性質及其變化に準じて亦變幻自在の魔物たるを示した。五國各々二名宛より成る十人會議から四國丈けの「四外務大臣」ともなれば、三國丈けの三頭會議ともなつた。併し予は之に對して必らずしも彼の狂熱的愛國家（ショウビニスト）連程に不平を稱ふるものでは無い。歐洲局部の領土問題紛議に、今回大戰中に出兵もせず、今後歐洲戰亂に出兵するや覺束無い我國が其領土問題に容喙し、其渦中に投ずるが善いかは疑問である。又た支那委員の五國會議に對する陳述中我委員が席を外つしたことも、是れ恰もユーゴスラウ委員をして自在に

無遠慮に陳述せしめん爲めに四國會議の席を外つした伊太利委員の雅量と同樣のものでは無からう乎。然かも是非善惡は別として、斯かる事情の下に、將た其國力優秀なる理由の下に終始同會議の中心となつたのは米英佛であり、其代表人物たるウイルソン、ロイドヂヨルヂ、クレマンソーの三頭であつた。同時に今回完了の對獨講和條約案に就ては、其罪に對して最も其責任を負ひ、功に對して最も表彰を受るの資格あるもの、六十六名の全權中此三頭たる可きや言ふ迄も無い。

予は以上の事情を記憶に留めつゝ、之から江湖諸賢と共に對獨講和條約の內容を檢し、其孰れの點に於て成功し孰れの點に於て失敗した乎、之と將來の國際政局との關係如何なる乎を說き、以て世上豫備講和會議の功罪を斷せんとするの士の參考に供し度いと思ふのである。

二

併し對獨講和條約案を讀んで見ると、十五章十萬語、浩瀚にして然かもあらゆる大問題を網羅して、一言一語、深遠の影響を今後に及ぼすものが多い。之が全部に涉る仔細の解說は一片の論議に盡され得可くも無いのである。依つて予はウイルソン、ロイドヂヨルヂ諸氏が今回講和條約の目的なりと稱しつゝある「將來に於ける國際平和」てふ見地から、之を論評して見度いのである。

條約案は大體二部に分つことが出來る。國際聯盟に關する部分が其一であり、純粹に獨逸との和議即ち戰爭の直接なる跡仕末に屬する部分が其二である。

先づ第一章を占めて居る國際聯盟から見やう。予は之を檢して第一に其戰爭防止、國際紛議仲裁の制度に於て比較的に有効なる規定をなし得たこと、第二に國際聯盟制度、國際平和の維持の邪魔物と化し易き將來の民族發達、國民狀態の

變化に對應する良案が講ぜられた事を承認せぬ譯にはいかぬ。是れは洵にウイルソン、ロイドヂョルヂ諸氏の一大成功と稱す可きものではあるまい乎、先づ戰爭防止、國際仲裁に就ては從來種々の案があつた。其第一は一九一五年六月米國前大統領タフト氏、ハーヴード大學總長ローウエル氏等に依て創立せられた永久平和勵行協會案で、之は唯だ國際協議が行詰り、戰爭の危險ある場合に一應紛爭案件を仲裁々判若くは調停會議に附せんことを要求したのみであつた。右仲裁々判若くは調停會議が判決を下した後、紛爭國が之を遵奉せずとも、之に對して制裁を行ふ如き考へは無かつた。是れ一九一三年及一九一四年に國務卿ブライアン氏が歐洲及南中米の諸邦、東洋の支那等と締結した所謂開戰延期條約の如きものであつた。無論當時米國の國際聯盟論者も、唯だ「一應仲裁々判に附する丈けで無く、裁判の判決其者にも拘束力を與へん」ことを希望せ無かつた譯では無いが、之では列國が容易に加盟すまいと心配したのである。而して唯だ一切の紛議を一應仲裁に附することとならば、其内に國民の感情も冷へ、戰爭も避け得らるゝならんと自ら慰め、自ら樂觀したのであつた。之に反對した案は一九一五年二月下院議員ヂツキンソン氏等に依つて設立せられた英國々際聯盟協會の案で、更らに進んで、右判決に拘束力を與へんことを主張したが、之も條約其他法律的性質に關するものに對してゞあつて、其他に關する判定につきては矢張り躊躇の色を免れ無かつた。然るに今講和條約の規定を見るに單に「加入國は一切の國際紛議を國際仲裁若くは審議に附し且つ仲裁判決後三箇月を經過する迄開戰せざる可きを誓約し」た許りでなく、右「仲裁判決を履行し且つ仲裁判決に服從せる係爭國に對しては交戰せざることを協諾し」たのである。此規定に依ると國際紛議より生ずる戰爭の機會は絶滅・れては居無い、又た仲裁判決の効力を生ずることも確保されては居無いが、開戰は唯だ紛爭國双方共に判定に服從せ無かつた場合のみに限られて居る。然かも實際の問題として考ふるときは、大抵の判決は一方に不滿足を與ふる代りに他方には少くとも之に服從せしむる丈けの程度の滿足を與ふるでは

無からう乎。双方共不服從と言ふ場合は極めて僅少ではなからう乎。從つて戰爭の機會は容易に起らぬでは無からう乎。此規定は南阿出身で英國軍事內閣員の一であつた、例の悧巧なるスマッツ將軍が夙に世上に發表した案であり、英國委員之を採用提出しウイルソン、クレマンソー兩氏の同意を得たものである。予は從來の世論不徹底多かりしに照し講和會議の此擧に對して寧ろ其勇往邁進の事實を認めざるを得ぬのである。否な獨り之のみで無い、其聯盟加入の一國と之に加入せざる一國との紛爭の場合に、不加入國にも右規定適用に同意せんことを求め、之に同意せざれば之に經濟的ボイコット、交通防止を加へんとする如き、道德論としては兎角の評があるにしても、同制度の奏効を圖る上には有効な規定ではあるまい乎。

次ぎに國際聯盟制度、國際平和の維持の邪魔物と化し易き將來の民族發達、國民狀態の變化に對應する良策が講ぜられたと言ふのは外でもない、所謂「國際聯盟委任統治制」を採用せること及び聯盟の常久的機關を設定し以て國際關係の定時改變を定むる方法を講じたこと是である。先づ委任統治制から說かうに、予は二月十四日聯盟規約原案發表に會し下の如く所見を吐露したことがあつた、曰く一八一五年維也納公會の失敗は孰れの學者も異口同音に言ふ通り、政治家が奈翁戰爭の慘禍を嘗めて固くなり過ぎ、何物をも犧牲にし何等の變動を促す可き分子を壓迫し以て偏へに平和と秩序とを求めたのであつた。之が爲めに其後現はれた白耳義の分立、伊太利の統一等の如き「自由の慾」も「進步の望」も「民族主義の熱」に對しては其漏れ得可き出口を閉鎖したのである。是れ當時の平和聯盟を不幸短命ならしめた主因である。斯くの如く「分り切つた歷史的教訓」があり乍ら今回の豫備講和會議で過失を再びするやうなことがあつては面目無いと言ふのがウイルソン氏等の心事であつた。今回は是非人類社會の生長、發達、變化をも眼中に置いて懸らねばならぬ、就中將來に於ける民族主義の發達、之に伴ふ自治、及獨立民族の增加、國家間優劣狀態の撤廢若くは變更をも豫

じめ考へて置かねばならぬ。併し一國内の諸民族の將來を議することは、列國共に差當り許す可くも見えぬから、先づ今回大戰の跡仕末として戰勝國に併合せられんとしつゝあり、稍容喙の餘地がある發達及與國の領土に對して、永久固定を圖らず、將來の民族的獨立若くは他の國體變化の餘地を殘さうと言ふのがウイルソン氏等の決意であつた」と。然り、斯くの如くにして「聯盟委任に依る特定國の統治」は出現した。此地域は國際聯盟の下にあるのだから、將來其發達如何に依つては自治も獨立も出來るのである。即ち變動の餘地が存するのである。勿論予は講和會議が將來民族的發達の望なき南太平洋等の未開地域をさへ委任統治に附したことの賢策なりやを疑ふものだが、大體から言ふと此制度其者は歡迎を値ゐするものと稱せねばならぬ。次ぎに聯盟が常久機關を設定し、定時集合を規定し且つ世界の平和に影響す可き問題を議することとしたのは、上記委任統治國狀態の改善、統治國の變動、被統治地域の獨立等人類社會の生長變遷に伴ふ變化を可能にする機會を造つたものとして更らに賞賛の辭を加ふる價値があると思ふ。兎も角も予は二月十四日發表聯盟規約原案が其後種々修正せられたに係らず、此等の點に於て不利なる變化を見無かつたことを欣賀するものの一人である。(勿論他方に於て國家領域保全の約定もあるし、之には種々な解釋も加へられるだらうし、敢て全然滿足とは言はぬが、比較的滿足を値ゐすると言ふことが出來るのである)。

以上は對獨講和條約中國際聯盟の條目を見て、國際平和策上難有く感ぜらるゝ所であるが、然かも太だ難有からず、歡迎す可からざる現象が他方に殘存して居るのは、亦た何等の憾事であらう。それは外でも無い、第一は國際軍隊の構成が出來無かつたこと是である。國際軍隊設置の主張は佛國に於て最も盛んであり、佛蘭西國際聯盟協會々長で講和全權の一員に列したレオン、ブルジョワー氏(クレマンソー、コムブ等と並ぶ元老的政治家にして曾て首相たり、勞働卿たり、戰時中無任所大臣たり)最も強く之を稱へた。クレンマンソー氏も同論であつたが、英米にては反對論が多かつ

た。即ち前駐米英國大使ブライス子、講和會議國際聯盟委員長ロバートセシル卿及びスマッツ將軍等之に反對して居たのである。從つて講和會議では佛國委員が終始本案の爲めに奮鬪したるに係らず之を否認した。而してスマッツ將軍の案たる「各國分擔兵力」の決定を聯盟委員會に委する事に決定したが、之は事情止むを得無かつたとは言へ、聯盟其者の實力を低下せしめたことは疑ひが無い。第二は聯盟執行委員會の決議が滿場一致を要する旨決定したこと是れである。如何なる事柄でもその國際時局に影響深き場合に際して、一國だも反對者が無いと言ふ事が望まれるであらう乎。問題は重大なれば重大なる丈け一國若くは、二國の反對は頑強になる筈であり、從つて執行委員會決議は實際餘程困難にはならぬであらう乎。同時に聯盟の實用も少くはならぬであらう乎。第三は聯盟原案が修正せられて脫退を許すやうになつた事是である。右規定には「すべて加入國は二年前に豫告を發し當日迄に當規約に遵ひ脫退に關する義務を履行したる場合には聯盟より脫退する事を得」とある。之は聯盟の永續を薄弱にしたものに外なら無い。殊に予をして憂慮措く能はさらしむるものは、之が小弱國の希望から出ず、强大國たる米國側の希望に基いた點である。無論大統領ウイルソン氏の本意では無いが、何分昨年十一月總選擧で共和黨が議會に多數を回復し、條約批准機關たる上院もウ氏の自由にならぬので、ウ氏も反對派の主張に讓步したのである。蓋し共和黨全國委員長ヘーズ氏は今春前國務卿上院議員ルート氏に依賴し六箇條の聯盟修正案を草せしめたが、此聯盟脫退規定はその第四條を構成して居たのである。最初國際聯盟の主唱者たる如くなりし米國が、三月頃から後退的態度に出でた事は、以て聯盟の薄弱を憂へしむる所以ではあるまい乎。第四は例のモンロー主義除外規定卽ち「聯盟規約は平和維持を確保せんとする仲裁條約若くはモンロー主義の如き局地的協商の効力に影響を及ぼすこと無し」との規定是である。予は敢て我國家が之が爲めに不利を得たとは考へぬ。米中南に於ける米國の主張を認むる規定は、東亞に於ける日本の主張も或程度に於て認むるに違ひ無い。併し渾然四海

を一にし、萬事を國際聯盟に託する精神の上に立つた平和同盟の主義から言へば、米洲の問題に歐洲の發言權を拒まんとする同主義の承認は是れ明白なる一大矛盾であり、一大退歩ではあるまい乎。

有體に言へば聯盟規定に對して予は下の如き感想を起さぬ譯にはいかぬ、『英米佛を中心とする豫備講和會議は一月中旬から二月中旬迄の第一期にありては國際仲裁制やら、委任統治やら、大分美しく勇ましい武者振りで國際平和同盟の理想に邁進した如くであつた。それが三月から四月にかけての第二期では、無暗に驅け出した後の子供が、俄かに進み過ぎたかを懸念し始めたやうに、回顧し、低徊し、現實の種々なる姿に驚かされて、後退した觀がある』と。是れ決して妄言では無い。前記の脱退、全會一致規定、モンロー主義等の規定が、第二期に現はれた修正案たるを見ても明瞭であらう。之を要するに予は大綱に於て今度の國際聯盟規約を美とするものである。然かも其規定が亦た彼處此處に汚點缺點を有して其將來の運用を累することも、承認するの外無きことを遺憾とするものである。

三

國際聯盟から一轉して眼を「純粹なる獨逸との和議即ち戰爭の直接跡仕末に屬する部分」に奔らすると、「高き理想が低き現實に依つて累せられた」と言ふ感じが一層甚しくなつて來る。否な前者に在つては兎も角も理想の働きが主になつて居るが、後者に在つては、理想は何處にか影を匿し、現實の低き要求が跳梁して向ふ所草木風靡するの概がある。今少し明瞭に言ふと、之等諸條件は國際永久平和とか、四海兄弟とか、平和聯盟とかを企つる者の如くならずして、寧ろ將來の戰爭を豫想し、敵國膺懲を目的とし、聯盟よりも從來の三國同盟對四國協商の如き國家團體の對峙狀態を假定とし、萬事を此上に積り立て構造して居ることは無い乎。一昨年及昨年頃英米に現はれた高遠な主張及論議を忠實に信用したものがあつたならば、是等の人々は此新發展に對し呆然又啞然たらさるを得無いであらう。

此對獨握手、對獨和協を豫想せずして、對獨戰爭を豫想し、歐洲の紛爭、葛藤を豫想して居ると言ふ證跡は、講和條約案中、獨逸の復讐心挑發を覺悟して專ら獨逸勢力破碎に力めた行動が到る所に現はれて居る事實に照して明瞭である。條約の各規定を見ると公平に評して峻酷苛酷たるを免れ無い。たとへば聯合國自身は徵兵制を廢止せざるに係らず獨逸の徵兵制廢止を求め、兵數を十萬に制限し、參謀部の廢止を要求し、且つ將校の養成を防ぐ爲め其服務年限を二十五年とし、又兵卒迄十二年服務とせるが如き、海軍に在りて戰鬪艦數を六隻に、輕巡洋艦數を六隻に、驅逐艦及水雷艇各十二隻に制限せるが如き、其商船中千六百噸以上のものの全部、同噸數以下のもの二分一を沒收するが如き、其經濟力回復を阻害する丈けの償金を課せる如き、海底電線の沒收、各種通商、經濟上の束縛等の如き悉くその實例である。然かも是等は予が玆に論ぜんとする所では無い。唯だ專ら其領土處分に關する部分に就て、少しく此點を撿して見度いと思ふのである。

條約第三章を檢すると、獨逸は多大の地域を喪失せねばならぬ運命に立つて居る。西方に於てはアルサス、ローレン、ニライン左岸諸地、東方に於てはポーゼン、西普魯西、上シレシア、海外領土に在りては、阿弗利加カメルン、トーゴー、獨領西阿弗利加、獨領東阿弗利加、及び太平洋方面のカイゼル、ウイルヘルム及ビスマルク群島、マーシャル、カロリン、サモア諸島、膠州等是れである。右の內海外領土につきては玆に論ずるの要が無い。又面積五千六百方哩人口一百八十七萬のアルサス、ローレンも佛國が正當なる主張を有するのだから玆に贅辭を費すの要が無い。但し西方に於けるザアル炭田、マルメデイ等を含むライン左岸問題と東方に於けるダンチッヒ市、ウイスチユラ河流域等を含む西普魯西波蘭領域問題が示す意義につきては一言せざらんと欲するも能はざるものがある。

先づ西方より說かんに、ザアル炭田を佛國に收め、同地方を含むライン左岸地方を獨逸より引離して國際聯盟の管理に

委したのは何故である乎。同地方の住民は全然獨逸人である。民族主義から言ふと同地方は獨逸の領土として殘るを正當とするのである。又たライン地方は獨逸に執りて政治的に經濟的に重要であり、種々の詩歌に謳はれ、國民思想上に重大なる地位を占めて居る、アルサス、ローレンが人種的には獨逸系であつても多年の間文化的に社會的に佛國化して居り、住民佛國を祖國視して居る如きものとは同日の談で無い。然るに佛國は何故に此ライン左岸に流涎し若くは其獨逸より分立を冀ひ、國際聯盟も亦た之を是認したのである乎。是れ一は佛國の石炭消費額一年六千三百萬噸なるに對し其生産額四千一百萬噸に過ぎぬ爲め、石炭産地を要求する事情もあるけれども、一層重視す可き事情は、軍事的理由である。蓋し佛人の意見に依れば、獨逸は一八七〇年にも、一九一四年にもライン河左岸に足場を置いて佛蘭西人民を慘憺言ふに忍びざる苦境に沈淪せしめた。依つて今後戰爭の場合獨逸をして、ライン左岸に足場を得せしめ有利に我を攻撃せしめてはならぬと言ふのである。同時に佛軍側は一朝有事の際ライン河を瞰下する高丘一帶に據つて砲火をライン河兩岸に及ぼし以て此處に第一の防禦を行ふ可きだと言ふのである。予は此意見の佛人に執りて重大であり又有理である主張たることを拒むものでは無い。然かもこは世界將來の永久的平和、若くは四海兄弟の思想から出たもので無く、國際平和聯盟の精神に副ふものでも無く、全然虎視眈々國際軋轢を是れ事とする舊來の考へを基礎としたものとの批評を免れ得よう乎。又た之が實現する暁、獨逸は民族主義蹂躙の犧牲となりたるを自覺し、發憤報復の邪念に燃ゆることとはならぬであらう乎。

斯くの如きもの、獨り佛獨國境のみではない。同條約が白耳義をしてオイペン及びマルメディ方面に新領土を得せしめライン河方面に發展せられたるなども、其の主要なる理由は軍事的事情である。誰も知る如く、開戰當時獨軍リエジユに向け殺到したが、右領土擴張は將來同一の場合にリエジユを掩護する所以となるのである。是れ亦た對獨講和約が

聯盟の精神と異る國際軋轢の思想の上に立ちつゝあるを示すものでは無からう乎。

翻つて東方を見ると、亦た矢張り同樣の現象に出遭ふのである。大戰終了後に在りても依然獨逸を敵國視し、又或程度に於て露國をも半敵國的に考へ、兩者間の聯絡と協同活動とを阻害する目的で講ぜられた所謂屏障政策是である。

屏障政策の爲に利用せられるのは、新興國の波蘭、チエックスロワック國、南スラウ國の三つである。北方の波蘭は露領波蘭(波蘭人々口九百萬)墺領波蘭(波蘭人々口四百七十萬)獨領波蘭(波蘭人々口三百餘萬)等から成り、中部のチエツクスロワック國は墺太利領ボヘミア、モラウイア及びシレシア(チエック人々口六百五十萬)、洪牙利領北部(スロワツク人口二百五十萬)から成り、南端の南スラウ國は塞爾比、黑山、ボスニア、ダルマチア、カリンチア、クロアチア、バナト、スチリア、クランジスカ等(スラウ人口一千萬)から成り、卽ちスラウ人三千六百萬(他の民族を合すれば四千三四百萬ともなるであらう)の三國で獨露間に障壁を造らんとするのである。蓋し聯合國側政治家の意見に依ると獨逸が帝政時代以來深大の地盤を露國に有し、今日さへ過激派政府を巧妙に操縱しつゝあるに照すときは、將來獨露提携以て歐洲の一大脅威となる危險がある。從つて右地域に有力な親アライ的邦國の聯合を形成して之を防止せねばならぬと言ふのである。而して今回の對獨講和條約案に照すと、聯合國が此障壁政策の爲めに大に此等諸國を强固にするに苦心した痕跡、領域決定振りに於て現はれて居るのである。餘り多くは言はぬけれど、先づ新チエック國の領域を舊墺獨國境迄進しまた如き、重大の事實ではあるまい乎。蓋し右國境附近の墺領には獨逸人が多數でチエック人が少い。從つて此處では獨逸國境を舊墺領中に進むるのが民族主義上當然であるに係らず、巴里豫備講和會議は屏障政策からして民族主義を無視し遂に幾多の獨逸人を犧牲とするの決意をなし、全部をチエックに附したものである。(同條約第三條中チエックスロワツキア中『此境界線は獨逸方面に在つては千九百十四年ボヘミア境界線に依るものとす』とある項目參照)次ぎ

に波蘭はドウカと言ふに「獨逸は上シレシアの大部分、ポーセン及びウイスチュラ左岸の西普魯西を波蘭に割讓す」とはロイテル所報條約案の傳ふる所である。是れは講和成立後十五日以内に七名の委員境界を定むとあるから、不明瞭な點もあるけれども、予は從來協議の形勢に照し、其獨逸人多きポーセン洲の北部、西部、西南部及び西普魯西の西部をも犧牲として居無いかを思はざるを得ぬのである。

之を要するに巴里豫備會議は國際聯盟問題から一轉對獨條件に移ると、國際平和の理想から覺めて國家輒機の現實に執着し、戰爭本位、權力爭奪主義本位に改宗するに至つたのである。以上に説いた例は則ち此形勢を指示して餘りあるものではあるまい乎。

四

併し乍ら此戰爭本位、權力爭奪本位の解決振りも、決して徹底的に行はれて居ぬのである。國際聯盟では一旦理想主義に依つて邁進し乍ら、半途現實の種々な姿に驚かされて低徊し後退したやうに、此處では現實に捉はれた決定をなし乍らも、折々理想主義を顧みては躊躇逡巡したのである。

そは何ぞ、先づ前述のサアル炭田及ライン河左岸問題にも現はれて居る。玆では現實主義が理想主義に妨げられて、「炭田こそ之を佛國に附したれ、ライン左岸をば全然佛國に移すことをなし得ず、十五年間の國際管理に委したのである。而して十五年後各村邑に於て人民投票を行ひ、現狀維持、佛國との合體、獨逸への復歸とを決せしむる筈である。佛國が此案に贊成したのは、十五年間の國際管理期中（國際管理と言つても、ザアル炭田等の關係から佛國の勢力最も多く入るのである）、佛國の地盤を堅くし、人民投票に勝利を得るの覺悟があつた爲めでもあらう。又た佛人に此信仰を與へたのは、同國が一七九二年から一八一五年迄該地域を領有し、更らに路易十四世の昔しにも此處に地歩を占めた歷史

もあり、其餘澤猶此處に殘つて居ると考へた點もあらう。されど、我等から見ると同會議が眞に軍事的に獨逸の西進を憂ふるならば、何の故にライン河左岸を擧げて永久に獨逸の手より離さ無かつた乎と怪まざるを得無いのである。

併し之れ丈けならば、猶可、一轉東方を見ると、其最も重きを置いて居る屏障政策にさへも段々缺陷を生ぜしめたことは、不徹底の顯著な實例では無からう乎。

そは外でも無い、ダンチッヒ港問題及東普魯西問題の處分是れである。條約案に依ると、ダンチッヒ及其隣接地方は自由市を組織する事となり、新波蘭國には加へられぬのである。成る程同市は國際聯盟の保護下に置かれ、外政上の事務を便宜上波蘭に管掌せしめ又ダ市に於ける波蘭人差別待遇を防止する規定もあるから、一見種々波蘭に有利な保障も出來て居るのだけれど、同港が獨逸商人其他獨逸人多く其數住民の八割を超え、完全に之を支配しつゝある現状に照し、將た是迄の獨逸人の狡猾な遣り口到底波蘭人の對抗し得ざる所あるを思ふときは、同港が獨立の自由都市と定められたことは、依然其獨逸跳梁の足場を造つたものと言はねばならぬを感ずる。即ち流域四千八百哩、內航運に適する者三千一百哩、何と言つても波蘭の經綸的生命を支配するウイスチユラ河のバルチック海口は、依然獨逸人に扼せらるゝものと言つて善いのである。次ぎに東普魯西は獨逸人百五十萬を含み、北方に多く南方に少いのである。條約案は民族主義的見地から之を依然獨逸領としたのであるが、予は之が將來の禍根では無からう乎と思ふ。此東普魯西は波蘭に併合の西普魯西一部(ウイスチユラ左岸)と右のダンチッヒ自由市とに遮られて本國との陸上的接續を失ふのであるが、此陸地的に一國を二分した狀態は永續し難いものであつて、必らず波蘭に累するであらう。論より證據十七世紀及十八世紀に獨逸本土と東普魯西とが同一の狀態に在つたことは、則ち當時波蘭分割問題を發生する重因とはならなかつた乎。ダンチッヒ問題、東普魯西の處分斯くの如くしては、波蘭は眞に聯合國が屏障國として希望する丈けの役目を盡し得やうと思

はれぬのである。

獨り之許りでは無い。ダ港東普魯西の處分右の如く、唯だ極めて狹い西普魯西の一部が波蘭に附せられた丈けでは、到底獨露聯絡其者を絕つことは出來ぬのである。何となれば東普魯西の東方に於けるエストニア、クルランド、リウオニアの波羅的三州は知力低い下級人民を除きて獨逸系であり、寧ろ獨逸人である。昨年獨逸形勢非となると共にエストニアの名士等は俄かに排獨の外姿を粧ひ、「我等の名は獨逸語なれども我等は獨逸人系にあらず」と言ふやうな議論を聯合國言論界に喧傳して居るが、事實は反對である。同方面の交通生產事業の如き獨逸資本に成つて居る。即ち獨逸はダンチッヒ、東普魯西、波羅的三州を經て露國と完全に聯絡し得るのであつて、此點に於ける遮斷策は大半失敗と見るも誰か空言と笑ふ事が出來やう乎。

詮ずるに巴里講和會議は現實政策の最要項目の一として屛障政策を採用したのであるが、サテ愈々之を實地に當つることゝなると、民族主義やら其他の理想に攪き亂されて、徹底した政策を執り得無かつたである。

是れ予が講和條約中純粹の對獨講和項目を檢して感ぜぬ譯にはいかぬ所である。

五

國際平和てふ見地からして予の對獨講和條約觀は斯くの如きものである、以て國際聯盟に現はれた理想主義が現實に躓つき、講和條件に現はれた現實主義が理想に躓いた姿が、幾分でも明かにせられたとすれば、予の望み足るのである。

然かも予は終りに臨んで斯くの如き不透徹で矛盾多き條約案の出現したことにつき、深くウイルソン、ロイドヂョルヂ、クレマンソーの三頭を咎むる譯にはいかぬこと、又三頭を擁して玆に到らしめた諸國政治家外交家も一箇々々として

は決して罪深しと言ふを得ぬこと、要するに本條約案は現下世界人民の思想狀態を忠實に反映したに過ぎぬことを一言し度い。蓋し大戰の慘苦は餘程世人を覺醒せしめ、永久平和翹望の聲は高まり、學者外交家政治家の平和聯盟論も盛んにはなつたけれども、國家間の不信用、嫉視はなか〳〵に減退し無い。正義人道の聲を高うしたウイルソン氏の本國でも、昨年十一月の總選擧には帝國主義の共和黨が勝ち、其領袖ルート氏の如き中南米を米國の支配下より國際聯盟に移すを欲せず、又た歐洲勢力の米洲に入るを厭ふて『米國は自ら希望せざるに歐洲より招待せられて舊世界に干與したり、されば自ら舊世界の問題に干與することあらんも、舊世界をして米大陸の事に干與せしむ可からず』との利己的說明の下にモンロー主義修正案を提議したのである。此思潮に對しては流石のウイルソン氏も中心當惑を感じたであらう。英國でも昨年十二月の總選擧は平和主義の自由黨敗れて、對外硬の統一黨が勝利を得、盛んに海外發展を呼號し、白耳義の熱心なる希望を排して獨領東阿弗利加を自國の委任統治下に收めた程では無い乎。比較的平和論の盛んな兩國さへ斯くの如しとすれば、戰時中最も獨逸等の暴行を經驗した佛國が對獨策に汲々として容易に理想主義に傾き得無かつたのも亦何の不思議があらう。爾餘の邦國が憂ひを同うするも、亦何の奇異があらう。斯くて此現實主義と理想とが相戰ふて互ひに幾多の負傷者を生じ、其痕跡を條約案の表てに示したのは自然であり、民論と瞬間々々の國際關係とを考量し之に指導せられねばならぬ政治家が之を防ぎ得無かつたのも、亦た狀情酌量を値ゐする事件と言はねばならぬ。

要するに一國と言はず、一階級と言はず、すべての國民、すべての階級々々通じて人類の思想、觀念が新たならざる限り、理想的な若くは徹底的な講和條約も、平和聯盟も出來得やうと思はれぬ。されば今後の一大事業然かも困難なる一大事業は世界思想發達の問題であらう。而して差當りての處、否、恐らくは長い歲月に亘りて、政治家も、國際關係を處理する外交家も、依然亂脈、且つ複雜である諸思潮の內に、恰かも一高一低する荒波に漂ゆる藻葉の如く左右せられ動搖せられて、猶幾多の不徹底な國際協約やら、國際關係やらを造りつゝ、宇宙の大なる歷史の下に微細な痕跡をも留め得ぬことを忘れて、獨り翻海の偉業をなし得た如く自負することであらう。

日本改造第一策として國家教育主義を提唱す

井箆節三

(一)

今後の日本は適當な順序と程度と方法とに於て社會政策の歩武を進め、遂には少くとも最も溫和な國家社會主義に達するであらう。因循姑息にして不徹底な半上落下の社會政策が社會問題の完全な解決に無效であることは聰明な識者の定説であつて、社會問題を完全に解決するに有效な程度にまで社會政策を遂行すれば、その結果として少くとも國家社會主義の一種に到達せざるを得ない。

勿論、茲に謂ふ社會問題は勞働問題を中心とする狭義の社會問題であつて、廣義の社會問題は人類の滅亡せざる限り永久に續出するであらう。これは言ふまでもないことであつて、もし社會主義をさへ實行すれば、勞働問題も信仰問題も、狭義の社會問題も廣義の社會問題も、兩つながら一擧にして解決せらるるものゝ如く思惟するならば誤解である。社會問題を解決する方法にも種々の方法があり、程度にも種々の程度がある。國家社會主義がマルクス主義に比較して微溫的である如く、マルクス主義も亦た更に一層徹底せる無政府主義や虚無主義に比較すれば不徹底である。

徹底といひ微溫といふも、畢竟程度の問題であつて、如何なる程度を以て適當とするかは時處との關係によつて定まる。時間から言へば或る時代、空間から言へば或る地域、此の二つの關係が經緯するところの社會的又は國家的事情に對して所謂適當な程度を以て徹底せるものとしなければならない。徹底といひ微溫といふも相對的意義に於てであつて、絶對的意義に於て如何なる社會にも國家にも一律な適度を發見することは出來ない。

勿論、同じく人類が組織する社會又は國家であるから、同一程度の文化に於ては、いづれの社會でも國家でも事情は大同小異である。日本は西洋に比較して根本的に國情を異にするといふが如き意見には固陋な謬見が乏しくない。明治の初期に樽井

藤吉といふ西洋の社會主義に無知な人が一種の國家社會主義を立案した。たとひ西洋思想の影響を受けずとも、一種の國家社會主義は日本に自發すべきものである。

然るに日本では不幸にも社會主義が中途から不自然な境遇に陥るやうになつた。明治二十五年に光吉定次郎といふ人が著はした「國家社會制」と題する書物は、ダウソンの「國家社會主義」を其儘翻譯したものであるが、同書の卷頭には末松子爵や故伊藤公爵の序文があつて、國家社會主義を讃美して居る。其後マルクスの社會主義が日本に輸入せられたのは、丁度日露戰爭の前後からで、當時社會主義の代表者が非戰論を高唱したために、社會主義は官憲の忌憚を買ひ、其後更に不祥事件を惹起したために、「社會主義」は遂に「危險思想」の異名とさへなつた。

近頃佐藤中將や上泉中將や其他忠君愛國主義の人々が、皇室中心主義を標榜して、國家社會主義の運動を開始したのは、陰暗な日本の社會主義運動に一道の光明を投入れたが、而して之等の人々は寛大にも賣文社派の高畠素之君や北原龍雄君の參加をすら許諾したのであるが、日本の權力階級が果して同樣な寛大を以て此種の運動を寛容するであらうかは暫く疑問としなければならない。賣文社派の人々は近頃二派に分離して、堺利彦君と山川均君とは暫くマルキシズムの山塞に踏留つて「新社會」の經營を續け、高畠、北原、其他の諸君は山塞を下つて實際運動に著手し、「國家社會主義」の發行を始めたが、多分此の分裂は表面のことで、裏面に於ては兩派の間に聲息が相通じて居るのであらう。今後兩派の關係が如何に變轉すべきかは勿論一箇の疑問であるが、思ふに兩派の人々が最近の思想を受入れてマルキシズムの缺點に修正を加ふるにあらざれば、社會主義は依然として危險思想と同視せられる。而も其の同視せられることは、必ずしも一偏の誤解ではない、或る程度までは當然である。

勿論、マルキシズムの缺點が完全に修正せられる時期も、マルキシズムに對する誤解が悉く氷釋する時期も、遂には到來するであらう。けれども其の時期が日本に到來しない以前に於て、日本の國情は憂惧すべき險惡な狀態に到着しないか。(若しも別箇の方面から早きに臨んで日本を此種の危險から救助しないと)。如何となれば、斯かる時期が到來しない以前に於ては、日本では社會主義と名づくべき主義政策は一概に政府の忌憚するところとなり、纔かに社會政策が脈々ながらチビ〳〵と採用せられるに過ぎまいから。(此種の社會政策が社會問題の完全な解決に無效であることは既に一言した如くである。)

日本改造の第一策として茲に提唱するところのものは、必ずしも單に日本の斯かる事情を顧慮した結果立案したものであるのみではない、今日社會主義に附隨する種々の疑問を疑問として暫く實行以外に保留し、平等主義の可否如何、唯物史觀の當否如何、主義實行の難易如何、主義實現の程度如何、すべて之等の問題と直接に關係することなくして、社會問題の根本だけを、社會主義に依賴せず、之とは別箇の方面から、獨立に、容易に、簡單に、擧國一致の態度を以て、解決せんがためであつて、社會主義の贊成者も反對者も、乃至過激派も溫和派も、異議なく贊成しなければならないところの大策である。

（二）

謂はゆる祕策の要領は意外にも頗る簡單であつて、斯かる簡單な方法で、果して社會問題の根本が完全に解決せられるか、果して日本の改造が充分に實行せられるかと、驚かれるほど簡單である。勿論祕策を採用して內容を充實する場合には相當に複雜なものとはなるが、國家社會主義や凡百の社會政策に比較すれば、到底比較にならないほど、その要領は簡單である。左記は卽ち其の要領である。

第一、男子も女子も一律に、滿七歲から滿二十一歲まで、前後十五箇年を以て義務教育年限と定め、貴賤貧富の區別なく、國家は學生に一定の教育費と生活費とを支給する。

第二、義務教育を終了した男女は選擧の權利を受け、男子は兵役の義務を負ひ、女子は育兒の義務を負ふ。

第三、男子も女子も在學中及び卒業後に於て各自適當な業務に從事し、一定の年期に於て、國家から支給せられた教育費と生活費とを償却する。

第四、以上の制度を實施するに必要な經費の調達は、最初は稅制の改革と公債の募集とに依賴し、公債の元利は富者稅及び奢侈稅によつて支辨する。

此の方法の效能は後段に說明することにして、まづ此の方法の內容に說明を附加へて置かう。

義務教育年限は必ずしも七歲から二十一歲まで、又は十五箇年たるを要しない。しかし大體から言へば此の程度を以て適當とする。或は學生の志望により、或は才能の優劣により、教育年限を一定せず、或は十五箇年以下となし、或は十五箇年以上となす。之等の區別が必要である如くに考へられるであらうが、本來教育は權利であると同時に義務であるから、國民は成るべく平等に教育を受けて才能を平等に發達せしめることが、箇人のためにも國家のためにも、極めて必要なことである。貧者の子女が充分の教育を受けて才能を發達せしめることの必要

なのは無論であるが、貴族や富者の子女が父母の富貴に依賴して教養を輕視するが如きも、從來國家社會に對して當然の義務を負ふ能はず、却つて迷惑を及ぼすのであるから、貧富貴賤の區別なく平等に教育を受ける權利と義務とを課することが必要である。既に平等の教育を受けて、其上國民の地位才能に高下の差等を生じても、それは各自の責任であつて、國家の責任ではないであらう。また秀才と鈍才とに平等の教育を授けるといふことは無用の沙汰とも思はれうが、最新の科學的研究に依れば、兒童は一樣に生れながら先天的に天才であつて、秀才と鈍才との岐れるのは後天的の事情に由る。此說の當否は暫く問題としても、國家は秀才よりも鈍才にこそ一層多量の教育を授けることが必要である。且つ平等の教育といふも、決して劃一的教育ではない。或は文藝に秀でる者、或は產業に秀でる者、或は科學に秀でる者、或は軍事に秀でる者、すべて各自の志望に從ひ、その研究が十五箇年以內で足る者には、其れだけ實習を課し實務に服することを許し、早くから支給の償却を開始せしめ、その研究に十五箇年以上を要する者には、在學中の實務を減じ、或は卒業後に於て研究を續けしめることも出來る。

男子と女子との教育年限を平等にするの一事に就いても、恐らく多少の異論があらう。男子と女子とは成熟の年齡に多少の差異がある。しかし此點に於ても後天的事情が幾分か影響して居る。殊に義務教育年限を二十二歲までとすれば、現在に比較して男子こそ著しく短縮せられるが、女子は二三年を增加するに過ぎない。而して今後の社會に於ては、女子は十八九歲で高等女學校を卒業しただけでは、家庭婦人としても職業婦人としても、教養が充分であることは出來ない。更に二三年を追加して充分の教育を受けることが必要である。尤も男子でも女子でも、國家が斯くの如き規模を以て完全な教育を施すならば、十五箇年の年限に於て教育の實績の擧がることは現在よりも遙かに優るといふことも考慮に加へなくてはならない。また斯くの如き教育制度は自然に徵兵制度及び選擧制度に理想的な影響を與へ、國民は大體に於て平等な健康と品性と才能とを得て、普通選擧は當然に行はれ、國民皆兵の實も亦た期せずして擧げることが出來る。

若しそれ以上の計畫を實行するに必要な經費の計算及び其の調達並に支出の方法に關する說明の詳細は省略するが、吾々は之が實行によつて最も理想的に社會問題を根本的に解決し、最も理想的に日本を容易に改造することが出來る、此の計畫は實に是れ國家百年の大計であるから、吾々は之を遂行するに如何なる經費をも惜むに足らない。況んや後段に說明する如く、此

の方法は畢竟するに、産業の國營を主張する國家社會主義に代ふるに、教育の國營を主張する國家教育主義を以てせんとするものであつて、換言すれば商品の生産を國營となす代りに、人間の加工を國營となさんとするところのものである。言ふまでもなく人間の加工は商品の生産よりも根本的で一層生産的なものである。即ち教育の國營は生産の根本の培養である。この意味から考へても、吾々は軍備や戰爭の如き不生産的事業のために消費する金錢の幾倍を教育の國營に充當しても、それは不利な放資ではない。現に軍備や戰爭は自ら公債を償却しないのに、教育の國營は自ら國費を償還する。

（三）

以下は以上の方法の效價を説明する場合であるが、之を詳述することは紙面の制限するところであるから、成るべく簡單に説明する。

前にも一言した如く、此の方法は大體に於て國家産業主義に代ふるに國家教育主義を以てせんとするものである。國家産業主義は即ち國家社會主義であるが、東京帝國大學教授森戸辰男君は之に代へて「國家經濟主義」といふ文字を使用する。蓋し「國家社會主義」といふ文字は、冒頭に述べた如く、日本では不快な文字である。それのみならず、國家社會主義は國際社會主義への前提であり、過激主義、平等主義への前提であるかの如く誤解せられる。また其の誤解が誤解でなく、事實となるべき危險すら絶無と斷定することは出來ない。言ふまでもなく國家社會主義は財産を平等にせんとするものではないが、その實行の經過によつては、自然の勢ひの激するところ、或は脱線して過激主義、平等主義に陷落する危險の絶無を保證することは出來ない。

人間でも、また萬物でも、或る意味に於ては平等であり、或る意味に於ては平等でない。時間と空間との關係から言つても時間に於て平等であれば、空間に於て平等でなく、空間に於て平等であれば、時間に於て平等でない。同一の時間に同一の空間に同一の事物は存在しない。單に時空の關係から見ても、一塵一埃に至るまで一事一物として平等ではない。如何なる平等主義でも特定の條件に於ける平等を主張するに過ぎないのである。即ち國家社會主義は生産機關を利用する權利を國民に平等に賦與せんことを要求する。而して之が反對者は、生産機關を利用する才能の優劣を問はずして平等の權利を賦與するは不當であると言ひ、而して之が贊成者は生産機關を平等に利用する權利を賦與すれば才能の優劣も減ずると言ふ、此の兩説の可否は措き、とにかく社會主義の可否に就いては、才能の優劣が問

隨して問題となることは事實であつて、社會主義を實行するには各人の才能を平等にすることが必要であり、各人の才能を平等にするには社會主義を實行することが必要であるとは、社會主義の往々にして陷るヂレムマである。また社會主義が大體に於て唯物論的であるといふ非難も亦た一面の眞理である。また社會主義を實行するには、多數の官吏が必要であつて、國務が非常に複雜になり、而も果して實績が豫期に添ふやは疑問であるといふ批評も一概に無視することが出來ない。また社會主義の採用は、何となく權力階級の勞働階級への降服を意味するやうに考へられるといふ感じもする。また社會主義の實行は、少くとも一時國家を凡俗の天下となし社會を凡化するやうにも考へられる。

凡そ之等の缺陷に直接關係することなくして、社會問題を側面的に解決するの方法として、謂はゆる國家教育主義が唯一の祕策であることは、大體想像せられるであらう。――社會主義は日本に禁物である。之に反して日本では教育が非常に尊重せられる。國民教育を國營に收容することは寧ろ日本の政府の宿望であるとも言はれる。學制改革の問題が容易に解決しない根本の原因は、政府に此の宿望を實現するだけの決心がなくて、因循姑息な態度をば改めないといふ一事に在る。而して國家教育主義は、國家經濟主義の如く、國民平等の標準を生產機關の利用に置かず、教育機關の利用に置き、資本の平等を要求せずして、才能の平等を要求し、物質的平等を要求せずして、精神的平等を要求する。社會主義の贊成者も反對者も多く之を批難すべき餘地がない。而して之を實行するにも、唯だ教育の實行及び行政に關する機關のみを擴張するを以て足り、爾餘の方面の行政は却つて之と反比例して漸次縮少することが出來るのみならず、箇人に於ても十五年間子女の教育を國家に一任することによつて、負擔の一半を輕減せられ、その活動の能力及び其の奉公の義務に於て一倍の餘裕を得ることが出來る。

若しそれ此の方法の實行により、單に勞働問題や教育問題が圓滿に解決せられるのみならず、延いては普通選擧の問題や軍備縮少の問題や婦人解放の問題や勞資調和の問題が、當然に而も理想的に、如何なる階級からの異議もなく、如何なる主義からの反對もなく、解決せられるといふに至つては、吾々は此の方法が殆ど萬能であることを認め、此の方法を以て「日本改造の第一策」と信ずる所以である。

（四）

自分はしかし此の方法を自身で發明したことを自慢しない。之と類似の方法は プラトン以來色々の 人々によつて立案せら

れ、またスパルタの人民は制度の上に實現して見るべき成績を示したのである。

自分は以上の立案の大略を「日本改造案」と題して、五月一日發行の雜誌「文化運動」で發表したが、意外にも之と同日に發行せられた雜誌「我等」に、「歐洲に於ける親族制度の將來」と題して、法學博士岡村司君が寄稿せられた一文によつて、五十年前のフランスに一人の同志を發見した。

岡村博士の紹介によれば、一八六五年に、パリ醫科大學の助教授ナツケエが「宗教、所有權、親族」と題する一書を著はして、其中にヨオロツパに於ける親族制度の將來を想像して、將來の國家に於ける親族の中樞たるべき者は、父ではなくて母であらう。母は自己と子女とを扶持することが困難であるから、國家は子女が一定の年齢に達するまでは相當の扶養料を支給する。子女が六七歳に達すれば、之を國民學校に入學せしめ、すべての兒童を寄宿舍に入れ、費用は國家が負擔する。十五六歳に達すれば、競爭試驗を行つて、平生の成績が優等で競爭試驗に合格した學生は之を專門大學に入れ、之に落第した學生は各自の材能に適應して各種の職業學校に入れる。之等の教育費及び生活費も亦た悉く國家の負擔とする。專門大學及び職業學校を卒業すれば、男女の區別なく、國家が一定の資本を給與し、種々の職業に從事せしめ、その大官富豪たると、その車夫馬丁たるとは、自由競爭に一任する。之がためにフランスは五六十億フランを要するが、之を得ることは難くない。租税は資本に賦課することゝし、資本を消耗せざる限度に於て累進税率を適用し、死者の遺産は悉く國家が之を相續する。今日此の制度を實行することの出來ないのは親族といふ感情が過度に強烈であるからであるが、それを適度に緩和して、國家を本位とするに至れば、之が實行も容易である。親族制度の改造は今日社會の大不正を矯正するの祕訣である、云々といふ意見を立てた。

マツケエは母系制度を豫想したから、兒童が學齢に達せざる以前にも國家が扶助せよと言つたが、日本の今日の實際では此の豫想は的中しないから、學齢以前の兒童には父母が扶養の責任を負擔し、國家が扶養する必要はない。國家は國民を生產するのではなく、國民が生產した子女を受取つて之に加工すれば充分である。（また此の制度の實行は決して家族制度と背馳せず、却つて家族制度の頽廢を未だ甚しからざるに挽回して、家族制度を健全にする所以であるが、此事は「世界と國家と家族と箇人との關係」と題する別箇の論文で主張する。）またマツケエは希望により子女が自宅から通學し、又は競爭試驗に落第した學生が大學に入ることを許し、唯だ此の場合には國家から費

用を支給しないことにした。また教育の年限も六七歳から二十二三歳まで即ち十七年間としたが、之等は重要な問題ではないから、自分に於ても格別異論がない。

たゞ一つマッケエの意見で注目すべき點は、教育を終了した國民に國家が一定の資本を給與して、社會的活動を便利にするの一事である。而して自分は此事を或る程度まで必要と思ふ。今日の實際に於ても大學を卒業した人間が、資力の乏しいために社會的活動から除外せられる場合が少くない。これは人間の經濟に於て極めて不利な現象である。また吾々の職業には實際愉快なものと不愉快なものとがある。勿論社會主義の夢想する如く、自由社會では不愉快な又は不衛生な職業は人間の代りに器械が勤めるとか、もし器械では勤まらなくて、是非とも人間が勤めなければならない場合には、社會の勇士が獻身的に勤める。それは今日血税を納める兵士に比較すれば容易である。自由社會では人間をさういふ美風に教育するとか、かういふことも一概に空想であるといふことは出來ない、國家教育主義に於ても此種の器械と美風とは成るべく奬勵しなければならない。けれども此種の空想が完全に實現せられるのは果して何時のことであらうか。少くともそれが完全に實現せられない間は、人間は境遇から已むを得ず不快な職業をも選ばなければならない。自由社會では人間が毎日六時間働けば、各自の欲望を滿たすことが出來る、さうすると多數の人間は少くとも今日の世界に於て最も贅澤な生活をして居る人間の生活を欲望するであらうとは、トルストイが社會主義を批評する場合に言つたことであるが、これも或る程度までは眞理である。ましてや未だ自由社會が實現せられない以前には、一概に愚評と謂ふことは出來ない。餘りに貧富の懸隔が甚しいといふことは勿論社會に有害であるが、各人が或る程度以上の生活と才能とを具有すれば、其上に貧富才能の差別のあるといふことは、敢て有害でないのみならず、寧ろ社會に必要であつて、本來この區別の發生するのは一面には此の必要が自然に誘發するのである。されば國家は職業の種類に從つて資力を支給する程度に適當な區別を設くべきである。實際今日の社會でも不快な職業には多くの報酬が伴ふといふことは或る程度まで事實であるが、大體に於てはそれが行はれない。トルストイがモスクワで實見した如く、三十七時間も打續けに、零度以下三十度の寒天に、破れたシャツ一枚で、酒もタバコも飲まないで、六トン一ルウブルの賃銀で、牛馬以下の勞働に從事して居る人間もあれば、一生殆ど何もせずに贅澤ばかりして居る人間もある。それは各人の自由でもあらうが、それが謂はゆる危險思想を挑發する一大原因であるとす

れば、國家のためには迷惑である。社會には斯かる餘裕もあるのであるから、國家が國民に資本を支給すべき財源に決して乏しくはない。而も國家は國民に折角充分な教育を授けて無為の境遇に置くよりは、彼等に資本を供給すれば、即ち人間の經濟であつて、極めて生產的な放資であるから、國家は此の經費をも惜んではならない。

（五）

最後に自分は尙ほ一言を附加して置く。(それは自分の立案の價値を一層明白ならしめるためである)。行體に言へば自分はマルキストであるよりは寧ろトルストイアンである。もしマルクスは「資本」の共有を要求し、トルストイは「生命」の共有を要求するものとすれば、トルストイの立場はマルクスの立場よりも一層大きく、トルストイの要求はマルクスの要求よりも一層根本的である。人間は何時しか其處まで到着しなければならない。否、或る程度に於ては、人間は何時でも其處まで到著して居る。最近に「中央公論」でドクトル鷲尾が指摘せられた如く、マルクスは唯だ過去の社會組織を科學的に批評したのみで將來の社會組織を科學的に立案しなかつた。而してマルクスの使徒は動もすればベラミイ一流の空想を以て將來の社會組織を悄況する。科學的社會主義は、空想的社會主義を免がれたが、「社會主義の空想」に囚はれた。彼等は資本共有の結果を生命共有の美風によつて說明する。實際資本の共有だけでは社會問題は解決せられない。人生は資本を共有にしなければならないほど窮屈なものではない。社會主義の「自由社會」が或は「窮屈社會」ではあるまいかとの危惧も亦た必ずしも杞憂ではない。資本の共有は生命の共有の前提としてのみ是認せらるべきものであるが、自分の提案は此の前提なしに直ちに其の目的に向つて接近せんとするものである。恐らくは多少の過誤あることを。乃ち識者の批判を待つ。（一九一九年五月五日）

民本主義・社會主義・過激主義

法學博士　吉野作造

政界の主力が最近特に著しく國民生活の安固充實を如何にして計るべきやの問題に集中され來つた事は言ふまでもない。斯る現象が社會主義の興隆に促され、又同時に社會主義の流行を促がして居る事も明白なる事實である。而して此問題が資本的支配階級よりも叫ばるゝが、併し本當に眞面目に之を問題として居るのがプロリタリアートであることも疑ひない。社會主義の起つたのも歴史的に見ればプロリタリアート發生の結果に外ならない。

是に一言プロリタリアートの說明を附け加へておく必要がある。プロリタリアートとは子供の多い人と云ふ意味で、兒女を持つてするの外國家に捧ぐべき何物をも持たない貧民と云ふ意味である。して見れば本來の意味は貧民と云ふに過ぎないのだけれども、今日言ふプロリタリアートは單純なる貧民ではない。貧民と云ふ社會的に固定した階級を意味するのである。

貧乏人と金持は如何なる世の中にもあるが、併し昔は此兩者は固定的社會階級ではない。貧乏人でも勉強すれば金持になれる。然るに今日では一旦貧乏人の子と生れたものは、永久に金持ちになれない。如何に正直に骨身を碎いて勉強しても子々孫々貧乏人でなければならない。別に法律で定つた譯ではないけれども、貧乏人の金持の階級に移り得ざるは恰も平民が士族になり得ざると同樣である。何故貧民が斯く一階級として固定したかと言へば、云ふまでもなく近代產業革命の結果である。昔の貧民問題は勤儉貯蓄を說けば或點まで解決が出來る。今日は如何に勤儉しても貯蓄の餘裕が與へられないのだから、其處で社會組織の根柢に疑が挾まれ、貧民階級も亦猛然として斯る不都合なる社會組織に反抗の聲を擧ぐるのである。

斯う云ふ所から國民生活の安固充實の問題は社會主義の主要と共に當初主としてプロリタリアートの問題であつた。今でも動もすれば斯くなり易い。

併しながら吾々は此問題を何處までも國內の或特殊階級の問題としたくない。斯くの如き社會組織を其儘に放任することが正しいか正しくないかは本質上國民全體の問題でなければなら

ない。社會の現狀は或は特に資本家階級に利益であらう。併し正義の要求の何であるかを尋ね、之に合するやうに社會を改造すると云ふ事は國民の一人として、又資本家の問題でなければならない。之を階級の問題とするか或は社會全體の問題とするかは我々の議論の出發點である。

國民生活の安固充實を如何にして計るべきやの問題は畢竟如何にして「貧」を社會より絶滅すべきやの問題である。而して此問題は實は大昔から常に政治家を惱ましたものである。古來の政治家は必ず此問題に觸れたのであるが、彼等は何處に其解決案を見出したかと云へば殆んど期せずして一種の共産主義を取つて居る。希臘の哲學者の說を見ても、支那の昔の經書を見ても、歷々として之を指摘する事が出來る。尤も此點を明白に主張したものは言ふまでもなく英國のトーマス・モーアである。日本でも鼠小僧を義賊などゝ稱して富者の財を盜んで之を貧民に頒つことに一種の正義を認めたのも、突き詰めて見れば又共産主義的思想に起因すると言はなければならない。只此等の昔の共産主義にはまだ何等科學上の根據が與へられてない。漠然と何となく斯く考へられたまでゞある。我輩は之に素朴共産主義の名を與へて居る。

十九世紀になつて、プロリタリアートの發生と共に貧困問題の解決が緊急を告ぐるや、之に關する科學的研究が俄かに盛んになつた。斯くして科學的根據に立つ所の、或は立たんとする所の幾多の解決案が我々に提供されて居る。人を馬鹿にした所謂溫情主義も其一つである。社會改良主義も其一つである。而して昔からあつた共産的思想は又新たなる合理的根據に基礎づけられて、社會主義と云ふ名稱を以て我々の前に顯れて來た。共産主義に科學的根據を與へた最大の功勞者がマルクスであることは言ふを俟たない。彼は社會主義の名を嫌つて――レーボーによつて創唱されたソーシアリズムなる言葉は當時實は社會改良主義の謂であつたから――共産主義ミ名稱を固執したけれども、彼の所謂共産主義は今日社會主義の名を以て呼ばれ、從つて彼も亦社會主義中興の祖と言はれて居る。

斯くして社會主義の主張は共産主義である。其理想は社會の共産的改造である。併しながら此理想は如何にして實現する事が出來るか。其實現の爲めに彼等の執つた最初の實行方法はプロパガンダであり、又小規模に於ける試驗的實行であつた。併しながら斯んな迂遠な方法では社會改造の大目的は到底達せらるゝの見込みはない。是に於て彼等は遂にプロリタリアート執

政を主張するに至つた。今日社會主義が實際政界に於て著しき特色をなすのは之が爲めである。故に今日社會主義を論ずる場合には共產主義と云ふ單純な理想のみを着眼する事は出來ない。更に之に加へて勞働者執政と云ふ事を併せ考へなければならない。從つて實際問題としては共產主義を是認するからと言うて、總て社會主義者と云ふ事は出來ない。自ら社會主義者を以て居らざるものゝ間にも共產主義の是認者はある。此點に就いて世上多く誤解するものあるが故に特に讀者の注意を乞ひたい。

社會主義がプロリタリアート執政を以て理想實現の最も捷徑の、否唯一の方策と認むるに到つたに就いては近來民本主義の影響を度外視する事は出來ない。プロパガンダや小規模の試驗的實行では駄目だ、プロリタリアートが天下を取らなければ目的は達せられないと云ふ事は、詰り佛蘭西革命後のデモクラシーの運動によつて敎へられたのである。斯う云ふ關係から最初社會主義の實際運動は民本主義の政治運動と相並んで進んで居つたのである。佛蘭西の二月革命の如きは此兩者の提携の最も著しい適例である。

兹に我輩は民本主義の主張に變遷のあつた事を一言しなければならない。主觀的に言へば民本主義の精神は佛蘭西革命以前から今日に至るまで一貫して同一の根抵に立ち、時勢と共に益々其眞義を發揮して來たと言へる。が、客觀的に言へば其主張並びに其實際運動の形式は時と共に變遷したと言はなければならない。此點から言へば彼等の最初の主張並びに實際運動はブールジョアジーのアリストクラシーに對する反抗であつた。後者の權力を前者に奪回する事であつた。但し此際ブールジョアジーは政權奪取の表面の口實を國民全體の名に於てした事は言ふまでもない。只其實際上の結果はどうなつたかと言へばアリストクラシーの政權がブールジョアジーに移つたまでの事である。之でも一つの大いなる進步には相違ない。けれども之れ丈けでは民本主義の本來の要求を去ること甚だ遠い。其處で考は一轉して、更に此ブールジョアジーの權力政權を如何にしてプロリタリアートの手に移すべきやの問題になる。十九世紀中葉の民本主義は動もするとプロリタリアートの爲めに働いた。併しながら今日の民本主義は頑に此階級的偏見に立つべからざるを主張して居る。無論國民の多數を占むるプロリタリアートが其優越の地位を占むべきは勿論であるけれども、只之は各種の階級を包括する全體の有機的組織中に於ける優越でなければならない。

之と同じやうな思想の變遷は、同じく社會主義其物の中にも之を見ることが出來る。社會主義が其理想實現の殆んど唯一の手段としてプロリタリアート執政を唱へた事は前にも述べた通りである。而して唯一の手段は動もすれば第二次の目的となる。實際的見地よりすれば此方が大事で根本の目的は往々忘れられる事もある。其處で社會主義の實際運動は更に進んで如何にしてプロリタリアート執政を實現すべきやと云ふ事を矢釜しく論ずることになる。

此問題に關して今日の社會主義は二つの解答を與へて居る。從つて又實行手段に就いて今日の社會主義者は二派に分れて居ると云ふ事も出來る。一方の立場は立憲主義（パーラメンタリズム）で他は革命主義（レヴォリユーショニズム）である。

革命主義はプロリタリアートの絶對支配を主張するものであり、而して之を實現するには資本的支配階級を全然撲滅せなければならぬとする。而して今日の政治組織は此階級の作る所、又據つて立つ所なるが故に現在の政治組織を是認しつゝ國家の希望を達する事は不可能でありとする點に革命的特色を示して居る。之に反して立憲主義は議會萬能の根柢に立つ現在の立憲制の下に於てプロリタリアートの希望を達することは不可能にあらずとする。何故なれば彼等は國民中の最大多數を占むるものであるからである。只之には普通選擧が布かれて居ると云ふ事と勞働者が結束して政黨を作ると云ふ二つの條件が要る。此等の條件を充たして議會の多數を制するまでの順序として資本家階級と喧嘩することも必要であらう。けれども彼等の資本家階級に對する態度は絶對撲滅にあらずして征服である。撲滅でも征服でも結果は同じ事にならう。只同じ結果に到る過程に於て革命的手段を認むるや否や、事實上大いなる徑庭がある。尙又此點の差から更に延いて實際上兩者の間には尙いろいろの點に於て差別あることは今玆に委しく述ぶる暇がない。

扨此兩主義の歷史上の關係を見るに從來の各國の社會黨は、概して議論としては何れかと云へば革命主義的であつた。けれども實際の行動の上から言へば立憲主義であつた。何故なれば現に政黨を作り、議會に議員を送つて現に資本家階級と國務の討議を共にして居つたからである。其癖每年の年會に於て決議する所などによつて見ると何時でも立憲主義などとは相容れない議論を吐くのは常であつた。而して大體の傾向より言へば資本家撲滅主義より、資本家征服主義に移りつゝあつたので、此點は正に民本主義の變遷と相應するものである。

余輩は茲に社會主義の實際的政治運動の變遷を示す一例として、獨逸の社會民主黨の事を一言して置きたい。獨逸の社會民主黨は一八七五年に出來たと云はれて居るが、併し社會主義の政治組織はもつと古く一八六三年にある。之は專ら立憲主義に據つたものであるが、之と相前後して革命主義の團體もあつた。革命主義と立憲主義とは本來實際運動に於て提携し得ざるものであるけれども、資本的支配階級を共同の敵とするといふ點から、合併した方がよからうといふやうな說が勝を占めて結局合併が實現した。實際の運動は理論の要求通りには行かぬものである。唯此際に注意せねばならぬのは、革命主義に最も忠實であつた極端理想派は此合併に加はらなかつた。斯くして社會主義者が皆一大政黨を組織し、此政黨の形で大に活躍するといふ際に、謂はゞ日陰者になつて實際社會の表面から取殘された若干の少數者が有るといふ事を看過してはならない。之は獨逸に限るのではないのである。

もと〳〵理論上兩立の難しい二派が合併したのであるから、其後社會黨の間には何かと云へば兩主義の反目抗論を見る事を免かれなかつた。獨逸の社會黨に所謂正統派と修正派との二裂があり、佛蘭西の社會黨に幹部派とサンヂカリストとの二裂を生ぜるが如きは、卽ち之が爲めである。英國の勞働黨中に於ても彼の有名なケーアハルディの如きは絕えず幹部の妥協的態度を非難して熄まなかつた。要するに此等の現象は、大體に於ては立憲主義で行動して居たけれども、革命主義の暗流も亦相當に强かつた事を語るものである。而して社會黨內の最も過激なる革命主義者が斯くの如き幹部の行動に慊らず、黨外の過激派と共に鬱勃たる不平を抱いて居つた事は言ふまでもない。而して彼等は斯くの如き微溫的妥協的態度が實に主義實現の最大障礙なりとなし、禍は寧ろ敵にあらずして吾と主義を同じうすると稱する者の中にありと唱へ、斯くてだんだん猛烈なる反感を社會主義の政黨運動に抱くやうになつて居つた。之が卽ち過激思想の由て起る所以である。過激思想が唯に資本家階級の最も横暴を逞しうする所に於てのみならず、社會主義の相當に勢力を振ふ所に於ても起つて居るのは之が爲めである。

今度の戰爭はいろ〳〵の事情から多年鬱屈して居つた過激派に、勃然として社會の表面に乘出すの機會を與へた。而して各國に共通なる社會的缺陷は此思想に蔓延の機會を與へて、今や過激思想は全世界を風靡せんとするの概がある。從て今更のやうに世人は兎や角之を批判するのであるが、然し吾輩の見地からすれば、之は到底特別なる時勢の産んだ特別なる産物に過ぎ

ない。

蓋し彼等の立場はプロリタリアート執政の即時實現によつてのみ彼等の希望は達せらるるとするにある。從て彼等は現在の政治組織に全然信用を置かない。此點に於て彼等の政治觀には根本的の謬りがある。

彼等は政治を如何に觀て居るか。彼等は政治を以て資本的支配階級間の遊戲と觀て居る。普通選擧が何うの、責任内閣が何うのと云つた所が、畢竟それは昔の源平爭奪のやうなもので、プロリタリアートの利害休戚には何の係りもない。こんな政治によつてプロリタリアートの利益幸福を圖り得べしとするは根本的の謬りである。此謬りより先づ我々は醒めなければならぬ。我々は政治に頼つてはいけない、之が彼等の政治觀である。成程此者は十九世紀前半の政治には當嵌まるだらう。又西洋よりも數十年遲れて居る我國の政治的實際運動の外觀上の形式には、此説の如きものが無いではない。併し乍ら現代の政治は餘程變つて居る　殊に徹底的民本主義を根軸として運轉して居る所謂現代政治は、決して或る階級の遊戲ではない。にも拘らず彼等は舊時代の政治觀が先入主となつて居るに加へて、最近までの社會黨の妥協的態度に對する反感が手傳つて、何うしても政治に對する極端な侮蔑と不信から脫却する事が出來ない。而して此等の説に感染れ、深く省慮する所なく、漫然と普通選擧や責任内閣論では國民的緊急問題が解決されないとか、或は政治的民主主義の時代は去つて今や産業的民主主義の時代と成つたなどと説く者を、最近我國の論壇に少らず見るのは、我輩の私かに苦々しく思ふ所である。

さればと云つて我輩は所謂國民的緊急問題が、現代の政治組織を無視した革命的手段によつて達せられないと即斷せんとするものではない。如何なる方法に據る事が最も適當であるかは自ら議論の岐るる所であらうが、唯政治的民本主義の徹底によつて此目的の斷じて達せられないといふ證據は無いと確信する者である。況んや政治的民本主義の徹底は、國民生活の安固充實を圖るといふ目的を達する爲めの手段として意義あるのみならず、國民各自の政治的人格を確立するといふ積極的意義を夫自身に於て有するに於てをや。

現在の政治組織に對する不信侮蔑の聲は、近來又過激思想とはまるで極端の反對の側からも主張さるる。此點に於て好箇の代表者たるものは、四月下旬大阪毎日新聞に見えた田中萃一郎博士の「民主政治の限界」と題する論文である。之は英吉利のマロックの近著の紹介であるとの事であるが、予は田中博士の

如くマロックを以て信用すべき學者と考へて居ないから、初めから此書に深き注意を拂はなかつた。而して田中博士の紹介する所に據つて見ると、彼の思想は國民生活の安固充實といふ近代政治の目的を本當に達し得るものは純然たる民主主義乃至民衆政治ではなくして寡頭政治であると云ふにあるやうだ。廣く政權を國民に分配するといふ事が政治的人格の確立といふ夫自身の目的を有するといふ點を閑却したのは根本の謬りであるが、縱令んば民衆政治を所謂近代政治の目的を達する爲めの手段に外ならずと觀るにしても、民衆政治を貶して寡頭政治を主張する議論の進め方は全然謬つて居る。彼は曰ふ、今日の民衆政治は之を民主主義、政治と觀るが謬りで、實は寡頭政治である。何故なれば少數の賢明なものが一定の計畫を立て多數者をして之に贊同せしめて行くからである。少數者の指導といふ事實は純粹なる民衆政治と相容るるものではない。多數者が未熟な意見を述べて之を少數者に強ふるといふ事は實際不可能である。卽ち純粹なる民衆政治の行はれざる所以で、今日の政治は外觀民主主義に近くして其實寡頭政治が行はれて居るのであると云ふのである。斯くして彼は今日の民衆政治を實は寡頭政治なりと觀る點に於て、更に本當の寡頭政治を讃美するが如き論調を進める點に於て、二重の謬を重ねて居る。少數者の指導は今日の民衆政治に於て何の障げがない、否、少數者と多數者と精神的の聯絡ある點に於て民本主義が文化發展の上に微妙なる意義を有する事は、今日デモクラシーを論ずる者の何人も認むる所である。所謂寡頭政治は多數と少數との精神的聯絡を缺く少數政治を言ふのであつて、その排斥すべきは亦深く說くの必要はない。人間が單純に理知によつてのみ行動するものならば、賢明なる少數者の政治が一番理想的のものであり得る事もあらう。併し乍ら人類活動の源泉は理知よりも寧ろ本能である。本能は固より理知によつて純化さるるものではあるけれども、併し乍ら國民全體の利福を圖るべき公人としての活動を過らさらしむる爲めには、彼が本能的に多數者の代表として活動するやうな地位に置く事が必要である。要するにマロックの說は多數者と少數者との精神的交互關係を無視し、以て現在の政治組織に不信反感を表示する點に於て、過激主義と共行き方を同じうするものである。

　現今我々の主張する民本主義は右のやうな次第で極端の急進派と保守的反動派との双方から攻擊されて居る。マロックなどは理義の觀察を謬つて民本主義を難じたものであるけれども、保守的思想家の間には殊更らに同じやうな見地から議會に對する不信の念を擴布せんとする者もある。而して前にも述べたや

うにて[illegible]には[illegible]もので、政府[illegible]の連中は時として同じく民本主義を敵とする點に於て相結ぶ事がある。我國でも高畠素之君の一派が堀内佐藤兩中將等と握手したといふ心理的基礎は、こんな所にあるのではないかと思はれる。要するに民本主義乃至政治其物に對する非難の聲は相當に高い。殊に過激思想の勃興に動かされて、政治問題を飛越えて經濟問題に突進すべしとの俗論が横行するけれども、我々は斷じて此説に迷はされてはならない。眞理はその何れの側にも無い事を確信して疑はざる者である。

民本主義の過激主義と相容れざるは前述の通りであるが、社會主義とは如何と云ふに、少くとも共に立憲主義を根據に有つ點に於ては兩立し得る。而して社會主義は其理想實現の手段として普通選擧を主張するが、此點も民本主義と兩立する。但し民本主義は普通選擧の施行並に政權の普及に伴ふ其他の種々の政治的形式の整頓を或る目的の手段と見ず、夫自身の目的とする點に於て社會主義と異なる。而して民本主義は單に政治的形式の整頓――予輩は之を民本主義の純政治的要求と名付けて居る――のみならず、國民生活の實質の整頓に關する要求――予輩は之を民本主義の社會的要求と名付けて居る――をも掲げ[illegible]と云ふ所以である。而して國民生活の實質に關する方面では、主として精神生活に關するものと、主として物質生活に關するものとの二種あるが、其一方の要求に應ずるものが即ち廣義の文化政策――言論の自由とか、信教の自由とか、又は教育制度を如何にすべきかの如き――であり、他方の要求に應ずるものが廣義の社會政策である。而して此廣義の社會政策の方面に於て、人によつて或は所謂社會改良主義でいゝと云ふ人もあらうし、又は共產主義的社會改良まで行かなければならぬと云ふ人もあらう。此點に於て所謂社會主義は民本主義の政治的勢力に於て、廣義の社會政策の項目の中に當然の地位を占むるものである。

斯くの如く民本主義者は必ず社會主義者であるとは限らないが、然し社會主義者であつても妨げはない。けれども斷じて過激主義者たる事を得ざるものである。

然らば茲に問題となるのは同じく社會問題の解決に熱中する者で、何故に一方は社會主義者となり、他方は過激主義者となつて兩立せざる兩極端に立つか。其根本は畢竟プロリタリアートの相手方たる資本家を自家の同類と見るか否かに關係する。資

本家といふ者は全然勞働者に同情の無い者、如何に說いても訓へても、公益の爲めに私益を犧牲にするを肯んぜる者と見る以上は、之を撲滅する外にプロリタリアートの執政を實現するの途は無い、けれども若し從來の資本家が如何に貪欲であつたとは云へ、彼等も我々と同じ人類である。彼等と我等との間には何處かに血脈相通ずる者があつて、說き且つ訓ふれば何時かは解る時があるだらうといふ精神主義の確信を有する者に取つては、何うしても相手方の撲滅といふ過激手段には出で得ない。詰り人間は全然其物質的境遇の支配を受くるものとする唯物的人生觀を取るか否かの最初の出發點の相違が遂に兩者の間に千里の差を生ずる所以である。而して我々が何うしても過激主義に贊同し得ざる所以も亦實に玆に存する。

されぱとて從來の資本家階級の頑冥なる態度、彼等が殆んど救ふべからざる程度に階級的利益の擁護に腐心して居つた事實は、我々の過激主義者と共に之を認めない譯には行かない。過激主義も畢竟其爲めに起つたのではないか。故に我々は過激主義に反對すればとて、彼等の指摘した社會的缺陷其物に眼を蔽ふものではない。況して其缺陷を一刻も早く取去るの必要を強いて認めざらんとする者では毛頭無い。併し乍ら我々は如何に相手方が極端に頑冥だからと云つて、我々の態度も亦不當に極端になるを寛假してはならない。「百里を行く者は九十九里を以て半とす」と云つたのは封建時代に無智の愚民を動す爲めの標語である。我々は百里の半分は何處までも五十里であるといふ明白なる計算の上に自ら止る所を知らなければならない。止る所を知る者にして初めて其進むべき途に本當の勇氣を出し得る。

之を要するに昨今世界を風靡するの概ある過激主義は、社會進化の當然の順序として起つたものでなくして、一時の反動的産物である。例を露西亞に取つて觀ても、我々は露西亞の社會的缺陷の産んだ天才として、一方の極端に立つレーニンの外に、他方の極にトルストイある事を忘れてはならない。露西亞に於て永久の生命を握る者はトルストイかレーニンかは、少しく現代の文化史に精密なる考察を加へた者の容易に判斷し得る所であらう。

大東京市發達史論

―都市發達の原動力は官權か民力か―

白柳秀湖

一、鎌倉中心の交通系統

武藏國府中から多摩川を渉つて關戸（せきど）といふ村に出で、それから山にかゝつて原町田（はらまちだ）、鶴間（つるま）と高座川（片瀬に注ぐ境川の上流）に沿うて南下する道は今でこそ片田舍の往來として忘れられて居るが、鎌倉に幕府が開けてから、室町時代の末に至るまでは、關東の首府と、北武藏、上野地方とを繋ぐ主なる街道として、軍事上、産業上最も緊要なものの一であつた。私は今の陸軍大臣が步兵第三聯隊長であつた頃、數々、統卒の下に、多摩の流れを亂して徒渉し、關戸、原町田から、大山山麓の高原にかけて陣を布き、露に臥して王師を學んだことがあるので、武相國境の地勢は一木一草の末に至るまで、生々として深き印象の裡にある。鎌倉以後、室町の末にかけて此街道上の要所々々に數次大合戰の行はれたのは、全く此交通上の關係に基くものである。正平七年の春、新田義興が宗良親王を奉じ、信濃、上野の宮方を合して、洪水の如く武藏野に進出した時には、足利尊氏之を小金井、小手指の曠野に邀擊し、多摩の流れを背に運命を賭して輸贏を爭つた。降つて享德、康正の間、鎌倉の足利成氏が、川越及び白井に占據せる兩上杉氏と兵を交へた時も此街道の沿線、殊に武藏野と西多摩、南多摩の高地とを分つ多摩の河原（がはら）は常に攻防兩軍の衝突する所となり、幾度か關東武士の鮮血を以て彩られた。享德三年上杉派が持氏の排斥に對して長尾昌賢、太田資貫を先鋒として之に當らしめた時も、兩軍は島河原に於いて衝突した。康正元年成氏が親ら軍を率ゐて府中に進擊した時も、上杉氏は上杉憲秋を將として之を分陪河原に拒ぎ、戰鬪は二日に亘り、結局上杉方の敗北に終つたけれども鎌倉方の損害も甚しく、歷史上有名な大戰役となつて居る。是等の戰鬪によつて考へても、鎌倉、室町時代に於ける此街道が、如何に重要なものであつたかを想察することが出來る。

次に江戶を中心として奧州との交通を考へるに、當時の奧州街道は、右に述べた上州街道（暫く此名稱を用ふ）と、今の程ケ谷附近で分岐して、目黒から澁谷に出で、戸塚（富塚）、池袋、巣鴨附近を經て瀧の川に進み、右折して隅田川に沿ひ、豐島、尾久、田端と行つて、今の淺草公園の裏手、橋場の渡から隅田川を渡つて、東に出たものらしい。此渡船場を武藏の石濱と云つて、歷史上有名な土地となつて居る。（以上長祿二年の江戶圖）斯く奧州街道か江戶の北を迂廻して居たのは、當時江戶の地は江水深く灣入して沼澤多く、交通に頗る不便を感じたからであらう。（南向茶話）

江戶の發達を知るには、以上二つの交通系統をよく理解して置く必要がある。

二、康正年間關東の政治地圖

足利尊氏は室町に中央政府を置き、鎌倉に管領を置いて東國の押へとした。管領は職制上いふまでもなく中央の節度に服すべきものであつたが、漸次其勢力を增大して自ら公方と稱し、管領の稱呼は之を執事に襲はしめて、評定衆、引付衆其他の職制皆中央政府に倣ひ、隱然獨立國の形をなした。其室町將軍に對する反抗の情は既に二代氏滿の時から始まつたが、執事上杉憲春の死諫によつて、纔に事なきを得、滿兼を經て持氏に至り、驕溢益々甚しく、偶々事に激して遂に東西の平和は破裂した。此時に於いても上杉氏は常に室町將軍の忠實なる目付として數々持氏を諫諍したが、持氏が聽かずして上杉氏を滅ぼさんとするに至り上杉憲實は難を上野に避け、京都將軍の應援を得て持氏を金澤の稱名寺に亡ぼした。憲實は其主持氏の亡滅を見て心安んぜず、伊豆の國淸寺に入つて僧となり、管領の職は第三子の憲忠が之を襲いだ。是より先、里見、一色、今川、桃井、新田、田中、佐野、大掾、國府、高階、野田、小山等關東の諸將は上杉氏の節度に服することを背んぜず、持氏の遺兒春王、安王を日光から迎へて結城に據り、京都の將軍を後援とする上杉氏に對して一年有餘を支へたが、嘉吉元年四月遂に屈して春王、安王は殺された。かくて鎌倉の實權は全く管領上杉氏の手に歸したが、それでは關東の人心が歸服しなかつたものと見え、間もなく、持氏の遺孤永壽王（成氏）が信濃から迎へられて鎌倉の公方となつた。上杉氏は成氏が凡庸の資にあらさるを見て心私に安んぜず、將來の形勢を豫想して上野白井の本據を固くし、暗に鎌倉に備へた。是より先管領上杉氏は山内と扇ケ谷との二家に分れたが、扇ケ谷の上杉持朝は、山内上杉氏（憲忠）が上州白井の本據を固くするのを見、同じく鎌倉を避けて武藏國河越に城き、顯房が代つて家を襲いだ。斯くの如くにして一旦鎭靜し

た如く見えた京都對鎌倉の確執は、鎌倉對白井、河越の確執となつて、更に新しい局面を開いた。

果然、寶徳二年四月といふに火蓋は先づ上杉側から切つて放たれた。此衝突は幸に其兄憲實と共に剃髪して佛門に入つた上杉道悦の奔走によつて一旦和解したけれども、幾もなく再度の破裂を生じ、享徳三年十二月、成氏先づ憲忠の邸を襲撃して之を殺した。事茲に至つては尙上杉氏も今は猶豫すべきにあらず、直に兵を出して成氏と爭つたが、關東の豪族多く成氏に歸して戰勢頗る不利、康正元年分陪河原合戰の後は、常陸の小栗城、下野の宇都宮城等相ついで陷落し、上杉氏の勢力は日に蹙まるのみであつた。併し上杉氏の、背後には京都の將軍家といふ絶大の力があるので、其聲望は容易に地に墜つるに至らなかつた。果然、康正元年六月には今川範忠が室町の命により、東海五ケ國の大兵を率ゐて鎌倉に入り、成氏は敗れて下總の古河に走つた。是より世人が成氏を呼んで古河御所と云つた。其處で關東の政治地圖が又又一轉した。即ち前には鎌倉對白井、河越の局面であつたものが、此時になると、古河對鎌倉の局面と變り、上州の白井と、武州の河越とは、鎌倉の藩屏として、隅田川を境とし古河と相對峙するの形勢にあつた。

扇谷上杉氏(河越)の家老太田道灌が江戸城を築いたのは此時である。江戸城は如何なる目的によつて築かれ、如何なる地勢を標準として選ばれたか。

三、武藏野の作戰に應ずる江戸の地位

鎌倉管領の實權が其執事たる兩上杉氏の手に移つた如く、兩上杉家の實權もやがて其家老の手に移つた。殊に兩上杉氏が白井と河越とに占據して後は、兩家ともに主君が幼仲で事にたへなかつたので、其實權はそれ〳〵家老の手に移ることとなつたが、山内家の家老長尾景仲と、扇谷家の家老太田持資とはいづれもよく文武兩道に達し、亂世には稀に見る達見の士であつた。殊に扇ケ谷家(河越)の太田持資は其識見凡流を拔き、其器量の遠大なる到底常人の覬覦を許さゞるものがあつた。

道灌の父、道眞(資淸)も文武の譽れ高く、將軍義教に謁して關東武士の氣骨を見せ、近侍をして舌をまいて驚嘆せしめたほどの英傑であるが、其器量は古河公方成氏に對する當面の問題以外に出でなかつたやうである。其處へ行くと流石に持資の見識は高かつた。或る日父の道眞が持資を閑所に招きよせて、私に古河攻略の謀議を告げると、持資之に答へて、

『古河のこともさることながら、茲になほ一つの患ひといふは、山内家の爭ひなり。今は上杉兩家同心一體にて御所方(古河)と合戰候なければ、互に婚姻をなし、水魚の交りをなす

と雖、始終御所方の勢ひ跡を絶つに至らば、當家の患ひとなるもの必ず山內殿ならん。山內殿は大身にて國土あまた持ちたまへば、當屋形の所領などは彼長尾入道の領地にもひとしかるべし。いかで對揚すべけんや。」

と、此時持資の眼中には既に古河公方なく、古河滅亡後の關東の形勢がアリ／＼と映じて居たのである。此時に於ける古河の勢力は容易に侮り難く、昨年以來各地に轉戰して上杉方を斬り伏せ、大に其占領區域を擴大して其號令狀は宇都宮、結城、簗田に及び、南は埼西より、關宿、野田、市川等江戶川沿岸一帶を包み、東は常陸方面にまでも及んで居たのであるが、道灌は此時に方つて天下の大勢に孤立し、我儘放埒なる關東の諸豪族によりて擁立せられて居る古河の勢力を重視しなかつた。唯、恐るべきは其宗家たる山內氏の勢力である。山內氏には長尾景仲といふ對手にとつて不足のない智惠者がある。さうして其領土は到底分家たる扇谷氏の比でない。此恐るべき大勢力が京都將軍の威令を挾み、關東に號令することに於いて扇谷家を利害相容れざる當面の敵として進擊し來るの日に於いて、扇谷家は何によりて其洪水の平野に瀰漫するが如き大勢力を支持すべきか。河越城の危きは、怒濤の前に立つ青蘆の如く、磐石の下に咲く雛罌粟の如し。太田道灌の假想敵は古河にあらずして上州の白井にあつた。

彼は古河に對して備ふると同時に、白井に對して武藏の曠野を確實に其手裡に掌握するの必要を感じた。彼は隅田川を以て鎌倉の外壘と見做し、河越に據つて上州の勢力を支へ、更に一城を隅田川の河口附近に選定して奧州街道を扼し、河越城と策應して敵を隅田以東に拒止せんとするの策を立てた。

此平原的作戰に應じて彼は河越の外に、更に一個の新しき城寨を構ふべく、隅田の河口をトして適當の地を求めた。これが康正二年の春の頃であつた。

四、城地選定の標準

以上說く所を要約して、太田持資が城地選定の目標としたる所を擧ぐれば、左の二點に歸著する。

(イ)隅田川の右岸にして、奧州街道を扼するに足るの地點。

(ロ)隅田川の河口に近く、船舶を泊するに適し、上流河越城との間に水路の便を利用し得べき地點。

右の二點は江戶築城の目的に應ずる特殊の條件であつて、其理由は既に述べた通りであるが、此外に江戶城の資格として從來の城寨の具有する一般の資格と異る點を列擧すれば、樞要左の三點に歸する。

(ハ)平原にありて四通八達の要衝にあたり、糧食の運搬、

大街道の行路に自由自在の地位を占むること

(ニ)周圍の地味、豐沃肥饒なること

(ホ)土地開豁して多數の聚落に便利なること

右の三點は江戶城が日本從來の城塞と全く其類を異にする所であつて、江戶の發達を知らんとするものの、特に注意を要する點である。然らば日本從來の城塞とは如何なるものであつたか。一言にして之をいへば日本の城塞は一夫萬夫を支ふる天然の要害がそれであつた。日本には上古から中古にかけて城壁といふものがなかつた。處が支那にも西洋にも城壁は古くからあつた。唯、日本だけにそれがない。日本だけが天然の山河を城壁として特に之を築かなかつた。之は必ずしも吾々祖先の文明が、支那や西洋のそれに後れて居たからではない。支那にしても、西洋にしても、上古に於ける城壁の目的は、異民種間の戰爭に於いて、其人民を保護するのが、主要なる目的で、戰術上の目的は寧ろ從であつたやうに思はれる。支那や、西洋に於ける上古の戰爭は多くの場合、言語、風俗、宗教を異にする異民種の間に行はれたので、被征服者の受けた戰禍は實に慘憺たるものがあつた。捕虜が奴隷として運び去られたのは勿論、身分の高い婦人が掠奪されたこと、罪なき老幼が虐殺されたこと。財產家畜の運び去られたことなど、到底我國人の夢想だも及ばざる所であつた。處が我國にも太古には土蜘蛛、熊襲、蝦夷等の如き異民種との爭鬪はあつたが、それは決して併立競爭といふ程のものでなく、鐵器と石器若しくは土器との爭ひで、寧ろ國土の清掃と云つた方が適當な位なものである。此國土の清掃事業が濟んで以來は、同一血族の間に於ける新舊勢力の爭ひはあつたが、異民種との併立競爭はなかつた。故に戰爭は家族同志、どちらが勝つても負けても、戰禍の國土及び人民に及ぶ所は極めて少かつた。京都でも、鎌倉でも、自然の山河を要害として、特に城壁を設けないのは、全く異民種と接觸することのなかつた結果である。故に私は、上古に於ける支那や西洋の城壁は、戰爭そのものの目的に應ずるのが主でなく戰爭の慘禍を緩和するの目的が主であつたと解釋して居る。其證據には我國にも火藥が渡來すると直ぐ戰爭の目的に應ずる城壁が出來た。處が日本では支那や、西洋のやうに人民を城壁の中に取入れず、城壁の外に餘して特に人民を保護する必要を認めて居ぬ所に此國の成立に關する著しい特色がある。處が日本にも元弘、建武の頃から漸く城塞らしいものが出來て來た。楠正成の千早、赤城に築いた城寨の如き、之を後世から見れば殆ど城塞といふ程のものではなかつたに相違ないが、それでも源平戰爭時代の『館(たて)』とか『柵(さく)』とかいふものから見れば、餘程嚴重なものでご

あつたに相違ない。處が此元弘、建武の頃から漸く日本に發達した城寨は、太田道灌が江戸に築いた城寨とは全く其性質を異にしたもので、第一に其目的が違つて居る。從つて其條件も違つて居る。次に其目的及び條件の相違を概括して讀者の參考に資することとする。

(い)少數の味方を以て、或る期間强大なる敵を支ふることを目的とし、必しも勝利を期するものにあらず。例へば二三百の兵を以て中央政府に反抗し、所在に同志の蜂起するのを待ちて革命の目的を遂せんとする場合。若しくは少數の兵を以て大軍を牽制せんとする場合、或は少數の兵力を以て一時を支へ、友軍の來援を待つ場合。

(ろ)從つて城地は山河自然の要害を擇び、道路狹隘峻嶮にして敵が容易に兵を進め能はざることを以て必要條件とす。

(は)兵糧は豫定の期間を支ふるを以て足れりとし、必ずしも補給の途を顧慮せず。(勿論、糧食補給の便利と附近の地味肥沃とは之を望まざるにあらざるも之等の條件を具備する土地は、必ず防禦の目的と一致せざるを常とす。)

今、日本歷史を繙いて之を見るに、天文十二年に西洋から鐵砲が渡來して、忽ち全國に普及し、戰術、戰法に大變化を生ずるに至るまで、日本の城寨といへば何れも右の目的及條件に應ずるもののみで、平原の城寨といふものは全く絶無であつた。處が太田道灌の江戸城を築いた康正二年は、鐵砲の始めて我國に渡來した天文十二年を去る八十七年の昔で、其城地としての資格が火戰に應ずる洋式城寨の資格と全く相一致して居るのは、歷史上一つの奇蹟と云つてよろしい。即ち道灌の選定した江戸城の資格中、(ハ)(ニ)(ホ)の三項は全く火戰に應ずる築城法に合致するものであつて、都市の發達と密接の關係がある。

五、官僚の都市と民衆の都市

早い話が、上州の白井にしても、武州の河越にしても江戸城のやうな平原にあるのではない。後年山内上杉氏の家老、長尾景春の築いた鉢形城も荒川上流の斷崖により天險を以て要害としたもので、全然舊式の城寨である。江戸城が餘り時代に超絶して居るので中には之を平原の城寨として取扱はず、矢張り山地の城寨であるといふ人もあるが、前に述べた戰略上の意義から考へて、武藏野の大勢から考へて、鎌倉を中心とする交通系統から考へて、江戸城は疑ひもなく日本に初めて試みられたる平原の城寨と云つてよからう。

其處で、鐵砲の渡來より八十七年以前、信長の天主閣を安土に造營するより百三十年以前、太閤の大阪築城より約百四十年

以前、太田道灌は何ものかの力に促されて彼の如き雄大なる戰略を胸中に描き、新式の城塞を武藏野の一角に起したかといふに之は全く歴史の謎であつて、容易に解くことは出來ない。が、要するに道灌を造つたものは武藏野といふ日本一の大練兵場である。騎戰が衰へて歩戰が發達し、諸大名が競つて大兵を動かさんとするに至つた時勢の刺戟である。戰爭と云つても騎戰時代の人數は五十騎、百騎の小勢で、千騎、二千騎といふ大兵を動かすことは滅多になかつた。處が元寇の頃から騎戰が漸く廢れて歩戰が起り、元弘建武の世となれば『徒立』の流行につれて團體戰が大に發達した。永享十年八月、將軍義教が上杉持房を大將とし、節鉞を授けて持氏追討の師を起した時には其兵十數萬騎と稱せられ、二十三日に出發して先陣が消名の橋に達したるに、後陣はなほ尾張の熱田になつたと註せられて居る。割引をして考へても可なりの大軍であつたといふことが思はれる。完全なる團體戰は無論鐵砲の渡來以後發達したものであるが、其傾向は元弘、建武以來既に斯くの如く著しいものがあつた。斯く考へ來れば、一代の俊傑で、生え抜きの關東兒で、武藏野の精氣を一身にうけて育つたやうな太田道灌が、武藏野の作戰に應ずる新式の城塞を思ひ立つて、隅田の河口に近く、千代田、寶田、祝田の三村に跨る高地をトし、茲に破天荒の新式城塞を經始したのも別に不思議はないかも知れぬ。

西洋の學者は都市の發達について種々の原因をあげて居る。寺院の祭日に立つ市が發達して都市となつたといふ説もある。武士土著の封建制度が廢れて、諸侯が其臣下を城中に集めるやうになつた爲に其城下が遂に發達したといふ説もある。船舶の碇泊に便利なみなと〳〵が賑はつて都市となつたことは說明するまでもない。が、之を要するに封建の土著制度、封建の鎖國主義が崩れて、多數の人が一ケ所に集合して生活し、多數の人が國境を踰えて他國と交通するやうになつた所に都市の發達したことは疑ひを容れぬ。西洋では十字軍の時、歐洲の諸侯が聯盟して大兵を東方に送つたことが、非常な勢で交通の發達を促し、其要所々々を都市として發展させたといふことになつて居る。我國でも鎌倉以來、東海道を大軍が頻々と往來するやうになつて、其要所々々が後世の都市となるべき素地を作り、人家の聚落する所には怪しげな婦人さへ出沒した。之を要するに諸大名が其城塞を平原曠野に選定するやうになつたのは、各地に都市の基が置かれたよりズツと後世の事である。即ち都市は其以前から既に發達の芽を吹いて居た所へ、武器の革命が起つて、城地選定の標準が根柢から一變した。さうして其標準が都市の發達すべき土地の條件と全く一致した。即ち（一）四通八達

の要路に衝り、(二)舟楫の便あり、(三)附近に肥沃豐饒なる原野を有し、(四)土地開豁して多數の聚落に便利であるといふ條件は全く都市發達の條件と一致して來たので、諸大名は其城地をそのまゝ領内の都市として發展しかけて居る土地に選定すればよいといふことになつて來た。茲に於いてか、近世都市の發達には二つの順序がある。此區別は私の獨創であるか(或は西洋の學者の中には先人があるかも知らぬ)都市を研究せんとするものにとつて最も重要なことであると思ふ。

(甲)交通の關係から、又地勢の關係から既に都市としての發達の道程にあつた所へ大名が城塞を設けた爲に、急激な發展を現出したもの。(例へば大阪市の如き)

(乙)聚落たる農村であつたが、大名が城地として選定した爲に、都市として急速の發展を遂げたもの。(例へば東京市の如き)

前者の場合に於いて、都市の發展を促した中心の力は自然である。社會である。民衆である。後者の場合に於いて都市の發展を促した中心の力は權力である。政治である。官僚である。大江戸から大東京市にかけて其發展膨張の裏に、常に政治上の權力が附きまとつて居るのは、江戸城草創の歷史に大關係があると私は信ずる。

六、郊外論

此關係を最も雄辯に證明するものは東京市と大阪市との郊外の比較である。政治の力で發展して來た東京市は、江戸城を中心として外へ〳〵と膨張した。從つて東京市の郊外は常に自然と人とのいたましい爭鬪を現出し、榛々莽々たる武藏野は一歩一歩、東京市の爲に侵略せられて行くのである。處が大阪市に至つては其關係が反對である。仁德天皇の經營以來、日本の富の胃の腑として自然に發達して來た攝河泉の野は、一村一邑、何處でもが都である。大阪市のみが都でない。試みにアノ驚くべき發展を遂げた大阪の郊外電車から攝河泉の平野を眺望すると、一村一邑相呼び、相應へ、參差たる甍は田甫を綴りて遠く眼の及ぶ限りに連り、森あれば必ず塔あり、丘あれば必ず樓あり、私の所謂『何處でもが都』といふ感じは何人の頭腦にも浮ぶ。之を東京市の郊外、謂ふ所の『場末』を經て歩一歩榛莽の領域に入らんか、部落遠く、人煙稀少、馬に乘つて弓を持つた武士の、末もかくれるばかりに生ひ茂つたといふ蘆荻(更科日記)は今もその面影を止め、若草の妻もこもれり、我もこもれり(伊勢物語)と詠まれたすゝき尾花は遠く地平線に連つて兩上杉氏の旗印が今も野の末に動くやうな心地がする。之を要するに東京の文明は政治の力で中央から野に嚮かつて行く。大阪

の文明に自然の勢で、周圍から中心に集まつて行く。東京市に於ける江戸城は、東京市の主である。中心である。生命である。併し大阪市に於ける大阪城は、大阪市のお客樣である。文飾である。儀式である。

大阪市に行つて驚くのは、郊外電車のターミナスが、市の中心、若しくは目的地の反對の方向にあることである。京阪電車が天滿橋から出發して居るのは、東京で云へば京濱電車が日本橋から出發して居るのである。市の中心から京濱電車の出發點に行くには、アノ長い高輪を牛の歩みのやうな市電に揺ぶられて、懷中時計を四五回出して見た後でなければ納まらぬ。それも直ぐ乘換へが出來る事か、市電の終點から八ツ山の橋一つ越して漸と京濱の切符に有付く。而もその聯絡を市電と京濱とが背中合せで空嘯いて居るのは言語道斷で、更に光榮ある江戸ツ子が、雨の降る日に傘をさし、重い荷物を提げて、座席の爭奪に悲鳴をあげながらヤツト腰を落付けると直ぐ『何うでげす。品川から淺草まで行つて五錢とは安いもんぢやありませんか』に至つては、言の加ふべきを知らぬ。それが中央政府の權力で、お役人の威光で近頃ヤツトの事院線が丸の内まで行くことになつた。東京では何事も官僚の力でなければ解決がつかぬ。官僚が手を出して官僚一流の經營をするまでボンヤリして居るから、東京驛のやうな、市民の實生活に縁の遠い、江戸の[illegible]積上沒交渉な官僚式停車場が出來る。斯うして現に八ツ山に於いて繼續されて居る悲劇が、東京驛の玄關にも移された。それを金持ちや、權力階級の御機嫌で持つて居る高橋某といふ官僚式の老驛長が空嘯いて、『そんなことはコツチの責任ではないよ』(註に曰く、電車が不便なら自動車でおいで)と往訪の新聞記者に豪語して居るのは何處まで皮肉であるのか分らない。大東京市は畢竟するに官僚の都である。權力の都である。市民の都ではない。民衆の都ではない。

更に大阪市に就いて觀察するに、市の中心から考へて東に當る高野山行の電車が其ターミナスを西區に有するのも驚くべきことである。之は本所の押上から出發する京成電車が、四谷、赤坂方面から出發して居るのに比較すべく、大塚や、新宿から出發する名も知らぬ何とか電車が、芝、品川から出發して居るのにも比すべきか。押上といひ、大塚といひ、箕輪といひ、池袋といふ。如何に其名の聞えざることよ。之を通俗にせんには瀧澤馬琴の八犬傳を引用し、百日鬘の犬山道節を引張つて來なければ駄目である。畢竟するに東京の郊外電車といふものは東京市民が郊外に働きかける爲に設けられたものではなく、郊外の住民が『東京に行く』爲に設けられたものである。此點から考

へても東京は飽くまでも中央集權式である。官僚式である。

七、政府の土木と市民の土木

文明十八年太田道灌が誅せられてから永正二年に至る十九年間は上杉定正の子朝定の臣曾我豐後守といふものが江戸城を守り、大永四年上杉氏が、小田原の北條氏に滅ぼされて後は、北條氏の臣、遠山、富永、太田、牛込、三田の諸將がそれぞゝ其部署について之を守つて居たが、天正十八年小田原落城と同時に徳川家康は秀吉の封をうけて關八州の主となり、秀吉の勸告に從つて(落穗集)江戸を居城と定め、八月一日を以て入城式を行つた。是から家康は江戸及江戸城の經營に取かゝり、高きを削り、低きを埋め、漸次修理開拓の歩を進めて居たが、慶長五年關ケ原の戰爭が終ると同時に、外樣大名に課役して更に大々的の經營を開始した。斯くて慶長八年から同十九年頃までの間に江戸城は全く其面目を改め、規模の大、輪奐の美、天晴天下の覇府たるに愧ぢざるに至つた。殊に寛永から明暦にかけては、主として市街の改良が行はれ、道路も橋梁も可成り立派に整ひ、承應三年には水道工事も完成して先づ大都市としての基礎が出來上つた。以上の次第によつても分る如く、大東京市の基礎工事といふものはすべて之を政府がやつた。商業上の必要に促されて市民が自ら之を經始したのではない。一番古い所では文明十年太田道灌が下總臼井城を攻撃する爲に、隅田川に架橋したといふことがある。(僧萬里の詩)此橋は所謂軍橋で、永久的の工事ではなかつたものらしい。明暦大火の時、隅田川の岸に於いて殊に死人の多かつたのは、橋がなかつたからであるといふので、政府は火災の後先づ兩國橋を架し、尋いで永代、新大橋を架設した。或人が此架橋を江戸城の防備の上から非難すると、酒井忠勝が『天下を治むるは人を以て要害とすべし。人を苦めて要害とせば江戸は一日も支持し難からん』と喝破したといふのが有名な話になつて居る。松平信綱が諸大名の邸宅を整理して道路の幅を擴張して最初の市區改正を行つたのも此時である。水道とても同樣である。神田川上水は最も古く、家康が江戸城に入つて間もない頃、大久保某といふものの引用したのが始まりである。承應二年に始めて翌年の六月に竣成した多摩川上水は、芝口の人、玉川庄右衛門、同清右衛門の仕事といふことになつて居るが、幕府から七千五百兩の補助があつたので出來上つたもので、政府の事業も同じことである。斯樣な次第で、江戸の基礎工事が殆ど皆政府の經營になり、其結果として商業が發達したといふ事實は、當時から今日に至るまで引續いて東京市の産業及市民の心理に重大な關係がある。産業に關することは別に述べるとして、東京市民がその都市生活に必

要なる諸機關に對して自治自督の精神に乏しく、之を[illegible]若しくは一部少數の資本家に委ねて少しも自家の利害に頓着せず、或る權力階級の爲に遺憾なく其面目を踏潰され、無暗に其利益を蹂躙せられつゝも恬として憤る所を知らざるが如きは、全く江戸時代からのお蔭思想、冥加思想に基くものと私は思ふ。之を以て所謂江戸ツ子が義理に篤く、利慾に恬淡なるの致す所となすが如きは皮相の觀察も餘りに甚しい。其處へ行くと大阪の發達は歴史が古く、自然の力による所が多いので、道路の改造、市區の整理、港灣の修築、河川の浚渫、橋梁の架設等必ずしも政府の力にのみよらず、市民が其財力を傾けて自ら成し遂げた所が甚だ多い。角倉了以(天文―慶長)河村瑞軒(元和―元祿)等の土木事業が、其表面は如何にもあれ、其内實は京都、大阪の町人階級によつて促され、其財力によつて成功したことはいふまでもあるまい。江戸の大土木が殆ど盡く幕府の高壓命令に出で、外樣大名の負擔によつて成し遂げられたのに比し、京都、大阪に於いては大堀川の開鑿も、高瀬川の疏通も、大阪港の修築も、淀川、大和川の浚渫も殆ど民間の力によつて成し遂げられたといふことは私達の餘程注意すべき事實である。大阪市民が電車電燈、電力、瓦斯、其他都市生活百般の經營能力において東京市民に比し常に數段の優秀を示し、所謂上方贅六の侮辱に對し、萬丈の氣を吐いて居るのは、其由來する所が頗る深遠である。之を以て贅六根性の副産物となすが如きは、未だ彼等の將來の如何に恐るべきかを知らざる淺薄皮相の觀で、彼等が必ずしも眼前の私利私慾にのみ耽る我利々々亡者の亞流でないことは最近の社會政策的施設によつて最もよく證據立てられた。大阪市の社會政策的施設未だ必ずしも稱すべきではないが、簡易食堂にしても、公設市場にしても、善いことは何でもドシ〳〵實行して行く。東京市民は資本家階級の横暴に妨げられて、摺つた揉んだの長評定をして居る間に大阪市は何時でも一歩お先へ失敬する。大阪市には大學はない。名高いデモクラシーの學者はない。唯、大阪市民の古い信條が社會政策の精神と合致する。善き奉公人を使ふことと、お客を優待することとは商賣繁昌の秘訣である。勞働者の知識を進め、勞働者の生活を改善することはよき使用人を得る途である。都市百般の施設に於いて貧民階級を優待することはお客を優待する所以である。何となれば貧乏人は社會の主要なる消費者で、市民の最上のお得意であるからである。此點に於いて東京市民ほど最上のお得意を虐待酷遇するものはあるまい。最近の電車値上に於いて、三電協定に於いて、又近々行はれんとしつゝある瓦斯の値上に於いて、最も露骨に最も無殘に苛めつけられ、若しくは苛

め付けられんとしつゝあるものは腰辨階級と勞働者とである。社會政策は愚か、東京市は未だ政府と特權階級とが合體して貧民、勞働者に一切の負擔を轉嫁し、飽るまでも之を硬縛酷使せんとする資本的蒙昧時代を經過して居ないのである。大東京市民たるもの、何の辭か、以て贅六の勇敢なる社會政策的施設を許せんとはする。

八、獨立の商業と御用商業

然らば江戸に於ける商業及びそれに伴ふ諸機關の發達は何うであつたか。江戸の都市が大部分政府の力によつて經營せられた如く、江戸の商業及びそれに伴ふ諸機關の發達は殆ど盡く、大阪市との取引上の關係、若しくは『上方者』の移住によつて、大阪から輸入されたものである。先づ順序として江戸に『上方者』の殺到した事情を想像するに、家康が江戸城に入ると間もなく、今の日本橋葭町邊に一つの遊女町(舊吉原)が出來た。此處の遊女は多く上方者であつた。此遊女町は武士の風紀を亂し、市の善良なる風俗を害するといふので慶長の初年に取拂ひとなり、遊女どもは一旦江戸を追放されたけれども、江戸の繁昌につれて又麹町の八町目に一つの新しい魔窟が現はれた。此魔窟は京都六條の傾城屋が移轉して來たもので、十四五軒あつた。後に至つて有名な庄司甚右衞門が江戸の遊女屋を統一して遊廓の設置を出願しようとした時にも、上方女專門の遊女屋と江戸女專門の遊女屋(最初常磐橋內にあり、後元誓願寺前に移轉す)とが折合はなくつて困つたといふことがある。此形勢から見ても、江戸の人口增加率が如何に甚しく、上方者が裸一貫で江戸に乘込む勢ひの如何にすさましかつたかが分る。後に江戸の大商人と云はれたものも、元を洗へば多くは此頃江戸に乘込んだ上方者である。今日でも江戸以來の老舖を誇る大商人が、多く上方者の子孫であることは一々例を擧げて說明するまでもない。何と云つても商業に於ける江戸は大阪の出店であることを否むことが出來なかつた。元和の役に大阪市の受けた打擊は、秀忠將軍の時に至つて早くも舊に復し、寬文の頃に至ると、兩替屋、卽ち今の銀行のやうなものも出來、問屋組合も出來、延賣買の法も立つた。近松の世話淨瑠璃に現はれて居る爲替手形の法(五十年忌歌念佛)問屋中の嚴重な商習慣(天の網島)飛脚宿の組合、及び爲替手形に對する組合の保險法(冥途の飛脚)などそれから約二十年ばかりの間に立派な發達を遂げたものである。處が江戸に初めて兩替店の出來たのは、延寶の末年で、創設者は三井家の祖先、三井高利であつた。三井高利が江戸の繁昌を見て、伊勢の松坂から江戸に乘込み、駿河町に吳服店を開業したのは延寶元年である。さうして其初めて江戸

に呉服店を開いたのが延寶の末年であるから、此制度已に大阪よりも十四五年後れて居る。處が三井高利の子、高平は元祿四年幕府から御用爲替を引受けて、それが爲に巨利を博することとなつた。此爲替手形の法も無論大阪に起つた事で、高平の創案ではない。殊に初めて幕府に此請負を出願したのは出目某と云つて上方者である。出目某は六十日爲替といふ一制を案出し、上方三十六人の代官から江戸に差立てる納金を引受けて六十日目にそれを幕府に納め、自分は公金を融通し、江戸と大阪とに店を置いて大に儲ける。幕府も道中人馬の冗費を省き、且つ安全に之を收め得るといふので出願中であつたが、(翁草)認可を得るに至らずして病死したのを越後屋の高平が引うけて、御用爲替を取扱ふこととなつたのである。斯くの如き次第で、商業上の諸制度、諸機關は何れも大阪に起つて、後江戸に及んだものであるが、茲に私達の注意すべきは、如何なる制度、如何なる習慣でも、大阪に於いては諸國の問屋商人、及び諸大名が對手で、其關係が大に自由であつたが、江戸に於いては幕府の『御用』といふことが主で、大なる補助もあつた代りには、其關係がまた極めて窮屈であつた。此關係は延いて今日にも及び、東京の大商人といふものは、何うしても政府の補助を當てにし、政府の『御用』を引受け、其豫算を見て事を企てるといふ氣風が拔けない。高田でも、大倉でも少し大きい商人といへば政府の『御用』を請負ふことによつて立つもので、議會に提出される豫算を見た後でなければ手も足も出ない。大隈內閣の時、貴族院が豫算案を否決すると、東京の所謂『實業家』は青くなつて狼狽を始め、政府と貴族院との間を調停するなど云つて騷いだのもおかしかつた。政府の豫算が成立しなければ手も足も出ぬ東京の大商人も心細いものではないか。後年、江戸の商業組合が二派に分れ『樽廻船』組と、『菱垣船』組との間に激烈なる競爭が起つた時も、菱垣船組が幕府に哀訴して年々一萬二百兩の補助金を得て纔に、樽廻船組に對抗し得たのも、今日の航路補助問題に似ておもしろい。樽廻船組が幕府の保護の下に立つ菱垣船組を向ふに廻して一歩も屈しなかつたのみか、常に菱垣船組を壓するの形勢にあつたのは、攝津傳法村あたりの大酒造業者が背後にひかへて居たからではあるまいか。何れにしても東京の商業は政府の力に依倚する所が多く、大阪の商業ほどに獨立獨步の力に乏しかつた。東京は所詮政治の都である。官僚の都である。御用商人の都である。

九、薄利多賣と廢物利用

斯く云へば一から十まで東京の商人をこなし付けるやうであるが、東京の商業にも特色がないではない。既に述べた如く、

東京は江戸時代の初期から商業上の諸制度、諸機關に於いて、常に大阪の後を追つて來たのであるが、唯一つ大阪に勝つて居たことがある。それは人口の增加率である。大阪も元和以後人口は漸次增加したのに相違ないが、江戸の人口增加率は實に驚くべきものがあつた。諸國から我も〳〵と江戸の噂をきいて集まつて來るものの中には眞面目な商人、善良な徒弟、勞働者もあつたであらうが、隨分如何はしい浮浪人も多かつた。上方者に云はすると江戸は人間の掃溜であるといふ。が、其處に江戸の特色があつた。零碎の利益でも一つ當つたとなれば事が大きい。西鶴の『永代藏』に上方のある金持ちのノラ息子が、放蕩の揚句勘當されて江戸に下る途中、品川東海寺の門前に一夜をあかして、江戸を喰ひつめた乞食に何かよい商賣はないかときく條がある。其乞食の江戸觀に曰く、

『いかな〳〵此廣き御城下なれども、日本のかしこき人の寄合、錢三文あだには儲けさせず、唯、銀がかねを溜める世の中』

と前提して、江戸も已に新開の遺利は盡き、資本主義の固定したる事情を告げたる後、更に曰く、

『大分に廢りゆく貝がらを拾ひて靈岸島にて石灰を燒くか、物ごと閙がしき所なれば、刻昆布、花鰹かきて計り賣か、つゞき木綿を買うて手拭の切賣か、斯樣なことならでは輕い商賣はあるまじ』云々（才覺を笠に着る大黑）

と。江戸の商賣の特色はよく此中に現はれて居る。廢物を利用するにしても、零碎の利を集めるにしても、多數ほど恐ろしいものはない。此點に着眼して大成功をしたのは越後屋の現金主義と、切賣りとである。三井高利は、少數の金持に高く賣つて儲けるよりも、多數の貧乏人に安く賣つて儲けるのが江戸の商賣の極意であるといふことに氣付いて先づ『現金懸値なし』といふ看板を思ひ立ち、之によりて多數の市民に現金の外賣らぬ代りに越後屋は安いぞといふことを暗示し、續いて吳服、反物の切賣りを始めた。切賣りは當時仲間の申合せで嚴禁といふことであつたが、下層社會の同情は之が爲に翕然として越後屋に集まり、流石にやかましい同業者も之を如何ともすることが出來なかつた。當時は之が江戸は勿論日本國中のやかましい評判となり、西鶴も『永代藏』に『大商人の手本』として推賞して居る。（昔は掛算今は當座帳）

薄利多賣が江戸の商賣の特色であつた爲に廣告術は全く江戸のものであつた。大阪の商業は諸國の問屋商人、若しくは諸大名が對手であつたから、大賈は緘して發せずの一點張りで、廣告などいふことには思ひも及ばなかつた。其處へ行くと東京は

[illegible]の方法もいろ／＼に考案され、店頭の装飾なども可なり發達した。越後屋の創意にかゝる番傘、赤本、黄表紙の本文、若しくは新聞を利用すること、芝居、操り人形等を利用すること。著名なる神社佛閣に華表、玉垣、燈籠等を寄進することなどいろいろあつた。店頭の装飾にも寛政の頃には却て凝つたものが多く、客が來ると人形が商品を持つてセリ出すやうな巧妙な仕掛けもあつた。齋藤彦麿の『寛天見聞記』に、

『寛政の末まで此處にあらし音八と云役者の家にて鹿子餅を賣ける。見世先に四尺ばかりの坊主小僧の人形、袖なしに羽織を着し、茶盆の上へ竹の皮包を持たるを立置きたり。餅買ふ人の來る時、此人形、おのれと持出るぜんまいからくり有りし也。』

とある。斯ういふことは流石に江戸が本場であつた。

十、明治維新と大阪の財力

維新の時、東京遷都のことを建白したのは大木喬任と江藤新平とである。世人往々にして之を大久保甲東と間違へるが、甲東は大阪遷都の建白者である。大木喬任と江藤新平とが、連署して東京遷都の建白書を岩倉公の手許まで差出したのは、全然政治上の意義に出で、産業上、軍事上、其他一切の地理的關係[illegible]否かに就ては何等の考察も、研究も加へられた譯ではない。(大木家所藏喬任伯日記及び意見書) 唯、王師東下して慶喜歸順の意を表したりと雖、東北の人心未だ定まらず、江戸には多くの幕臣が祿に離れ、職を失して其適歸する所に迷つて居るのに、勤王の諸藩も財政窮迫して内訌、大に苦しんで居る。此際は兎も角も至尊の東幸を仰いで威を東北に示し、仁を幕下の士に垂れ、天下の人心を一新する必要があるといふ意見書を岩倉公に提出し、それが採用せられていよ／＼遷都といふことになつたのである。今日多くの專門家が有らゆる方面から研究をした結果、日本の首都としては矢張り東京が一番適當であるといふ、ことに意見が一致したとすれば、これぞ大木喬任、江藤新平の思ひもかけなかつた偶然の功績である。それは何れにしても、此政治的大變革の結果として、京阪の將來が一時極端に悲觀され、京都が火の消えたやうな衰微を來したのはいふまでもなく、大阪は東京遷都の影響に搗てて加へて大名小名の版籍奉還により、各藩の藏屋敷が一時に撤廢され、藏元、掛屋は三十六人を殘して將棋倒しに破産をするといふ慘狀を呈し、從來その生命とした商業上の覇權までも東京市に奪ひ去られるといふ悲境に陷つた。此時に方つて何人が大阪市の將來を悲觀せざるも

のがあらう。何人が舊き江戸の得意を想望せざるものがあらう。けれども物は見様である。一概に明治維新は薩長勤王の働きであるといふが、實は京阪を中心とする資金の力が、薩長の雄藩を動かして成し遂げた大事業である。自由の都市であり、自然の都市である大阪市に蓄積された資本主義が發して、德川氏の封建制度に最後の止めを刺したのである。江戸を征服したものは大阪の財力である。大阪の財力は勤王の旗印となり、薩長の兵力と化して今江戸に乘込んだのである。大阪市の寂寞は、旌旗の靡として動かず、兵營の寂として彈なき靜けさである。

試に舊き江戸の立場に立つて、新しき東京を見よ。新しき東京の繁榮と光華とに於いて、舊き江戸は何を誇り、何を說かんとするか。舊き江戸が自らの力を以て新しき東京の何の部分を建設したか。新しき東京は舊き江戸の征服者であつた。侵入者であつた。さうして東京の後押しをしたものは京阪の富の力であり、蹂躙され、破壞され、支配され、凌虐されたものは、爛熟の極、廢頹の境に入りつゝありし舊き江戸の文物である。明治維新は政治の改革であつたのみならず、產業、學術、文藝、美術、有らゆる文明の改造であつた。然り江戸を中心とした有らゆる文明の改造であつた。

十一、將來東京の主たるべき勢力

果然、江戸を征服した京阪の財力が、大東京市建設の使命を果して、其故郷に復歸すべき日は到來した。日清、日露の二大戰役は實に其一大轉機の時機であつた。日本が東洋の覇權を掌握すると共に其對外貿易の中心は、遠き歐米から、近き東洋に移動した。紡績に、綿布に、燐寸に新しき需要は颶風の如く日本の內地に襲來した。政府の補助金に賴らず、政府の豫算に關はらざる獨立の工業が驚くべき勢を以て勃興した。さうしてそれらの事業は原料の產地と、生產地と、市場との關係から日本一の東京、文敎の中心であり、政治の中心である大東京市を見捨ててドシ／＼大阪に移動を始めた。何でもかでも本社は日本一の大東京市に置かなければならぬといふので、莫大の費用を投じて建設された工場と事務所とは、何時の間にやら空家同然のものと化し、大阪、神戶の郊外に、東京郊外の名を冠した大會社の大煙突が林の如く聳え立つやうになつた。大阪市は非常な勢で膨脹を始めた。東京市の膨脹も驚くべきであるが、併し、大阪市の人口增加率は今や、鮮やかに東京市の人口增加率を凌いで來た。ちやうど寬永、正保の昔、江戸の人口增加率が、舊き大阪のそれを凌いだやうに、大阪の發展は今や明々地に東京を顏色なからしめて居る。

大阪の築港は失敗して魚釣場だと云はれて居る。けれども大

反[illegible]論者は、[illegible]戸の死活問題を[illegible]することなしに行はれたる

東京灣の築港問題が何のかのと云つて煮え切らぬ背後には横濱の死活問題がある。京濱運河を開鑿して兩岸を工業地にせよなどいふ若しい說もある。大阪は發展しても神戸と共喰ひをせぬ。大阪と神戸とは提携して發展して行かれる。東京と横濱とは動ともすると共利害が衝突する。尤も横濱近年の不振は東京に喰はれる結果ではない。淸水に喰はれ、四日市に喰はれ、遠くは神戸にまでも喰はれる結果である。心配する人があつて八王子の貨物を埠頭まで運び込む横濱鐵道といふものを敷設した。さうして日本に初めての臨港鐵道であると誇つたが、横濱市の爲には何の生彩も添へなかつた。さうして東京市民の大多數は其鐵道の存在を知らんで居た。さうして西園寺公とお花さんとの旅行によつて、初めて其線路の存在を知つた。

日淸戰爭の後までは大阪新聞の呼聲は豐橋驛以東になく、朝日ビールも、八ツ橋も濱松までは來なかつた。處が日露戰爭後は大阪新聞が濱名の水をこえて遠慮なく靜岡縣に侵入し、此頃では足柄の險を突破して國府津を占領した居る。東海道の濱松は昔、純然たる東京の勢力で、語の訛りにも東京に似た處があつたが、日露戰爭後は全く西方の勢力に傾いた。濱松の男曰く『遊びに行くなら東京に行け、金儲けなら大阪に行け、北海道の貨物は四日市で揚げよ、船賃は高くても、汽車賃が安い』

日淸、日露の二大戰役まで商工業の中心であり、政治の中心であつた大東京市は、日淸、日露の二大戰役を境として商工業の覇權を大阪に讓つた。處で、殘る政治は實生活が問題か、實生活と沒交涉な空理、空論が問題か。新興勢力の私鬪に美しい名を冠した憲政擁護、閥族打破の叫びは東京市を中心として大阪市に波及し、國民の胃の腑の問題から起つた（政府の發表によると）米騷動は、大阪市から起つて東京市に傳染した。政治が若し國民の實生活を取扱ふものとすれば、政治の實質は東京になくして大阪にある。將來政治上の新しい勢力が商工業の都たる大阪市に勃興して、空虛な東京の政治に新しい生命を鼓吹する日は來ないか。それはちやうど明治維新の時新たに興つた京阪の町人階級が、薩長の兵站部となつて幕府を倒したやうに、或る新勢力が大阪市から勃興して、腐り切つた現存政黨の支柱に改革の大斧鉞を加へる日は來ないか。

横濱市の大火を見るの記

法學博士　渡邊鐵藏

(上)

四月二十八日所用があつて私は横濱市に神奈川縣廳を訪れてをつた。晝の食事の最中市内長者町より出火したといふ報知に、折柄烈風のこと丶て警察部長は驚いて直ぐ樣箸を置いて佩劍の音ガチャ〳〵と出で去つた。私は新任の大島内務部長と話をしてをると數分毎に部長室の扉が開かれて火事が益々大きくなるといふ報知がある。その度毎に部長の顏は緊張して來る。數回目の報告を聞くと共に部長はそれは容易ならぬことであるといつて、忽ち自働車を命じて火事の現場に馳せ付け、數分の後大變な勢で歸つて來たが、折柄縣廳間際の仲通りに起つた別手の火事が猛威を示して縣廳をも威嚇せむとする有樣に、部長や廳内の人達は自らも火の車の樣に回轉して、警視廳に自働車ポンプの來援を請求するやら、應援巡査の出張を依賴するやら、救護の手段を打合せるやら、防火、避難の準備をするやらこ丶も火事場其まゝの騷ぎとなつた。私の樣なのんき氣な學者が此騷の中に閒誤〳〵してをることは邪魔になつて氣の毒に思つたが、しばらく大島君の新任早々の活動振りを拜見しながら、昨年の秋の米騷動の折に警視廳官房主事としての同君の活躍の狀況を想像して見たりして居たが、ふと思付いて後學のため火事見物をしようと考へた。

先づ苦しい思いをして縣廳の高い塔の上に昇つて見たが、其の效果空しからず二つの猛火が暴威を振ふ有樣があり〳〵と見える。仲通りの方の別火は既に數十軒を甜め盡して正に三井銀行支店の美しい堅固な煉瓦造の建物を包圍攻擊中であつた。町の角に控へてをる此建物は一軒置いて隣の土藏造の家と向側の頗る頑固な土藏造の家を援軍として、儼然として猛火に對抗し、一時苦戰の模樣が見えたが、遂に此建物派が打勝つて火は間もなく鎭まつてしまつた。塔の上から此戰を見てをると、あの樣な烈風の折には水の防火の力は殆んど見えぬ樣である。戰は火と耐火物との間に行はれてをるのであつて、水はたゞ命中して

[illegible]木造の家屋こそは味方として實に厄介な足手纏ひであつて、始先に逢へば一甜めにされるのみならず、此所の火事の原因がそうであつたといはれるように、飛火に逢へば容易に敵に降參して忽に味方を裏切つて脊面から味方を攻め立る。しかも味方として何の賴にならなかつたものが敵と結ずると忽ち猛威を備へて、火焔を放ち火子を噴すこと頗る巧妙且つ猛烈である。私は塔の上で、此頼なきしかも腹黑く且つ恐るべき多數の味方の内にあつて僅の手勢を率いて孤軍奮闘を續けをつた三井耐火物軍が激烈なる風火同盟軍の攻擊を遂に美事に退けた效績を切に讚嘆せずには居られなかつた。此耐火物軍がなかつたならば筋向の「サムライ」商會は屋根上の仁王樣は勿論其所有する巨萬の貴重品を擧げて數分間にして灰燼に歸し、火勢は忽ち海岸に達して縣廳も亦或は災厄を脫れ得なかつたかも知れぬ。私は此塔の上の數十分間の見學で一躍にしてまるで建築家のように耐火建築物崇拜者になつてしまつた。此樣なことを考へながら眼を南の方に轉ずると長者町方面の本元の方の火事は恐るべき大火となつて烈風に驅られて今や既に横濱公園の對岸にまでも達してをる樣に見える。私は其火事の現場に近い市役所を訪ねたいと思つて急いで塔を下りた。折柄數議上の打合せのため廳縣へ

[illegible]出合つたので其後に付いて、群衆者や火事場に馳せ付ける人々の右左往する中を縫ひながら避難者の持出した家財具が山の如くに積まれてある公園の中を驅け脫けて市役所に飛込むだ。

私は此所でまことに心配氣な顏付をして居られる久保田市長に挨拶をした上、樓上の窓ガラスを通して再び火事の觀察を始めた。火は此時既に數千軒を燒盡して正に市役所の對岸を甞めてをる。數百の火藥庫を一時に爆發させた時はこうもあらうかと思はれるほど人を威嚇する樣に天を覆ふた恐ろしい黑烟の中から祝融（シユクユウ）の神の大きな舌とも見える眞紅の焰が、烈風に煽々と音立てゝ煽る每に、何のたわいもなく三棟、四棟を一時に猛火の塊に變へてしまふ。誠に怖るべく驚くべき慘狀である。小荷物を抱えて市役所前の靜橋上や未だ火に化しない部分の對岸を逃げ惑ふ者、近傍の路上に取敢えず持出した水に濡れたる荷物の前に青ざめた顏色をして喪心の態で立すむでをる人達等の有樣を見、又其心の内を推したり、此先きどうするのであらうかなぞ考へて見ると悽愴とも悲慘とも形容の詞がない。生れてから始めて大火の慘害を目の當り見た私は先刻塔の上から火事を見た時のような心の餘裕もなく、暫時はたゞ此恐ろしい、慘たらしい情景に心を傷むるばかりであつた。しばらく私が呆然とし

て居る間に市役所よりも一層火焔との距離が遠いと思はれる公園内の倶樂部の木造二階造の建物の屋根上から突然黄色の焔を噴き出したと見る間に、數條のポンプの水の防禦も其效なく、數分間にして此建物全部が火焔に包まれて燒落ちてしまつた。これを見ると同時に私は自分が此樣な大火事場の眞近にしかも烈風の風下に居ながら何の心配もなくのん氣に火事見物をして居られることは自分の立つてをる此市役所が頑丈な耐火建築物であるからであると氣付き、同時にまた先程塔の上で實驗した三井耐火建物單の效能をも思ひ出した。そして私はつく〴〵と、もし火元に近い風下に充分な耐火性を備へた建物があつたならばどうであらうか、此所の火事も仲通り同樣早く鎭火して此日の火事はこれほどの慘害を生ぜずに濟むだに相違ないと考へた。然ながら其內夕方となつて風力が漸次に衰へ、且つ河と公園とに阻止されて流石の猛火も最早や勢を延す力も失せたようであるので、私は市役所を出て戰場のような町筋を皆大變た事だといふ顏付をして軒先にうろついてをる橫濱市民の顏を眺めながら櫻木町驛に辿りついて、潮の如くに東京から押寄せた來た彌次連の間を縫ふて漸く電車內に身も心も落付けて、川崎驛の邊までは、眞赤に彩られたる橫濱の夜の空を顧み〴〵して東京へ歸り着いた。

(下)

橫濱の大火は三千餘戶を燒いたとのことである。其財產上の損害の莫大なこと、多くの類燒者が困難な、悲慘な境遇に陷つたことはいふまでもないことである。私は昔のことは今よく知えて居ないが明曆の江戶の大火といふのは大變大きな火事であつたといふ、其外書物から拾ひ出せばづい分澤山の數の大火を並べ立て、燒失戶數總計何萬、燒失財產價格概略何億圓、又進むで每年平均燒失戶數何千若くは何萬、其財產損失價格何千萬圓といふ數字を擧げることが出來よう。しかしその樣な古い事を數へ、又色々の數字を並べ立てずとも、私の物心の分つてからの事で、一寸私の頭に浮むだ例を考へても、私の小供の折に二日間續いて燃えた大阪市の所謂「新町燒け」其後の北區の大火、橫濱市伊勢崎町の大火、東京市神田の大火、吉原の大火、又近くは水戶の大火、仙臺の大火、今度の橫濱の大火、小田原の大火、福井の大火及つい二三日前の米澤の大火等火事通ならぬ私でさえすら〴〵とづい分澤山の大火を數え擧げることが出來る。そして特に統計的數字を掲げずとも何人でも皆是等の大火の生ぜしめた財產上の損害の恐ろしく莫大なものであることを知つてをるであらう。

さて昔から今日まで地震やら、海嘯やら、洪水やら、颱風や

ら[illegible]されて、いかなる[illegible]を表された、百億の財産を失つてをる日本國民は是等の天災の上に附加へて、更に大きな火事を起して古い昔から明治、大正の御代に至るまで引續いて、又之から先きも引續いて、大きな〳〵損害を生ぜしむる必要があるのであらうか。現代の日本國民の思想がいかに混亂してをつても、精神に異狀ある者でない限りは、まさか時々大火を起す必要があると答ふるものはあるまい。しかし火事はお江戸の花といふ俚言もあり、鳶の者殊に筒先とか纏持ちとかいへば大ひに敬意を表されて歌にまで持て囃され、又それ火事よといへば大名行列の七ツ道具のようなものを火事場に押し並べ、近隣は高張り提灯を建てゝ酒樽の鏡を拔 といふ勢であるから、江戸ツ兒の内には火事をお江戸自慢にしたり、年中行事視したり、或ひは御祭り同樣に考へてをる者があるかも知れぬ。又近年東北、地方の都會は代る〳〵順次にすべて大火災を起して、今度の米澤の大火災は第二回巡回大火災――昔から數へれば既に數回若くは數十回目であるかも知れぬ――の魁であるかのようにも思はれる。又何時何所の大火後復舊の實狀を見てもまた直に燒けるような、そして燒けても大して差支へのなさそうな手のかゝらぬ、金のかゝらぬ粗末な木造家屋が無造作に、しかし感心するほど敏速に、建並べられてある。そして別段將來[illegible]す、一向平然たるようである。それや、これやを考合せて見ると日本人の内に大火災必要論者はないにしても、大火災天災說、不可抗力說、運命說、自然法說位を持つてをる者が多いのかも知れぬ。然ながら明治の世になつても大正の世になつても、又此先きいかに日本の文明が進歩しても、いつまでも此種の運命論者、不可抗力論者が多くてはそれは大ひに困りものである。日本人の無神經、無理解、非文明、低能を嗤はれることは忍ぶことが出來ても、維新以來折角歐米から受け入れた物質文明の御蔭げで貧乏ながらも此五十年間に相應に積上げた富を一部分づゝ繰返し〳〵燒捨てるといふことは、どう考へても惜しいのである。都會の膨脹と、經濟の發達のために火災の損害が日增しに大きくなるに拘らず、數百年來殊に明治大正の代になつても未だ我國に於いて根本的の火災對抗策が講ぜられぬといふことは實に理解し難いことである。

大阪市は多年淀川の出水に苦められてをつた、東京市は荒川の出水に苦められてをつた。然るに大阪市は決然として毛間の閘門を完成して永久に此天災から免れた。東京市も荒川の大改修工事を計畫して今や着々として其の工事を進めてをるようであるが、それが完成するまでは毎年夏季に豪雨のある每に心配

して、いざ出水となれば堤坊の上に砂袋を置く、河中に蛇籠を投ずる、橋の上に重いものを載せる、橋脚を縄で繋ぐ、篝火をたく、結飯をこさえる、まるで江戸時代の錦絵そのまゝの大騒ぎをせねばならぬ。しかも一個所が破壊さるれば一面の洪水で手の附けようが無くなつて、たゞ自然に水の引くのを待つばかりである。私は火事については我國には何等の一般的、根本的の對抗策が講じてなく、風があれば心配し火が起ればあわてゝそこに水を掛けるといふ態であつて丁度水害を恐れる者が豪雨を見て心配し、出水と見て急に堤防に土嚢を置き、橋の上に石を置くようなものであつて、一旦防備方面を破らるればたゞ風の向ふに任せて燒拂はること堤防を決潰せる洪水の渦卷く力を防ぎ得ないのと同じである。しかし水害の方には根本的防止策が講ぜられむとしてをる、獨り火災の方面に於いては何故に豪雨をして出水、洪水に變ぜしめざる樣な根本的の防備策が取られないのであらうか。

水害は天災であるが、火災は天災でもなければ不可抗力でもない。天災である水害の豫防が出來て、そうでない火災の豫防が出來ぬ筈はない。小火災は脱れ得ずとするも、數百戸、數千戸を燒く大火災は之を豫防し得ぬ筈はない。私が殊更にいふまでもなく西洋の大都會は勿論小都會においても立派に一般的根本的の、火災防備策が講ぜられてをるではないか。あの西洋の都會の堅牢なる、永久的な絶對的耐火建築物を見た者又之に住むだ者は、其火災に對する對抗力の絶大なることゝ、住居者の生命と財産の安全なることを想ひ起さずには居られない。私が伯林に下宿してをる際其家の最下層にある八百屋より火を發したる時に私が其眞上の三階の自分の部屋の窓から首を出して下の火事の成行を平氣で見てをつた事實なぞは是等の家屋の耐火構造の完全せることを知らざる人達には虚言のように聞えるであらう。數日前の大阪の火事では高島屋や、小大丸が數百萬圓の貴重品を瞬時にして烏有に歸してをる。人家櫛比の中であれほどの貴重品を藏する容器となつてをる家屋を燃燒物で作つてをくからあのような損害が生ずるのである。折角一軸十數萬圓の名畫を手に入れながら容器に注意せず、或ひは費用を節して、たゞ紙に包むで、鼠の時々出て來る藏の中に抛り込むでをいて鼠のために造作なく上紙包を破られそして折角の名畫を散々に嚙み破られたのと同じ事である。づい分智慧のない話である。

人或ひは我國は富の程度が低いために耐火建造物を作ることは出來ぬといふかも知れぬ。しかしそれは大きな考違いである。智慧の足りない人のいふことである。一隻數萬噸の大軍艦を深山に作り得る國民に、又それを一度に沈めても大した驚き

を感ぜぬ國民に、家屋を耐火式にすること位出來ないことはない。固よりあらゆる建築物を一時に又急速に耐火式に變更することは出來ることではない。又何等の權力、制度及び組織を用ひずして全く個人の自由に放任して我國に於いて耐火建築の普及を望むことも亦無理である。一歩〳〵機會を見機會を作り、組織を立て、方法を考へて進まねばならぬことは勿論である。東京にも銀座街や、柳原河岸には古くから耐火構造が試みられてあるではないか、今頃はせめて、防火線位は成立して居なければならぬ筈であるが一向それが出來て居らぬのは多少江戸兒の火災運命論觀が禍してをるのかも知れぬが、私はむしろ今日まで政府自治體に遠見なく、無神經に、無精に、不決斷に日を暮して來た罪であると考へる。近來官廳や、大株式會社に可成り立派な耐火的永久的建築物が出來るやうである。役所や資本家の營業所ばかり火災に對して安全になり、一般國民や、貧乏人の家は何度火事に焼けようが一向構はぬではあまりに冷淡である。日本人六千萬人中一人として家屋の内に住居せざるものはないのである。どうか人民の家屋の問題も考へて貰いたいものである。國民から税を取つて大砲や軍艦を拵へながら、國民の住居なぞはどうなつても構はぬ、焼けようが倒れようが國家は無關係であるといふ態度では頗る不人情である。節一己むを得ない事情でどこかの國と戰爭でもするやうな不幸なことになつたときに、或風のある日に敵國の飛行機が帝都の上に飛むで來て、日本の飛行機が代る〳〵墜落して一をる間に、敵の飛行機が宙返りをしながら爆彈を投下して蜂打をしたならば或ひは數時間で東京全部を焼盡されるかも知れない。それでは折角拵へた大砲や軍艦も徒費になる。こんな空想はせずとも近來頻りに我國の大都會を巡回する大火災より生ずる損害に付ては固より國家が痛痒を感ぜぬ筈はないのである。水害豫防に大なる國費を支出する政府は何故に火災に對しては僅に地方費を以つて應急策たる消防機關の設備をなさしむるに止まり、國家直接の一般的、根本的火災對抗策を講ぜぬのであらうか。

國家の火災對抗策といつても私は必ずしも直に國費の支出、助金の支給等を要求するのではない。然ながら水害豫防につ補いて國家が考へ、國家が支出をなすほどならば火災に對してもせめては國家が根本の對抗策を樹立すると及其遂行に努力し、建築法令の完成、耐火的永久的建築の普及奬勵、建築會社、建築組合等の建築企業組織若くは建築改革機關の成立援助、是等の事業に對する資金の貸付、特典の授與、其他種々適宜な方法を考へて其實現活動を促進して貰ひ度いものである。産業保護は補助金 補給金を濫發せざる限り 政府の重要なる仕事であら

う。然ながら他方に於いて生產の結果が絶えず無慘に破壞せられ灰燼に歸することを防止することも亦政府としては頗る重大なる國務と見るべきものではなからうか。私は行政府や立法府に於いて此問題が從來頗る閑却せられてをつたのを怪むのである。今春漸く發布を見たる市街地建築物法の成立のみを見て直ちに此問題が解決に近付きたりと考ふることは出來ぬ。曙光を認め得たといふだけのことである。將來の進展如何は政府者の此問題に對する根本的の考慮如何、いかなる程度の熱心を以つて、いかなる方法を考へつゝありやといふ點にあるのである。

そこで私が最後に希望として述べたいことは先づ政府が將來全國殊に都會の建築物を全部災害對抗的及衛生的に改造、若くは新造するの大方針を確立すること、之に必要なる立法を完成し、行政廳をして勵行せしむること、建築企業組織の成立を援助し殊に具體的の直ちに實行可能の問題として政府資金の流用を許すことである。是等の點については又他日之を詳述する機會があると思ふ。終に私は日本の建築問題、住宅問題は現今の日本の實際的政治問題としては總理大臣が注目せねばならぬ問題であつて、同時に現在の軍備問題或は區々たる山東問題よりはむしろ重大な問題であると思ふことを附言しておきたい。橫濱の火事が途方もない所へ飛火をしてしまつた。（完）



講和會議に於ける各國の主張と其批判

講和會議に於ける各國の主張とその批判

室伏高信

(一)

講和條約草案は五月七日聯合國の代表者チョージ・クレマンソウから獨逸講和委員ブロックドルフ・フランツオウに手渡しされてゐます。それは過去半年に亘つて聯合國講和準備會議において討議されたうへで決定されたものであります。それを一讀して見るものは何人も先づウヰルソン主義の崩壞を觀取せざるを得ないことと思ひます。いふまでもなく今回の講和の基礎となつたものは、ウヰルソン主義の世界改造案がこれでありますす。そのうちウヰルソン主義を最も具體的に表明せるものとしてウヰルソン氏が昨年一月八日、七月四日及び九月二十七日の三回に亘つて試みた演說は今回の講和の基礎條件として約束されたものであります。それは先づ聯合國の首腦者の會議において二つの條項の保留のもとに承認されたものであります。その聯合國の首腦者の承認のもとに米國國務卿ランシングの名によつて獨逸政府に交付されたものが昨年十一月五日の對獨公文書であります。この公文書によりてウヰルソン主義を具現せる前述の三回の演說において指示されてゐる諸條項が今回の講和を決定すべき基礎條件として獨逸政府及び國民に約束されたものであり、また中外に宣明されたものであります。爾來半年に亘つての聯合國の準備會議なるものはこの世界に並に敵國たる獨逸に約束されたる宣明に對し、聯合國の政治家がどれだけ誠實であり、どれだけ公明正大であるかを試練するものとしてわれ等の深き興味をもつて傍觀してきたところであります。さうしてその聯合國の主張と精神との具體としての講和條約草案を一讀するとともにウヰルソン主義の一大崩壞の事實に無感覺でゐ

ることにできない。先づウヰルソン十四ケ條として知られてゐる一月八日の演說の第一條についてみる。それは秘密條約と及び一切の秘密外交とを排斥したものであります。この點は新世界組織に入るためには最も重要なる綱目の一つであります。即ち今日までの世界の陰謀または戰爭といふものが悉く秘密外交の結果であるといふことはできないにしても、其秘密交外なるものは帝國主義、軍國主義の世界においてのみ必要のものであり、またその世界組織の特有なる産物として生れてきたものであつて、舊世界組織の弱點と暗黑面とを最もよく表徴してゐるものであります。そのことは決してウヰルソンによつて初めて指摘されたものではない。世界の平和を欲するもの、就中勞働階級の思想と利益とを代表する勞働黨、社會黨、またはその側の人々によつて屢々論ぜられてきたところであります。それゆゑにこの秘密外交に關する條項が各國の政治家によつて如何に取扱はれるかといふことは、われ等の世界が新世界組織に入るべきことのどれだけの可能性があるかの試金石としてこの講和預備會議の劈頭において人々の注意を促したところであります。それにもかゝはらずこの條項は眞先きに葬り去られてゐます。これがウヰルソン主義の崩壞の第一であります。ウヰルソン十四ケ條の第二の條項は海洋の自由についてのものであります。この海洋の自由の主張もまたウヰルソンの創唱にかゝつてゐるものではなくして獨逸から主張されたものであります。それが獨逸側から――革命前の獨逸側から主張されてゐる間は英國が獨逸軍國主義を攻擊するのと同じく、たゞ英獨兩國の世界的爭覇戰の口實としてのみ意味のあることであるにしてもそのこと自體は何人がこれを主張したにしても新世界組織に入るべきヴアイタルの條件でなくてはならない。即ちそれは事實上において海軍力をもつて世界を支配しつゝある英國の世界的覇業を粉碎するの主張である。何となれば英國の世界的覇業は英國の今日までの海洋の獨占によつて、確立されてきたものであるからであります。從つてこの點について英國が反對の立場をとることは當然のなりゆきであると觀察されてゐたところであります。けれども英國がその特殊的利益の立場からこれに反對すればする程、全世界にとつては海洋の自由の必要が益々痛切でなくてはならない。公平にこの世界戰爭の原因を觀察するものはこの戰爭の原因をもつて獨り獨逸軍國主義の罪に歸することはできない。それは一切の舊世界組織の罪であると申さなくてはならない。即ち權力均衡、武裝的平和の口實によつて表徵されてゐる帝國主義及び侵略主義の舊世界組織からこの世界大戰が生れたものであることは少しも疑ひの餘地のないところであつて、公

平たる立場にある何人も一致しなくてはならないところであります。この舊世界組織を最極度に代表するものは一方において獨逸の軍國主義であり、他方において英國の海國主義であります。今日までの世界はこの二つの勢力の――侵略的勢力の角逐場となつてゐたのであります。この二つのものゝ爭ひの破裂において世界大戰が成立したのであります。それゆゑに大戰の原因を除いてこの世界をして平和なる人民の生活の保障としての新世界組織に入らしめ様とすれば先づ何よりも先きに獨逸の軍國主義及び英國の海國主義を打ち破らなくてはならない筈である。それゆゑにウヰルソンが一方において獨逸軍國主義の打破を主張するとともに海洋の自由を唱へて英國の海國主義を轉覆するの主張を發表したとは、新世界組織の提唱者の一人としては當然の態度であります。けれどもその主張もまた講和豫備會議或は國際聯盟委員會を俟たずして有耶無耶のうちに葬り去られてゐます。さうしてウヰルソン自身がこれについて、何等の辯解をも發表することができないのみならず、各國の政治家のうちにおいて一人もこれを問題とするものゝ無いとの事實は、一方において英國の偉大なる勢力を物語つてゐる者であるとともに世界改造の前途の甚だ遼遠であることを證據立てゝゐます。斯くしてウヰルソン主義の第二ケ條も傷ましき崩壊をつげてゐます。ウヰルソン十四ケ條のうち、第三條にあたるものは經濟的障壁の撤去、通商條件の平等といふことでありますが、この點はウヰルソンの九月二十七日の演說においても指摘されてゐるところであります。けれどもこの點もまた英國がその自治領に對する特惠關稅を實施することによつて事實上裏切りされてゐます。ウヰルソン主義の崩壊の第三として計へべきであります。ウヰルソン十四ケ條の第四條にあたるものは軍備縮少問題であります。ウヰルソンの要求してゐるところによれば、その軍備縮少の程度は國內の安全を維持する程度においての最少限度にまで引下げらるべきものであるとされてゐます。この點は世界改造論の立場からみれば寧ろ不徹底を極めたものであります。眞實に世界の平和を維持し、世界の諸國民が凡ての侵略慾または大國家慾から解放されて誠實なる民族的コーペレーションに入るためには軍備の撤廢が斷行されなくてはならぬ。少くとも常備軍の廢止にまでは行かなくてはならない。徵兵制度のごときものはたゞ武斷的、侵略的國家組織及び世界組織の產物であるがゆゑにそれの廢止がロイド・ヂョーヂによつて主張されたことはもとより當然の次第でなくてはならない。軍國主義の歷史に注意するものは徵兵制度――プロシアに生れたる徵兵制度が近代世界の軍國主義の濫觴であることを拒むことはでき

ない。またそれとともに武器の集中による常備軍の組織が國内に於ては階級的權力の擁護となり、外においては國家間の不安の原因となつてきたことも何人も拒むことのできない事實であります。それゆゑに軍備問題についてのウヰルソンの主張が單に軍備の縮少を提唱するに止まりて軍備撤廢に及ばずまた常備軍及び徴兵制度の點に少しも論及してゐないことは彼れの十四ヶ條の一大欠點であり、またそれが世界平和の保障の原則として不徹底の譏を免れることのできない所以であります。それにもかゝわらずこの不徹底なる要求さへも實現されることができない。即ち國際聯盟規約の第八條についてみるに軍備縮少の程度はウヰルソンの主張してゐるごとく國内の安全を維持するに必要なる最少限度のものでなくして、國家の安全を維持する爲に必要なる限度とされてゐます。この二つのものは一見して相似たるものゝ如くであるが、實際においてはその間に越ゆべからざる隔りがあります。國内の安全を維持するために必要なる軍隊の限度は國家の内部的警察權の維持に必要なる軍隊の限度であるにすぎない。それもまた被征服民族の壓迫及び被征服階級の壓迫特にストライキの場合の職工壓迫または軍隊の職工代用として利用されることの危險がないとはないにしても、その限度は必ずしも高き程度であるとすることはできない。これに反して國家の安全を維持するといふことであればそれは對内的及び對外的の兩面の防衛上の意味をもつてゐます。その對外的の國家の防衛といふことは要するに權力均衡、武裝的平和の議論へと復歸するとであつて、事實上軍備の縮少を不可能ならしめるものまたはこれに近いものであると申すの外はない。從つてそれはウヰルソン十四ヶ條の宣言に比ぶれば一大變化であつてこゝにもウヰルソン主義の重要なる崩壊のあとをみなくてはならない。ウヰルソン十四ヶ條の第五にあたるものは殖民地の處分についてのものであります。即ち殖民地の處分についてはは當該殖民地の人民の意思に從つて決定せらるべきものであるとするの原則であります。この點は民族自決主義を奉ずるウヰルソンとしては當に然る可き要求でなくてはならない。けれども國際聯盟規約及び講和條約草案によるときは殖民地の處分はその殖民地の住民の意思とは全然無關係なる五大國會議によつて數個の大國家の委任統治に附屬せしめられてゐます。これもまたウヰルソン主義の一崩壊であるとみることができます。次にウヰルソン十四ヶ條の第九にあたるものはイタリア國境の問題であります。即ちイタリアの國境は凡て民族線に從つて決定せらるべきものであるとするの原則であります。この點もまたフユーメ問題の紛糾とともに難局に陷つてゐることはわれ等の

現前の事實であります。斯くしてウヰルソン主義の精髓と目されてゐるウヰルソン十四ケ條のうちの最も重要な六ケ條は、既に講和豫備會議において聯合國政治家の手によつて破壞されてゐます。これ等の事實は講和の基礎條件としてのウヰルソン主義の破滅の最も具體的なものであります。それのみならずウヰルソン十四ケ條のうちの第六第七第八第十一第十二第十三等は主として聯合國とその敵國たる獨逸及び獨逸の與國との關係を規定するものであり、從つて獨逸及その與國の敗戰とゝもに自然に解決さるべきものまたは既に解決されたるものであります。それゆゑにウヰルソン十四ケ條が現に形骸を止めまたは効力を生じてゐるものはたゞ最後の國際聯盟についての一ケ條があるのみであると申すことができます。即ち講和豫備會議におけるウヰルソン主義の破滅はこの講和豫備會議における半ケ年間の記錄の最も重要なるものであり、或はまた聯合國の諸政治家がウヰルソン主義の破壞のためにヴエルサイユにおいて半ケ年間を費したものであるとも申すことができます。それゆゑに私がこの論文の初めにおいてウヰルソン主義の崩壞の事實を眞先きに指摘した所以であります。

（二）

ウヰルソン主義の偽ましき破滅は既に述べた通りであります。然らば講和會議におけるこのウヰルソン主義の失敗は主としてウヰルソン氏の責任として論ぜらるべきものであるか。

ウヰルソンは偽善者であるとするの批評は屢々聞くところであります。特に紳士階級によつて占領されてゐる日本の輿論、その紳士階級を代表する學者、政治家または新聞記者の諸君の間においてはウヰルソン攻撃は最も徹底的に行はれてゐます。ウヰルソンを攻撃し、彼れが偽善者であると論ずるものでなくてはたゞそれは西洋かぶれの書生論、ウヰルソン門徒の非愛國論であるとなすことが日本の今日の紳士階級においての流行であります。五月十六日政友會の一總務によつて發表されたる外交辯駁なるものは單に一總務の一家言ではなくして政友會を非公式に代表するものであり、從つてまた現内閣を非公式に代表するものとされます。政友會は自ら欺くことなくしてはこの一般的承認の事實を非認し去ることはできないのであります。その現内閣または現内閣の與黨の非公式の外交宣言とされるもののうちにおいてさへ著しく非ウヰルソン的の音調が響かせられてゐます。單に音調だけではない。山東問題と關連して時に隣國の元首ウヰルソン氏をもつて偽善者、背信者のごとくに罵つてゐます。これ等の事實にみてもウヰルソン攻撃論の日本の支配階級、紳士階級、物知り階級、外交通、軍事通、支那通と稱せ

らるゝ一團の諸君の間に如何に人氣のあるものであるかゞ察せられます。講和豫備會議におけるウヰルソン主義の失敗は果して、ウヰルソン氏の責任であらうか。この點を論ずることはまた同時に講和會議における各國の主張について論ずることでなくてはならぬ。

（三）

ウヰルソン主義の確立が凡の國家の世界的覇業を困難ならしめるところにその世界改造案としての價値と意義とをもつてゐるごとく、世界的覇業から後退することを欲せざる英國にとつてはまた何よりも先きにウヰルソン主義の破滅を期待しなくてはならない筈である。英國の支配階級を代表する政治家とウヰルソン主義との一致することのできる點は たゞ主として獨逸打破、獨逸軍國主義の打破の一點においてゞあります。英國の世界的覇業の求めるところは國際聯盟ではなくして英國の世界的覇權そのものであります。詳にいへばウヰルソン主義の求めるところは國際聯盟であり、また國際聯盟主義の實行であるに對して英國の求める處は一國の世界的覇業即ち英國の世界的覇業の確立であります。此二つの者は共根本の思想に於て決して兩立する事のできるものではない。日本の知識階級又は紳士階級の間においては國際聯盟をもつて英米の資本的侵略主義の機關として發明されたもの〻ごとくに論ずることがこれまた一つの流行となつてゐます。けれどもこのやうな議論はたゞ日本の軍閥のプロパガンダとしての價値と意義とをもつてゐるものであるにしても、決してそれをもつて國際聯盟についての正しき解釋あるとなすことはできない。却つてその反對であります。その反對に英米の或は一切の大國家の侵略熱を排斥することにおいて國際聯盟の思想が成立するのであります。この國際聯盟なるものはギリシアのアムフヒクチョン會議またはエーキアン同盟のうちにもこれに類似してゐる計畫を求めることができるものであり、また近世の初頭におけるウヰリアム・ペンのヨオロツパ同盟或はジョン・ベラースのヨオロツパ國の思想のうちにもみることのできるものであり、また米國の平和強制同盟のごときブルジョア的色彩の著しく濃厚なる團體によつても支持されてゐるものであるにしても、之に對して最も熱心なる支持を與へてゐるものは寧ろ諸多の小民族、被征服民族、または勞働階級の代表者であります。これに對して國際聯盟に反對してゐるものは英、米、佛、伊、日の諸國の支配階級、軍閥、資本閥、または知識閥の諸君であります。就中、この國際聯盟について最も猛烈且つ露骨なる反對を表明したものは米國の資本閥を代表する共和黨の一派――ロッヂ・ノックス君等の最右翼派の諸君

である事は何人も承知してゐる通りであります。それ等の人人の反對論の要旨は國際聯盟をもつて米國の獨立宣言の主旨に背きモンロー主義に反對し及び米國の獨立とその自由とに反對し米國は失ふところありて得るところがないといふの點であります。米國の資本的または國家的利己心からみて國際聯盟が米國に何等得るところなきものであるとするの觀察は、觀察そのものとしては決して誤謬であると申すことはできない。またそれだけの國際聯盟をもつて米國の利己心のための機關であるとすることの議論の誤謬であることを證明してゐるものでなくてはならないのであります。また英國において最も强くこの國際聯盟に反對したものは英國の貴族閥を代表してゐる統一黨の諸君であります。また資本閥的自由主義の代表者としての自由黨のこれに對する態度も頗る曖昧であつたことは、昨年八月一日下院における國際聯盟の討議の際に自由黨の主なる首領株が欠席したこととの事實に見ても明らかであります。ロイド・チョーチの率ゐる内閣の態度についてみるも昨年六月ブライス卿の質問に對する政府の代表者ロード・カーゾンの答辯の曖昧模稜であつたがごとく曖昧模稜であつたのであります。フランスの支配階級の代表者としての現内閣のチョーチ・クレマンソウが國際聯盟に對して好感をもつてゐなかつたものであることは世界周知の事實であります。これは國際聯盟についてのグレー卿の小冊子が發表された時に、これに對しクレマンソウの機關新聞が反對論を發表したことによつても證據立てられてゐます。ある人がクレマンソウに對して國際聯盟に贊成であるか否かを質問した時にクレマンソウは『わしは老人だ。戰後のことなぞは考へてゐる暇がない』と答へたといふことはその當時のデーリーニユースによつて報道されたところであります。權力均衡論の最後の維持者としてのクレマンソウとしてはこの告白がおそらくは彼の衷心を吐露したものであつたに相違ない。イタリーの支配階級を代表する政治家の所作が著しく帝國主義的であり、侵略慾に充たされてゐることは改めて指摘するまでもない。最後に所謂五大國の一たる日本の支配階級が國際聯盟の反對者でありまたその國際聯盟をもつて一片の空想であるとなしてきたことはこれまた内外にかくれなき事實であります。斯くして國際聯盟として實現されたるウヰルソン主義は世界の最も强大なる勢力を代表する諸國家の支配階級の政治家によつて包圍攻擊をうけてきたのであります。この事實によつてみても國際聯盟なるものが資本的侵略主義の機關として生れ出でたもので無して、却つてこの資本的侵略主義または軍國的侵略主義を打破するものとして生れてきたこととの事實が證據立てられてゐる次第

であります。それゆゑに英國における國際聯盟の最も熱心なる主張者としてのエッチ・ヂー・ウエルスが國際聯盟をもつて帝國主義に對するハデッス・ネルであると論じたことは正しき批判であると申さなくてはならない。米國におけるウヰルソンの最も熱心なる攻撃者としてのヂョーヂ・ヘアヴェーが國際聯盟をもつて國際的社會主義の思想を代表するものであると述べてゐるとは、必らずしもウヰルソン攻撃のための攻撃論としてのみ聽くべきものではないと思ひます。(北米評論四月號参照)

(四)

この國際聯盟についてのウヰルソン主義と非ウヰルソン主義との戰ひにおいて今日の國際聯盟草案なるものが出來上つてゐます。從つてその國際聯盟は極めて不純粋なる聯盟であり、國際聯盟論者の要求する國際聯盟ではない。この點においてもウヰルソン主義の失敗をみることができます。けれどもこれ等の失敗の責任は少くともウヰルソン一人の罪に歸することはできない。各國の政治家の共同の責任においてこの失敗があつたのであります。その失敗の結果は國際聯盟はその規約において繁雜を極めてゐるにもかゝわらず、その要點においては何れも曖昧と不徹底とをもつて充たされてゐます。軍備の縮少がこれによつて完全に行はれてゐないことのごとき、民族自決主義が一貫されてゐないことのごとき、モンロー主義のごとき例外的規定が設けられてゐるとのごとき、海洋の自由が少しも保障されてゐないことのごとき、各國の主權に對する制限が殆んど行はれてゐないことのごとき、國際勞働の諸原則が强制されるに至つてゐないことのごときがみな何れも國際聯盟の思想即ち民族自決、恒久平和、國際的民主主義の思想の實現を不可能ならしめてゐます。これ等の國際聯盟の眞實なる主義の實現を不可能ならしめてゐる結果は、ウヰルソンも亦その責任を負はなければならないとは勿論であるにしても、その他の各國の政治家は一層重き責任を擔はなければならぬ。その重き責任の負擔者としての英國があり、佛國があり、伊太利があり、日本があります。

(五)

英國の世界的覇業は將來の事實といふよりは寧ろ現在及び過去の事實であります。それゆゑに英國としては積極的にその利己心を發揮することよりも消極的にその過去において獲得し現在において保存するものを將來に維持する事において利己心を發揮するとに、英國の支配階級の政治家の苦心と戰術とが藏されてゐます。英國がその今後において獲得すべきものについてよりは現在保有するものを維持することに主力を注いできたこ

とはこれが第一であります。その第一に數ふべきものは海洋の自由に反對してきたことであり、從つてその有する强大なる海軍力についての制限を拒絶したことであり、次にはエヂプトの保護國としての地位を確立したことであり、愛蘭の獨立についての諸運動を迫害して民族自決主義をその領土内に不可能ならしめたることのごときみなこれであります。斯くして講和豫備會議における英國政治家の努力は世界の改造を目的とする民族自決、國際聯盟、恒久平和、國際民主主義のために爲されたるものではなくして、却て世界改造の偉大なる機會にあたりその大國家的已利心と侵略慾とを充たすことに費されたものであることを知ります。いふまでもなく徴兵制度撤廢の主張はロイド・ヂョーヂによつて講和豫備會議に提唱されたものであるにしても彼れ自ら島國としての關係から世界を支配する大海軍を保有しながら、大陸の諸國に對して徴兵制度の撤廢を主張するとはそれ自身に於て辯解すべからざる矛盾であるのみならず、それはたゞ英國の海國主義を保障し從つて世界的協同にゆくべき世界の改造の妨害を意味してゐるにすぎないのであります。斯くして講和豫備會議に現はれたる英國の態度及び主張は依然たる大英國的海國主義の主張であり、さうしてまたこの事實によつて、世界の改造がそのヴアイタルの點において不可能に終るのはやむなきことを察知してゐるのであります。それゆゑに今後に來るべき戰爭について英國がその重要なる責任を擔ふべきものであることは勿論であります。講和條約草案によるときはこの世界大戰（一九一四—一八年）の責任者は獨逸であり、就中カイゼルであるとされてゐます。この主張を支持してきたものが英佛兩國であることもまた世界に隱れなき事實であります。ロイド・ヂョーヂはその總選擧の政綱のうちにおいてさへカイゼル處分論をもつてその最も重要なる綱領の一つとしてゐたのであります。けれどもこの世界大戰をもつて一人の奸惡を好む人物（カイゼル）の遊戯的偶發心から生れたもののごとくに論ずるとは、愚昧なる選擧民の排獨熱を鼓吹するの方法としては兎も角も、これを持て現在の世界組織の裏面と効果とに徹したる政治家の言葉としては受取り難きものである。それは既に述べてきた通り今日までの世界組織——權力均衡、武裝的平和、さうして帝國主義の破裂において生じたものであることは公平なる識者の等しく一致するところでなくてはならない。從つて世界大戰（一九一四——一八年）は全世界の責任であり、今日までの一切の政治家がその責任を免れることのできないものであり、就中、獨逸及び英國の政治家がその責任を免れることはできない。その世界大戰の最も重要なる責任の負擔者としての英

國の政治家が、一切の責任をカイゼル一人に嫁して彼れ自らは依然たる海國主義の支持者であり、民族復合主義の支持者であり、從つて大國家的慾望の最も豐富なる所有者であるとは反對に世界改造に對する義務心の最も稀薄なる所有者であることは、ウヰルソン主義の失敗、さうして世界改造の失敗の最も重要なる責任者の地位に英國を据え付けてゐるものとならなくてはならないのであります。

（六）

國際聯盟の反對のチャムピオンとしてのフランスの代表者ヂョーヂ・クレマンソウはまた世界改造の最も重要なる反對者の一人としてのヂョーヂ・クレマンソウであります。ウヰルソンが昨年暮ロンドンに上陸した時までクレマンソウが依然として勢力均衡論を支持してきたことは世界周知の事實であります。その國際聯盟の反對者であり、勢力均衡論の主張者であり、從つて徴兵制度の頑強なる支持者であり、無併合無賠償の反對者としてのクレマンソウはまた同時にザール併合の主張者としてのクレマンソウであり、獨逸膺懲のチャムピオンとしてのクレマンソウであります。いふまでもなくアルサス・ローレンを回復することが一八七一年の不正を正すものであるとしてのフランスの立場が世界の同情を惹いてゐたことの事實について私は何の疑をも抱くものではない。その事實は獨逸においてさへ公平なる立場にあるもの——國家的偏頗心に囚はれざるもの例へばハーゼ、ヂットマン等の獨立社會黨のごときは一昨年の覺書のうちにおいてこのアルザス・ローレンが歐洲における忌はしき戰爭の原因であることの事實を指摘してゐることによつて承認されてゐます。フランスが單にアルザス・ローレンの回復を目的としてゐる間はフランスの立場は公明正大である。何人もフランス——然り歴史的にヨオロッパの諸民族の間に光輝あるフランスの公明正大に對して疑を挾むものはない筈であります。またフランスの諸政治家が休戰に至るまでの間において主張してきたことは實にこのアルザス・ローレンの回復をもつてフランスにとつて唯一の戰爭の目的、さうしてこの問題を解決することがまた同時に恒久平和に入るべきフランスにとつての唯一の道であるとなされてきたのであります。けれども欲望のうへに慾望を積むことは人間の弱點である。フランス人もまたこの慾望から免れることのできなかつたのは傷ましき人間的慾望の暴露でなければならぬ。フランスの辯護者はこのザアルをもつて曾つてフランス國に屬したとのあるものであると云ふかも知れない。然り、それの一部は僅にナポレオン戰爭時代にフランスに屬してをつたにしても、これ等の主張はアルザス・ロー

レンが嘗つて久しく獨逸に屬したるものであるとしてこれを獨逸領に屬せしめることの主張を辯護すると同一のものである。それ等のものはたゞ帝國主義者の口實であるに過ぎない。さうしてそれは一八七一年においてビスマークの主張したものであるに過ぎない。フランスは五十年後において第二の普魯西となるべきか。然らばこの大戰は第二の歐洲大戰または世界大戰の製造者として終りを告げたものであると申さなくてはならない。實にフランスは一八七一年の普魯西の轍を蹈みつゝあるのであります。三年兵役制度の主張者としてのクレマンソウとしては或はそれ相當のとであるにしても、これが果して歷史的に輝いてきたフランス國民の名譽であるといふことができようか。フランス國民は徒にその大國家慾に囚はれることなく彼れが如何に世界の改造に向つて貢獻したか否かの事實を反省して公正なる輿論を發揚し、さうしてその歷史的に輝ける過去のフランス國民の名譽を維持しなければならないと思ひます。

(七)

伊太利が三國同盟を脫退してこの大戰に參加したことの動機についてはこゝに批評することを避けます。けれどもフユーメ問題に對する伊太利政治家の態度についてはわれ等は少しもこれを辯護すべき理由をもつてゐるものではない。即ち伊太利は單にその伊太利イレデンタとして知られてゐる地方の回復を主張したばかりではなく更に進んでフユーメの領有をも主張してゐます。この點について伊太利の委員たるオルランド及びソンニーノ等と米國大統領ウヰルソンとの間に意見の衝突がきり、遂に四月二十四日を期して伊太利は講和會議から脫退するとを發明してゐるのであります。けれどもオルランド氏の聯盟脫退の辭として發表してゐるところをみるにたゞウヰルソン氏の人物攻擊をなしてゐるに止まり何故に伊太利がフユーメを領有しなければならないかの理由については何等の說明をも與へることはできないのであります。オルランドはフユーメの領有をもつて伊太利國民の要求であると主張してゐる。けれどもそれがつて伊太利國民の要求であるか否かはそれが正義であるか否かの問題とは何等の交涉もない筈である。況んや伊太利國民の間にあつても國家的偏頗心に囚はれることなき社會黨は決してオルランドの主張を支持してはゐないのであります。即ちオルランドの謂ふところの伊太利國民の意思とは勞働階級を除外したる支配階級の意思であるにすぎない。フユーメ議會の決議と稱せられるものもまた主として伊太利人の利害を代表する支配階級の意思の表明であるにすぎない。これを四月二十三日に發表されたるウヰルソン大統領のフユーメ併合反對の堂々たる宣言書に比

べる時は殆んど比較にならないほどの相違である。ウヰルソンはこの問題についてあくまでも民族自決主義を適用しやうとしてゐるのに對して、伊太利の立場はその民族線の限度を越て隣邦たるユーゴー・スラヴの弱きに乘じて その領土慾を滿足せしめやうとしてゐるのであります。この明白なる正邪の問題に對して伊太利の態度に同情するもの丶少くないことは、特に日本においての支配階級の同情が期せずして伊太利に傾いたとは、日本における排ウヰルソン熱の如何に高きかを示してゐるとともにまたその世界改造に對する日本の政治家の無感覺であるのみならず、また日本の政治家または批評家の國際的正義の標準の如何に低きかを說明して餘りあります。或は伊太利の問題を機會として講和會議に對する日本國民の態度そのものを告白したとも申すことができます。甚しきに至つてはこの伊太利の態度を辯護してそれは一九一五年の倫敦秘密條約のうちに伊太利のフユーメ領有を保障してゐるとなすものがあります。けれどもその倫敦秘密條約の第五條においてはフユーメ港がクロアチアの領土たるべきことを明白に規定してゐます。さうして伊太利の政治家もまたこの條約に調印してゐるのであります。それのみならずそのフユーメを伊太利に領有せしめることはウヰルソンの主張してゐる通りハンガリー、ローマニア、ユーゴー・スラヴ諸國の 地中海に通ずる出入口を 閉鎖するものであります。バルカンの諸邦がその海洋に通ずる出入口を求むるがために屢々戰爭を起したとの事實にみれば、伊太利をしてフユーメを領有せしめ、ハンガリー、ユーゴー・スラヴの 海洋に通ずる出入口を封鎖することが啻に正義に反するのみならず、またやがて來るべき戰爭の原因となるべきとは明白なる事實であります。われ等はフユーメ問題に對する伊太利の主張に對して何等の同情をもつことができないと申す所以であります。

（八）

私は更に進んで日本の立場について論じなくてはならない。日本の立場のうちにおいて最も重要なるものとされさうして政府がそい成功として誇りつ丶あるものは山東問題の解決であります。私はこ丶に山東問題について詳に論じてゐる暇がない。けれども山東の一角についての爭ひにおいて勝ち、さうして支那國民の人心を失ふとが果して成功であるか失敗であるかは、日支親善論にして虛僞のものでない限りそれ等の主張者の當に一考すべきところではないであらうか。政友會の一總務が政友會を非公式に代表しての宣言によれば山東問題の困難となつたことは一切大隈内閣の責任である。如何にも對支二十一ヶ條の提出者としての大隈内閣はその責任を逸れることはできない。

けれども對支文化侵略の證據者として、若しに支那民衆の支持者としての寺内内閣がその責任から除外されるものであると主張するものがあるならばそは驚くべき虚僞であります。否獨り大隈内閣または寺内内閣の責任だけではない。日本における歴代の帝國主義または軍國主義の政府及び政治家は悉くその責任から免れることはできない。日本における歴代内閣の帝國主義または軍國主義の諸政策は獨り支那人民の不信用の原因となつているのみならず、濠洲の勞働階級の不信用の原因となり、米國政治家の日本に對する猜疑の原因となり、更に全世界における日本軍國主義の印象となつてゐるのであります。その印象が山東問題に影響し、南洋における領有諸島の問題に影響し、人種的差別撤廢の問題にも無關係であることはできなかつたのであります。人種的差別撤廢に對する日本の立場についてはそれのみにおいては何人も正義を口にするものゝこれに反對すべき理由のあるべき筈がない。況んやその人種差別撤廢案なるものが最後に公正なる待遇云々といふがごとき骨ぬきのものとなつてゐる以上、正義を口にする如何なる國家といへどもこれに反對することを許されるものではない。けれども人種的差別撤廢の要求のごとき世界にむかつて公正なる待遇を要求するとの問題は、また同時に日本が世界に對する公正なる彼自身の奉公心の發露と相伴ふものでなくてはならない。國際聯盟に對して最後までその態度を表明することのできなかつた日本、さうして其支配階級の意思として表明せられたる日本における諸種の會合——對外硬の諸君の會合において屢々國際聯盟打破論が主張されてきた日本、國際勞働規約の世界的義務から免れることの爲めのチャンピオンとしての日本、さうして非公式に政府及びその政府の與黨たる政友會を代表する一總務の外交辯駁において日本が軍備縮少に反對したると即ちその軍國主義を維持するためにしたる努力を得々として誇りつゝある日本、その日本は人種的差別撤廢を主張することにおいて自らその心に恥ずるところはないか。自ら僞るものでない限り彼れは省りみてその良心の指導をうけなくてはならぬ。これを要するに日本の講和會議における立場は唯日本の帝國主義の立場を維持しその國家的利己心を滿足せしめることの爲に努力してゐるとの以外に、世界の改造に對する國民的さうして世界的の高尚なる義務については何等の努力をも費してはゐないのであります。非公式に政府及びその與黨を代表する政友會の一總務の外交辯駁において日本の講和委員がその利權獲得または帝國主義の維持について努力したるとに關し得々としてこれを誇りとしつゝあるにかゝわらず、世界改造に對して日本の政治家、遣外使臣が如何なる努力をな

したかといふ點については一言も論及するところのないのは、彼等の政治的理想とその國際的正義の觀念とが如何に低調であるかを暴露してゐるものでなくてはならぬ。眞實なる日本の國民、新しき、若き、さうして眞實なる日本を創造せんとする國民の聽かんとするところは、實に日本の政治家が此世界的義務に對して如何なる努力をなしたかといふ點でなくてはならぬ。この點に答へることのできない政治家はもはや支配階級の政治家としてのみ役立つものであらねばならぬ。彼等が單に支配階級のための政治家であるにすぎないことは國際勞働問題に對する彼等の態度によつて最も明白であります。牧野特使の國際勞働問題に對する演說原稿として傳へらるゝものをみるに、日本の資本家對勞働者の關係は、日本特有のもの即ち主從關係であると述べてゐるではないか。ことの事實は彼等が如何に徹底的に支配階級のための政治家であり、また如何に時代に取り殘されてゐる政治家であるかを證明して餘りあります。

(九)

かくして講和會議における各國の――聯合側各國の主張は世界改造の觸れ出しのもとに始められたのにもかゝはらず、遂に各國の國家的偏頗心の發露において終結を告げるに至つてゐます。從つて世界改造は大體において失敗であると斷言するのほかはない。――さうして正義人道論なるものが聯合國によつて四ケ年有餘の間維持されてきたのにもかゝはらず、今や却つてそれが獨逸側によつて主張されることとなつてゐます。支配階級の集合場としてのヴエルサイユ會議、ブルジョア的利慾の競爭場としてのヴエルサイユ會議の結果としては、われ等には何の不思議もない。ウヰルソン主義は眞實なる恒久平和の基礎條件ではなくしてたゞユートピアンのものであるに過ぎないことが暴露されたのであります。それはフーリエーやシモンやカベエの社會主義がユートピアンであつたがごとくウヰルソンの平和主義もまたユートピアンであつたに過ぎない。さうしてユートピアン社會主義の後にマルクスの科學的社會主義が生れた如く、ウヰルソンのユートピアン平和主義の後に科學的平和主義――勞働階級の平和主義が生れなくてはならぬ。(五月二十日)

開國か鎖國か

法學博士 田中萃一郎

平和主義者の主張は大戰勃發以後と雖も決して放棄せられたるに非ず、英國に於ては夙に外交の民主的監督の要求と爲りて現はれ、次で國際聯盟の提唱となれる次第なるが、他方に於て大戰の繼續久しきに亘れると共に厭戰的思潮も漸く濃厚となり爲に折角の國際聯盟も實に肉汁鍋と呼ぶ無きの觀を呈するに至りぬ。然れども前後五年の歲月に亘れる惡戰苦鬪は人類をして衷心戰爭の厭ふ可きものなることを知らしめたれば國際聯盟の精神が益す勢力を加へて一九一九年を以て世界史上の一新時代を劃するに至らんことは余輩の期待して止まざる所なり。余輩は元來平和主義を以て一種「贅澤なる女流思想なりと認むるものにして同主義者と行動を共にすることを好まざれど所謂世界改造の標榜にして一片の眞理を含むものたらしめば平和主義の見地よりして講和會議に於ける各國の主張を批判するも亦必ずしも無益の業に非る可し。

世上の對獨條件國際聯盟に對して評論を加ふるものを見るに多くは軍事上用兵上の見地より之を非難し我が全權を痛罵して得意の色を示せり。さり乍ら國際聯盟の精神は仲裁調停を以て兵力爭鬪に換へんとするにありて絕對に戰爭を禁止せんと云ふにあらねど成る可く干戈に訴へずして國際間の葛藤を除かんとするに在り。軍事上用兵上の見地に立てる批評の如きは戰爭の念を以て國際聯盟に加入するに於て寧ろ之を差控ゆ可きなり。例へば南洋諸島の防備の如き戰略上國防上の見地よりせば全然之を放棄す可きにあらず、然れども所謂世界改造の巷に於ては强て之を固執せざりし迚、我が全權の大失態なりと云ふ可からず。日本の長所は決して陸海軍の精鋭なるにのみ限られたるに非ず、科學に藝術に工業に商業に日本人は優に歐米人に拮抗するの技倆を備へたり。思ふに今後二三十年間列强の間に小康を保ち得可きは知者を俟て後知らざる所、世界各國を達觀し今後利害衝突の結果互に干戈を執て相爭ふ可きものは英米二國の外一も之なしと斷じ得可ければ、この際に於て我日本たるものは英に黨せず米に偏せず、不卽不離、決して兩國戰亂の渦中に捲き込れざるの覺悟を要す。見よ日本兵力の衝突の近き將來に起

る可きことを暗示するは英人にして日英利害の衝突の支那大陸に於て到底避け難きことを唱道するは米人に非ずや。我々日本人たるものはかゝる所論に迷はされず他人の爲に火中の栗を拾ふの愚を爲さざるは勿論、英米兩國他年一日不幸にして衝突するとも嚴に中立の態度を執て夫婦喧嘩の一方に黨するが如き愚を爲す可からず。さり乍ら日本が英米兩國に對して共に親交を繼續す可きは當然にして彼の印度獨立の爲めに一臂の勞を吝まずと云ふが如きは空論家と雖も之を口にすることを愼まざる可からず。余輩は某々志士の印度革命黨に與へたる援助幷に之が取締を怠慢に附せし當時の當局の如きは我が國家に對して意外の不利を來らしめたるものなりと斷言するに於て躊躇せざるものなり。扨てかくて日本人は今後世界の競爭場裏に立ちて平和的活動に全力を傾倒す可しとせば講和會議に於ける各國主張の批判は須らく平和主義の見地の上に立たずんばある可からず。

然れども眞の平和主義の見地に立たんか國家至上主義は之を放擲せざるを得ず。國家の主權は固より之を傷くることを許さず、而も各國對等に國家の主權を拘束するは國際聯盟成立の根本要件たり。蓋し國際聯盟は國家主義に對立して現はれ來れる世界主義に就てその主張の一部を是認せるものなればなり。果して然らば米國が飽くまでモンロー主義を維持せんことを主張して聯盟規約に修正を加へたるが如き不可解の甚しきもの、殊に南隣墨是哥の極力モンロー主義に反對せるに於て然りとす。否墨其哥の之に反對せるのみならず南米のＡＢＣ三共和國もパナマ共和國の成立を快とせざるコロムビアも亦之に贊同するものにあらず。モンロー主義にして歐洲列强の兩米大陸に於ける領土侵略を防遏せんとするものならしめば兩米大陸の諸共和國一として之に反對するものなからん。然れども北米合衆國にして兩米大陸に對して覇權を握らんことを思はゞ諸共和國の之を北米合す可きは多言を要せずして明なり。モンロー主義は或は不快と衆國の國是ならん。而も世界を擧げて國際聯盟を組織し恆久平和の基礎を確立せんとするに方りモンロー主義何物ぞ、斷じて之を放擲し去て可なり。況んやその精神の兩米諸共和國の悅ぶ所にあらざるに於ておや。而も米國は遂に國際聯盟規約に於て公然モンロー主義を承認せしめたり、曰く當規約の規定はモンロー主義の如き局地的宣言に對して其效力に影響せざるものと認めらる可しと。茲に於てか石井ランシング協約も亦承認せられたるなり。而して在巴里の支那委員等は石井ランシング協約承認せられんか日本の極東に於ける特殊權利利益を承認することゝなる可しとてモンロー主義の承認に反對したりと云ふ。然れども乞ふ意を安んぜよ日本は敢て極東に於て覇者たる

の地位を要求するものにあらず、而も之と共に太平洋諸島權利に於て機會均等の原則の下にその富源の開發に參加せんとするのみ。豈に他あらんや。然れども余輩は更に之に附加して云はん。米人にして東亞大陸の地より日本人を驅逐するの意あらば——米人ハルバート氏の如きは朝鮮を獨立せしむるは米國の天職なりと云へり——而して崇米支那人にして米國と提携して日本人を排斥するが如きことあらば、日本人は之に對抗するが爲にはあらゆる方略を講ぜずんば止まざる可く、之に由て以て日支兩國人の親交を期し得可くんば卒先領事裁判制度撤去の中華民國の要求に應じ支那をして法權制限の國辱を免れしむるに於て努力せん。

佛國がアルサス・ローレーン兩州の回復に加へてザール河流域の割讓を要求し伊國がフューメ幷にダルマチアの領有を頑強に主張するは純然たる平和主義の見地よりせば大に議す可きものあらん。然れども平和人道の權化なるかの如くに思はれしウイルソン大統領さへもモンロー主義の承認を要めたり。果して然らば各國共に萬一の場合に備へて國防の安全を期せざる可からず。曾て世界を併呑せんとする勢を蓄へたりし獨逸に近き佛・兩國が背面より獨逸を牽制し得可き露國の元始的共產社會に退步したりし今日領土保全の爲に苦心せるは同情に價せずとせず。

ウヰルソン大統領は當初より休戰の交渉に於て海洋の自由を唱へたりき。而も海軍の偉力に由て世界の覇權を失はじと決意せる英國の反對に逢着して忽ちにして海洋自由の主張を葬り去れり、參戰以前に於て殊に米國の重きを置けるは海洋の自由なりと外間よりは觀測されしがウヰルソン大統領は惜氣もなくこの主張を撤回したり。蓋し英國に次で最大の海軍力を有せる米國は最早海洋の自由を主張するに於て却て不利を覺えたるによらん。實に英米兩國は共に強大なる艦隊の偉力を恃んで國防上要如たり。大陸に於ける佛伊の防備に對しては同情なくして可ならんや。徴兵制度廢止の主張の如き畢竟するに英米の利益とする所なるも佛伊の共に不便とする所、我日本も亦勿論之に反對せざるを得ざるなり。

然れども萬一の場合に備へんとするは所謂武裝平和の主義にして眞の平和主義に非ず。眞に世界平和の爲に謀さんとせば列國互に國境の牆壁を撤し去て物と人との出入來往を自由にし苟くも國家の力を用ゐて國民に特殊の便益を與へんとするの計劃を棄て世界各國の人民をして渾圓球上到る處に自由に平和的活動に出でしむるの雅量なかる可からず。是れ余輩が自由貿易自由移住の兩大原則を承認するや否やを準繩として以て國際聯盟の平和主義的價値を測定せんとしたる所以にして、自由貿易の

主義は今や多年保護貿易を執れる米國に於てさへ漸く識者の認識を得んとするに至れるが故余輩はその或は講和會議に於て承認せらるる事無きに非る可しと期待せしも『締盟各國は聯盟加入國の通商に向ては運輸の自由と平等の待遇とを獲得維持せんが爲め聯盟の機關を通じて規定を設くるを協諾す云々』と規定せしのみにて列國對抗の精神旺盛なる今日殊に當業者の國家的保護を熱望する今日に於ては是亦已を得ざるものあらん。自由移住に對しては米國幷にキャナダ濠洲等の植民地に於て反對の唱へらる可きは明白の事實なるが而もこの反對は果して正義人道に照して是認す可き物なるか。論者或は曰く上記の諸國は民主政治の國なれば勞働者の主張を無視するの要求を爲さんとするは事情に迂なるの行動なりと。然れども民主政治は衆愚政治の意味にあらず將た又多數横暴政治の意味にあらず。一國公民中の多數者たる勞働者の利害は勿論十分に之を顧慮せざるを得ずと雖も而も勞働者の主張にして我利私利の他に何等の根柢とする所無くんば政治家たるものは之を啓發して之を善導し正義人道の良心を覺醒せしめざる可からず。徒らに衆愚の利慾心に媚びて輿望を博せんとするものの如きは煽民家にして經世家にあらず。濠洲の首相ヒューズ氏が『白人濠洲』論を臆面もなく唱へて得々たるの態度を見てその男らしきを讃歎したる向もありとのことなるがヒューズ氏の如きは所謂煽民家にして經世家にはあらず。某米人は公然語りて曰く日本にして人口の繁殖甚しきに苦まば産兒を制限せよと、勞力乏しく開發せざる巨額の物資を蔽珍せる米國が支那人日本人等の入國を制限しつつあるは人道上赦す可からざるの罪惡なり。思ふに獨領たりし植民地を國際聯盟の主權の下に各關係國の委任統治に附し機會均等の主義を之に適用せんとせる大統領ウォルソン氏の精神は自由移住の原則を國の内外に行はんとするにあらん。而も惜むらくは民衆の理智を開發して自由移住の原則の必要なるを感ぜしむるの時日なく、而して國家主義を懷抱せる共和黨の上下兩院に多數を擁して政府に肉薄せんとするあり、今日の機會に於ては到底之を提唱し得ざりき。事情かくの如くたりしを以て日本全權の人種的差別撤廢を提議するや故らその移民問題と關係なきことを聲明して英國植民地幷に米國の反對を緩和せんとしたり。而もこの人種的差別撤廢の提議さへも四月十一日の委員會に於て三分の二以上の多數を得たるに拘はらず不成立と爲れり。米人は日本開國の恩人なりと云ふ。而も英米はこの決議に際して開國主義を執らずして鎖國主義を執るものなる事を明にせり。

一

論者或は曰く日本は外國人に土地所有權を與へず新領土の住

只に正等の待遇を與へず、世界改造の舞臺に人種平等の主義を主張するの資格なしと。是れ自ら作るの甚しきものなり。この原則にして一度國際聯盟の容るる所とならば勿論その精神と矛盾するの法規は悉く之を撤廢す可しと雖も列强の國家的確執熾烈なりし時代に制定したる法規存したり迚足を以て日本に正義人道を主張するの資格なしと云ふが如きは渾て無外の思想を以て滿されたる自尊心なき片片たる人物の言としては或は是を聽くを得可し蓋し國士の言にあらざるなり。米國社會學の大家ギチングス教授は社會存續は當然の權利なり唯侵略に由て擴大し得ざるのみ、社會は共に擴大し得可き平等の權利を有す、この權利にして妨げを受けんか之を防衛するの權は侵略に非ずして防禦なり"と。蓋しキチングス教授の如きは米國の人口無限に増加し得るの時に於て日本に向て人口増加を制限せよと忠告するが如きことなからん。余は聯盟加入の諸國が何れも鎖國の精神を擲ち去りすべての方面に門戶開放の主義を採用し平和的活動に於て互ひに男らしく競爭し以て各民族の特色を發揮して各、人類文明の向上に相當の貢獻を爲さんことを望んで止まざるもの、隨て國際聯盟講和會議に於ける各國の主張に對しては一概にその是非を斷ぜんとするものに非るなり。

予の講和會議觀

文學博士　三宅雪嶺

（一）

講和會議は何時でも多少の困難を伴ふが、今回のヴェルサイユ會議には、規模こそ甚だ大なれ、性質に於て從來の會議と大いなる違ひあるを豫期し難いのである。矢張勝つた方がよいと云ふに歸する。勝つた方が何程まで損失を償て、將來の發展に征を獲うるかを考へる。前に獨逸が佛國に勝つて二州を併合し、賠償金を得た。今回佛國が獨逸に勝ち、二州を恢復し、賠償金を得るは勿論、損害の多いだけザアルなど、別に要求すべき順序であり、他の聯合諸國また各々參加した程度に應じ、何か要求しようとするは定まつて居る。

主義は今や多年保護貿易を執れる米國に於てさへ漸く識者の認識を得んとするに至れるが故余輩はその或は講和會議に於て承認せらるる事無きに非る可しと期待せしも『締盟各國は聯盟加入國の通商に向ては運輸の自由と平等の待遇とを獲得維持せんが爲め聯盟の機關を通じて規定を設くるを協諾す云々』と規定せしのみにて列國對抗の精神旺盛なる今日殊に當業者の國家的保護を熱望する今日に於ては是亦已を得ざるものあらん。自由移住に對しては米國并にキャナダ濠洲等の植民地に於て反對の唱へらる可きは明白の事實なるが而もこの反對は果して正義人道に照して是認す可き物なるか。論者或は曰く上記の諸國は民主政治の國なれば勞働者の主張を無視するの要求を爲さんとするは事情に迂なるの行動なりと。然れども民主政治は衆愚政治の意味にあらず將た又多數横暴政治の意味にあらず。一國公民中の多數者たる勞働者の利害は勿論十分に之を顧慮せざるを得ずと雖も而も勞働者の主張にして我利私利の他に何等の根柢とする所無くんば政治家たるものは之を啓發して之を善導し正義人道の良心を覺醒せしめざる可からず。徒らに衆愚の利慾心に媚びて輿望を博せんとするものの如きは煽民家にして經世家にあらず。濠洲の首相ヒユーズ氏が『白人濠洲』論を臆面もなく唱へて得々たるの態度を見てその男らしきを讃歎したる向もありとのことなるがヒユーズ氏の如きは所謂煽民家にして經世家にはあらず。某米人は公然語りて曰く日本にして人口の繁殖甚しきに苦まば産兒を制限せよと、勞力乏しく開發せざる巨額の物資を蓄藏せる米國が支那人日本人等の入國を制限しつつあるは人道上赦す可からざるの罪惡なり。思ふに獨領たりし植民地を國際聯盟の主權の下に各關係國の委任統治に附し機會均等の主義を之に適用せんとせる大統領ウヰルソン氏の精神は自由移住の原則を國の内外に行はんとするにあらん。而も惜むらくは民衆の理智を開發して自由移住の原則の必要なるを感ぜしむるの時日なく、而して國家主義を懐抱せる共和黨の上下兩院に多數を擁して政府に肉薄せんとするあり、今日の機會に於ては到底之を提唱し得ざりき。事情かくの如くなりしを以て日本全權の人種的差別撤廢を提議するや故らその移民問題と關係なきことを聲明して英國植民地并に米國の反對を緩和せんとしたり。而もこの人種的差別撤廢の提議さへも四月十一日の委員會に於て三分の二以上の多數を得たるに拘はらず不成立と爲れり。米人は日本開國の恩人なりと云ふ。而も英米はこの決議に際して開國主義を執らずして鎖國主義を執るものなる事を明にせり。

一

論者或は曰く日本は外國人に土地所有權を與へず新領土の住

民に平等の待遇を與へず、世界改造の精神に人種平等の主義を主張するの資格なしと。是れ自ら僭るの甚しきものなり。この原則にして一度國際聯盟の容るる所とならば勿論その精神と矛盾するの法規は悉く之を撤廢す可しと雖も列強の國家的確執熾烈なりし時代に制定したる法規存したり迚是を以て日本に正義人道を主張するの資格なしと云ふが如きは渾て思想外の思想を以て滿されたる自尊心なき片片たる人物の言としては或は是を聽くを得可し雖し國士の言にあらざるなり。米國社會學の大家ギチングス教授は社會存續は當然の權利なり唯侵略に由て擴大し得ざるのみ、社會は共に擴大し得可き平等の權利を有す、この[illegible]にして[illegible]けんかこれを防衛するの資に侵略に非ずして防禦なりと。蓋しギチングス教授の如きは一國の人口無限に增加し得るの時に於て日本に向て人口增加を制限せよと忠告するが如きことなからん。余は聯盟加入の諸國が何れも鎖國の精神を擲ち去りすべての方面に開國の主義を採用し平和的活動に於て互ひに男らしく競爭し以て各民族の特色を發揮して各、人類文明の向上に相當の貢獻を爲さんことを望んで止まざるもの、隨て國際聯盟講和會議に於ける各國の主張に對しては一概にその是非を斷ぜんとするものに非るなり。

予の講和會議觀

文學博士　三宅雪嶺

（一）

講和會議は何時でも多少の困難を伴ふが、今回のヴェルサイユ會議には、規模こそ甚だ大なれ、性質に於て從來の會議と大いなる違ひあるを預期し難いのである。矢張勝つた方がよいと云ふに歸する。勝つた方が何程まで損失を償て、將來の發展に便を獲うるかを考へる。前に獨逸が佛國に勝つて二州を併合し、賠償金を得た。今回佛國が獨逸に勝ち、二州を恢復し、賠償金を得るは勿論、損害の多いだけザアルなど、別に要求すべき順序であり、他の聯合諸國また各々參加した程度に應じ、何か要求しようとするは定まつて居る。

（二）

所で各自更に考ふべきは成るべく殘酷の頻度に陷り度くないと云ふにある。文明の漸次高まり來つた所があり、敵を愛せよとの話の記憶に殘つて居るのがあり、同じ人類として或る一部を無理押しするのが穩かでないと感ずる所があり、旁々脅迫の手を緩めやうとの心得がある。昔から幾分か此調子があつたが、近來一層進歩を示して居る。僅かの進歩にしても進歩は進歩である。が其進歩だけでは特別に耳新しく聞えず、普通の定り通りにするものと認められるのである。其處へ持つて來て新に問題を提供し、世界の耳目を聳動したのは米國大統領ウヰルソン氏の講和條件で、正義人道を眞向に振翳して世界改造の意あるかに仄見える。絶大の戰役の下に絶大の變革あるは人の豫め察する所、如何に變革するであらうと迷ふ時、十四ケ條が明白に列擧せられ、成程斯くもあるかと思はしめた。

（三）

戰役は難儀であつたにせよ、獨をして其の繼續を斷念せしむるに最も力あつたのは米國參戰であり、米が一時なりとも敵味方に最も重きをなしたのは確かである。ウヰルソンの歐洲へ渡つたのは恰も天使の舞降るが如く、各地に於て歡迎され、定に下へも置かぬ有様である。世界の和戰を決する實力を控へ、高遠なる理想を提げ來つたので、歡迎又歡迎は事の當然とする。

けれどもウヰルソンは單に理想として十四ケ條を掲げ、實際に臨んで如何樣にも修正しようといふのであつたか、其修正は何の程度まで遣らうとするのであつたか、最初のあらはれ方が目覺しかつた丈け、後の經過に疑問を免かれぬ。餘りに希望を囑させた丈け、失望を招く事少くない。初めから單に理想として掲げ、實行の容易ならぬ事を示したならば、聞く者も其心持を以てしたらうが、直ちに之を實行すると見えたが爲め、初めは大いに嘆美し、次いで大に顰蹙する。ウヰルソンが飽くまで理想を掲げ、其實現の爲めに努力したならば、如何になつたであらうか。或は失敗に終り、大統領職を辭するの餘儀なきに至つたかも知れぬが、僞善者とか嘘吐きとかの非難を受けなんだらう。所が國内でも反對の色あり、國外でも反對の色あり、とても最初の主張通りに行きさうもないと見て取り、如何に妥協の口實を得やうと考ふるに專になり、次から次ぎと修正し、十四ケ條は殆ど骨拔き同然となつた。

（四）

理想の實現は急に求むべきでなく、成るべく之に近づかうとするならば分つて居る。が、判斷に於て頗る偏頗であり、強くて面倒になるものから許さうとし、先づ米國から國際聯盟にモンロー主義を挾む事を言出し、之を言ひ出しては他國に於て自國の利權を唱へるに憚る所ない。米が歐洲に干渉し亞細亞に干渉して、他國の米洲に手を觸れるを禁ずるなど、米洲の必要と云はば必要、偏頗の處置たるを免かれぬ。而して實は米洲の必要よりも合衆國の必要である。墨其哥を初め、中米、南米の或國は寧ろ東半球の國と提携し、合衆國の脅迫を防がうとの意がある。モンロー主義では夫れが自由にならぬ。併し合衆國はその邊に頓着なく、遠慮會釋なく繩張りを嚴重にし、他國への干

渉を勝手とするを ウヰルソンは 初めから 之を承知したかどうか。其頭腦は敏感であり、國內 輿論は絶えず動搖する。旣に足許を見られたウヰルソン、歐洲強國に於て多寡を括くるは必然の順序に屬する。

（五）

佛國首相クレマンソー氏は最初から殊勝氣な說法を好まぬ。ウヰルソンが理想を掲げ、天國を打建てるかに標榜した時、早くも斷言した、戰役の勝を得た國でなくては理解の出來ぬ事があると。而してウヰルソンが何主張に拘はるの勢を認、フオシユ將軍に進軍の意を傳へ、更に全國の新聞に佛國人の決心を發表させた。佛國は今や疲弊の極に達したが、此儘で戰役を終る事が出來ぬ、聯合國は頼みにならぬ、頼むべきは唯佛國人の愛國心、絕體絕命仆れて已むべきであると。強ちクレマンソーの策でなく、民心の緊張此處に至つたのであるが、兎も角もウヰルソンは之れを何うする事も出來ず、緩和の手段に出づるの外はない。二州の恢復は十四ヶ條中に上つて居るが、賠償と云ひザアルの管理と云ひ、特別に佛の利得となるべきものを認めねばならぬ。

（六）

英國にありては首相ロイド・ジョーヂ氏は 早く海洋自由の內談を遂げた。ウヰルソンは案外無造作に承知した。國際聯盟の下、海洋自由は問題となるべきでないとした。ウヰルソンの融通の利く事驚くべきであるが、英國側では他に何の事情があつても、苟くも英帝國の利權を脅かすが如き、斷じて許すべきでないと腹を据えて居る。敏感なるウヰルソン氏は前以て之を知り、餘計な議論をせず、さつさと承知して仕舞ふ。其結果としては英佛 苦情なく、事實上三國同盟したと言へる。

（七）

所で伊太利は之れに應じて利權を主張する。獨墺との同盟から脫して聯合國に加はり、悖德國呼はりされたのも自國の利權の爲めであり、それが目的を達し得ぬとあつては立つ瀬が無くなる。米・英・佛に於て非併合非賠償の實を行ふならば、堪忍せねばならぬ。然るに英佛は夫れ〴〵分けながら、フユーメの併合を許さぬとは何であるか、勝手な事をするなら、我に於ても所存があるとの決心を示した。米國は餘り大きな口を利けぬ。正義人道の範圍次第に縮少し、情實の範圍次第に擴大し、情實一點張りとも見えるやうになつて來た。伊國に於て啖呵を切れば相應に贊成する者もある。中歐及び東歐は形勢が定らず、米・英・佛が勝手次第の事をすると知れては、獨墺に於て講和條件を拒絕するかも知れぬ。兵力を以て強制し得ぬではないが、強いて壓迫し、過激派思想の瀰漫するやうになつても困る。賠償金の希望の絕えるのも考へものである。伊國の言ひ分だけを、刎ね附けるにも及ぶまいと言ふ事になる。

（八）

小國は各々主張する處あるが、五大強國の一なる我日本は何うであるかと云ふに、五大強國の一に加つたのを勿怪の幸とする形があるも、識者と知らるゝものまで、日本は其仲間入りするの資格あるかを疑ひ、公然之を口にして居る。五大強國の一など聞いて呆れるなどゝ新聞雜誌に公言して居る。自ら卑屈にす

るは當人の勝手、六千萬の國民を斯く見做すのは精神の侮辱を疑はねばならぬ。然し政府も此の異様の空氣中に漂ひ、惴々焉として他の大國の感情を害せざるに努め、折角得た地位を失つてならぬとの調子である。何の態度に於て、何を主張すべきか豫め定めず、御多分に洩れまいと云ふに過ぎぬ。青島に於ける獨逸の權利の獲得、赤道以北の獨領の管理など豫め期待し、此邊の事ならば六づかしくなからうとした。

（九）

西園寺侯が出立する時大抵程好く物が定まると認めた。隨員を連れ悠々閑々出懸けたのは他にも事情あらうが、餘り事を六づかしく見なんだのである。けれども講和會議の狀態を察すると、日本でも何か適當な事を主張するの有利なるを考へ、人種の差別的待遇を撤廢する事を申し出た。之を要求する位ならば、米國以上に正義人道を叫ぶ方がよかつた。利權を見向けず正義人道の下に爲すべきを爲し、我は何事も之に從ふ可しとの態度に出づべきであつた。人種の事も歸化移民等に觸れず、純粹の理論を戰はして、然るべきである。最初五大強國の一つに加はる時、正義人道を條件とし、何處までも之に從つてよいかどうかを確め、之を容れぬと云ふようでは大國の列に入る事を拒絕すべきである。講和會議に於て有力なる國々は正義人道に準據する事を欲せず、我々は世界の弱小國と共に人々の自由を擁護せねばならぬと主張せば相應の反響がある。獨墺等も今は小國扱ひである。斯く大きく出たならば他の四大強國も夫れ相應に考へ直す。妥協に自由なるウヰルソン氏は何とか名案を考へたらう。氣兼ねしながら、差別撤廢を言ひ出したが爲め、折角の主張が潰れてしまつたのである。

（一〇）

青島及び南洋の事も幾許か伊國の脫退を示したのに負ふ所ないとはせぬ。日本の當局者は慰安の理由を發見し得ぬではない。何國も十分に主張の貫徹したのがなく、中にも牛耳を執るの觀あるウヰルソン氏が斯くの如き狀態である。日本では割合に面目を毀ける事少なかつたと稱する。さう慰安し得ぬではないが、後より顧みて殘念に思ふ事がいろ〳〵あらう。講和會議は初め豫想したと其實際を見た時と考の違つた事少くなかつたらう。米國の態度の突飛なのは今に初まらぬ事と承知しつゝ、斯くまでとは今が今まで思はなんだであらう。石井子がランシング氏の言に驚いたのは、驚いた方がお目出度いと分つたらう。講和會議はウヰルソン氏の宣言の爲めに希望を囑し過ぎ、實際問題に入るに從ひ從來の會議と大差なく、只何程か儀式張つた事の減じたと共に、微かながら前に比して理想の加はるのを見る。我外交界に於ては良い經驗を得たらう。何時までもグレー氏に習うても居れぬ。我が政府に於て反省するの必要あると同じく、反對黨に於ても、外交を得意とする加藤子を初め反省するを要する。講和會議が從來の會議に類似しながら、ザックバラン地金の現はれた處がある。其處に今後の發展を見出し得るであらう。先づ其處から着眼すべきである。



「此の世の人とも覺えず」の光悦

野口米次郎

将軍家光から『光悦は天下の重寶』と、灰屋紹益から『此の世の人とも覺えず』と讃仰された本阿彌光悦は、長い〳〵日本歷史の人物中で一番完全に生きた人間であつた――少しも妥協せずに生活し得た偉い人間であつた。彼は堂々たるエゴイストであつた。然し彼の主我主義は生來溫厚高潔な個性の力で極めて哲學化したものであつた。近代の主我主義者と異つて、彼は騷騷しい言語と行爲を絕對的に否定した我彼の八十歲の一生（寛永十四年二月三日に歿した）は沈默の表象であつた。即ち沈默の言葉で彼はその主我主義を殆んど完全に歌つて死んだ。エマソンの標語『汝自身たれ』"Insist on yourself"を守つて初めて selfreliance(自恃)の完成を得る、そしてそれは古着（セコンド、ハンド、クロース）のやうな汚れた生活を嫌ふ眞實な人格を築く最大要件である。光悦は眞實な人格の人であつた。

僕は光悦位幻想（ヴキジヨン）の鮮かな人間は無いと思つて居る。桃山時代から德川時代に入つて殺伐を賣物にした時代精神も漸次に野卑な物質主義に變轉し、單純な原始性も無造作に是認された複雜性の爲め取つて替はられやうとする狀態に對する彼の幻想は、彼をして絕對的に沈默ならしめた、そして靜寂な生活の理想を追求せしめた。彼の沈默は決して臆病な降服でない、寧ろ言葉の反抗より更に一層力強い挑戰狀である。彼の沈默は豫言者としての威儀であり品位である。彼が藝術の上に於てばかりで無く、實際の行爲に於て（優々として迫らない大海の姿に比較

することが出來る彼の一生）暗示した瑣細主義（トリビアリズム）の否定は、彼をして力強く彼の永遠性を摑ました、――その點で豫言者としての彼の價は充分であつた。

勿論のこと表面上に於ける彼の靜寂は、決して精神上の讓步でも無く又妥協でも無い。彼の行爲の單調は決して內面的疲勞と闘聯したもので無い。實際僕はこの光悅位充實した精神の所有者が他にあるを知らない。彼が筆蹟に繪畫に蒔繪に、又製陶に表現した單純性（ウヰトマンの好んだ言葉を使ふとPrimevalだ）は複雜を知らないので無い。自分の經驗で肯定した永遠性の落付いた姿である。彼は有らゆる物象に於て、有らゆる思想に於て、又有らゆる感興に於て、選擇の權利を自由に振つて、藝術家また人間として對い箇性を育つことが出來たことを祝福した。

僕は種々な人間の傳記を讀み、又色々な日本や西洋の藝術家の完成した仕事の跡を考へた。然し僕は未た曾て本阿彌光悅の一生の如く完全に連續して、宛も日月星辰が一定した氣分で動いて居るが如き渾然たる人格の表現あるを知らない。彼の外面的行爲は無事件で無感激で而かも時には理智的であると受取れる場合もある。然しそれは彼の全部のもので無い。彼は生前已に大きな a cult と權威付けられて澤山の信者をその身邊に集めた。彼の知過並に交遊の跡を調べると、その當時第一流の大立物悉く含まれたかの感があつて、德川家康加賀侯前田から尊朝法親王近衞三藐院並應應山に及び、松平伊豆守信綱土井大炊頭利勝板倉伊賀守勝重、それから茶人として小堀遠州守政一或は千宗旦或は宗拙、碩儒として林羅山、畫家又書家として松花堂昭乘や俵屋宗達、彼の弟子として角倉素庵又佐野紹益――これ等の知名の人々が宛も大きな星の如くに、その周圍を取捲いた。佛家の如くで必ずしも悲觀的で無く老莊の如くで必ずしも諷刺的で無く、儒者の如くで必ずしも四角張らず又歌人の如くで必ずしも感傷的で無い彼の人格が、如何に豐饒なチャームを共等の人に與へたことであらう。世間を超絕して世間から離れず世間と和合せずして世間と親しんだ彼が、偉い人格の人で無くて何んであらうぞ。僕が理想の詩人を歌つた一詩に、

『深淵と暗黑のなかより
躍き出づる神祕、一つの姿、
完全なる或る物、
宛も日中の搖ぐごとくに來る。
その吐息は馨なり、
その眸は星への道を示し、

その額に微風あり、
その背に天の光榮あり。
その歩みは空に懸る幻影の如く、
永劫の情熱を放散す。
その住居は朝日の輝ぎ、
その言葉は夕暮の音樂。
その視線に會へば、
人は奧津城の座より起ちて、
瑞樹の森へと動き行く。』

わが本阿彌光悅も斯かる詩人に最も近い人間の一人であつた。僕は灰尾紹益の『此の世の人とも覺えず』の言葉を決して誇張と思はない。將軍家光と共に彼を『天下の重寶』として酒杯を彼に擧げたい。

人格の大小を定める尺度がたつた一つある、——外で無い、他人に對して何んな磁引力を持つて居るかである。人は知らず知らずその引力に吸收せられて、軈ては自分の或物をそのうちに發見するに至ることを喜ぶ。光悅を圍繞した公卿武士學者僧侶畫家茶人、そのいづれも自分の影を彼に見出して何んなに喜んだことであらう。偉大なる人格は神秘だ、言い換へると光悅は神秘だ『此の世の人とも覺えず』の人だといふことが出來る。程由も容易に知ることが出來やう。光悅位諸藝に達した人間は何處を尋ねても二人とは有るまい、而して彼が手を觸れた如何なる藝術にも、所謂商賣的の臭味がこべくり付いて居ない所に、彼が最高位のディレッタントとなる品質が香つて居る。勿論彼の藝術（彼の筆蹟にしても又繪畫にしても又蒔繪にしても又製陶にしても）は彼の人格の一變化に相違ないが、彼の人格自身は彼の藝術より更に大きく深く高いといふ理由も彼のディレッタンチズムに潜んで居る。僕は彼の藝術に對してその表現の實力を疑ひ又輕んずるもので無い、が、彼が藝術を獨立的に取扱はず如何なる場合に於ても、彼はそれを以て彼の人格を暗示する前奏（プレリュート）たらしめた點に敬意を表するのである。自然と人性の永遠的融和を追求する努力の上に、彼の偉大な人格が輝いて居ることはいふまでも無い、——そして彼はこの努力の結果を多くその他の藝術家の如く、珍奇な式樣から顯さうとしなかつた。彼は決して畸形兒的矛盾の人で無つた。その點から見ると彼は藝術の謀反人でない。彼は何處までも整理の人であつた。整理の人であつたから彼位自然と人性の價を正當に平均に杏定した人はない、——彼の哲學的理智の半面も共處にある。故に箇人として彼は寡慾淡々、情誼に厚く親には至厚、嚴肅な尊皇

心を胸中に守つて神佛の敬虔心深く、そして又顯貴に對しても無意味に屈しない丈けの力強い自信力があつたのである。元和元年六月に五十八歳で鷹峰に移住して云はゞ退隱生活の彼を見ても、『見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ』の骨を嚙むやうな寂莫な境地の唯美主義者で無く、洋々として春の平和な光線が漲る初秋氣分の大逸民であつた。即ち能く和し能く敬し能く寂びた天下に稀れなる大達人であつた。今日神田の五軒町本阿彌琳雅氏所藏の空中齋光甫（光悦の孫）の作だと傳へられて居る光悦像を見ても、背は低くあつたらうと想像されるが顔がふつくらと肥へた如何にも優々と迫らない澗容の所有者で、彼は『さびしさは其色としもなかりけり』の千利休のやうに痩せた剃刀男で無つた。又その外觀に相應しい人格を彼は持つて居た。僕は夢にだに光悦のやうな人間に接して尖つた箇性の荆棘を直したいと思ふ。

『本阿彌行狀記』『賑ひ草』『北嶋翁草』『日允書簡』あるいは『續近世畸人傳』等に書いてある彼の挿話のかず〳〵を讀むと、松平伊豆守がいつたやうに『光悦一人本性たがへじ』で極めて強健實直な倫理を守り、卑しい時流をずつと超絶した質以て麗はしい心の尊皇家であつたことが知れる。そして道德家たる彼の半面（また彼は立派に經世家ともいへた）が彼の藝術心を少しも傷付け又傾はさ無つた點を注意せねばならぬ。彼は家康の知遇に依り鷹峰の所領百七十六石八斗一升を給はつて、『かの朝にては光武皇帝、我朝にては東照公、かゝる世に生れたるは幸福あり』と家康の盛德を讃嘆した言葉は、『江戸表へ引越の儀はゆめ〳〵あるべからず、日本國中は神の御末にて皆々禁裏様のものなり』と、いつて子孫の江戸移住を嚴禁した態度と彼に於ては何等の撞着が無かつた。彼は私情の爲めに尊皇心と德川に對する敬愛心とを混合せしめなかつた。彼は實に『本性たがへじ』の潔士であつた。

彼は義朝賴朝時政義時つゞいて信長秀吉などの尊皇心の稀薄であつたことを責め、『日本は神代より禁裏様の物と申事を忘れて、皆御代短し、神國の妙といふべし』と一斷案を下して居る。彼は和氣淸麿づつと後の世に至つて彌平兵衛宗清、河津祐淸、名和伯耆守長年分けて楠正成三代を古今無類の忠臣だと稱讃した。彼は『禁裏様の御劍を淸め總て御用を勤め來りし事何程か難有事にて候』と感涙に咽んで、父光二時代からの御所の御用を一向專念に守護した。

彼はまた嚴重に女子の縁で立身出世してはならぬと一家一門を戒めた。『我等親類共の娘杯上様へ御奉公に差出候事は一切無之内々申合家の掟の一ケ條にいたし置候、其意味は自然御氣に

叶ひ立身出世致候ては本阿彌一家の者共只今より御憐愍も厚く相成申候得共、女の緣にて立身出世仕候ては先祖の存念も如何と家の法度にいたし置候事にて、中にくき事仕候得共大名小名御旗本倍臣下々の私式の者まで此心を持せ度候』と彼は語つて居る。彼の淸廉寡慾は實に淸淨教的のものであつた。灰屋紹益の『賑ひ草』中に、『光悅は世を渡るすべ一生さらに知らず、若かりし時より物の數を合するもの〻たぐひ、重し輕しと知るもの〻たぐひ一生我家の内になし、金銀手にのせたること、昔加州の大納言直に判金を賜ひければ手に取りていたゞきたるを覺えたり、其外一度も手に持ちたることなし』と云い、又『光悅世の中のわざとては一ことも知らず心にもなし、我はさこそすべけれとこしらへたるに、更になくて生れ得たる心のいさぎよきにてぞありける』といつて居るが、多少の誇張がそのうちにあるにしても彼の高潔な心事を證明するに餘りあるといへる。

彼がある年の極月晦日に年頃の友人の許へ立寄つたことがあつた。奥へ通されたが、門口に澤山の人が集つて居る樣子が合點出來なかつた。所がその家に日頃出入して居た禪門のなにがしが居合せたので、そのものに何事かと質問した。すると彼は『此家の仕くせにて每年大三十日の金拂を僅かなる小拂までも、大三十日の夜四ツ時前に拂はる〻なり、その仔細はかく鬧しき折なれば、金錢とも仕當不足ありてこも押切のいとま無き故、そのま〻にて受取かへる、仍て其得分を考へての事なり』と光悅に語つた。光悅は『渠は扨も淺間しき心なり、凡貴賤にかぎらず翌日は元日とて、己がさま〴〵取いとなむの折なれば少なりとも渡すべきものならば早く遣さんこそ本意なれ、さるを僅かの貪りを得物とし人に迷惑をかけ、夜陰までも遲怠させ剩さへ相對せし價のうちを猶厘毛を掠るは、不仁とやいはん不道とやいはん、か〻る人とも知らでこれまで因みたることの悔しさよ』と思つて、そのま〻一言の挨拶も無く友人の家を飛出したと『其蜩翁草』や『賑ひ草』に書いてある。世にいふ變人に近い律義者の光悅としてはさもあつたであらうと想像される。人を責めるに嚴粛なだけそれだけ彼自身に對しても決して容赦しない淸い生活（リビング）の人で彼はあつた。ウオヅウオスの所謂簡素（シンプル）な生活と高（ハイ）尚な思想（シンキング）の人であつた。彼晩年の病褥を屢々板倉伊賀守父子が見舞つて、彼が着て居た木綿の夜着蒲團を見て感服したと『本阿彌行記狀』に書いてある。又『光悅が身に奇特なること多けれども、學び難きことは二十歳計より八十歳にて相果候までは、小者一人食焚一人にて暮申事也、此故に一生諂ひ申さず』とある言葉の眞實も容易に信ずることが出來ると思はれる。

そして又彼は鷹峰へ引込んだ際、家財調度の目星しいものを

皆擧げて一家のもの或は入魂の友人等に贈呈して仕舞つたさうだ。人が何故にそんな無鐵砲な行爲をしたかと質問に及ぶと、彼はさればさ、良い道器となると落してならぬ、毀してならぬと口汚なく喋べらねばならぬ氣苦勞が一方ない。粗末のものさへ使用さへして居ればその心配から逃れられる』と答へたさうだ。こう成つて初めて彼の寂びた高雅な大人格もその圓熟期に入つたと見ることが出來る。然し彼に茶道の名品を蒐集しやうとした時代もあつた、……いつの頃の出來事だか知らぬが、黄金三十枚(『日允書簡』に依るとこの三十枚は家を賣つた十枚に人から借りた二十枚を合せたものとあるが)で小袖や宗是茶入を手に入れた。彼は早速茶をそれに入れて伏見へ出掛け、加賀大納言利家の息利長公の御目に懸けた。利長公は扨々結構な茶入だなと感嘆されて、光悅がまかり歸らうとした時横山山城守といふ男が公の命令で白銀三百枚取出して彼の茶入を所望した。然し彼は即座に辭退申上げた、『數年來御蔭を以てため置いた銀で求めたものだから』といつて拜領しなかつた。歸宅後このことを母妙秀に話さうとすると、妙秀は聞きもあへでお前はその銀を拜領したか』と光悅を瞰みつけた。光悅の語を聞き終つて、『よく御辭退申上げた。若しお前がその三百枚を拜領したならばお前の茶人はそのまゝ腐つたものといふべきだ』と妙秀はいつて、伜光悅の見上げた心を非常に喜んださうである。

彼には耳を澄まして諦聽すべき議論が澤山ある。今彼の儉約論を『本阿彌行狀記』から拔くと、

『權現樣御鷹野等に御部屋付添の女中もみな馬上にて御供のこと度々奉拜見候、駿河より江戸御表へ鷹野より直にならせられ候節、毎もかやうの事にて古雅なる難有御身持と奉存候、斯樣の事も下へ儉約を御示しのことゝ奉存候、左候へば貴賤とも儉約を專ら御示し難有候、併し貴人方儉約被遊候と諸職人別而織屋杯今日のたつきにつき申候歟、貴人は貴人の御儉約之有かにて餘り衣裳法度等强ち被仰付候と、下々は表向は君の御意に叶候樣に見苦物を着用仕自身方の用夜分又は私の宿に於て存の外結構成物を着用仕候事抔出來仕候者に御座候、十人が九人は能物を着たり旨き物を喰たがり申候、五百年も前さへ稀なればこそ靑砥左衛門布帷子に藤卷の大小を用ひられし事日記に殘り今に何心なき人とも奇きたとへに申候へども、その眞似は成可申靑砥が器量を眞似候事は覺束なく候、尤靑砥左衛門尉君の心に叶はんと致され候にもあらず、北條三代目の泰時時頼公の御身持等も右に似寄候故、斯樣の人を御目利に預り評定衆の御一に成候、此靑砥左衛門尉藤綱は藤濟の末子とか承り申候、是に引替大閤樣奢飽までに御極大名小名も見及び聞及び下々の者迄

もうつり候と、御仁政多く御代太平に候故我を忘れ候事に移られ候、いつとても儉約は人間の常に候へども下々のものどものいたまぬ様に御儉約御示有度候、儉約と吝嗇と取違候はまゝ是あり候。』

それから彼の秀吉論を聞くと、

『常に御使被成候人々も格別賤き足輕中間等にもぬけ候ものは無之、たとへ適に有之とても我朝にては代々其家柄の者の内より役儀等被仰付候事にて、人才に御不自由はなければ必〻下賤御取立御無用歟と奉存候、恐多き事ながら大閤秀吉公古今獨歩の名將にて候へども、唯御自分の智惠ばかりにて御一代御取計遊ばされ、我を忘れ給ふ故に神代より例無據家を差置二代關白にそなはり給ふといへども、秀次樣御人にあらず御父子の滞より官位御辭退もなく高野山にて御生害、彼是つまらぬ御政道故御代短く、偏に君と神とのばちを蒙り玉ふと信長公の御公達へ不忠故、天より御代を短く御取計のことゝ恐しき事也、是下賤より立身し玉ふ上御一代知術にて不義を人は知らぬかと自身御高慢故諫を聞入給はず奈良の大佛御建立と當所大佛御建立と雲泥の違と奉存候、唯今に大氣と云はれん爲に諸國の難儀をかまはず御建立の大佛殿こそ淚もこぼるゝ事どもにて候、夫のみならず朝鮮陣なども、たとへ御利運に成候ても大海を隔て候て御爲にもならねば、是大佛殿と御趣意同じき歟其上御自身は信長公へ不忠にして、秀頼公へ無二の御奉公仕るべき由にて誓詞等被遊候事大に義理の違ひ候事にて御座候、御取立の大名小名も御取亂世によく治世にあしき人多し、夫故大方は秀頼樣をみつぎ不申、是には意味有事にてつまる所は大閤樣の御不徳に奉存能き人々のいましめと奉存候、兎角素性が大事のものに被存候候、其樣子は武家は武家、町人は町人、百姓は百姓と氣々風俗ことなりいか程筋目よろしき町人百姓の倅にても武家に相成候ては、其人立身致候程素性相顯れ申候事にて、其内百姓より取出し候人は唐土我朝にも名將賢臣數多有之候、町人に惣に名を上候程の人承り不申候、至て町人は算勘に達候故天下の政等を取扱候程の人才無之者と被存候。』

これ等の論評は光悦が手紙で松平伊豆守信綱へ差上げた訓誡中のものである。彼が所司代板倉重宗の邸で信綱に遇ひ直接言上した訓誡も『兎角慈悲深くおとなしきが誠の人間にて御座候』といふ點を根底とした政治論であつた。彼は『萬民樂み不申候へば目出度御仕置にては無御座候、御法度の上にも少し譽れ有者、又老人杯者御用捨可被成候智惠の足らざることは御免し被成べく候、武家の上には氣隨無禮成人にても少し覺へ有人をば御めしなさるゝと見へ申候』と人才登用を語り、軍場の功名と

治世上の仁政とは非常に違つて『只造物の森羅萬象を生育し給ふが如く何事もあらせ度候』と結論して居る。

彼は『後代は知らず當御代迄決して外に聖君ありとも不存、有難御代に生れ候事と每度落涙いたす事也』と感激的な言葉で家康を嘆美して居る。又家康も何にかと箇人的溫情を彼に示し、時に高麗筆や貴重な唐墨時には彼が中風で手が振へると聞いて鳥屋籠などを彼に贈つて居る。然し前記の如く彼の尊皇主義は彼が自ら江戸の土を踏み箇人的に家康に接觸することを許さなかつた。寛永二年冬（彼の六十八歳の時）甥の本阿彌光室が江戸城で腦溢血の爲め病歿した時、彼は本阿彌一家の代表者として急遽江戸へ下つたが、滯在僅かに二日間で家光の親切な言葉さへ振り拂つて、用事が濟み次第早速江戸を後にして下總中山の法華經寺に參詣し、光室が寄進した五重塔を見て感慨の情をながして居る。彼をして二日間以上江戸に滯在せしめなかつたとは、彼はよく／＼關東の空氣を嫌つたものと見ることが出來る。それは彼の尊皇主義が江戸の名利に走る天下一般の腑甲斐なさに對する憤慨が結付いたからではあらうが、情に於ては德川の治世を是認したけれども彼の內心の主義はそれを否定したとも想像される。故に彼は簡素靜寂な生活の一境地を開拓してそれに自分を閉込めて一步も外に出ない決心をしたのであらう。彼の偏屈なピユリタニズムは彼に完全な主我主義の隱遁所を得せしめたのである。彼の意見が今日から見ると時に執拗な獨斷に落ちてる場合があることも自然であつた。

彼は學才と行爲との不一致を痛論して、『邪智の者は學文にていよ／＼邪智と成學成者ども只物知りと成迄にて、學文の本意を我物として今日の事に取直用候人は甚稀成物にて、多くは學才と身の行と二筋の川の樣に相成候』と云ひ、又『杜甫李白の詩は上手に候へ共其の一生も餘り事足候人共不被存候』と語つて居る。彼は何處までも調和論者で物の比例といふ實際の方面を決して忘れることが出來なかつた。そして彼は、『亦唐土より本朝の聖人吟味仕候へば數人有之べきにて候、總て餘り物每委し過候と一圓郭に添て人を追て走るが如く、先んずる者却而後れたるものを追に似たり、何事も始は少に後大に成が物每根强成く申物にて、鼻の先の學術智術計にて大場成事は行屆申さぬ者かにて候、是に付ても天滿宮御在世遣唐使の儀は御諫あらせられ御止に相成候事杯、難有御尊德と奉存候』と論じた。

また彼は云つて居る、『宋の世ほど大儒の出來候時は無之候得共中頃より揚子江とやら申大河を限りに四百餘州を半分夷にとられ、徽宗欽宗の二帝沙漠の地へとらはれに成て御幸被成、漸高宗皇帝中興は被成候得共杭州とやら申南國に卽位ましまし、

宗の代元朝迄一統の天下無之彼の候々の大儒の顯候書物又は書物の註杯我朝迄渡り我人尊敬仕候得共、其作候人々の在世にさへ宋一統の天下に學文の力にて成不申、學問は治世の要と乍申至て學文過候と、物毎あまりに理屈計に罷成又亂の端とも相成候。』そして彼は『今時めける林道春など上宮太子をそしり兼好法師のつれ〲草源氏物語をそしらるゝが如き、朱晦庵が餘風を眞似らるゝ事と我々はおかしくこそ候へ』と罵倒して居る。

七八年前のある夏の日、僕は骨董道樂の一醫師（お醫者のなかには文學と骨董弄りの方が本筋の人が多い）を訪問し　ことがあつた。僕の訪問は彼の蒐集を見せて貰ふためであつたことはいふまでも無い。夜來吹き荒んだ八月なかばの風は午後になつても納まらず、雨雲が低い天空に密集したかと思ふと、それを突然排して地上を射りくだる數條の光線は燦爛たるものであつた。僕は豫期したやうに僕の友人の歡迎を受けた。僕がこういふ天氣の脅喝にも閉口せずに訪問したことに關しては多少の理由があつた。僕は夏の期節は美術品を見るに不適當だ、我我の心持を集中させることが出來ないので、それを否定するよりも一層肯定することが困難な時候だ。開けばなした障子が右からも左からも亂雜に迎へる光線の爲め、雪舟の達磨でも乃至は良寛の筆蹟（この醫師は稀有な良寛物の所有者であつた）でもその藝術的良心の安定を亂されざるを得ないであらう。僕は他の場合には呪ふべきこの惡天候に對して感謝した、——醫師の客間は障子は勿論、雨戸さへある場所には閉ぢられて居て、一幅見冬のやうな落付いた暗黒が床の間に程良く集つたから、一幅一幅と順を追つて懸られた繪や書が何んなに靜寂に見へたであらう。『君、この書の筆者は誰？』と、僕は眼前に顯はれた茶懸けの一小幅を見た時大な聲で叫んだ。醫師は『これは本阿彌光悦だ』と答へた。『何んですて！光悦！これまで見た全體をひつくるめた以上に僕はこの小幅に價を付ける。もう今日はこれで澤山です』と僕は語つて、二三分經てから僕は彼の得意そうな顏を眺め乍ら、『何うでせう、これを僕に一二週間貸して吳れまいか、——もつて行つて僕の家に懸けて置きたいから』と强談に及んだ。

『君の氣に入つて結構だ、宜しい持つて行き給へ、——いつまで君の手元に置いてもよい。場合に依れば僕に返へさなくても差支無いよ』と僕の友人は云つた。

僕は醫師から光悦のこの小幅を貸して貰つて歸宅して、その晩それを自分の書齋の床の間に懸けた。僕は電燈を消して古い

世界の柔な蠟燭の光に對座すると、僕は耳に生に疲れ世を厭つた古い歌を聞くやうな心持がして、身は急に光悦の寛永時代に運ばれ宛も灰色の風來物(ウエーフ)か或は生命の寂びを味つた茶の宗匠でゝもあるかのやうに感じた。實際僕は、林羅山が鷹峰記に書いた『林霏朝開山氣夕佳、花芽三千旅一月入二紗窓一』の王城を去る僅かに二十餘町の太虚庵 Abode of Emptiness にでも座りこんで、今しも滾る鐵瓶に耳を澄して居るやうにさへ想像した。我我の生命の如く果敢ない光に生きて居る蠟燭の焔を通して、床の間に懸けた光悦の小幅の文字を見ると、英語でいふと the haunting Charm of a Ghost が薄ぼんやり浮出て見へた。

『櫻花庭の春風あとも無し問はゞそ人の雪とだに見む。』

(僕はこの歌を英語に直して、

"Whose's Cherry-blossom?
The trace of the garden's spring breeze
Is seen no more.
I will point, if anybody called here,
To my fancy snow upon the ground,

暗黒のなかゝら日光、花のなかゝら生命、乃至は墜落(フォール)のなかから上昇(ライズ)を創造し得るのは想像の力だ。座上に散亂する花瓣といふ散文的事實を見ないといふ所に壯嚴な力がある、藝術の衝動で感激的特種の境地を造る所に詩人の權威が潜んで居る。人間が自分に向つて虛僞を語ることが出來るといふことは何んたる祝福であらう、――野鄙な心が眞理非眞理と稱するものに明瞭な分界線を見かず、戶を閉ぢた蝸牛のやうに自分が創造した藝術的空氣のなかに生活するといふ位愉快なとは無い。落ちた櫻の花瓣を麗はしい雪と變化せしめることが出來た人間の心に藝術の目覺めがある。詩的憧憬の進路を遮るものは何處にも無い、――若し僕が藝術家の生活を何等の生活よりも尊いといつても、其處には決して迷信があるのでないと斷言し得ると思ふ。近頃僕の心理狀態は孤獨(ロンリネス)(エマソニアンの意味でも叉『見渡せば花も紅葉も無かりけり』の歌の意味でも)の二字で蔽はれて、それに對する祈願の力で自己完成の域に達したいと思つて居る。今僕がこの光悦の『櫻花の書』(彼は滅多に自分の歌を書かなかつたから、これも他人の歌ではあらうけれども)に對して感謝する所以も外でない、――現實と官能のなかから産れた想像の薄明路、云ひ替へると死の痛みで洗禮を受けた理想の路を歩いて、僕自身の詩へ到着することが出來るといふ決心が出來たからである。僕は必ずしもこの歌を立派な作品と思ふもの

無い。又彼が筆蹟で今日殘つて居る所のものを見ると、書いてある歌の大部分は優麗雅美な外形美に即した新古今情調のもので、それも歌の背景たる色紙の圖案と調和させたいといふ彼の藝術的用意が然らしめたものとも思はれるし、又彼の清く溫い寂びを望んだ彼の人格は、必ずしも焰のなかゝら艶な色を拔いたやうな青白い禪僧的寂寥の藝術を避けたものとも見ることが出來る。假令『櫻花』の歌に高貴な文學的價値が無いとしても、僕はそれから暗示を受けて自分が進むべき路を發見し得たことに對しては感謝せねばならぬ。

光悦は書の上で尊朝法親王或は素眼法師或は近衛龍山又或は近衛三藐院を師としたと云ひ傳へられて諸說が紛々として居る。故人の書で私淑したのは日本では空海と道風、そして支那では王義之であつた。彼が書道で天下に隱れなき偉名を生前にほしいまゝにした事實は、羅山が『今世叟心匠有ㇾ巧、尤善能ㇾ書自謂花鳥風雲得㆓之心㆒而後倭字漢字應㆓之手㆒故心在㆓筆前㆒自成㆓一家法㆒』と書いて居るのでも知ることが出來る。寬永の三筆といへば、彼光悦と松花堂それに三藐院を加へるのであるが、三藐院は已に慶長十九年に死んで居るから寬永三筆の一人は應山とすべきだといふ說も、年代的には是認せねばならぬ。又光悦は三藐院より七歲の長であつたことを知ると、前者が後者を師としたといふ說も眞實でないかも知れない。然し光悦はその當時近衛三藐院と共に書家の名を馳せた事實を側面から證據立てるに足る、愉快な一挿話が此處にある、——ある日彼は三藐院の面前に出た。三藐院は『今天下の能書家は誰れだらう』と彼に質問した。彼は『………されぱさ、第二の能書家はあなた、その次は松花堂であらう』と答へて、自分を第一に推すだらうと私かに考へて居た三藐院の鼻を拉いだ。三藐院は叫んだ、『さればさも何にも無い………第一番の書家はそんなら誰れだ?』『申し難いがこういふ手前で御座る』と光悦はいつて退けた。この挿話の眞僞は保證の限りで無いが、書道に於ける光悦の自信は壯大なものであつたに相違無い。自信力の輝を持たぬ大人格は存在しない。又素撲正直な人に限つて大な自信力の所有者たり得る。光悦が書道に對する自信は極めて自然であつたといふことが出來る。

僕は彼の書には野卑性が微塵も無いことを喜ぶものである。僕は嘗て彼の書を嘆美してこういふ言葉を用ゐたことがある、『彼には幻覺的魅力がある。それは秋の草花のなかを流れる小河が持つて居る魅力だ。彼の書には感銘の深いものがある。それは月が西に急に落ちる時人に與へる深い感銘に譬へることが出來る。彼の書は宛も吹く風や嘆息する雨の如くに偶然の産

物である。それは彼が書いた時卑い自覺に捕へられ無かつたであらうといふ意味だ。故に僕ばかりで無い誰れでも、彼の書に對しては批評の言葉を弄する權利が無い。たゞもう彼の書を眺めて稱贊するのみだ、僕等は何うして此書が出來たかなどいふことを議論する必要が無い。』

今『櫻花』の小幅を見るに行書である　我我の東洋では書が繪と骨肉的關係を持つて居る。それと同時に書は我我の生活の藝術とも關聯して居ると僕は躊躇無くいふことが出來る。楷行草の三つのうちその何れを生活上に選定するかゞ問題だ、――四角張つた楷書の形式主義か、それでも草書の羅曼主義と行書を單に中性的平凡の中道と呼ぶことは正當で無い。人間の理想は楷書的物質主義の因襲乃至現實から庇れる。光悅が少くもこの『櫻花』の書に於て、狂暴な草書的生活を避け、太虛庵裡茶釜と數本の筆を友として to make one best day before he fell into the final rest の爲め、程良き抑揚を尊重する行書生活を選んだ彼の賢明を知ることが出來るといふことが出來る。世を知り時を知り又自己を知つて、恬淡で間然する所なき麗はしい生活を營んで八十歲の長壽を保つた彼は世にも稀れなる人格であつたことを誰れが否定するであらうか。

彼の時代は、豪氣な英雄主義を背景とした桃山趣味が豪美的修養の清い水で洗はれやうとした時であつた。藝術を實生活に融和させせんとした努力の中から時代精神の象徵的半面が顯はれた。大德寺中に營んだ孤蓬庵の庭に近江八景を收めた伏見の奉行小堀遠州でも、又叡山の麓一乘寺村から白眼世上を見て宋風の隸書を溫雅な京の青空に書いた石川丈山でも、如何に完全に平凡な瑣細な俗界の塵埃から脫出したであらう。彼等の藝術觀は消極的だ、熱烈を缺いたと云へばいへるが、確に野卑な物質論で弱められ無かつた英雄主義であつた。彼等の實際生活には靜寂な祈禱があつた。又彼等が極力防護した簡素な雰圍氣は、その清淨敎的(ピユリタニツク)純白で何んなに彼等の藝術を養つたであらうぞ。本阿彌光悅が五十八歲で元和元年に鷹峯へ移住して藝術鄉を建設するに至つた以前の歷史は、今日では邈として知ることが出來ないとなつて居る。慶長十六年に死んだ持明院中納言が古田織部正と織田有樂齋の兩人を中に立てゝ彼の繪一枚を所望した時、彼は『あら悲しや浮世にながらへればかゝるうきめを見るものか』と知人に送つた書簡の一節に書いて居る所から推察すると、彼が鷹峯移住以前に已に堂々たる一家を成して居たものと見ても間違は無い。そもそも鷹峰は京都の西北、丹若二州に通ずる要路であつたが、『昔は高き草もなき原』と本阿彌行狀記にあるやうに實に群盜の巢とさへ云はれた場所であつた、――

こゝの荒地を開拓して東西二百間南北七町丁字形の街道を通じた。南京口を入ると東側に間口五間乃至二十間といふ五十四ケ所の屋敷が並んで、その中央に光悦は間口六十間の居所を構へた。そして彼に隣して東側に住んだものは、光益、光榮、光班、宗珠宗知などゝいふ人々であつた。又西側の屋敷二十一軒には、光甫、光伯、宗仁、宗澤、宗伯や筆屋妙喜並に茶屋四郎次郎なども交つて居た。僕は彼が盗賊の影をこの鷹峰から無くさした實際的功績を擧げ得た時、如何に彼は滿足の情に撃たれたことであらうと想像する。又『光悦心靜なる夕暮、ここかしこ眺め歩みて思ひけるは、いかなる故に如斯大なる野山を拜領申、何思ふこともなく明し暮すことの忝さ今生一世の事にはよもあらじと思ひける、若年の時毎々妙秀語りける事を不圖思ひ出し、扨は疑なく我親の善心の報ひなりと肝にめいじける』の言葉を僕が本阿彌行狀記中に讀む時は、いつも僕の眼前に彼の濃かな溫情の顏が浮いて見へる。

光悦崇拜の米國の一詩人(デトロイトのフリーヤ氏所藏の『玉蜀』と『木蔦』兩雙の屏風が如何に光悦宗の傳道を米國で謀つて居るであらう)が一兩年前に鷹峯を訪問したことがあつた。その節僕が彼から受取つた書簡のなかにこういふ言葉があつた、『君よ、今僕は光悦寺本阿彌庵から鷹ケ峯を仰いで居る。君よ今僕はこの左露遠く一面に展開する京都の北半を見下して居る。洋々たる海波のやうに動いて居る霧のなかに漂つて居るものがある。何ぞ、——これは洛中の高樓である。僕は君から散散京都に降る雨の「白い襟足」のことを聞かされた。然し不幸にして僕はそれを未だ見ない。君よ、今僕は色々と光悦の庭園趣味を想像して、寺内にある光悦家歴代の墓場を歩いて居る。蔚蒼たる樹葉のもとに默々と蹲つて居る一巨石を見た時、はあこれが君から聞いた薄墨の手洗鉢だなと思つた。半球狀に地上に露出した部分は古い溫かい淡黑色。その上を點々模樣付けて居る綠色の時代を知らぬ苔。此手洗鉢を見て居ると、あら不思議や、瞑想に落ちた光悦の姿と變化したやうに思はれた。確に彼にはこの沈默せる手洗鉢の如き表情の場合があつたに相違無いと信ずる。』

羅山の鷹峰記を初め隨分と種々なものに鷹峰の風景が稱賛されて居る。佐野紹益の『賑ひ草』のなかにも、『ひがしは賀茂の山、松が崎などはいとちかく松と竹とのけぢめ見ゆるほどにて、ひえの山はこなたの山より上にふもとまでみえていとゞ高く、一乘寺の里、白川までもふもとゝ見ゆ、雪の頃ならねど有明の月はいたゞきの山のはにのこりて、明がた近きほどにをちかたは霧ふかく、ふもとの山はみなかくれて、ひえの山は水海のあ

なたにやと打ちながめらる、よこ雲たな引いでゝたが別路のなかめならんと老の心をなぐさむ。『本阿彌行狀記のなかにも、「みちのくの松島を見ける人々此鷹峯に及ばずと申き』と書いてある。又利休が秀次公の御供して此處に來り、日本無双の地なりとて竹の柱で御茶屋を造り御茶を秀次公に奉つたとも同書に書いてある。

この風景明媚の場所で靜寂を感じた光悅が熱烈な宗教心を發揮するに至つたことは自然であつた。鷹峰の地を得たのは我親の善心の賜、一門の繁榮を見ては祖先の應報だといつも感謝して居た彼は、先天的信仰の人であつた。勿論彼を立派な法華信者としたことは父母の感化が與つて力があつた。彼は鷹峰へ移住すると間も無く彼一家で四箇寺を建設して居る。その一は妙秀寺（彼の母親の名前は妙秀であつた）で、特に亡母の菩提を弔ふために建立したものである。彼が太虛庵に閑居してからの晩年は、清い水をくんで茶を立てたり又祈禱のつもりで尊い經文を謹寫した。今日彼が謹寫した經文は澤山京都の本法寺や妙蓮寺や本滿寺に納まつて居るそうである。又光悅寺の什寶として、彼が佛法流布祈願の書初めがいくらも今日傳はつて居る。

鷹峰繁昌の時代には、前記四箇寺のうちなる常照寺（光悅の嫡子光瑳の建立）に數百人の諸化が居て、天台六十卷の講釋を數十遍もくり返した。又妙秀寺にも澤山の僧侶が集つて毎月朝暮二度妙經一部を讀誦し又毎日五種の妙文を讀んで天下の御祈禱怠りなかつたといふことだ。光悅歿後、孫の空中齋光甫時代の鷹峰はその生命に於ては勿論弛廢しつゝあつたのであるが、佛教の聖地としては寧ろ以前に增した繁榮を極め、更に普明庵淨光庵妙解庵といふ三箇寺も附け加へられた。艸山元政上人などは屢々この地へ來遊して三度も遊鷹峰記を書いて居る。

光悅の曾孫光傳は光悅歿後四十二年目に鷹峰の領地を返還するに至つた。これは延寶七年の出來事である。偉大な人格の光悅が鷹峰で開いた藝術郷の存在は此處に至つて遂に亡びたのである。元祿十年には本阿彌一家は舉げて鷹峯を引拂ひ江戶へ移住するに至つた。本阿彌家の凋落と共に鷹峰光悅寺もその生命を失つたのである。

讀者諸君は今僕は東洋美術に對して銳利な批評眼を持つた一英人と一所で、倫敦は南ケンシングトン博物館内に展覽されて居る光悅作蒔繪棚子の日の前に立つて居ると想像し給へ。(これは日英博覽會後間も無いことであつた。)僕は同行の友人に、中板一面に延びた根付の小松が描かれて居る理由から『子の日』の

名前が付いたと說明した。我々兩人は仔細に、中段に描いてある扇面に夕顏の繪、厨子の扉に描いてある檜垣と牛車又牛車の側に樂さうに眠つて居る舍人一人の繪、又これから棚の側面や後面に散らばつて居る楓葉や散松葉の繪を眺めた。僕は彼に、小松が春で夕顏が夏で檜垣の牛車が神事の秋で楓葉松葉が卽ち冬の表象だと語つた。彼はこの意匠の含んで居る素樸でしかも高雅な麗はしい藝術美に對し心からの嘆稱を叫んだ。僕は彼に東京博物館の所藏にかゝる光悅作舟橋蒔繪硯箱の美を語らざるを得なかつた。

『後選集戀部にのつて居る「あづま路の佐野の舟橋かけてのみ思ひわたるをしる人ぞなき」といふ源等朝臣の歌が意匠の中心だ。半球形に小高くなつた蓋、その上に鉛の橋が嵌入してあつて、「東路の佐野の」と「かけてのみ」が銀、「舟橋」は鉛の橋で繪で示し、「思ひわたるをしる人ぞなき」の十字は銀で書いて金蒔繪の波と舟との間に入れてある。君よ眼をつぶつて、燦爛たる金蒔繪の舟と波に對照する黑い鉛の色を想像し給へ、――更にこれに配する鮮麗優美な銀文字が如何に氣高い美の調和を謀つて居るかを想像し給へ。半球形の蓋を宛も天に冲するとでも評することが出來る勢で一文字に横に走つて居る鉛の橋に、何等の壯大氣分がたゞよつて居るであらうぞ。これは光悅の傑作たるばかりで無い、日本の全蒔繪中最大作品であると信ずる一般日本人の意見を、君は君の想像のみでも是認することが容易に出來るであらう。君等西洋人は、無鐵砲にも時々日本の優秀な美術品は最早や海外に運ばれて居るなどゝいふことがあるが、僕は君等に示すに足る美術品をまだ〳〵澤山所有して居る。然し僕は暮斯敦博物館やフリーヤ氏が持つて居る日本美術の價を決して安く見積るもので無いことを云ひそへる。』

僕が倫敦を去る時ある一英人から獨逸帝室博物館所藏の光悅色紙三十六枚揃を是非見て行けと懇に注意されたに係らず、ある事情の爲めこの希望を達することが出來なかつたを僕は殘念に思つて居る。聞く所に依ると三十六枚に書いてある歌は恐く新古今集和歌で、背景たるべき模樣の繪に驚くべき變化があるそうだ。勿論草花や自然を取扱つたものであることはいふまでも無い。然しそれに匹敵し得る光悅物はまだ日本に澤山ある、――僕等の念頭に第一浮ぶのは、大倉家所有に懸る『光悅蓮華の卷』と『光悅小倉の卷』だ。僕はこれを單に複製で瞥見して居るのみだが、光悅研究者森田清之助氏の言葉を讀むとかう書いてある、『今其地繪を見るに、卷頭五六尺の間に徑四五寸の蓮の圓形小葉八箇を散らして畫き、次約四尺の間には唯徑二寸のぜに葉一箇を落せるのみ、次凡二丈の間には蓮華を畫く、はじめ

には小なる蕾或は三、或は一、或は二、極めて疎らなるが漸次群生に加ふるに數多の蕾遠近林立し其間に半開花の加はるに至り、進めば滿開の花も交はり、更に進みては轉倒して殆んど滿開華のみとなり、蕾は曉星も啻ならず、葉は蕾華、半開花連續の間には唯徑七八寸のもの丶半圓を畫くあるのみ、滿開華の簇生する所に到りてはじめて大なる蓮葉卷面を壓し來り、或は上方に、或は下方に、或は拳を捧ぐるが如く、或は拳を提ぐるが如し、かくて滿開の華はうつつて亂開の華と化し、大なる葉はやがて凋落の葉と傾き卷末凡一丈に亘る間は或は破葉倒まに仆れ、或は亂華靡爛、落花狼藉の有様にて卷尾漸く一軸の蓮實の現はる丶に至りて終を告ぐ、之を季節に考ふれは春より秋までの蓮池の風景を順序的に描寫したるものにして蓮生涯の經過を語れるものなり、崇佛家たりし光悅が佛事に賞玩する蓮を描き、其清くいさぎよく濁りに染まぬ心もて泥中の蓮華を畫きたりしは如何ばかり會心事なりしぞ、卷首小蓮華のうき草の如く漂々然たるは、其何物にも執着せられさる氣分の如く、次に蕾華の矗々乎たるは其性質の率直にして衒氣なきが如く、ついて滿開華の空間に愉々乎として笑める姿は其樂觀的なる襟懷にさも似たり、卷末破葉の婆娑として將に仆れんとし華瓣の落ちて翻々たる風景も頗る坦懷洒落にして、露も凋落悲觀の風を見る能はず、卷尾一枚の蓮實が亭として天の一方を突ける所、所謂「言ふに言はれず說くに說かれず」底の風情にして僅かに禪機の妙所あり。』これに依つてこの書畫卷物の價値も充分に想像せられ得る。

今故フエノロサの批評の文字に依つて、フリーヤ氏の『木蔦の屛風が何んなものであるかを考へると、地は銀で、くすんだ赤と橙黃と銀色の蔦の葉がずつと下の方へ垂れて居る。この繪には華麗な花を描いた永德の配色手法が多少取入れられて居るそうだ。垂れさがつた蔦の葉の艷麗さは他に比較物が無いといふことである。又もう一枚の『玉蜀』の繪は、曾て西班牙人が日本へ輸入したといふ大形の玉蜀で、古來何處の畫家でもこの光悅のやうに精緻な動いた描線を支配することが出來まいといふ深い印象を與へるそうだ。フエノロサは元來はある佛蘭西人の所藏であつたが今日暮斯敦博物館に入つて居る光悅の六曲屛風の美を稱贊して居る。これは淡黃色と銀で淸い水の流が描いてあるそうである。

誰れも知る如くもと／＼光悅傳來の家業は刀劍の鑑定磨礪淨拭の三事であつた。其點の造詣の深かつたことはいふまでも無い。然しこのことは今日では古い書物に載せられて居る所のものを讀んで唯想像されるのみである。筆蹟繪畫と時繪との外、光悅が自分の藝術心を表現したものに陶器がある。『予は燒物を

家業體にするにもあらず、ただ趣味のよき土を見たて折々拵へ侍るはがりにて名を陶器にて上ぐる心つゆいさゝかなし』と自分で云つたといふことであるが、今日彼の遺作として茶盌の世界で有名なもの丶中に、東京博物館所藏の銘鷹峰や德川賴倫侯所藏の銘緋縅や酒井忠興伯所藏の銘不二や松平直亮伯所藏の加賀光悦等が含まれて居る。僕の友人月郊君が見たといふ鹿の香合に就て同君はかう書いて居られる。『鹿の首ばかり表はした素朴青瓷や堆朱より濃茶一色、空山の夜半に聽く風韻は溢るゝばかり流つて居る。』

『書に盡きず畫に盡きず圖案に盡きず陶器に盡きず、庭園に盡きず自然に盡きず宗教に盡きぬのは彼の人格であつた。其全部は彼に親炙した人々にも盡されなかつたであらう。太虛か。大充實か。太虛と自稱して藝術各種に渉り、どれも無意識的に豐圓である。しかも全力を濺いだ熱烈はない。そこが近代の藝術家と違ふ所、張詰めた大充實で無い代りに何物も容れる太虛。弱肉強食が最慘酷に行はれた亂世を經て殺氣が無く、東山禪寂の氣韻を受けて枯渴せず、母の感化から日蓮宗に歸して其祖の覇氣も無く、平安朝の優美を傳へて其頽唐は無く、長い傳統を受けて貴族的でも無く、大に治まらうとする太平の空氣に融解して特種の人格となつたのである。其人格から出た圓融の趣味となつたのである。其趣味から出た衆[illegible]的藝術となつたのである。』これは月郊君の光悦論の結末であるが、僕は全然同君の言葉を裏書するものだ。要するに彼の種々な藝術、は彼の大な人格を暗示的に說明する箇條書である細目條欵たるに過ぎない。

彼は眞實な意味に於ての大ディレッタントであつた、——所謂旦那藝の最高位まで進んだものであつた。英語で書くと彼には The solitary grace of amateurishness in the highest sens があつた。それは彼の藝術が『非職業』といふ力で立派に藝術の散文的瑣細主義を脫したからである。それは彼が藝術的熱烈を僧院的な寂びの水で靜め得たからである。

『只何流と申すものにては無之、私流にて御座候。』この言葉は光悦が自分の筆蹟に關して語つたものであるが、彼は彼の如何なる藝術の上にもこの偉大な誇を持つて居たのである。若し西洋で彼の匹儔を求めたならば、伊太利のダヴヰンチであらう。

杜鵑啼くころ

黒頭巾

(一)

◉杜鵑啼く新綠のころ、都門を西に去る一千哩、故鄕近き海岸の町に淹留すれば、大柄の浴衣地にシンシを張りたらんように眞直に美しく伸びたる長き町に沿ひて限無くひろがりゆく萬頃の碧波、舞臺の背景よりも麗はしき、參差としたる綠の山々、谷々。帆影と鵑聲と、客愁を動かし易し。

◉客中、更に客となりて、筆を載せ、舌を載せて、山に登り、海を渡り、一年の好時節、何事ぞ一日の閑なるを得ず。溪流に漱げば落紅、吾掌に濺ぎ、甲板に微吟すれば、鴫の柳條、吾帽を掠めて搖らぐ。樹下、石上、悉く詩あらざるは無く、薰風、吾懷を暢ぶ。到るところ、新綠、吾眼を染めて、正に杜鵑の舞臺なるかな。

◉此夕、偶、客舍に閑居して机に向ひつゝあれば、朝來の雨、漸く大地を浸潤し、夜に入つて蕭やかに地に觸るゝ雨の音、吾が旅魂を誘ふて、のどかなる閑愁を味はしむ。

◉忙がしき小旅行を續けし後の、休の一夜なる、客舍の寂し味の貴さかな。雨の音、次第に重くなりゆきつ、家を包める遠き緩やかなる海は、靜かなる眼の微かなる鼾を聞くに似たり。

◉殘りの微光を溶かしたる黄昏の雨に、東窓を開けば、裏の小路を隔てゝ、大なる庭の夏橙、寶玉のやうに浮びて見えし。日落ちて窓を閉せば、一室に籠もりて、吾が心頭の乾坤、却つて廣がりゆくを覺ゆ。

◉雨の音の歇みし間を、思ひ出したるやうに蛙の鳴くが、始めて聞ゆ。町に迫りて西南に近く斗出したる岡の森の梟が、宵より續けて、雨の夜の司會者らしく鳴く。雨の音、斷えて、また續き、殘燈、熒々として吾筆を照らしつゝ、床の間の高き芍藥花に、夜は、獨り靜かに深け行く。

(二)

◉吾が行李の中に、漱石の句集落椿一卷を携ふ。その中に、「晝寢す可らずとある寺の椽涼し」の一句を見れば、ひとり微笑せ

ざる能はず。これに依つて漱石を思ひ、併せて此の頃、吾輩の多く往きて遊ぶ町近き山の寺を思ふ。

◉此の句は、必ずしも漱石の傑作といふに非れども、彼の詩境は、よく此の中に現はれたり。而して此の頃の、涼しき寺の椽こそ興趣盡きざるものなりけれ

◉吾輩、二十二三年前、大學生の時、漱石及び四方太と子規庵に往きしは恰も新綠の頃なりし。子規庵の新綠に、始めて端午や、げん／＼畑の句を作りし運坐のおもしろかりし事を思ひ出すかな。漱石、遠く北國に在りて久しく相逢はず、四方太とは東京の同じ町に住みしが、去年、早く世を捐て、墓木倘ほ新なり。

◉此の頃の旅に、四方太を憶ふこと多し。彼の句に、「河豚さくや出刄に滴る血の黑き」といふあり。子規庵より、漱石と三人して本郷に歸る途、谷中の綠蔭に、彼、此の句を語り出で、河豚には古句多し、新生面を開かざる可らずと云ひて豪傑笑せし。

◉四方太は極めて瘠せたる男なりしが、强き句を作り、その會心に笑ふや豪傑笑を爲せり。杜鵑花の句には、「つゝじの根に蛇蠢動く微風かな」といふあり。今、吾輩の淹留する地方に河豚を名物とし、吾輩の行く山寺に、滿園、悉く杜鵑花、盛開せり。四方太が黄泉の俳壇に、豪傑笑を爲しつゝあるを想ふ。

◉子規は肺を病みて血を吐き、依つて自ら子規と號す。杜鵑啼くころ杜鵑花開く。此花、開きて、月の夕、子規の魂、髣髴として還り來るや。吾輩の父、杜鵑花を愛して、遍ねく書齋の前に栽え、その花の盛りの時に死せり。吾輩、杜鵑花を見るを喜び、且つ悲しむ。

（三）

◉竹藪の筍は伸びて竹となりて、廣庭の涼しき寺の椽に腰掛けて在れば、閑却されたる名所を發見したる心地す。

◉晝寢す可らずと書かれたる椽の寺の、俗にして涼しからず。書かれざる寺の涼しきは嬉し。晝寢せずとも可し。獨り山寺の椽に來て、新綠を眺めつゝあれば、悠々たる天地、自ら吾有に歸せずんばあらず。

◉遠く、近く、群がり漲がる新綠が、吾が一身を包むを觀つゝあれば、寺の椽は舟にて、吾身は大海原に浮べるなり。新綠は水の如しといふよりも、海は新綠の如し。限り無き碧波を地上に飜へして、凝つて崩れざるものは、新綠の氣分にあらずや。

◉風吹けば新綠の波立つこと、此の頃の碧海の如し、風無きも、新綠は自ら流動の勢を帶ぶ。流水を溯るとき、新綠を穿つて行くに異ならず。

◉水を擘くは新綠を擘くがごとく、新綠を擘くは水を擘くがご

とくならずんばある可らず。草木黄落して根幹を露はせば、溪流に水落ち石出るなり。

◉新綠の凉味は水の凉味なり。水は新を意味す。水、生動せざれば新らしからず、綠、新らしきときに凉味湧く。

◉カナメの芽が眞紅にして火の燃ゆるようなるも、凉し。紅爐中生二蓮花一、靑天上有二百楡一の味は、萬綠叢中のカナメに見る。新芽は必ずしも綠を要せず。紅、黃、白、みな美しくして凉し。

◉新綠は早曉に宜しく、薄暮に宜し。新綠の妙味は盛日よりも微光にあり。その尤も微妙の佳境は、眞に暫時の中に在り。譬へば醱酵の妙處の刹那の如く、醉心地の好適の瞬間の如くなるべし。

◉新綠は水より出て水に入る。未明に見る新綠の森の海の如くなるが、曉光に伴ふて新綠、漸く流れ出づ。殘陽より見て薄暮に至れば、畫くが如き新綠留めんとして得可らず。暮光、おぼろなる刹那、新綠の森は、破墨を以て畫ける山水の趣味あり。此境、僅に一轉過すれば、星稀に、月白く、新綠は蒼然として海を望むが如し。

◉吾儕、一日、暮色に、新綠に對して米點山水を思ふ。夕陽に新綠の畫趣の移り行くを見れば、畫法を悟るを得べし。

◉日暮れ、綠の闇を穿ち、山寺を出て、溪盤に浴ひて下り行く。綠樹の缺けて空明らかなるところ、回看して山を望む。一山、左右より迫つて、嶺の低きところ星數點、僅に山を出るの月。此の時、月、頗る人間に近きを思ふ。杜鵑、一聲、月を掠めて飛ぶべき理想境なり。

◉夕陽、消えなんとして、僅に、海面に粘著して残るとき、燕魚、高く波を出で飛ぶ。杜鵑は地上の燕魚なり。燕魚の飛ぶは杜鵑が新綠の海を啼き過ぐる詩境ならずんばあらざるべし。

（四）

◉吾儕床の間に存中して、朝餐を終る間に、花瓶の芍藥花吹けり。花の開く刹那を見る者は少し。月を見ること多けれども杜鵑の飛ぶを待ち得たる者は稀なり。

◉蓮花、開く時、音すといへど、その開くを見易からず。音するとき、花、すでに開きてあり。杜鵑一聲、月ばかり殘れるが如くなるべし。

◉昨日まで蕾なりしに、今日、花なるを見れば、花は、夜半に開く乎。然れども吾が朝餐の時にも、何時とは知らず、芍藥花咲く。杜鵑、啼きて過ぐるとき、乃ち杜鵑花、開くなるべし。

◉新綠そよぐおぼろ月の夜半を柳蔭に浴ひて、溪聲を溯りつゝあれば、急瀨の音、潺湲として遠くより來り、微風、吾が裳を吹いて、吾心、陶然として微醉の思あり。

●此の時、溪上に青山、夢のように淡く、溪流、夢の中より來る。一足、一足に、歩を運ぶに、溪聲、恰も美妙なる樂譜の琴線に觸るゝの刹那、忽然として杜鵑、青山を飛び過ぎて、一聲を放たしめばやと思ふ。

●杜鵑を思ひつゝ、知らず〳〵吾歩、前に進みて、溪聲、一歩一歩に鳴りまさりつゝ、溪聲、吾が詩境を奪ひて、「杜鵑の詩」すでに吾が背後に在り。詩は機會なり、機會は過ぎ去るの後、また前に求む可らず。

●月の出る刹那を思ふ。晴れたる十五夜の東海を眺めつゝあれば、新らしき、光水平線を染めて、月輪、微かに海を出づ。光湧き、月生じ、躍び出でゝ半輪に及ぶころ、光彩、煥發しつゝ、限り無く月輪の輝きまさること、まさに綻んとする花の莟のごとく、海を離るゝ刹那、新に開く花の如し。天を行く月は、既に開き滿つる花の枝に在るが如きなり。

●將さに開くべき刹那こそ花なれ。既に開く後の花は、餘情なり。月は水を出る時、杜鵑は一聲を期待する時。

（五）

●此頃の、峯の杉の、新緑滋ほへる梢に、夕雲の、殘陽を含めるを眺むるとき、つねに、雲のあなたに、神の國あるかと思ふ。美くしく、崇嚴なる、縹緲としたる、紗よりも淡き雲かな。

●獨り坐して、雲を見るの興、悠々として窮まること無し。秋は寂びし、冬は寒し。新緑の地を、高く飛ぶ雲。此頃の雲。

●雲は默契の友ならずんばあらず。吾、語らず、雲、言はず、相對して盡日、時の移るを忘る。

●欄干に倚るは、星の夜こそ風情多かるべし。風景の、露骨なるは、宜しからず。樓を開き、新綠を望むに、坐敷を一つ隔て坐すべし。興趣は景情全く露らはならざるところに存す。雲を看るも亦た此の如し。

●坐敷を隔てゝ欄干に映ずる雲を望む。雲は千變萬化しつゝ、心の儘に、心のかぎり、大空を行く。

●晴日、獨坐して凝思に耽るとき、往々にして俗客來りて想泉を妨ぐることあり。此時、客を謝するを可とす。必ずしも謝するを得ざるとき、須らく客を以て山中の頑石と視倣して、淡々然として、雲の行くえを觀よ。

●會心の友は、必ずしも互に語り盡くすを要せず。相對して默坐するも、兩心の中、自ら無聲の語あり。ともに閑かに雲を看つつあれば、藹やかにして、暢び〳〵したる感、脈々として兩心の間に通ず。

◎唯だ二つ三つの會心の人の團坐を、雨蓋を以て蓋くとき、その背景に、雲描くのみにて足れり。人の心は雲に寄せて、心の

儘に、大空を行き盡くすらん。

●客樓に獨坐して、雲を見て、靜に思ふ時、唯だ一杯の酒を傾けば、薫風、微醉を吹いて、雜念を一掃し、心目を一新せしむ。坐ながらにして、胸中に青天明月あり。

●行く水を看て暮らすものは川端の柳なり。獨居、須らく行雲を見て暮らすべし。閑に雲を友とすれば、獨居すとも寂しき事無し。雲を觀るの好伴侶は山僧なるべし。

●山僧と、默坐、相對して、閑かに雲を見て居れば、檻外に清溪、鳴つて、吾心、自ら看雲禪の三昧に入る。若し雲起らざる時、葉卷の烟草を吹かして、雲烟の湧くを觀る。

（六）

●雲と水と情、相引く。雲影あれば溪聲なかる可らず。溪聲に雲心を宿し、雲影は溪聲を帶びて浮ぶ。水流の底に雲あり、行雲の中に水聲あり。

●水聲を帶びざるの雲は、花に香無く、雲影を宿さざるの流水は、花に色無きなり。乾坤の詩趣を調節するものは雲ならずんばあらず。

●山、雲を吐き、雲、月を吐く。山は雲に依つて活き、雲は月に依つて光彩を生ず。雲に情緒ある乎、山を繞ふて綢繆し、雲に執著なき乎、山を離れて高天を奔る。雲は悟道の僧に似て、或は卽き、或は離る、卽かず、離れざることもあり、拘泥すること無く、束縛せらるゝこと無く、自由自在なり。

●凡そ自然の風情の中、活用の尤も妙なるものは雲なるべし。禪は自然なり、禪機を示すものは雲なり。現世に大智識無くば、乃ち頭を擧げて雲を見よ。

●本來空は雲に非ずや。千變萬化するものは雲に非ずや。雲は謎なり、天半に揭げたる、明らかなる謎にして、その理、一にして、問と答と刻々に變化して新らしきは、此の謎の興味、盡きざる所以なり。

●雲、能く、山水を明滅し、潤飾し、これを破毀すること無くして變化せしむ。人の構想の妙を極むるものは、雲の趣味に歸著するなるべし。

●人、能く自然を支配すと思へる者は、試みに煙草を吹いて、人能く雲を創造し、呑吐すと思へるものゝ類なるべし。大自然と人力との對照は、雲煙と煙草の煙とくらゐならずんばあらざるべし。

●自然の力と、人間の力とは、噴火口の煙と、灰吹の煙とに由つて象徵せらる。灰吹の煙は、雲に屆かず。人の卓上を覆ふものは灰吹の煙、天を覆ふものは雲。

●若し、人ありて行雲に駕するを得るとも、行雲盡くる時は、

天を行くを得ず。如何なる大畫家、精妙なる繪具ありとも、未だ夕陽の嶺雲を畫き盡くすを得ざるべし。人は自然を支配するを誇るを休めて、能く自然を嘆美するを得るを期せよ、雲の頌を作れ。

(七)

◉杜鵑啼く頃、推移に富める濕帶の空の色、一年にて尤も美しき時なるべし。杜鵑は警告者なり、此の天色の好季節に、人をして仰いで天を看せしむ。

◉此の自然美の警告者は、飛行に由つてすその使命を行ふ。高く、天に居るは彼の天職なり。則ち飛行を離れて杜鵑無きが故に、低く地上に居る杜鵑を畫きし畫家、未だあらず。飛行しつつあらさる杜鵑は杜鵑らしからず。

◉涅槃圖に、杜鵑を畫かず。佛說に、杜鵑無きにはあらず。佛說の中に見たる、多くの鳥獸は、佛の前に集まり蹲まりて悲しみたるも、蹲まりたる杜鵑を想像し易からず、涅槃に、杜鵑來りしならば、高く佛の頭上を飛行せしならずんばあらざるべし。

◉「ねぐら離れし杜鵑、子で子にあらぬ自らを」一句、玉三の名句。人口に膾炙す、隨つて杜鵑は卵を鶯の巢に產み落して、鶯をして孵育せしむといふ說、遍ねく世間に行はる。

◉此の說未だ盡せりと爲さず。杜鵑は、鶯ばかりと限らず、他の小鳥の巢にその卵を產み落して行く。杜鵑の産婦となるべき巢の所有者は廿七八種以上にも上るべしといふ。然るに、日本にては、杜鵑は必らず鶯の巢のみを擇ぶものと思へり。

◉鶯の聲は、のどかに、杜鵑はかなし。鶯は諧を奏し、杜鵑は一聲、帛を裂く。鶯は歌ひ、杜鵑は叫ぶ。此の樂觀、悲觀の代表的歌者が、同じ巢にて養育せらる。

◉家鴨の雛が、水に飛び込むに至つて、牝鶏が始めて驚くは、有理とすべき事情あり。雌鶯が杜鵑の卵と雛との大なるに驚かざるは、豈おかしからずや。

◉蓋し雌鶯は、愛らしき小さき卵と伍して、一の大なる異卵を發見したるとき、自家計らず畸形兒を得たりと思へるなるべし。

◉天邊の月に向つて、不如歸を叫斷し去る杜鵑一聲を、老鶯は、眠まさに濃やかにして、聽かさるべし。聽くとも、其のねぐらに育ちし雛とは想像する能はさるべし。

◉杜鵑の卵も雛も、小鳥より大なるを以て、その一が小さき巢に闖入し來るとき、幾箇の可憐なる卵は、爲に、巢外に押出されざる可らず。

◉杜鵑の卵は、小禽の巢の中に、王者の如くに鎭坐す。ひさしを借りて漸くおもやを奪ふものあり。杜鵑の圖々しき、初より

一擧して、おもやを奪ふものなり。

◉兒を産放しにして養育を爲さゞるものは、溫血動物の中にては唯だ杜鵑あるのみ。必ずしも子の可愛ゆくなきにてはあらざるべし。彼に取つては養育は面倒なれば、他の小禽に托するなるべし。然れども小僧奉公に子供を送ると異なりて、その雛をして、鶯に就て修行せしめん爲にはあらず。鶯は、鵑雛を養育すれども、毫も敎育せず。敎育せらるゝ筈も無し。

◉吾輩想ふに、一世の志士、その家庭を顧みずして、四海を以て家となすものあり。妻臥二病牀一兒叫レ飢、一身直欲レ掃二戎夷一と歌ひし古の梅田雲濱の如きもそれなり。杜鵑は則ち天界の志士ならずんばあらず。彼は天上に飛行して、人間の詩情を啓發するを事として、自己の家庭には意無きものなるべし。

◉彼は、詩の鼓舞者なり、一年好時節に於ける警告者なり。彼は、詩の神の傳令使として、天空を急馳するものにして、彼の飛過する時、新綠、悉く波立ち、人間悉く詩あり。

◉鶯や、その他の小禽が、自分の卵とは、似ても似つかぬ杜鵑の大卵を、それと氣付かずして孵化し、養育するといふ事、如何に彼等の無智なるよ。然れども此の馬鹿々々しき喜劇は、極めて眞面目なる事實なり。天は、此の靈妙なる詩神の傳令使をして、その天職に專らならしむるを得るが爲に、雛育の本能を奪ひて、特に、これを他の小禽に賦課するものなるべし。

◉鶯及び多くの小禽は、杜鵑の爲に、慈哺雛育を爲すの本能を有す。これを以て、鶯の巢は、杜鵑の爲に養育院には非ず、幼稚園なり。幼稚園といふよりも、寧ろ杜鵑の爲に指定せられたる無報酬の保姆といふを妥當とすべし。

（八）

◉海峽の功山寺は杜鵑の舞臺たるべき名刹なり。山に倚り、東、北、南の三面開けて、東に、亂松の間に山門あり、亂松の下に泉聲囁やく。山門より上、本堂の前の廣庭、喬木の隙より東に遠く海峽の蒼波を望む。

◉此寺、金山と號す。桂庵禪師が金山に寄するの詩に徵すれば、四百年前、山門に近く海濤、白沙を拍ち來りしと見ゆ。今、山門、海を去る七八丁にして、その間に、一條の淸溪、だんぐ川、月光を浮べて、濺々として鳴る。

◉寺の後に峯深く、南北に邱壑起伏して、大なる圓線を描きて、爭ふて滴翠を廣庭に擲ち來る。

◉諸院の庭こそ幽雅なれ。山を以て籬落となして、傾斜、椽に近く迫り、松、杉、雜木、茂りたきまゝに茂り、その根を覆ふに、杜鵑花を以てす。

◉此の庭、由來、杜鵑花、滿開して、紅、白の花は松の邱を浮ぶ。

殘光、殘陽の微花たるとき、紅花は隱れ、白花、殘雪のごとし。籬落の頂に、多くの石楠花、小亭をめぐつて開く。石楠花は杜鵑花科の尤も美くしきものなり。

◉邱腹、老松二三本、天半に聳え、竹樹その根を擁するところより、噴泉、流れて巖肩より滴りて小池に注ぐ。筧を以て水を導いて書院に至る。

◉此の書院こそ維新前に、三條公等七卿の遷居の舊跡にして、三條公は、此の角の坐敷に起臥して、此の庭の月を眺め玉ひしならん。景物すべて舊觀を改めず、椽に近き花崗石の手水鉢の頗る大なるが、公等の回天の手を洗ひし水を湛えし。

◉高杉晉作が獨力、義兵を擧げしは、此の山門の前にして、望月の夜半に、偶、吹雪は紛々として、來り、事實その儘、極めて悲壯なる史劇を現出せり。高杉が馬を山門に繫ぎて、七卿に拜別し、別盃を請ひしは、此の書院にてなりし。

◉由來記は詩趣を損ずること少からず。此の寺、則ち史跡の臭味を帶びず。人事、既に雲煙に附し去る。眼前の景情、禪機を養ふに足る。

◉吾輩、海峽に淹留する時、つねに此の寺に遊び、曉月に、殘陽に、吾が想泉を澄ましめ、また時に、書院の椽に腰掛けて、和尚と道元禪師の詩を讀むを好む。

◉道元の詩、古今禪林に一頭地を抜く。幽清、高雋、その人の如し。彼は深山幽谷を好みて永平寺に隱る。その詩の背景は永平寺山中の幽深、奥邃、遠く人間界を離れしところにあり。

◉彼の詩、秋冬に多く、春夏に少く、頃ろの新綠を詠ずるもの稀に、杜鵑の吟無し。彼は杜鵑を好みさうに想はる。然れども山人に山無く、雲中に雲なし。

◉杜鵑一聲は悟道の機たること、香巖（キヨウゲン）の擊竹に比すべし。悟後の人、何ぞ嘗て悟道の機に執著せん。未悟の人、吾輩の如き、則ち杜鵑の一聲に憧憬するなるべし。

◉道元の語に、山林に獨棲して、心、枯木の如くなれば、方に始めて道と相應するを得る。既に道と合すれば、便ち能く山川を借りて言語と爲し、及び風雨を拈して舌頭と爲すといへり。

◉偉なるかな、斯の高僧。彼は道を得て山林に獨棲し、山川を借て言語となし、風雨を拈して舌頭となすものなり。彼、杜鵑に憧憬せず、杜鵑却つて彼に憧憬すらん。

◉彼は自贊して、住山の頑石なりといふ。然れども彼の詩に、黄鳥飛聲亂斷腸といへるあり。これを以て見れば、鶯聲は尙ほ彼の石腸に徹するを得るらし。鶯聲は悟後の人に好かれ、杜鵑は未悟の人を引く乎。

●道元禪師に杜鵑の詩無しと雖、永平寺の幽谷は、まさに杜鵑の舞臺なるべし。彼に杜鵑の詩無くとも、彼の遺文、裂帛の一聲を藏するもの少からず。

●此の山中に、寺僧、呼び做して木魚鳥といふものあり、その啼くや、全く木魚を叩くが如し。彼の詩に木魚鳥をいはず、彼の時、木魚鳥無かりしならん。門前の小僧、未だ習はざるの經文を誦すると同じく、此の深山の鳥、木魚を聞き覺えたるなるべし。

●此の山中、無名の異鳥、「ねてをけ」と叫ぶものあり。三百の雲水僧、修業の課程多くして、睡眠つねに足らず、「ねてをけ」の鳥聲を聽いて、福音の思をなす。

●山口は自ら小京都と稱す。六十峰の蒼翠、近く、三面より市街に肉迫し來る。東、北、兩面の山、一川を挾んで漸く相近づくところ、杜鵑尤も多し。此地の鵑聲、夕陽の頃、「湯は湧いた？」と鳴いて過ぐ。湯は風呂を意味す。

●鵑語は聽く人に依つて意を異にす。或は、「てぺんかけたか」と鳴くともいふ。支那人は古來、不如歸と鳴くと聞く。

●今、吾輩の淹留する海峽には、殆んど杜鵑を聽くこと無しといふ。海に接すとはいへ、此の如き無數の青山、杜鵑、鳴き過ぎること無きにあらざるべきに。

●功山寺より清溪に沿ひて下ること三四町にして、開山堂あり、老居士の隱棲するところなり。十年前の秋、杜鵑、西山より飛び來つて、斜に、開放したる回廊を過ぎて、南山を望んで箭の如くに去らんとし、ガラス障子に當つて、嘴を折つて斃る。

●杜鵑、飛び入るの後、鶯も亦飛び來つて、同じ徑路を經て同じガラス障子に當つて斃る。抑、此の地、杜鵑を聽くこと無しといふに、杜鵑、飛んで開山堂に入ること、頗る珍とするに足る。

●杜鵑、若し啼かば、僅に一聲と雖、人、知らざる事無し。此の地、古來、杜鵑を聽かずといへば、眞に、杜鵑の棲ざるなるべし。則ち飛んで開山堂に入るの杜鵑は、秋來、南渡の途、偶、此地を經由したるものならずんばあらざるべし。

●支那人の所謂鵑語の不如歸は、人をして鄕情を起さしむといへり。然れども支那音の不如歸は、日本人には鄕情を起こしむる筈無し、日本の詩歌、杜鵑を聽いて鄕愁を動かすは、支那文學の影響たるに過ぎず。國語に、杜鵑を稱して、いもせどりといふ如き、夫婦の愛情を嘆美するはあり、これに依つて鄕愁を引けるものはあらず。

●杜鵑、若し意ありて、不如歸を歌ふとせば、其は、彼自らその眞情を歌ふものなるべし。杜鵑は日本を本國とす。支那に在

つて、不如歸を歌ふは、有理の事なるべし。

◉杜鵑は候鳥なり、春晩、日本に歸り、産卵して秋に去る。若し、人間と同じく、生地を以て故鄕とせば、杜鵑は祖先以來、代々、日本を以て故鄕と爲すものなり。

◉鰻は、溪谷にまで溯れども、産卵する時、遠く川を下つて、太平洋の海底深き處に向つて去り、再び還り來る。鰻の本國は日本なりや、太平洋の海底なりや。

◉日本人の古風に、産屋といふものあり、婦人、分娩の爲に、隔離して特に家を爲すをいふ。杜鵑の爲に日本は、その産屋なるやも知れず。然れども、祖先以來、連綿として同じき産屋を守るとせば、その産屋を指して本國と爲すを妨げず。

（十）

◉杜鵑に關する文學は、西洋よりも、東洋には頗る豐富なり。禽鳥の中にても、恐らくは尤も詩的なるものとして東洋人の愛賞したるものは杜鵑なるべし。ウオルヅウオルスに杜鵑の詩あれども、その鳴音の鋭く、叫斷するを歌ひ、これに關して、別に、鄕愁を連想すること無し。

◉支那の詩、杜鵑に關するものは、枚擧するに堪えず。客愁には、此の鳥と哀猿とを、歌ふこと型の如し。ともに其の鳴くの、哀叫するに似たるを以てなるべし。鵑聲は鋭けれども、自ら悲しめるにあらず。故に、鵑聲は、樂天詩人に、詩境を與ふれども、哀愁を引かしめず。

◉萬葉集に、「うぐひすの卵の中に、ほとゝぎすひとり生れて」の句あり。鶯の巣より杜鵑出るが故に、かく歌へるなるべし。

◉古今集の中に、「今更に、山へ歸へるな杜鵑、聲のかぎりはわが宿に啼け」といふ。或は、「杜鵑、我とはなしに卯の花の、うき世の中に鳴き渡るらん、」必ずしも鵑聲を、かなしきものと思はざるなるべし。

◉「むかしへや、今も戀しき杜鵑、ふるさとにしも啼きてきつらん、」杜鵑を聽きて故鄕を思ふものなり。然れども此の歌の中に、不如歸の意味を含めるを認めず。

◉俗謠に、「聲はすれども姿は見せぬ、深山かくれのほとゝぎす」といへるは、「唯だ有明の月ぞ殘れる」の歌と同じく口頭語、更に調低く、意淺し。

◉紛々たる杜鵑詩は概ね支那人の糟粕たるに過ぎず。俳句には、自ら新生面を開くものあり。「朝倉や、木のまろ殿のあけ方に、山ほとゝぎす、名のりてぞ行く」は即興といへども、淡々の意、却つて新らし。若し末の一句を改作せば、更に好かるべし。

◉蕪村が「ほとゝぎす平安城を、すじかひに」は、鵑聲の雄趣

を歌ふ。此句は、「朝倉や」の歌と、去來の句とより著想して、一大なる背景を擇び得たるなり。

●鵑聲の畫趣を歌へるには、先鞭を著けたるは去來なり。その句に、「ほとゝぎす、啼くや告天子と十文字」といふ。杜鵑は地上に平行し、告天子の飛ぶ縱線は、地上に直角を爲す。杜鵑と告天子との飛ぶ線を空中に畫かしめば、正しく十字形に交叉するなるべし。

●吾輩、去來には、唯だ其の新意を出せるを多とす。杜鵑の詩、古來すでに山樹の新葉よりも多し。前人、未だ言はざるところを言へるものより見れば、棄兒行の殘月一聲杜鵑啼も亦た新意たるを失はず。杜鵑を以て棄兒に配したるが新意なり。

●去來も告天子を以て杜鵑に配したるも、要領は、杜鵑の飛行線を現はすにあり。全く他物を配合せず、杜鵑のみを用ゐて、その飛行線を描きたるは、蕪村の手腕なるべし。

●謠曲に、ほとゝぎすの句、散見すれども、これを以て主題とせるもの無し。「鵺」に、ほとゝぎす雲井に名を揚ぐるの句あり。杜鵑を用ゆること淺し。謠曲文學は、未だ多く杜鵑に觸れざるなり。

●月に杜鵑、ほとゝぎす血を啼くといふは、日本に於ては普通智識なり。苟くも風流を口にするもの、王公貴人より、猫も杓子も杜鵑を言はざるは無し。これほど普遍的の題目にして、又たこれほど傑作の少きは無し。日本の詩趣、畫趣に於て、尤も能く知られて、尤も月並なるものは、富士山と杜鵑とならずんばあらざるべし。

●杜鵑啼く頃、侯西園寺、巴里の風雲場裏に在り。故國の風物を回想する時、富士山と杜鵑とを思出すならん。

●此の如き大舞臺の樽俎に乘出したるは、吾國にては、これを最初とす。日清談判は東洋人の間の折衝にして、日露談判といふも、我は戰勝國たり。今の講和の大會議は、從來と全く其の選を異にす。折衝、豈、容易ならんや。啼血の思を爲すもの、ひとり侯西園寺のみならざるべし。

●彼、先年、東京に於て、雨聲會を催うし文人を招く。漱石、辭するに一句を以てす、いはく、「ほとゝぎす、厠なかばに出かねたり」

●政治家と、杜鵑と、厠と、而して「吾輩は猫である」の作者と。對照し來れば、一種の妙味あり。漱石死し、侯西園寺、西天の外に在り、ほとゝぎす獨り新綠の天地を占領しつゝあり。

●漱石に、「銀線の如き强雨やほとゝぎす」の句あり、能く杜鵑の新詩境を見出せるもの、會心の句なり。又た移して以て、講和使を評すべし。杜鵑の季節、重ねて杜鵑に寄せて、侯西園寺

の健康を祈る。

（十一）

●杜鵑の季節、感興、湧く／＼こと泉の如し。背景と、境遇と、頻りに杜鵑を思ふ。吾、杜鵑を思ふとき、杜鵑、來て啼け。計らず一聲を聽き得たるも惡しからず。然れども待つこと久しくして、漸く忘れんとするとき、忽ち一聲を送る、詩境、皆、甦へり來る。

◉山麓の田舍家に泊して、外風呂（ソトフロ）に、夕月を眺め居れば、筧の淸水、音す。森閑としたる新綠の村かな。杜鵑を思ふかな。

◉行き暮れて、俥を驅つて、夏の月に田舍道を馳す。一水、道に沿ひて長く、鈍き水車の音、遠くより聞ゆ。

◉山の中の溫泉宿に滯在して、一夜、殊に、まろねして夏の月を愛す。夜深けて窓を明け放して、かやの中に、風を樂しむもよし。此の時、ほとゝぎす鳴き過ぎばやと思ふ。

◉大座敷の夜の宴に、絲囃子うるはしく、舞女の銀扇に灯の映つりて、庭樹の新綠の匂（ニホヒ）に、一座、華やかに更け行く時、夜半の月、光を增して、一聲、ほとゝぎす鳴き渡らばや。

◉山居すれば、晝も、ほとゝぎすを聽く、書齋の前の岡に竹樹、水の如し。夢心に、夕立すらしと思ひて、寤返れば杜鵑、啼く。

●「水飯や、百の若水常に在る」の一句は、永平寺を詠じたるらし。大月、深山の寺の屋根に懸りて、ほとゝぎす、聲々、暗樹の裏に消え行く。

◉「水飯や、紀文目さめて日の高き」といふは、をもしろき句なれども、事實に於ては、此の事無かるべし。紀文は、一代に豪富を成したるほどの男なれば、一擲千金の豪遊は暫らく措き、人物としては宵寢、朝起の人なりしなるべし。

◉淺野總一郎の所謂高輪御殿といふもの、金閣寺を模造したるらしく見え、その三層閣は後ろの邱上の綠に觸れ、杜鵑、屋瓦を掠めて過ぐべく想はる。全盛、此の如くなれども、その自ら奉ずるは極めて薄しといふ。彼は閑日月ありとも、杜鵑の一聲に憧憬する男にてはあらざるべし。

◉吾輩の聞くところを以てすれば、彼は、その居室にては、自ら木綿の座布團を敷き、木綿の寢具に寢る。高輪御殿に象徵せらるゝ一切の豪華は、すべて客を樂しましむ可きが爲にして、自ら樂しむ所以にあらず。

◉紀文の風流、淺野と同日にあらずとするも、その精神は、恐らくは相讓らざるものあるべし。風流人の朝寢する風流と、紀文の風流とは相同じからず。

◉「悉く帙入の書や、鉢牡丹」何句は、實情、觀るが如し。恐

く帙入の書、整しく積まれて、朱檀の卓、懸物の軸には、青磁の風鎮なるべし。主人の身のまわり、整頓せること、畫くが如く、杜鵑の話などするなるべし。

●杜鵑啼く頃は、鮎光る。鐵線に吊る橋、深谷の瀬川に懸り、崖高く、水急にして、鮎光る。崖上の處女林、綠樹の輪廓、まろくひろがり、ほとゝぎき鳴いて行く。

●城見ゆる侍町の若葉、それもほとゝぎすの舞臺なるべし。夜更けて、灯の漏るゝ圓窓の裡には、夜深けて、棊の音、とき〲パチリと疊む扇の音など聞ゆるもあるべし。一聲の杜鵑に、打つ棊の手を控ゆるは勝棊ならん。

●月の明らかなる野を、麥の浪の、滿潮のように波立ちて寄する夜を、汽車の窓より眺めつゝ、偶、ほとゝぎす一聲、聞きつけたる。

●蓮咲いて月白みゆく湖水の曉、薄雲低く懸り、孤舟繫いで人無し。蘭の杖を弄して水畔を散策しつゝあれば、輕寒、水の如く、吾襟に滿つ。水を隔つるの煙樹、蒼茫として殘夢のごとし。杜鵑を思ふ。

●頃來、吾儕、しば〱ランチに搭じて海峽を周游す。海峽の好風景、天下に稀なり。兩岸の青山、翠色を凝らし、新綠、舟に滴る。門司の古城山、早鞆の瀬戸に斗出し、山形、殊に愛すべし。山上に無線電柱聳ゆ。瀬戸は海峽の尤も狹きところ、頗望すれば、砲臺の山、群がり峙ち、新綠、砲壘を捧ぐること、蒼波の舟を浮ぶるが如し。

●海峽の好風景は、舟中より見るを尤も好しとす。海波の上に新綠の波あり、翠光、層々として青天に續く。若し月明に、杜鵑、砲臺の山を飛び超えなば、ほとゝぎすの新舊趣たらずんばあらず。

●星斗闌干たり、海峽に、潮湧いて大江の流るゝよりも速なり。潮聲汩々として、波頭白し、舟を捨て、步して長府に歸る。沿道の左側の邱樹、帽簷におほひかゝる。回看すれば、門司の街燈、紅一綫、よこさまに海波と綠波との間を縫ふて伸び、海峽を縱に、遠く、恍として龍宮城を望むの思を爲す。若し頭上の崖樹、ほとゝぎす鳴き過ぐるありせば、杜鵑の翼の下より龍宮が見ゆるなり。

(十二)

●團十郎と菊五郎とに、ほとゝぎすを聞かせて、その感想を聞きたかりし。彼等は、聞きしかも知らざれども、吾儕、未だ知らず。

●菊五郎ほど凝つた人は少かりしなるべし。その藝の極めて細かく、器用なりしやに見えて、その實は團十郎の大巧なるが如

くならず。彼の化粧こそもの〳〵しかりけれ。朝、日高くして起き、長時間を厠に費やし、それより顔を洗ふに、先づ姿見に向つて、いろ〳〵の楊子を用ひて、いろ〳〵の歯磨粉を使ひ、悠々として洗ひ畢れば、朝餐は午後三時に近し。彼は、ほとゝぎすの人には非ず。然れども彼がほとゝぎすを聴かんとせば、定めて凝つて聞くなるべし。

◉團十郎は、代赭に速に、自ら水刷毛を使ふに巧なりといへり。唯だ水刷毛を操縦するに妙を得れば、變化自在なり。彼は、杜鵑の趣味に契合するらしく見ゆ。

◉諧趣を以て論ずれば、團十郎は狩野派にして、菊五郎は則ち浮世繪なり。而して此の二派に、ともに杜鵑の諧多し。狩野派は豪宕の筆致、浮世繪は細かに筆を運ぶこと、針を運ぶが如きものあり。

◉一聲の杜鵑は、諧趣よりも、解脱の機に在り。火事を見たるに、延焼の前、隣家の柴垣、熱して未だ火を見ず。一片の焔、吸ふが如くに届くや、化して全面の火となる。火焔の届く刹那、禪に於ける解脱の機なるべし。

◉林檎は、むかしより紛々として墜ちざるは無し。林檎の落つるを見て、引力を悟道せしは、ニートンなり。落つる林檎は、一偶、彼の爲に解脱の機をなせり。

◉禪に所謂解脱の機は、悉く落つる林檎ならざるは無し。ワットが見たる湯氣の壓も亦落つる林檎に同じ。

◉解脱の機に淺、深あり、大器は深く悟り、小器は淺く悟る。此の二大家は、その器の極めて大にして煩悶の大なりしだけに、その悟道も亦極めて大なりしなり。

◉解脱の機は、つねに、到る處に在り。解脱を求むの熱、高まるにあらざれば、解脱の點火を見ず。機を求むるの熱と、機の來ると、卒然として相合ふこと、啐啄の同時なれば、則ち解脱を得べし。

◉子、卵の中より啐つき、母、卵の外より啄つき、機正しく契合すれば、卵破れて雛出づ。子母相知らずんば、啐と啄と時を同じくせず、安んぞ解脱を得べき。

◉古今集に、「ほとゝぎす、人待つ山に啼くなれば、我うちつけに戀まさりけり」の一首あり。杜鵑一聲を以て、戀に於ける啐啄同時の機となすものなり。人戀する山に杜鵑一聲、戀の火、乃ち燃ゆるなり。

◉想泉渾々として流るといへども、波瀾、掀翻するに非れば、奇景を現はし難し、急湍は、則ち波瀾を揚るの機なり。杜鵑一聲は、人の想泉に、急湍の機を與ふ。

◉藝術の進歩は飛躍せざれば能はず。新時期を劃するは躍進な

り。ダンダラ阪を、徐ろに登るが如くなる可らず。躊躇して、歴階して、登らざる可らず。

◉解脱は水が漸く浸潤するやうなる可らず。一刹那に、全面に火の移るようならざる可らず。火の移り、一氣に焔を上るの後、舊物を燒盡して、形質を變化すること、一頓悟の後、別人を現出するが如きなり。

◉禪は梯子禪なる可らず。梯子禪は禪に非ず。雞鳴は雄ならざるに非れども、數次に音力を揚げて一聲を爲す。杜鵑一聲、唯だ裂帛の一音を叫破するに比す可らず。杯禪子なる可らず、須らく杜鵑一聲を聞け。

（十三）

◉杜鵑の詩、吾輩尤も「ほとゝぎす、大竹原を漏る月夜」の一句を愛す。月と花とは、あらはに見る可らず、花は半ば隱れたる花、月は樹陰より望む淸光。

◉昨夜、小溪を溯つて功山寺に行く。靑山の樹色、澄める海の藻の如く、古城址に續く大名町の大逆りに、月、畫の如し。溪畔に草樹、掬して、垂れて、水に觸れて螢火、數點星。

◉溪流は溯りて見るに詩あり。瀨あり。明月の淸溪、鳴つて、月と水と、吾に向つて來る。溪曲る處、老樹、蒼々として月晴く、大なる水車の音。

◉山門の側に、苔、甍の厚く葺ける小門を過ぎて本堂の前に出づ。靑天、唯だ月あり、遠く、近く、新緑歴々として光の海なり。

◉此の時閑かに山僧を伴ひ、月光を看る。山門を含める亂松の間に、月光滿ち、月は高く梢に隱る。月を見ず、淸光を見る。

◉林間の淸光、人をして醉はしむ。回頭すれば、天地、唯だ月。林間に向へば、淸光、軟らかにして情味深し。淸光、看て盡きず、端無く、「ほとゝきす、大竹原を漏る月夜」の一句を思ひ出す。

五月十八日、古竹君と、ランチにて門司より海峽を溯航して、長府町に上陸し、此稿を畢る、海峽の舟中に功山寺の月光を說く。　黑頭巾再記

水郷遊記

田中貢太郎

多摩川の鮎狩

簗あめば、燕、腹をかへし行く
陽、中天、月見草咲く河原かな
鵜河すみし鵜や石の上に羽たたきす

こんな拙い俳句の出來た時だ。それは五六年も前の事である。二時半頃新宿を出た汽車に乘つて、立川驛におりると、開札口にナポレオン帽を著た、鬚をもやもや生やした白い顏を見付けた。かねて案内を頼んであつた府立第二中學校の漢文教師の大林弘一郎君であつた。その大林君とは、私だけが生面で、桂月翁も道別君も、山根君も、皆舊知であつた。

暑い陽の中を、燕が灰色の腹をかへして飛んでゐた。燕は又驛の前の旅館の内庭の内へ入つて、ぢ、ぢ、ぢと啼いた。その内庭の天井には、燕の巣があつた。燕は又床屋の軒に止まつて、首をかしげるやうにしてゐた。私達は大林君に随いて、驛の人家はづれから踏切を越えて、多摩川の方へなだれた勾配の緩い路を行つた。盛りあがつたやうになつた左右の畑には、刈殘された麥があり、枝を切られた桑があり、陸稻があり、南瓜があり、馬鈴薯があつた。南瓜の青黒い葉蔓の間からは、金茶色の花が一面に覗いてゐた。其所には陽炎がきらきらと燃えてゐた。薄赤く見える小さな測量旗が其所此所に立つてゐて、それが幽微に多摩川の方へと靡いてゐた。

疎末な中學校の建物が直ぐ路の右側にあつた。大林君はその背後隣(うしろどなり)に住んでゐた。私達はその家へと連れて行かれた。床には鎧を置いて、栗翁の軸を懸け、庭には花壇をしつらへて、ダリヤや朝顏などの鉢をぎつしりと並べてあつた。瀟灑な風の冷冷する住居であつた。

話してゐると、たててあつた湯が沸いた。一人一人その湯を背ひ、汽車の埃を洗ひ落して、表座敷に顏を並べると、酒が出た。膳には若鮎の料理が添へてあつた。夫人と令孃とが酒の酌

旋をしてくれる。桂月翁の兩手で膝頭をぱたぱたと叩いて、鳥の羽たゝきをするやうな身振がはじまつて來る。

夜になつた。一行はその夜宿となつてゐる日野の玉川亭へ行く事になつた。大林君が紙を出して紀念の筆蹟をと云ひ出した。桂月翁は漢詩を書き、私は俳句を書いた。それが終ると、大林君の手に灯した提灯の火に隨いて出發した。眞黒に暮れた野の中に、提灯の火が一つ赤くほつかりと光つて、綺麗であつた。河縁に近くおりて行くと、提灯の火に水田の水がほのかに見える所があつた。蛙の聲が靜に聞えてゐた。路は上流（かはかみ）の方へと行つた。それに隨いて歩いてゐると、直ぐ日野へ渡る假橋が來た。橋杭はゆらゆらと動いて、空中を歩いて行くやうに思はれた。私の手には大林家から贈られた數本のビール壜があつた。河の向ふの玉川亭に著くと、そのビールは私達のほてつてゐた咽喉を潤した。

蚊の多い寢苦しい夜であつた。朝になつて二階の雨戸を開けると、朝霧が四邊にかゝつて、家の傍の桑畑の桑や楊柳の樹が水の中の藻のやうに見えてゐた。その霧の底からは鷄の聲が起つた。宿の裏手には桔槹があつて、それは早くからぎいぎいと云ふ音をさしてゐた。

宿を出て河の土手へ出ると、長い間の天氣續きで、水が枯れて、河原が廣々と露はれてゐた。上流には鐵橋がかゝつてゐた。私達は直ぐ土手の下を流れてゐる流れで顏を洗つて、河原を散歩した。洲になつた所に、月見草の花が目覺めるやうに一面に黄ろく咲いてゐた。鴨跖草の花もあつた。水に虐げられて杉菜の葉のやうに小さくなつた、木賊が、その中に交つてゐた。私は物珍らしさうにそれを二株三株引いてみた。

『君、必用がないに、物の命を絶つもんぢやないよ。』と、道別君が云つた。私は默つて足許の砂を掘つて、引いてゐた木賊の根を埋めた。

朝飯の後で、又河原を歩いてゐると、普濟寺へ行かうと云ふ者があつた。私達は假橋を渡らずにその上流を徒渉して行つた。そして、河原石を築いた鐘樓の傍を通つて、裏門の方へ行き、其所で許しを受けて、庭へ入つた。多摩川の流れを見おろす丘の上に在る寺で、鐵橋は直ぐ眼の下になつてゐた。前岸には屏風を建てたやうな低い丘陵が連つて、右に寄つた方には、その丘陵を踏臺にして、相模の大山をはじめ、その附近の人が足柄と云ふ三國山、石廊山、高尾山、武甲山などが霧の中に姿を露はしてゐた。その崖に近い、枝のすくない大きな欅を背にして靑石らしい古い古い六面塔があつた。その面には持國天王、增長天王、廣目天王、多聞天王の四天王と、密迹金剛、那羅延

笠塔の七重[illegible]れであつて、その一面に延文六年辛丑七月六日道因刊、施財性了とした文字が見える。その塔は、今、國寶になつてゐる。私は普濟寺へは前後四回ばかり行つてゐるが、—この間大正八年五月十四日——一人で行つた時には、小松の間に交つて咲き殘つた紫色の躑躅の花へ、翅の黑い大きな蝶が一つ來て、その周圍を意味ありさうに飛んでゐた。

方丈に隣つた離屋には、時々某の宮の來られる事があつた。一行の行つた時にも、丁度避暑に來てをられたので、庭に垣をしつらへて、先の方へ人をやらないやうにしてあつた。たけの高いコスモスが花をつけてゐた。離屋の横手の壁に添うて二十ばかりの板碑を立てかけてあつた。裸足になつてその前で落葉を掃いてゐた住持は、何んと思つたのか畫帖を持つて來た。

宿へ歸り着いた所で、雨が降り出したが、直ぐ歇んで陽が出た。二階では宵に歸つてゐた大林君が來て、午睡をして待つてゐた。

十一時頃になつて船が出來た。用意をして土手へ出てみると、下流の方に五六艘の屋形船が出來てゐた。私等はその一艘を占めて乘つた。流れの傍には蓆張の小屋が、出來てゐて、其所から鮎の料理をこしらへて來た。鮎の腸を焼石で焼いた物が來た。

『こんな薄氣味の惡い物が喫へるもんか、』と、道別君が云ふと、

『これを喫はないものは、日本人ぢやない、』と、桂月翁が云ふ、

私は苦い生臭い肴の一箸を口にしてみた。

五六艘の屋形船は、狹い淺い流れを上下しはじめた。船頭は皆水の中にゐた。客も大半は水へもぐつてゐた。

『皆集まれ、日本人か日本人でないか見てやる、』と、桂月翁が云つた。

一所になつて泳いでゐた私達は、苦笑しながら桂月翁の前に立つた。大林君は一人、その容を船の中から見て笑つてゐた。

三時頃になつて待ちかねてゐた鵜飼がはじまつた。二人の男が左右の手に別れて、瀬の上から小さな網を曳いてくだると、鵜飼の男は、網の中程に網を背にして歩きながら、連れてゐる二羽の鵜を使つて、網の目に驚いて逃げやうとする鮎を捕らした。そして、鵜飼は、魚を口にして浮みあがつて來る鵜の咽喉を掴んで、その嘴を腰の籃に入れ、ぐいと一とねじして、それを吐かした。

鵜飼を遣る者は三組ばかりであつた。皆下流へ狩りくだると、鵜飼の男は鵜を兩手に掴へて、河原を上へとあがつて行つ

た。鵜は脊光のする眼をつむつて、ぐつたりとしたやうになつてゐた。五時頃になると、鵜飼が終つた。私達は船からあがつた。大林君はもう歸つてゐなかつた。料理小屋の傍を通つて見ると、二羽の鵜を石の上に休まらしてあつたが、二羽とも大きな袋のやうな咽喉をふくらまして、風の方に向いて羽たたきをしてゐた。

玉川亭では小さな笊に入れた土産の鮎を拵へてあつた。私達はその鮎を手にして、日野から汽車に乗る事にして、暑い焼けつけるやうな夕陽に長い影法師を引いて、日野の町へ入つた。桂月翁の鮎は、私が一所にして持つてゐた。

町の兩側には、小溝があつて、汚い用水が流れてゐたが、その中には藥屑が沈み沈み、繩切が浮いてゐた。桂月翁はふとそれに眼をつけて、洋杖で片つぱしから除けはじめた。

『甚だこれは怪しからん、』などと云つて、その藥屑や繩切を路の上に放ね飛ばした。

附近の人々は、奇矯な老人の容をぢろぢろと見て、呆れたやうな顔をしてゐた。

『よつぽどおかしいよ、』と、道別君は私の耳に囁いてから、鮎の笊を私に持たせ、桂月翁の先へ廻つて、藥屑や繩切を除けて行つた。

山根君は平氣で前へ前へと一人で歩いて行つた。

犬吠岬の一夜

豚を積む名無し小驛の暑さかな
短夜の旅館に黴の匂かな
極東の犬吠岬や雲の峰
雲雀啼く燈臺路の暑さかな
この三日増上慢の暑さかな
吾がせこが鰹釣る間を午睡かな

これも多摩川に鮎狩をした年の事で、期日はそれよりも早かつた。東京銚子間を通ふ小蒸汽に乗つて利根川を上下して、夏の水郷を見る積りで、兩國へ行つて聞くと、その船は夜の七時に出ても翌日の午後三四時でないと著かない、それに天氣模樣で水がすくないから、その時間も覺束ないと云ふので、銚子行に變更して、午後六時發の房總線の汽車へと乗つた。

道別君が一所であつた。それは七月八日、薄曇のした涼しい日で、汽車の中は寒い程であつた。十一時に銚子へ著いたが、銚子の地理に暗い私達は犬吠岬と銚子とを一所にして、直ぐ犬吠岬の旅館に入れるものと、思つて、念の爲めに聞いてみると、犬吠岬へはまだ一里十八町もあつて、其所へは銚子驛から

默に同意を表してゐるが、今夜はもう出ないとの事であつた。それでも、汽車の右側は直ぐ外洋に面してゐたと信じ切つてゐる道別君は、頻りに海に近い旅館をと云つて、提灯を持つて改札口に待つてゐる四五人の客引には眼もやらずに外に出た。

滿月に近い月のある晩であつたが、曇つてゐるので暗かつた。それに時間が遲いので起きてゐる家はすくなかつた。歩いてゐても波の音らしいものは聞えない。二人はすこし心細くなつて來た。五六人の客が入らうとしてゐる汚い旅館の前へ出た。私達はその客の後から入つて行つた。

銚子館と云ふ旅館であつた。下座敷の平生はがらくた物でも置いてあるやうな所へ通された。形式の軸も懸けてないやうな頗る殺風景な室で、それに黴の匂などがして苦しかつたが、懷中が怪しいので、綺麗な室に通されるよりは安心であつた。しかし、それでも私達が一番に眼をやつたのは、壁に貼つた宿泊料のビラであつた。丙が七十錢、乙が八十五錢。そして、比目の洗ひで地酒を飲みながら、思ひ出したやうに耳を傾けて波の音を聞かうとしたのは滑稽であつた。

幅の狹い銚子の町は、犬吠岬の方へ連つた丘陵の裾にあつて、利根川の岸に臨んでゐた。朝になつて旅館を出て歩いてゐると、町の一方の家と家との空合から大利根の滔々とした流れが見えた。河岸には東京行の汽船の會社があつた。私達は又その會社へ行つて時間を問き合はせた。午後四時に出帆する船があると云ふので途中まで、その汽船に乘る事にして、その間にと徒歩で犬吠岬へ行つた。背後が直ぐ河になつた郵便局などのある通りを通つて行くと、飯沼觀音へと行つた。規模は淺草觀音よりは小さいが、結構はそれに劣らないものであつた。その軒下の彫刻の龍は、一種變つた形式の物で、山澤の氣のすこしもない、海蛇を見るやうな感じのする物であつた。

『飛魚から出世したもんですね。』と、私が云ふと、

『君もなかなか云へるよ。』と、道別君が笑ふ。その朝も薄曇がして涼しかつた。銚子の町を離れて、利根の流に別れて行つた。犬吠岬の方へ高まつた丘の上は、多く甘藷畑になつて、村の人々はその畦をあげ、草を抽いて手入れをしてゐた。女の赤い帶がそれに交つて趣を見せてゐる。畑の果の松林の上に、白い燈臺の尖塔が現はれてゐる。左の方には、利根の川口になつた方の海が見える。犬吠岬の右端になつた戸川の近くまで行つてゐる輕便鐵道の線路が足許にある。

線路の踏切を越して、松林の下を拔けると、犬吠岬の最端で、燈臺の白堊が巍然として中空に聳えてゐる。右は[illegible]

まで、見渡す海岸は大小無數の岩礁が磊砢として横はつて、その陸には旅館が連つてゐた。左は一帶の砂濱で、それが川口に臨んだ丘の下まで續いてゐる。川口の冲には一簇の岩礁が散布してゐた。それはあいじケ島と云つて、最近まで寒潮について來たあじが、この上にあがる事があつたと云はれてゐる。

一帶にその海岸の石は、砥石からなつてゐた。彼の海上砥は、その海岸から切り出した物である。燈臺の方へ行つてみると、丘の其所此所へ數十丈の穴を掘つて、砥石を切り出してゐる。穴の傍に立つて覗いてみると、底の方には澄明な清水が溜つてゐる。二三人の女勞働者がそれを桶に汲んでゐる所もあつた。

燈臺の周圍には白堊の壁があつて、城砦のやうに一廓をなしてゐた。其所には二軒の茶店があつた。私達は燈臺の前の崖の上に立つた。傍の石の上には夫婦らしい者が寢ころんで小聲でひそひそと話してゐた。磯の方を見ると、折柄の干潮で潮の落ちた磯には、一面に暗礁が露はれて、それを濁つた波が激しく打つてゐた。三四人の漁師が岩から岩を傳つて、釣を垂れたり、岩の間を探して貝らしい物を拾つてゐた。私は道別君を促して崖をおり、つるつるする岩を傳つて漁師の傍へ行つてみた。いいせいごを三四尾も釣つて、それを岩の水溜に放してゐるものもあつた。一人の漁師は蟹を捕つてゐた。

晝飯に近い時間となつてゐた。私達は崖をあがつて旅館を尋ねて行つたが、その序に燈臺の傍の茶店へ寄つて繪葉書を買ひ、その内の五六枚へ俳句を書いて、その茶店にかけてあるポストへ入れた。そして、松林の傍まで行つて、旅館のある方へと坂をおりたが、まだ季節が早いのか、旅館の多くは門を鎖してひつそりとしてゐた。私達は潮の滿ちかけた磯を傳つて、海栗を探し探しして歩いてゐる内に、長崎の鼻へ行つてしまつた。其所は屋根に石を置いた不潔な漁師の家が、ごたごたと並んでゐて、足を踏み入れると魚の腸の腐つた惡臭が四邊に漂つて、狹い路の上には、蠅が黒くなつて集まつてゐる所があつた。

私達は引返して、取つ付の小さな旅館へ行つた。自轉車が一臺入口に立てかけてあつて、その乘手らしい店員風の若い男が二人、庭に向いた方の室でビールを飲んでゐるのに、子供を負ぶつたお神さんらしい姿の好い女が、窓の先に立つて相手になつてゐた。私達の通されたのは、その室から海の方へ鍵の手に折れ曲つた所で、雄大な犬吠岬の景致が左斜に眺められる室であつた。

『利根川のぼりも好いが、此所で一泊しても好いな。』と、私が云ふと、

「それもよからう、」と、道別君が同意する。いよいよ一泊する事にして、飯が濟むと、燈臺の丘を越えて川口の方へと散歩した。くもが薄くなつて、薄陽が射して來た。磯に盛りあがつた砂山には一面に濱防風が實になつてゐた。川裾の小さな丘の下に、磯の窪みと岩とを利用してこしらへた生簀があつた。その所を曲ると黒生と云ふ掌ぐらゐの入江があつて、漁師の家がぽつぽつあつた。私達はその磯で海水に浸つた。入江の向ふの出つ鼻の上には、蜘蛛の巣のやうに線を垂れた無線電信の電柱が立つてゐた。

かへりは、燈臺の丘から松林の中へ入つて、自分達の泊つてゐる旅館の背後まで行つて、其所から下におりた。廻遊鐵道の停車場は、直ぐその背後の甘藷畑の中にあつて、著いたばかりの客が二三人おりて來た。

五時頃湯に入つて、杯を持ちながら日の暮れるのを待つてゐた。空は雲切れがして眩しい夕陽が射してゐた。道別君は和歌を考へ、私は俳句を考へてゐた。

『好い句があるが、一錢五厘奮發しようか、』と、私が云ふと、

『どんな句だね、』と、道別君が聞く。

『この三日増上慢の暑さかな……、どうです、好いでせう、』

『増上慢は好いな、』

陽が落ちて波の音が高くなつた。沖の方を見る、海は蒼茫と暮れて物凄くなつてゐた。と、何時の間に點火したのか、電光のやうな廻轉光がぴかりと眼を刺した。月は雲にかくれてゐた。一時間ばかりすると、長崎の鼻に近い海の上にある雲の襞が赤くなつたが、やがて光のない橙色をした大きな月が出た。それでも海の上は暗かつた。

酒が濟むと海岸に出た。潮は滿ち溢れて磯を狹くしてゐた。月には半圓形の雨傘がかゝつて、海の上は依然として暗かつた。廻轉光が眼を刺した。二人は酒に熱つてゐる體を冷たい砂の上に横たへてゐて、それから室へあがつたが、戸を締めて寢るのが、惜しいので、蚊帳を釣らさずに室の障子を開けて横になつてゐた。そして、一寸睡つて眼を覺まして見ると、月の面に雲がかゝつて、その下から一條の金茶色の光が射して、それが海に映つてきらきらと輝ひてゐた。

朝は早く起きて日出を見ると云ふ事にしてゐたが、寢過してしまつた。雨戸を開けて裸足で戸外へ出てみると、もう陽は海を離れて高くのぼつてゐた。それでも海の眺めは、眼新らしく感じられた。私達は踏みこたへのない砂を踏んで歩いた。

朝の八時三十七分の汽車に乗る事になつてゐた。朝飯をすまして時計を見ると、まだ二時間ばかり間があつた。二人は時間

の間際まで其所にゐる事にした。私は雜記帳を出して、宵からの句を記入してゐたが、便所に行きたくなつたので、廊下に出た。壁一つ隔てた隣室の障子が一枚開いてゐるので、ふと見ると、色の蒼い男が仰向けに寢たなりに、痩せた片手で藥罎を持つてそれを口のふちにやつてゐた。私は肺病患者の事を思ひ出して氣味が惡かつた。その次の室の口へ行つてみると、丁度女中が藥鑵を持つて入つて行く所であつた。次の室の事があるので、其所へもそつと眼をやつてみた。中には痩せて色の惡い女が寢て、その枕頭の方には老婆が坐つて、牛乳の罎から牛乳を移してゐた。これもどうも怪しい病人だと思つた。私は急いで用を足して室へ歸ると、道別君の耳へ口を寄せた。

「大變だ、肺病患者が二人ゐる、」

『なに、』と、道別君も驚いた。

私達はそこそこに其所を出て、停車場の方へと坂をあがつたが、林の中に來ると、足を止めて大きな呼吸を續けさまにした。それは旅館で吸はされた黴菌を吐き出す爲めであつた。二人は又帶を解いて著物を振つた。そして、二人は顏を見合はして笑つた。

停車場には二三人の客が待つてゐた。まだ一時間も間があるので、外川の方へ行つてみた。長崎の鼻から折れ曲つた所で、家居の容も長崎と同じかつた。その海岸には防波堤があつた。昨日から川漁してゐた漁船 波を切つてかへつて來る所であつた。磯にはそれ等の女房や子供が集まつて來て、その船を引きあげてゐた。犬若崎はその右の方にあつた。犬若崎の海中には仙ケ岩と云ふ小山のやうな岩がある。たいしや色をした屛風が鼻は、遙にその先の方に見えてゐた。

館林の躑躅園

土黑き町中の午（ひる）、桐の花
罎に詰めて蓴菜（ぬなは）賣るなり驛の前
沼、五月、薄曇りして鴉の鳴く

小さな停車場の前通りには、正宗の罎を並べるやうにして、蓴菜を詰めた二合罎を並べてゐる店が多かつた。其所は、黑い、どぶ泥を乾かしたやうな土の眼につく町で、人家の間には桐の花が汚れて咲いてゐた。私達はその館林の町を通つて、躑躅園のある方へと行つた。

驛の前通りの路を行き詰めて右に曲つた所で、『花山行き辨天の渡これより一町』と書いた木札を小路の入口で見付けた。躑躅園になつてゐる花山へは半里ばかりもある事を知てゐる私達は、一寸不審してみたが、一町の文字に引き付けられて、そ

方へ出て行つた。

盆のやうに刳れた、氣味惡い田圃の端が見えて、それが右の方に長く擴がりを持つてゐた。その田圃の中に五六本の木立のある小祠があつて、その傍から通じた狹い溝に渡舟がゐた。その溝は城沼に通じたものであつた。祠の裏手に一軒の農家があつて、その前には花山行の客が溢れてゐた。渡舟はその客を一杯に積み込んで、順々に溝を下つて行つた。待つてゐる客が多い上に、遣つて行くやうにのろのろと行く舟を見ては、乘る氣にはなれなかつた。

私達は田圃を向ふに越して、廣い道路に出て歩いた。村は新緑に埋もれてゐた。麥の穗は麥の穗に續いてゐた。鯉幟を建ててゐる所もあつた。輝かしい五月の陽が容にあつた。私達は善長寺の渡を聞いて歩いた。

渡場の目標の石が見えた。一行はその方へ折れて行つた。蛞蝓のやうな形をした城沼の水が見えた。躑躅園は左寄の對岸にあつた。緑葉におほはれた丘に、一所二所赤い色があつて、澤山の人が見えてゐた。天幕張の掛茶店も見えてゐた。渡舟は眼の下を通つて、對岸に往來してゐた。私達は路からおりて渡頭に行つた。客の供をして來た五六臺の人力車が茶店の横に置いてあつた。舟が歸つて來ると、客は爭ふて乘つた。私達一行は都合好く一つ舟に乘る事が出來た。沼の水は鈍い鐵色をしてゐた。沼の縁には蘆の若葉が風に動いてゐた。舟に乘つた方の左寄の蘆の中で、グウルルグウと鳴く聲がした。その聲は遠くの方にもしてゐた。それは鴫であつた。白い燕のやうな鳥が、飛んで來て、沼の中の杭の上にとまつた。

『船頭さん、あれはなんだね、』と何人かが聞くと、

『あれは、白燕でさア、』と、船頭が云つた。

躑躅は二三日前の暴風雨で散つて、僅にしか殘つてゐなかつた。築山のすこし大きな位の丘には、躑躅の碑があつた。私達は躑躅山の角にある料理へ入つて遲い晝飯をとらうとしたが、客が一杯立て込んでゐて二階へは直ぐあがれなかつた。仕方なく物置のやうな下座敷へ入つて待つてゐたが、とても客がすきさうにないので、其所で食事をする事にして、飯と料理を注文した。

一行には俳句を作る人が多かつた。飯の出來るまでにと句を考へる者もあつた。乙字君が東京から持つて來た正宗の壜の口が開けられた。出來て來た料理の蒲燒は泥臭い鯰であつた。茶は薄い氣味惡いものであつた。

『これは茶の葉ぢやないだらう、一錢くらゐ買つて來ないか、』

と、店男に云ふ者があつた。

腹上死と云ふ、奇怪な話をはじめる者があつた。酒を廢めてゐる桂月翁は花臭い顔で淋しさうに飯を喫つてゐた。綾郎君は腸が惡ひ惡いと云ひながら、始終何か喫つてゐた。綺麗に著飾つた若い女の玄關口を出入するのが見透かされた。

飯の後で又一寸躑躅の中を歩いた。沼に臨んだ方の丘に立つて遠に眼をやると右の方に當つて、日光の男體山、大眞子などが見え、左に寄つて赤城や黑髪山などが見えた。雲に暈かされて頂に白雪のある、つくねたやうな山塊は大白根であらう。躑躅の中では、お酌らしい少女が二三人で鬼ごつこをしてゐた。

茂林寺へ廻つて歸る事になつた。私達は躑躅園を後にして、東に向つて歩いた。麥畑があり、桑畑があり、竹藪に圍まれた人家があり、森があつた。桐の木には紫色の花があつた。

茂林寺は森の中にある寺であつた。山門を入つた所には槇の大木が枯れて、それに纏ひ付いた藤が花をつけてゐた。寶物の拜觀料を拂つて本堂の右手からあがると、案内の男が來て案内した。はじめの一室には書畫の幅があつた。文福茶釜は次の狹い室にあつた。

『これが紫金堂文福茶釜であります。量が一斗二升、重さが、三貫方徑八寸まはりが四尺あります。』と、茶釜の傍にゐた若い僧が、文福茶釜の說明をはじめた。

『文福茶釜に毛が生へた。』と、私達と一所に見てゐた商人らしい男が、小唄を謡ふやうに云つた。

私達は一寸本堂の横で休んで、茶を買つて飲んだが、その茶も薄かつた。

かへりは汽車の線路に沿うて歩いて、町に入ると、停車場の見付の蕎麥屋へ入つて、名物の花山うどんを喫つた。

『田山花袋の小説に矢張りこの味があるね。』と、何人かが云つた。

其所で飲んだ茶も薄かつた。

『好い茶を早く飲みたい』と川俣君が云つた。

停車場へ行つた時には、もう日が暮れてゐた。多くの人の手には薄茶の壜があつた。私の手には花山羊羹の包みがあつた。

支那劇を觀る記

谷崎潤一郎

瀧田君から梅蘭芳の事に就いて何か書いてくれと云ふ依賴を受けたが、私は去年二た月ばかりちつと支那を覗いて來たばかりで、支那通でもなし支那芝居のことなどは無論分らない。それに本誌の前號には權威のある人たちの面白い記事が掲載された後であるから、今更私の如き門外漢が彼れ此れと半可通を並べるのも嗚呼(をこ)がましい次第である。で、茲では單に一箇の白人(しろうと)の考として、梅蘭芳に限らず一般の支那劇に關する私の感想なり見物記なりを述べて見ようかと思ふ。

支那へ行つたら出來るだけ多くの劇場を廻つて見たいとは、最初からの私の希望であつた。支那の演劇、支那の俳優、——刺戟の強い色彩と甲高い音樂とから成り立つて居るらしい彼の國の舞臺の光景は、見ない前から私の好奇心を唆り、其處へ行けば自分が常々憧れて居る夢のやうな美しさと、怪しい異國情調との織り交つた物に接する事が出來るだらうと想像して居た。北京に梅蘭芳と云ふ名優の居ることも夙に聞いて居た。そんな譯で朝鮮から始めて支那の領土に這入つて、先づ奉天の木下杢太郎氏の家に落ち着くと、早速芝居を案内してくれるやうに同氏に賴んだのであつた。

「奉天なんぞは支那の場末だから此んな所の芝居を見たつて仕様がないさ。見るなら北京へ行つて梅蘭芳を見給へ。あれを見なければ駄目さ。」

かう云つて杢太郎氏は取り合はなかつたが、それでも平康裡(ピンカンリ)の中華茶園とか云ふ劇場へ案内して貰つた。ついでながら支那では何々茶園と稱する芝居小屋が多い。茶園と云ふからお茶を飲ませる家かと思ふと大概は劇場なのである。南方はどうであつたかハツキリと記憶しないが、奉天を始め天津、北京などはさうであつた。兎に角この奉天の芝居が私の最初の經驗なのである。觀客席の模樣は日本の活動寫眞小屋のお粗末な物だと思へば間違ひはない。等級は樓上と樓下と二つに別れて居たきりであつたと思ふ。樓下の方は地面へ直(ぢか)にベンチが並べてあるだけであつた。私が這入つて行つたとき、舞臺では小柄な若い女優が、きらきらと銀色に光る毒々しい冠を戴いて、眞紅な地に

金色の刺繍を一面に施した服を着けて、キヤア、キヤアと猫の啼くやうな聲を張りながら臺辭を云つて居た、何だか斯う赤く燒でた蝦のやうな感じがした。その女優だけはそんなに嫌ではなかつたけれど、後から出て來る役者たちはみんな氣味の惡い度強い隈取りをして居るので、惡夢に魘されるやうな不愉快を覺えた。おまけに立ち廻りとなると音樂がヤケに騷々しい。銅鑼のやうな物を無闇にヂヤランヂヤランと鳴らし續けるので、耳が聾になつてしまふ。活版刷の番附は貰つたけれども一と晩のうちにいろ〳〵の芝居をやるのだから、今演じつゝあるのが孰の藝題で孰の俳優なのか見當が附かない。筋は勿論まるで分らない。私の抱いて居た幻覺は此れで滅茶々々に壞されてしまつた。

北京へ行つたらこんな筈はあるまいと其れを賴みにしながら、天津でも到る處の芝居小屋を覗いて見た。其處は可なり芝居が盛んな土地だと見えて、日本ならば淺草公園とか道頓堀とか云ふやうな町を步いて居ると、芝居の廣告とか劇評とか云ふやうな記事ばかりを載せた新聞を、賣子が賣つて步いて居る。（此の種類の新聞は、少し大きい都會には何處でも發行されて居るやうであつた。）それを一枚買つて、廣告欄に出て居る劇場を一つ一つ見物して步いたがやつぱり一向感心する氣にはなれなかつた。第一小屋が不潔なのには少からず辟易した。甚しいのになると、立ち廻りの際にトツタリがとんぼ返りを打つたりすると舞臺からぱつと埃が舞ひ上つて其の邊が濛々となるのである。それから美人だの色男だのに扮して居る役者までが、舞臺へペツペツと痰を吐いたり手鼻をかんだりする。（藝者でさへお客の座敷で手鼻をかむ奴が居る。）眼のさめるやうなケバケバしい衣裳を着て居て其れをやるのだから全く不思議である。しかしお客は平氣なもので、音樂に聞き惚れつゝ首や手足で拍子を取りながら、佳境に來ると熱狂して掛け聲をかけたり喝采したりする。私はつく〴〵、支那人は音樂を好む國民である事を知つた。

北京へ着いた明くる日、神田の小川町のやうに書店が列んで居る琉璃廠へ行つて、支那現代の戲曲を集めてある戲考と云ふ書物をあるだけ買つて來た。それから劇通を以て有名な辻さんや、同文書院出身の村田孜郎君や、平田泰吉君などに說明を聞いたり案内をして貰つたりして居るうちに、だんだん分るやうになつて來た。北京に前後十日ばかり滯在して居た間、私は毎日一つや二つの劇場を覗かない事はなかつた。新聞の廣告に依つて其の日の芝居の藝題を知り、それから戲考を開いて其の戲曲の筋を呑み込み、その上に劇通の講釋を聞きつゝ見物する

のだから、依然として悟りを開いたやうに分り出して來たのである。尤も其れには奉天や天津で下等な芝居を澤山見て居た間に、知らず識らずあの調子の高い音樂が耳に泥んだと云ふ事もあつたのだらう。さうして筋さへ吞み込んでしまへば、支那音樂のメロディーには西洋の其れと違つて、日本人にも共通な感情の流露があるのだから、悲しい所は悲しく感ぜられ、勇ましい所は勇ましく感ぜられるのである。李陵碑などゝ云ふ戯曲の悲壯な味はひは、私にも可なりよく分つたやうな氣がした。

辻さんの話に依ると、目下の梅蘭芳は二三年前ほどの人氣はない。容貌も頬がこけたので以前ほど美しくはないし、聲もいくらか惡くなつたのださうな。梅と同型の女形で、彼の後輩である尙小雲の方が前途有望で、將來梅と匹敵すべき名優になるだらうと云ふ。私は尙小雲の孝義節を見たが、どうも梅蘭芳ほどは感心しなかつた。梅蘭芳は聲ばかりでなく、表情があり動作があるのだから、我々の如き白人には理解され易い點もあるのだらう。此の意味に於いて、梅蘭芳と共に一對の夫婦を演ずる立役の王鳳卿が、今度日本へ來なかつたことはいかにも殘念である。やゝ幸四郎に似た趣があつて、藝から云つても顔から云つてもあんなだらだらした缺點のない、カツチリと引き締まつた、何となく支那の古英雄の如き颯爽とした風貌と態度と肉聲とを持つた王鳳卿が來たらば、或は私の好きになつたかも知れない。

帝劇で私が見たのは御碑亭であつたが、王鳳卿が一枚缺けて居た爲めに、北京の廣德樓で見た時よりも劣つて居た事は爭はれない。それから柳生春に扮した俳優も、北京でやつた役者の方が上手であつたやうに思ふ。王有道と柳生春とが、試驗官の前で話をする時の措辭の云ひ渡しや抑揚が、馬鹿に好かつたいだけれど、此の間はそれほどでもなかつた。御碑亭の雨宿りの場の梅蘭芳の出來榮えも北京の時の方が優れて居た。廣德樓の舞臺では、御碑亭の側に楊柳の立ち木を据ゑて、それがいかにも雨の情景を添へて居たのに、どう云ふ譯か帝劇では柳を置かなかつた。孟月華は御碑亭の上手の柱のほとりにうづくまり、柳生春は下手の柳の蔭にしよんぼりと佇みつゝ、互ひに更け行く鐘の音を數へて歌をうたふのである。あの柳は是非ともあつた方がいゝ。王有道が妻を離緣する際の表情も、王鳳卿が演ずるとあんなに騷々しくはなく、もつと男性的で沈痛を極めて居た。

南支那へ來て蘇州杭州上海邊に流行して居る新劇をも見たが、此れは頗る奇拔なのがあつて、腸を抉り出したり皮膚を剥ぎ取つたりするやうな無邪氣で殘酷な芝居もあつた　女優では

杭州の西湖鳳舞臺で見た張文艶の妖艶さを未だに忘れる事が出來ない。それから上海の大世界で見た人形芝居は非常に綺麗な美しいものであつた。支那の舊劇は動作よりも音樂が主で、加ふるに衣裝があの通り絢爛であるから、人形芝居には實に適して居るのである。

發音遊戲

——未定稿——

菅原教造

一

「發音遊戲」と云ふのは私が新しく付けた名で、日本では古くから早口、早言として知られて居る事柄である、其名の示す通り恐しく速く饒舌る一種の遊びである。しかし早口、早言と云ふ名には、速くしやべると云ふ事しか表はれてゐない、發音し難い卽ち口の廻り難い文句を主としてしやべると云ふ意味が充分に示されて居ないから、それで發音遊戲と改めて見た。今私が之に就いて御話をする趣意は、大體は國語の發音敎育の問題に少し文化史的に觸れて見たいと云ふ事が動機になつて居る。

二

子供が小學校に行くと、國語讀本を讀む事を敎はつたり、修身の御話を聽聞したり、お伽話を傾聽したりする。孰れも模範的のコチ〳〵の先生が小學校の敎師として之れを敎へて居る。勿論此先生は其のやうな敎科を敎へるだけの素養も見識も方法も充分に貯へて居るが、しかしどうかすると、よく口のまはらない先生、徹頭徹尾標準語の發音の出來ない先生、師範學校で應用聲音學を習はなかつたから、そのやうな事はどうでも好いと言つた風に、この問題に何等の刺戟を感じない先生が可なり多い。そしてこれが就學前には正しかつた子供の發音をどし〳〵と改惡する。

所が一方で社會や家庭では、學校へ子供をやつておきさへすれば、自分達は兒童敎育の責任解除をされた氣になつて、學校

が萬事をやつてくれる、國家が總ての問題に責任があるからと云ふ風で、急にだつくりと氣を許して、いろ／＼な事——社會や家庭のみが可能な卽ち彼等が片側的な學校教育を補つて行かなければならない事——についても子供の面倒を見ないようになる。このやうに、萬事を學校に任せ切りにしておいて、コチ／＼のゴリ／＼の先生に發音教育までも委ね切りにして了ふ。

しかし大體に於て學校の先生は云はゞ教授法の權化である。教授細目の編成、教案の作製のお化けである。教科教材の扱ひは身體細胞の一粒づゝの隅々にまで行き渡つて居るけれども、之れは寄木細工流の師範教育の沈澱したもので、先生方は不幸にして教育の文化史的背景と云ふ大きい勢とか力とか流れと云ふやうなものの教育を受けなかつた。さう云ふ譯で、彼等は發音される言葉の教育、其文化史的意義などゝ云ふ問題は餘り考へて見なかつたらしい。

三

今東京あたりで饒舌つて居る言葉は、大體に於て壞れた江戸言葉の殘り滓に地方語を加味したものである。それ故勿論嚴密な意味で標準語などゝ云ふやうなものの樹立される事は覺束ないが、兎も角も江戸語の殘り滓の好い所と中央に勢力を得た地方語の健全な所を調和して、口語法を參酌して饒舌れば、勿論絕えず變化はして行くが、曲りなりにも、現代の標準的な東京語と云ふものが出來上らう。若し語勢や調子やアクセントにまでも問題が立入つて來れば、吾々には徹頭徹尾地方色と云ふものがこびり付いて却々離れ難いから、これは學んだとても得られると云ふやうに容易いものでない。それ故この發音の方面から標準語を詮議して行けば、とても嚴密には問題の成立はむつかしからう。そこで是もある程度で妥協をしなければならない事になるけれども、兎も角も東北流のズー／＼や西南流のツッケン／＼はどう考へても締め出しを喰はせなければならない代物である。

四

江戸と云ふと落付いた懷しみの文化の匂ひがあり、明治大正と云ふと生な動亂の文化の味がある。一には平均を得た調和の取れた纏つた取り澄した形態が充分に整つて居り、他には曲つたいびつな不揃ひな軟かい地盤に混亂した動搖が絕えず漲つて居る。其代り甲は出來上つて了つた飽滿した沈澱した引き潮の文化で、乙は生成の中途にある飢渇を感ずる醱酵的な揚げ潮の文化である。從つて前者は萬事がきちんときまり切ツて型にはまつて結局物事が表面的で遊戯的で輕く行き、後者は萬事が亂雜で桁外れで其代り內面的な生眞面目な重くろしろい所がある。

地口や洒落や語呂合せや聲色や端唄や音曲と云ふ風に幇間流の藝が餘り旨くなり過ぎて江戸兒が天下を失つたのは、士農工商と法律的に地位が定まつて動きの取れない警察國家の時代の社會の當然の行き路だらうけれども、薩長や土肥の田舎武士共が、さう云ふ幇間藝の旨い江戸兒から見たら殆ど半動物的な野性生活の裡に醇血させた彼等の鬪爭と狡猾と破壞の本能は、明治の立憲國家の時代の、法律でなく能力に基いて分れた階級生活の社會を果してどれだけ念入りに造り直して呉れたゞらう。さう云ふ野人が官金即私金でにわかに唖の洋行をして來て急に拵へ上げたガタ／＼普請が、所謂明治の文化の設計圖だと云ふ云ふ事丈けは、誰が見ても確であらう。

五

前置の長いのは感心しないから、これから愈々發音遊戲に入つて、先づ言葉の組織を瞥見しよう。德川時代の言葉と云つても、元祿頃まではやはり京都言葉が勢力を占めて居たらしい。大體に於て、江戸語には四の要素があると見る事が出來る。第一は三河言葉でこれは江戸の行政官御直參の連中の出生地の土語で最も重大な要素である。第二は關東の土語で德川一族が江戸に入る以前にこの地方一圓に行はれたものである。第三は京都語でこれは大奥を支配して相當の勢力が有つた。第四は大阪語で商人の間に根を張つた。それから八代將軍が江戸に入つた時に、以上の外に紀州語がやはり幾分でも一要素を爲した事も考へに入れて置かなければなるまい。この異質的な寄木細工流な多樣體が、混和圓融して、一つの纏つた江戸語を作り上げるには、かなりの年月を要した事は云ふまでもない。それ故江戸語の仕上げは、どうしても寶暦以後で、明和・安永・天明あたりがかれこれ其の成立期と見る事が出來よう。この點に於て黃表紙などの出現が極めて興味の多い問題と成つて來る。

私は三四年來發音遊戲の蒐集が心がけたが、大正に成つてからのこの試みは極めて不充分であるのみならず、集つたものを的に江戸・上方・田舎と三分して、更に其生れた時代を付けると代目地理云ふ事は、非常に困難な仕事である。後に九に掲げたる二市川團十郎自作の外郎賣りの臺詞には、この發音遊戲がかなり澤山集められてあるが、これは享保三年の狂言だから、この時代にこれ丈けのものが出來て居たと云ふ事がかなりの手掛りになる。又嬉戲笑覽の飮食の部に早言と云ふ項があつて、芝全交の戲草子に鼻下長物語と云ふ早言の本があると記してあるが、私はまだ調べて見ない。私は此の機會を以て、かう云ふ問題に興味を有せられる方々の御助力を得て高教を給はりたいと思ふ。

私は此の發音遊戯を斯のやうに分けて見た。孰れも速く言つて三度や五度は繰り返さなければならないが、しかし發音の性質の上から五つ位に分類されるらしい。

第一は同じ音が度々反覆される爲めに、一定の愉快な韻が出来上るもので、狂獣の形に成つて居るものが少なくない。そしてこれは必ずしも發音し難いとは限らない、中には韻が踏んである爲めに、却つて舌の廻りの良いものもある。この第一類のものは數が却々多い。

（一）りん〳〵とりんと咲いたる山櫻
　　嵐が吹けば花がちりゝん

第二は笑話に出て來る長い人名で、これを人に分らせるやうに繰り返して言つて居る間に、大變に時間がかゝると云ふ趣向のものである。

例へば

（二）丁切ノ丁切ノチョウ〳〵ラノ
　　テンモコモ　コゾリソッポウイン

第三は反覆して速く言つて居るうちに、いつの間にか別の意味の句に變化して了ふものである。例へば

（三）棚に升棚に升
（四）扇に玉子

第四は短かい一句が悉く別々の音韻で成立して居るものでこれを速く完全に發音する爲めに、急いでそれ〳〵の音韻を出すやうに調聲の位置を變化しなければならない。例へば

（五）國技舘
kokugikwan——即ち o u i a を速く繰返す爲めには口に非常に忙しい大變化を與へなければならない。これが却々の難事である。

第五は五六度反覆される一句の中に類似した又はまぎれ易い調聲位置の音が續いて表はれる爲めに、一方が他方を同化して了ふもので、これが發音遊戯の中で最も多い。例へば

（六）傳染病豫防法
（七）畦泥鰌田泥鰌
（八）生米、生杉葉

（六）は bo と byo とが互を同化し、（七）は do が jo を同化し、（八）は namagome が nagamogo に成つたりして、m と g との置換が行はれる。其他「富貴主義」と云ふ句なども玆に入る。

七

私は此の機を以て、かう云ふ問題の歴史を大急ぎて述べて見よう。

早口の最も古い例は天台宗の早懺法（はやせんぼう）であらう。坊さんがお經

を讀むのが追々と慣れて上手に成つて來れば、スラ〱と速く他人の眞似の出來ないやうに讀み上げる事が面白く成つて來る。今にしても寄せ算の讀み手、かるた取りの讀み手、子供の素讀などがやはりこの類で、其外にも例を求めたらいくらもあらう。

次が足利時代あたりの早歌で、當時の流行りの物事を早口で歌ひ續ける。例は歌謠考などに求めるといくらもある。

其次が主として德川時代に發達した早口(早言)で、例へば物賣りの早口とか、あほだら經とか、類はいろ〱あろる。これは孰れも聽く人によく分るやうにして、しかも速く言ひ續けて人に感心させなければならない。落語に出る「がまの脂の賣立」はよい例である。この風は今でも露店商人の口先に殘つて居る。

物賣りやあほだら經はまだ專門の商賣人の藝であるが、これが全く遊戯的に、或は酒席の幇間の藝として、或は家庭の遊戯として出來上つたものは、表面的な所謂引き潮の文化の江戸兒の輕口で、或は洒落、地口、語呂合せとなり、尻取りとなり「ちんわんねこにやあちゆ」となり、或は私の言ふ發音遊戯と成つた。

尻取りもこの節は殆ど全體を暗唱して居る人はどれ程もないやうだから、山中共古翁が集古會志に揭げられた全文を拜借しよう。

ぼたんにからじゝたけにとら　虎をふまへて和藤內　內藤樣はさがり藤　ふじみ西行うしろむき　むきみはまぐりばかはしら　柱は二階と椽の下　したや上野の山かつら　桂文治ははなしかで　でんでん太皷に笙の笛　ゑんまは盆とお正月　かつよりさんは武田びし　菱餅三月雛まつり　まつりまんどうだしやたい　たいにかつをにたこまぐろ　ろんどん異國の大みなと　とさんするのはおふじさん　三遍廻つて煙草にしよ　しようじきせうだゆいせのこと　ことにさみせんふえたいこ　たいかうさまはかんぱくじや　白蛇の出るのは柳島　しまの財布に五十兩　五郎十郎曾我兄弟　鏡臺針箱煙草盆　坊やはいゝこだねんねしな　品川女郎衆は十匁　十匁の鐵砲二つ玉　玉屋は花火の大元祖　さうしよのでるのはばせうあん　あんかけどうふによたかそばそうばのおかねがどんちやん〱　ちやんやおつかあ四文おくれ　おくれがすきたらお正月　お正月のたからぶね　たから船には七福神　じんごうこうごうたけのうち　うちだはけんびしなゝつむめ　むめまつさくらは菅原で、むらでたばねたなげしまだ　しまだかなやは大井川　かはい

はりやこそ要用からかよふ　かよふふかくさ百夜のなさけ
さけとるかなで六百出しやまゝよ　まゝよ三度笠横たにかぶり　かぶりたてにふるさがみの女　女やもめに花がさく
さいた櫻になぜ駒つなぐ　つなぐかもじに大ぞうもとまる。

八

私は次にこのやうな發音遊戲が我國の説話藝術――即ち講談や落語や芝居の臺詞――の上にどのやうに現はれたかを調べて見なければならぬ。

元來講釋師や落語家や役者は、皆それ〴〵專門的の發音遊戲家である。苟もこれが出來ないやうなのろまな人間は、どんな事をしても説話藝術家などに成れるものではない。從ツて若し此處に例を擧げるならば、それは非常に多い。しかし中でも面白いのは幸若舞の「夜討曾我」から來た講談の「曾我の紋づくし」である。これは別に發音しにくいと云ふのでもなく、又韻を踏んで居ると云ふのでもないけれども、諸大名の假屋の紋と其人名を順々に述べて最後に工藤左衞門祐經に及ぶ其の讀み方が、追々と音樂的に調子を張ツて速くスラ〳〵と進んで行くと共に、初めは抑へ付けられた感脣が追々に解放されて、聲を張つて高揚りして來る……其の强い偉大な興味が充分に味はれる。

落語では大阪種の「錦明竹」が發音し難い早口の例として最も適切なものであらう。「私は中橋の加賀屋佐吉方から參じましたが、先度仲買の彌一が取次ぎました道具七品、次第は黄檗山錦明竹ずんど胴切りの花立、並びに……………」と留守番をしてゐる内儀にはとても分らない道具の名を早口にズラ〳〵と並べ、最後に「あの屏風は私が檀那寺の坊主の好きな屏風故經師に遣つて坊主の好きな表具坊主の屏風にしたいと、こないに御取次ぎを願ひまつせ……」と云ふ。内儀は何の事やらどうしても分らないので再三聽き返へす。使者の口上は追々に早口に成つて、益々内儀には分らなくなる。此の落語を聽いて居る客にもそれがよく分らないけれども、使者がスラ〳〵と速く饒舌るのを聽いて居ると非常に面白い。

九

芝居の例としては五で述べたやうに、二代目市川團十郎が享保三年に森田座でやつた外郎賣りの臺詞がある。これは團十郎が自分で當時の發音遊戲を澤山集めてたゞ雜然と並べ立てたもので、今日の人が發音遊戲の時代や地理を調べる上に非常に參考になる。しかしこんな詰らない幇間藝を臆面なく舞臺の上でやつて、しかもそれが大當りで、その後これが市川家代々の藝として歌舞妓十八番の一つに成つたと云ふに至つては、當時の

芝居見物の程度が推し量られて、これも亦面白い。次にこの有名な參考品を掲げて見よう。

ゐらう賣のせりふ（歌舞伎年代記卷一より）

拙者親方と申すは。御立合の中に。御存じのお方もござりませうが。お江戸を立て二十里上方。相州小田原。一しき町をおすぎなされて。青物町を登りへお出なさるれば。欄干橋虎町左衛門。只今は剃髮いたして。圓齋となのります。元朝より大晦日まで。御手に入まする此藥は。昔ちんの國の唐人。うゐらうといふ人。わが朝へ來り帝へ參内の折から。此藥を深く籠置。用ゆる時は一粒づゝ。冠のすき間より取出す。依て其名を帝より。頂透香と玉はる。卽ち文字にはいたゞきすく香と書てとうちんかうと申す。只今は此藥殊の外世上に弘り。ほう〳〵に似看板を出し。イヤおだはらの灰俵のさん俵の炭俵のと。いろ〳〵に申せども平がなをもつてうゐらうと致たは。親方えん齋ばかり。もしやお立合の内に。熱海か塔の澤へ湯治にお出なさるるか。又は伊勢御參宮の折からは必ず門ちがひなされまするな。御登ならば右の方。お下なれば左側。八方が八棟おもてが三棟玉堂造。はふには菊に桐のたうの御紋を御赦免有て系圖正しき藥でござる。イヤ最前より家名のぢまんばかり申

ても。御存じない方には。正身の胡椒の丸呑。白川夜船。さらば一粒たべかけて。其氣味合をお目に懸けませう。先此藥をかやうに一粒舌の上にのせまして。腹内へ納まるとイヤどうもいへぬは。いかん肝肺がすこやかに成て。薫風咽より來。口中びりやうを生ずるがごとし。魚鳥木の子麺類の喰合せ。其外萬病速功あること神のごとし。偖此藥第一の奇妙には舌のまはる事が錢ごまがはだしで逃る。ひよつと舌が廻り出すと。矢も楯もたまらぬじや。そりや〳〵そりや〳〵まはつて來たは廻つて來るは。あわや咽。さたらな舌にかげさしおん。はまの二ツは唇の輕重かいごふ爽に、あかさたなはまやらわ、をこそとのほもよろお、一ツぺぎへぎにへぎほし、はじかみ盆まめ盆米ぼんごぼう。摘蓼つみ豆つみ山椒。書寫山の社僧正。こゞめのなま嚙小米のなまがみこん小米のこなまかみ。繻子ひじゆす繻子しゆちん。親も嘉兵衛子も嘉兵衛親かへい子嘉へい子嘉兵衛親かへい。古栗の木のふる切口。雨がつぱがばん合羽か。貴様のきやはんも皮脚半我等がきや半も皮脚半。しつかわ袴のしつぽころびを、三針はりなかにちよと縫て、ぬふてちよとぶんだせ。かはら撫子野石竹。のら如來のら如來、三のら如來にむのらによ來。一寸さきのお小佛に、おけつま

づきやるな。細溝にどぢやうにようろり。京のなま鱈奈良なま學鰹ちよと四五メ目。おちやたちよ茶たちよ、ちやつとたちよ茶たちよ、靑竹茶筅でお茶ちやとたちや。くるは〱何が來る。高野の山のおこけら小僧狸百疋箸百ぜん天目百ぱい棒八百ぼん。武具馬具ぶくばく三ぶくばく、合せて武具馬具六ぶくばく。菊栗きくくり三きく栗合せてむきこみむむきごみ。あのなげしの長なぎなたは誰長雉刀ぞ、向ふのごまがらはゑの胡麻からか眞ごまからか、あれこそほんのま胡麻殻。がらひい〱風車。おきやがれこぼし、おきやがれこぼし。ゆんべもこぼして又こぼした。たあぷぽゝ、たあぷぽゝ、ちりから〱つつたつぽ。たぽ〱一丁だこ落ちたら煮てくを。にても燒でも喰れぬ物は、五德鐵きうかな熊どうじに石熊石持虎熊虎きす。中にもとうじの羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやるかの頼光のひざ元去らず。鮒きんかん椎茸定めてごたんなそば切そうめん。うどんかぐどんな小新發知小棚のこ下の小桶にこみそがこ有ぞ、こ杓子こもつて、こすくてこよこせ。おつとがてんだ心得たんぼの川崎、かな川程がや、とつかははしつて行ばゆいとを摺むく三里ばかりか、ふぢ澤平塚大磯がしや小磯の宿を七ツおきして、早天さう〱相州小田原、とうちん香隱れござらぬ貴賤群集の花のお江戸の花うゐらう。あれあの花を見てお心をおやはらぎやつといふ。産子這子に至るまで此うゐらうの御評判御ぞんじないとは申されまい〱。つぶり角出せ棒だせぼう〱まゆに。うす杵すりばちばち〱ぐわら〱〱と。はめを弛して今日御出の何茂樣に。上ねば成らぬ賣らねばならぬと。息せい引ぱり東方世界の藥の元締藥師如來も上覽あれと。ホヽ敬て。うゐらうはいらつしやりませぬか。

十

これから六で分類した第一と第二と第五との例を擧げよう。

先づ第一の韻を踏んで行く例の中で、狂歌に成つて居るものを四つばかり擧げる。

（九）月々に月見る月は多けれど
　　月見る月はこの月の月

（一〇）瓜賣りが瓜賣りに來て賣り殘し
　　賣々歸る瓜賣りの聲

（一一）瓜賣りが瓜賣りに來て瓜賣れば
　　賣る瓜は古瓜で古瓜を賣る
　　　瓜賣り

(一二)宇治の火事茶園火炎と
　燃え上り　茶場茶仕事
　　ちやつちや無茶苦茶

(九)は「つき」が八つ、(一〇)は「うり」が九つ、(一一)は「うり」が十ある。(一二)は「ちや」が七つあるのみならず、「うじ」と「くわじ」、「ちやえん」と「くわえん」とがよく共鳴して滑らかな感じを與へる。

(一三)神田鍛冶町の角の乾物屋の
　　吸栗は堅くて噛めない
(一四)神田鍛冶町の角のかち栗屋で
　かち栗買つたら堅くて噛めない
　　返して歸ろ

(一三)と(一四)とは「か」の繰り返しである。

(一五)京の三十三間堂の佛の數は
　三萬三千三百三十三體あるといふ
(一六)京の三十三間堂の佛の數は
　三萬三千三十三體ござると云ふ
　眞に三萬三千三百三十三體ござるか

(一五)と(一六)とは「さん」の反復であるけれども、「佛の數」は發音し難い句になつてゐる。

(一七)京の狂言師が京から今日來て
　狂言今日して京の故郷へ今日
　歸つた

(一七)はたゞ「きやう」の繰返しに過ぎない。

(一八)高野弘法大師此の子負うて
　粉をひいて此の子の眼に粉が入つた
　もうこれから此の子を負うて粉を
　ひくまいぞ高野弘法大師
(一九)家(うち)い裏の小坊主が此の子抱いて
　粉を食ふたら此の子の目に粉が
　入つた今度から此の子を抱いて
　粉を食ふまい
(二〇)向うの小山の小寺の小僧が小棚
　の小味噌を小嘗めて小頭こきん
　とこづかれた

(一八)も(一九)も(二〇)も、共に「こ」の反復である。(二〇)に似た句は外郎賣りの臺詞にも出で居る。この(二〇)のやうに無理に「小」を付けるやり方は、次の(二一)(二二)(二三)のやうに「お」を付けるのと同類である。

(二一)御門跡様の御池の御蓮葉の上に

御蛙御退おばち〳〵

(二一二)御門跡様の御庭の御池の御蓮の御葉に御蛙の御子が御三匹御止まり遊ばして御山椒のやうな御目をおばちくり〳〵

(二一三)お臺所のお切れたお障子からお風がおこう〳〵とお吹き遊ばしておすりこきがおばつたり〳〵

(二一七)から(二一三)まで、決して發音し難い句ではない。これと同じやうに、たゞ速く繰り返して面白い丈けで、格別發音しにくくないものは、まだいくらもある。

(二一四)永年住んだ蛇があるさうぢやが何ぢやかかんぢやか判らんぢや

(二一五)美濃の蛇池に蛇が居るぢやげな牡蛇か牝蛇か何ぢやか分らんぢや

(二一六)淺草の池のほとりの數年大蛇が居るさうぢやが其蛇が牡蛇か牝蛇か何ぢやか分らんぢや分らんぢや

(二一七)東禪寺のとう〳〵念佛通して十申せば必す金佛様になるといふ

(二一八)向ふの土堤を唐人が提灯を十つけて十通る

(二一九)私の家の私の木に鷲が止つたから私が鐵砲で鷲を打つたら鷲も驚いたが私も驚いた

(二二〇)新町の新九郎さの尻に虱が四匹しみ付いて死んどつた死んどつた

(二一四)から(二二〇)まで「ぢや」「とう」「わし」「し」の反覆であるが、中で發音し難いものは、(二一四)の「何ぢやかかんぢやが」、(二一六)の「牡蛇か牝蛇か何ぢやか」、(二一七)の「必ず金佛様」、(二一八)の「唐人が提灯」、(二二〇)の「四匹しみ付いて」等である。最後に澤山繰り返して、しかも發音し難いものを擧げて見よう。

(二二一)家の小僧に寒三十日寒念佛を申せと申付けましたが申した事やら申さぬ事やら申したら申したと申しましようが申さぬけりやこそ申したと申しませぬ

(二二二)歌うたひのやうに歌うたはれたら歌うたいのやうに歌うたふけ

れども歌うたひのやうに歌うたはれないから歌うたひのやうに歌うたはぬ

(三三)歌うたひが歌うたひに來て歌うたへと云ふが歌うたひが歌うたふ丈け歌へ切れは歌うたふけれども歌うたひ丈け歌うたひ切れないから歌うたはぬ

十一

これから六で說いた第二に移らう

(三四)法性寺の入道先の關白太政大臣と云ふたら腹を立てたから今度から法性寺の入道先の關白太政大臣樣と申しましようのう法性寺の入道先の關白太政大臣樣

(三四)は發音し難い長々しい人名で、最も良く人に知られてゐる發音滑稽の例である。

これに傚つて馬鹿々々しいほど長い人名を無理に作り出したものがいくつかある。六の(二)が其一つの例である。次の三はそれ〳〵長い說明が付く。

(三五)一丁木二丁木チョン〳〵ノ長三郎平助茂助平上神(ひらがみく)ノ平三郎チョンス〳〵茶杓子(ひしやく)團栗ゲーノ團栗左衞門

子供の無い百姓の夫婦が、神樣に願がけとして一子を授つた。お寺の和尙に一番上等な名を付けて貰つた。それが(三五)に示したやうな長い名だ。或日夫婦で田圃へ出て働いて居ると、其子が道傍の井戸へ墜ちた。二人は近所の家へ飛んで行つて「己(おら)が息子の一丁木二丁木チョン〳〵木……團栗左衞門が井戸へ墜ちたどから、ちよつくら梯子を貸してくんろ」とどなつた。生憎其家の婆さんは聾で「え何だとえ」と聽き返へす。百姓は「己が息子の一丁木二丁木……」を終りまで繰り返へす。このうちに可愛い息子は溺れ死んで了つた。

これと同じやうな馬鹿々々しい話をもう二つ出す。

(三六)アリステ三平郎テキ〳〵屋テキスリゴンボウ走心坊宗尙(そうたな)入道ハリマが別當茶椀ペブスの引井コツケ

(三六)も武士が其最愛の一人子に武運にあやかるやうに方々の偉い武士の名を澤山集めて、長い〳〵名を付けた。或時いよいよ戰が始まつて、其子の初陣の晴れの戰場に、彼は敵に對して

「アリステ二平郎テキ／＼屋……　……引井ノコッケ」と其長々しい名乗りをあげやうとした。所が餘り名が長いので、名乗り切らぬうちに早くも敵に首を切られて了つた。

(三七)壽限無々々々五光ノ擦り切レズ
海砂利水魚水魚末　雲來末風來末
食寢ル處ニ住ム處　ヤアブラ小路
藪小路　パイポ／＼　パイポノシウリン丸
シウリン丸ノグウリンダイ　グウリンダイノ
ポンポコピイ　ポンポコナノ長久命ノ長助

これも始めて男の子を持つた親が知合の隱居に芽出度い名を付けて貰ふ。これが(三七)に掲げ　馬鹿しい長い名だ。或時其子供が喧嘩をして相手の子供の頭に瘤を拵へた。親は「壽限無……………長久命の長助」と二三度叱つて、扨て相手の子供の頭を見ると、餘り長い名を云つて居たので其瘤がもう引込んで了つた。或時この子が井戸に墜つたので引揚けて醫者を迎へる。醫者は手當をして「さあ早く呼びなさい」と云ふ。親は例の「壽限無々々々……………」を緩な節でやると、醫者は「これ／＼まだお經には早う御座る」と云ふ。

十二

餘り馬鹿々々しいのはこれ位にして切上げて、愈々發音しに

くいものを一括して掲げる事にする。

(三八)今の京は平かに菊桐々々
三菊桐
(三九)年中遊び給ふが役目なれば
のら如來身から如來と
そそつても……………
(四〇)花かづかしき鉢かつき姫
(四一)上加茂の總孫で下加茂の
下孫ぢや
(四二)長町の七曲り長い七曲り
(四三)青卷紙赤卷紙白卷紙
(四四)青卷紙赤卷紙黄卷紙
(四五)猿が拜みやがる
(四六)屁でもおかぎやれ
(四七)船待橋
(四八)私や癩の種
(四九)いゝ一貫達摩の猿眼
(五〇)青茶葉赤茶葉ヵ茶葉
青茶葉
(五一)お前の前髮垂げ前髮

(五二)芝増上寺の和尚ちやぞえ
小僧ちやぞえ
(五三)大鍋に大まな箸小鍋に
小まなな箸
(五四)樫木の丸薪割る薪わり
(五五)下駄百そく棒八百本
(五六)傘一本棒一本、傘二本棒二本、傘三本
棒三本、傘四本棒四本、傘五本棒五本、
傘六本棒六本、傘七本棒七本、傘八本
棒八本、傘九本棒九本、傘十本棒十本
(五七)貴殿の頭は禿げ頭拙者の
刀は錆び刀
(五八)山の猪、屋根の楪、こはだの壽司
に帶の繻子
(五九)屋根の楪 帶の繻子
はもの壽司
(六〇)小原の嘉平さん親嘉平小嘉
親も嘉平なら子も嘉平
(六一)蛙ぴょこ／＼三ぴょこ／＼
合せてぴょこ／＼六ぴょこ／＼

(六二)山王の櫻に猿が三下り
合の手と手と 手々と手と手と。
(六三)向うの竹屋に竹立て掛けた
(六四)裏の竹籔に竹たてかけた
(六五)向ふの竹垣竹立て掛けた
(六六)隣の壁に竹たてかけた
(六七)己が竹垣何故竹立て掛けた
竹立て掛けたかつたで竹立て掛けた
(六八)家のくゞり戸は栗の木のくゞり戸
くゞりよいくゞり戸
(六九)久能の久遠山の栗の木のくゞり戸は
めつそうくゞりいい栗の木の
くゞり戸ぢや
(七〇)久留米のくゞり戸は栗の木
のくゞり戸 くゞりつけりやくゞり
いゝくゞり戸
(七一)家の桐戸の桐の切口は隣の桐戸
の桐の切口によく似た桐の切口だ
(七二)私八幡のけ牛蒡長牛蒡
牛蒡賣ちや

(七三)此の牛蒡いゝ牛蒡だ
取つて掘いて盆の盆牛蒡にしよう

(七四)杭引抜きにくい

(七五)庭の竹石根が引抜きにくい

(七六)家の裏の石竹ちよと根が
引分け抜き分けにくい

(七七)雨合羽日合羽

(七八)有馬玄蕃さんの玄關番の
番合羽

(七九)城の番場で合羽屋が合羽ほす
俄かに天狗風合羽舞ひ上り
合羽屋があわてゝお壕へ墜ちた

(八〇)はがまに生米

(八一)長持の上に生米七粒

(八二)長持の上に生米生麥生玉子

(八三)扇に玉子生米生杉葉

(八四)小米の生米小米の生米
こゞん小米のなあま米〳〵

(八五)隣の客はよく柿食ふ客だ

(八六)飛脚柿むくお客柿食ふ

(八七)客三人に柿二つ客二人に柿三つ
客三人に柿二つ

(八八)隣の客はよく柿食ふ客向うの客
もよく柿食ふ客家の客もよく
柿食ふ客

(八九)坊主が屛風で屛風が坊主だ

(九〇)坊主が屛風に上手に坊主を
畫いたなあ坊さん

(九一)高野の坊主が屛風を持て來て坊主が
屛風に上手に坊主の繪を畫いた

(九二)屛風屋の前坊主が屛風を
脊負つて行く屛風屋の屛風か
坊主の屛風か坊主の屛風だと
見えて坊主が屛風を脊負つて行く

(九三)向うの溝に細泥鰌ちよりと
によろり

(九四)裏の田圃堀に泥鰌がによろ〳〵
三によろ〳〵

(九五)泥鰌によろ〳〵三によろ〳〵
合せてによろ〳〵六によろ〳〵

(九六)牛蒡〳〵牛蒡賣ちや
私八幡の田泥鰌畦泥鰌
泥鰌賣ちや

(九七)向の溝にどろ泥鰌によろりん
中の溝にどろ泥鰌によろりん
下の溝にどろ泥鰌によろりん
三溝三どろ泥鰌三によろりん

(九八)家の行燈丸行燈向うの
行燈丸行燈隣の行燈丸行燈
三つ合せて三丸丸丸行燈

(九九)裏の小池小川に鴨が米かみや
小鴨が小米かむ鴨米かみや
小鴨が小米かむ

(一〇〇)家の牛こはよい牛こ、隣の牛こも
よい牛こ、向うの牛こもよい牛こ、
三つ合せて三よい牛こ(東北語)

(一〇一)橋の下で河童子は河童子産た
産た子も河童子共子も河童子
秋河童子女河童子だ(秋田音頭)

(一〇二)向うの天狗どんよく鼻差出しなさる
何故そないに鼻差出しなさると
問へば尙鼻差出しなさる

(一〇三)家の釣瓶は潰れぬ釣瓶
隣の釣瓶は潰れる釣瓶

(一〇四)家のバッグは皮バッグ、隣のバッグも
皮バッグ、向うのバッグも皮バック
三つ合せは三皮バッグ

(一〇五)家の茶釜は靑銅空茶釜
隣の茶釜も靑銅空茶釜
向うの茶釜も靑銅空茶釜
三つ合せて三靑銅空茶釜

(一〇六)家の娘一人御家奉公致させ
たさも致させたし又家に置いて
靑竹の靑竹茶栓で御茶たて
させたさもたてさせたし

右の六十九種のうちで、外郎賣りの臺詞の句と大同小異のものとしては、(三八)、(三九)、(五五)、(五九)、(六〇)、(七一)、(八四)、(九三)、(一〇六)等がある。

若し此處に無いもので、外郎賣りの臺詞を納めてあるものを選び出して、この六十九種に附加へたならば、共數はもつと澤

山なものとなる。

更に其分類に就いて時代や出生地の調査を進めて行つたり、異同を比較したり類屬させて見たりしたら、面白い結果が出て來るだらうと思ふ。

十三

これで一通りの材料の陳列だけが濟んだ。發音遊戯の發達は、やはり上方が早く、之れが後に成つて江戸からも面白いものが出たものだと見なければなるまい。之と共に地方々々にもから云ふものの芽生ひがあつたであらう。

今私はこの發音遊戯に日本の說話藝術と云ふものの發達をかぶせて、其上の方から全體を見渡して見よう。

早口の初まりは天台の早懺法(はやせんぼう)であるらしいやうに、日本の說話藝術の起原は、やはり天台眞言の說教を以て奈良朝以前から始まつた。說話を集めて記錄としたものとしては大納言源隆國の「宇治拾遺物語」が古い。この人は「年高うなつては暑さをわびて暇を申して、五月より八月までは平野院一切經藏の南の山際に、南原房と云ふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結ひ分けてをかし氣なる姿にて、莚を板に敷きて涼み居侍りて、大なる團扇もてあふがせなどして、往來の者高き卑しきを言はず呼び集め、昔物語をさせて、我は内に添ひ伏して、語るに從ひて大なる草紙に書かれけり」とあるから、この大納言は人の話した物語の記錄者である。然るに高僧傳など現はれた天台や眞言の僧侶は多くの人々に自ら親しく說教をしたのであるから、彼等は正に說話者である。殊に鎌倉時代の狂熱僧日蓮の辻說法は、文藝復興期フローレンスェチの僧サヴォナロラの熱辯と比べて見て非常に興味が多い。

近世初期の說話者としては、信長の御前で話をした野間藤六や、秀吉の政務の鬱を慰めた安樂庵策傳の名が傳つて居る。それからから云ふ話を記錄して說話を集めたものとしては、策傳が「醒睡笑」を編んだと云はれて居る元和九年より以前に「戯言養氣集」横本二冊が活字版本として刊行された居た事は、安田善之助氏の珍藏によつて確かに成つた。

これが德川期以前の說話藝術發達の大筋である。

十四

德川期に入つて專門の說話藝術は講談と落語との二路に分れた。其他に浄土宗の御談義と日蓮宗の說法とが盛に成つたけれども、これは布教の具としての說話藝術であるから、今は主として專門の說話藝術丈けを引出して述べよう。

講釋師は學校の先生のやうな心持で、傍觀者として事件を記述して行くのに對して、落語家は舞臺の役者のやうな態度で、

自分が一々事件の中の人物に化けて了ふ。即ち講釋師は寛永あたりから盛んに成つた軍學者兵學者の講義の民衆化したもので、落語家はお國歌舞伎に起原を有する芝居の物眞似を取入れて仕方話(表情說話)を工風した。中川喜雲の「私加多話」は既に寛文十一年に江戸で出版されて居る。

元祿の以前に、この兩派の說話藝術家は、街に出てそれ〴〵辻講釋・辻話を群集に聽かせた。辻講釋をした者に京都では原永暢、江戸では橫六・淸左衞門・靑龍軒などが現はれた。又辻話をした者に、京都では露の五郎兵衞、大阪では彥六(もつと年代が下つて元文頃には瓢簞かしく)、江戸に鹿野武左衞門が出た。この武左衞門はお座敷仕方話の元祖で、彼の說話を集めたものは貞享三年に出版された有名な「鹿の卷筆」である。そして元祿時代の大阪では客も幇間も酒席で笑話を頓作する競技が行はれて居たらしい。

講談は其正統が神田伯龍子・滋野隨龍軒・成田壽仙・馬場文耕森川馬谷と傳はつて、寛政年代の馬谷の時に軍書合戰と御家物と世話講談とに分れた。この世話講談は正統講談の別派で、この流れを承けたものとして文政年代の乾坤坊良齋と天保安政年代の爲永春水を出すに及んで、落語の方の續き話・人情話と接近して來た。然るに講談の他の一方の別派として延享時代に寶全、寶曆・明和時代に深井志道軒が出て、所謂談義物流の講談を試みた。今日の講談は正統講談を主とし、之に一部分は世話講談を交へて、猶明治の黑猿(奥宮健之)の後を承けた痴遊(伊藤仁太郎)流の政治物を僅かに加味したものである。

落語は五郎兵衞・武左衞門・彥八以來餘り振はなかつた。蓋し之は江戸言葉の發達の上から見て尤の事でなければならぬ。江戸の武左衞門が仕方話をしたにしても、恐らくは上方言葉がかなり勢力を得たものであつただらうと思はれる。

明和、安永度に至つて江戸言葉の四要素が融和し圓熟して、其特色たる簡潔・酒脫・輕妙・機智と云ふやうな引き締つた氣の利いた中心を捕へた印象的な說話法が完成した。洒落・地口・語呂合せ・謎々・狂歌小話の頓作・機智の合戰・聲色・茶番・音曲・手踊り……總て偉大・深刻・沈默・高遠・徹底・老漢・悲壯と云ふやうなものの正反對に立つ賑やかな小さい淺い近い輕い間に合せの浮ついた面白可笑しい文化が一世を風靡した。若しかう云ふ時に落語や尻取りや發音遊戯が發達しなければ、彼れは永劫日本の國民性と親密になる機會を失つたに違ひない。

それ故江戸の眞の落語は天明から文政の初期に活躍した立川焉馬と、寛政から天保の初期に雄飛した三笑亭可樂とを以て始まるものと見なければならぬ。焉馬は一代で絕えて後を繼ぐ者

お話かつたが、可樂の門には英才が輩出して今日の三遊派・柳派の繁榮を見るに至つた。

十五

明治時代の文化は粗悪な田舎趣味と、未熟な西洋趣味と殘滓の江戸趣味とが無自覺的に互を亂し合つた外に何事をも爲し得なかつた。目的地のきまらない不安な模索的な無理想な四十五年間の其日暮らしは、明治時代をして人類の有ゆる運動の博物館たらしむるに充分であつた。しかし私は今此處で明治文化史に立入る丈けの暇がないから、直ぐ明治時代の説話藝術の略述に移らう。

このやうな動亂の渦流は、說話藝術の上にも開路して從來の僧侶の說法と講談と落語の傍に、牧師の說教と政治家の演說と學者の講演とが新に出現した。

昔の面影の無いほどに壞されて衰へた江戸語の上に、强さや深さや幅のあるしかし粗野極まりなき中國語や四國語や九州語がかさにかゝつて來た。しかしこの新參語は徒に從來の江戸語の型を突き崩してくれた丈けで、政壇や教壇に於ける彼等の說話藝術的價値と云ふものさへも、格別認められずに了つたらしい。そして今殘つて居るものは、主として憲法發布時代に働いた頭の無い壯士上りの政治家の誇張的な嫌味な說話の系統と、謙

堂と官房ばかりで修業した[illegible]のない話の系統のみである。

私は今更ら牧師や教山（自分が最も良く自分を知つて居るから）の說話を批評する丈けの勇氣がない。特に彼等には說話よりももつと大切なものが缺けて居るからである。

十六

私は最後に急いで復た發音遊戲の問題に歸らう。吾々の生活は、全體の文化過程の流れの中に溶け込んで居る限り、吾々の新時代の說話も亦決して前代の宿緣から脫却する事か出來ぬ。私に何等の重大を考へさせないこの發音戲戲も、思はずそれを反覆してゐる間に、不思議な微妙なゆかしさが其の全體の調子の中から湧いて來る事が切に私に感ぜられる。

又昔のお婆樣が炬燵に入つて孫達に繰り返し〳〵教へたこの遊の中に、更に彼女の故鄕の强いなつかしい響がこもつて居たに違ひない。

私は紛糾した現代語の發音界の分野に、どの部分に又どのやうにして、此の發音遊戲一彈を最も有效に投ずべきかを、未だ充分に考へて居ない。しかし現在の小學國語讀本卷の五の「星とり」が、安樂庵策傳の「醒睡笑」（十三參照）卷二の鈍副子の一項——

小僧あり。小夜ふけて長棹を持ち、庭を彼方此方振り廻はし、坊主是を見付け、これは何事をするぞと問ふ。空の星が欲しさに打ち落さんとすれども落ちぬと云へば、さて／＼鈍なる奴や、夫程さくはなうてなるものか、其處からは棹がとゞくまい。屋根へ上れと云はれた。御弟子は、さも候へ師匠の指南ありがたし

星ひとつ見つけたる夜のうれしさは
月にもまさる五月雨のそら

――から採集したものであるからには、其處に何等かの暗示が與へられて居るやうである。

國定教科書の編纂者にこれほどの通人が居るからには、わが發音遊戯も亦、かう云ふ通人の御引立を蒙つて、新時代の恩澤に浴して、國語の發音教育に何等かの貢献を爲し得るやうに推し進められるのが當然の事であるかも知れぬ。

十七

此の稿五月十日に私がある學會で話した講演の速記を、瀧田君の勧めに任せて急いで筆を入れて未定稿として取り敢へず本誌に寄せたものである。其理由は私のこの拙ない未定稿を閲覧して下さつた方でかねてかう云ふ問題に興味を有せられて、私の集めた以外のいろ／＼な發音遊戯の句の御記憶が有つたなら、どうか下記まで御一報を給りたい。邦語の發音遊戯に止らず、外國語のをいろ／＼御存じの方はどうか御教示を給はりたいと云ふ希望を廣く多くの讀者諸君にのべて、資料の御寄贈を請ひたい爲めである。(東京市外代々木山谷一一五菅原教造)。

日本現在の社會主義者評論

▽我國の社會主義者

文學博士　三宅雪嶺

一

社會主義の形跡は日本古來の歴史に認め得るにしても、現在の意義にて知られたのは自由主義と共にして來て居る。歐米で二者經路を異にし、日本で略ぼ同時に起り初めた。明治の初め自由主義は頗る漠然、之を唱ふる者は社會主義に傾き、共產主義に傾かうとする。中江兆民等の佛國に留學した頃は、帝政が仆れて共和となり、共產主義者が騷いだりして間も無い時である。兆民はルツソーの民約說を宣傳するに努めたが、實際に於て共產主義に近い。當時之に肖たのは少くなく、自由主義者は非資本家の傾向がある。大井馬城が自由運動に從事したのは廣義の社會主義を加味して居る。當時社會主義は明晰なる概念なく、カール・マルクスの名も知られたか知られぬ位である。併し自由黨員中後から見て社會主義の色彩を帶びたのがいろ／＼あつた。自由主義か社會主義か區別し難い。之を合併した特殊のものと云へる。板垣伯は思想が動搖し、一律に云へぬけれども、時として之

に屬する。自由黨員中代議士に成つた者は境遇に移され自ら資本家と成らうとするのがあり、左なくとも之に反抗する氣分を減じたが、それでも議員に小山久之助のやうなのがある。併し自由黨が後に政友會と成れる如く、最初に比べて著るしく社會主義的色彩を減じた。

二

自由黨員の運動が議會開設を以て一段落を遂げた頃、社會主義が漠然たる自由主義以外に色彩を鮮明にし初めた。マルクスの説は未だ廣まらず、政府に於ける獨逸思想の盛行と共に國家社會主義が入込み、公然社會黨の名を用ゆる者があつた。然し讀書界に廣まつた書はベラミーの「回顧錄」及び其他二三である。「回顧錄」はいろ／＼と飜譯され、飜案された。「シーザアスコラム」は磯野依絲軒によつて「大破壞」と譯されて出版されたが、其原書は頗る興味を以て讀まれた。今の露西亞の過激派運動を豫言したやうな所がある。廣義に於ける社會主義は常識を以て理解せられ、此邊の思想の一部は廣く世に傳はつた。ヘンリー・ジョージの説も一時盛んに紹介せられた。單税太郎といふ論客もあつた。矢野文雄氏は一種世間に先んじて着眼したりする方であつて、「新社會」を著したのも其一例である。やはりベラミーに據つて思ひ付いたのであらう。歐米でもベラミー流の書き方が相應に行はれ、一時の流行である。

三

日露戰役頃まで社會主義は或る程度まで加味すべきものと考へられ、甚しく恐るべきものとせられなかつた。但だ戰時中に非戰論を唱へるので、一般の協調を破る所があつた。而して幸徳一派が社會主義より無政府主義に轉じ、大逆事件を起したが爲め、社會主義といふ語を使用する事だに禁ぜられる事となつた。前に社會主義を研究した者も、將た之を宣傳するに勗めた者も、刑事に尾かれるのを厄介に思ひ、其儘に放棄したのが多い。中で引續いて社會主義を標榜し來つたのは、先づ堺枯川を推す。

堺氏は其筋の嫌疑の中で安全に過し來つた所、聊か妙とする。過激なる説を唱へ私かに其筋と馴れ合ひ、實際に探偵の役を勤めたりする者あるが、彼はさうでなく、壓迫の厳しい時は手を着けず、素知らぬ顔をし、賣文社で筆を執り、壓迫の手が緩むと觀れば前通り主義の宣傳に取り懸る。其呼吸を得る事、巧みを求めずして巧みになつて居る。主義に忠實と云はうか、絶えず續いて來た所が珍らしい。刑事にも尾かれぬやうになり、漸く大手を振つて意見を發表し得るやうになつた。其風采の揚らぬのは一得一失である。風采堂々として居るならば、今一層世

間に重きを爲し來つたらうが、同時に壓迫が強く、何かの名義で入獄を餘儀なくされたらう。氏は入獄したけれど、其れ位の事で濟まぬ。無期を宣告されたかも知れぬ。社會主義の知識に富む者は少くなけれども、斯くまで一貫し來つたのは稀れである。山川氏夫妻は能がある。片山氏は一時のやうに行かぬ。

堺氏が刑事の付添ひを免かれた後、尚ほ刑事に尾かれるのに大杉榮氏がある。其筋では何を標準に置いて刑事の尾く尾かぬを極めるのであるか。大杉に刑事を尾けずに如何なる事をするかを觀るもよいではないか。高畠氏一派は國家社會主義を唱へる事になつた。社會主義に種々あり、派別するのも必然の勢である。政府では露國の勞兵會、獨逸のスパルタカス團、米國のI・W・W等に感染れるのを恐れ、之れに類似するのを取締らうとするであらうし、事を起さうとする者も其邊に考へる所もあり、之れに似ねやうにするであらう。今の社會主義はやゝ禁の緩んだものの、過激派より遠ざかるものであり、遠ざからねばならんのである。單にマルクスの説を敷衍するだけならば差支へなく、過激派に接觸する所を打切るを要する。

四

今は人が相應に思慮し、濫りに警察と爭はうとせぬ。それだけ相應の地位ある者が社會主義の範圍に入り込み來つて居る。

京都帝大の河上肇氏の如き、次から次へと意見を發表する。今の時代に於て尚ほ大膽なる行動とする。併し堺氏が壓迫の強い時に強いて反抗せず、他を顧みて時の過ぐるを待つが如く、河上氏も強いて壓迫に反抗せぬであらう。堺程に運動するかも疑はしい。然し今のところ續々意見を發表するのは他に類がない。鈴木梅四郎氏の皇室社會主義は資本家として大膽なる意見の發表である。政府で社會主義と見るか何うか。相應の資産家が彼の如き意見を發表するに至つたのは機運の進歩を示す。

社會主義は範圍廣く、勞働問題、救濟問題等或は合一し或は分離し、問題となる。國家社會主義を以て社會民主主義を制するやうな事もある。片岡直温氏が勞働問題に力を盡くすといふのは、如何なる方法に於てするか。眞に力を盡くすならば新に勢を作るに足れど、其方法が未だ知れて居らぬ。加藤時次郎氏は何とか云はれるが、洗ひ立てすれば何處でも濁りを見る。社會問題、勞働問題が盛んなる時、何かの力を見せるであらう。

五

社會主義者と云へば警視廳の注意人物を指すやうになつて居るが、多少主義を加味する者は數に於て頗る多い。官僚の名ある者も、國家社會主義を標榜せぬまでも政策に入れて居る。資本家以外は幾許か之と感情の共通する所がある。議論を知らな

くても早解りがする。貧民の一を聞いて十を悟る所は其處にある。誤解するであらうが早く呑込む。所謂無產階級なる者は、一部分は資本家に傾き、一部分は貧民に傾く。日本の貧民は歐米の貧民と違ひ、或地位を占めて敬意を拂はれる。官吏と同格になる。官吏も或る部分は生活上貧民に類する。所で問題が複雜になる。社會主義を標榜して立つ者が少く、論者も指を屈する位なれども、之に趣味を感じ相應の議論を持つて居る者は多からぬとせぬ。若し社會主義者が所謂注意人物、所謂危險人物のみならば別段の事はない。けれども全く聞えぬ所に意見の豐富なるものが居る。安寧秩序を念とし、世間を騒がす事を好まぬが、相應の人物の居る事は居る。政府にも居る。何でも此調子であるけれども、社會主義者に就いても此邊に考ふる所あるを要する。

▽マルクス系の二分派

小泉信三

「我邦現今の社會主義者」と云へば重に雜誌「新社會」と「國家社會主義」とに據つてゐる堺、山川、高畠の諸氏を指して謂ふのだらうが、私は是等の諸氏を批評する丈けの材料を持つてゐない。第一、私は是等の諸氏と一面識もない。從て所謂人物評などの出來る筈はない。それならば Writers としての諸氏の仕事はと云ふに、私は是等の人の著譯の或ものを讀んでゐる。(堺幸徳二氏共譯「共產黨宣言」の如きはもつと廣く一般讀書界に迎へられて然る可きものだと思つてゐる)併し批評らしい批評を書かうとすれば私の是等諸氏の作物に關する知識は斷片的で殆ど用をなさないのである。

たゞ一ツ私に氣の付いてゐる事がある。それは堺、山川、高畠氏等が同じく Marxism を標榜してゐても、マルクス系統中何の點に最も重きを措くかと云ふ事になると、是等の諸氏の意見は啻に同じでない許りでなく、少なくも堺、高畠二氏に就て云へば、堺氏の重きを措いてゐる點を高畠氏はマルクスの弱點として非認(少くも輕視)し、反之高畠氏がマルキシズム中最も推重して居るらしい部分に對して堺氏は甚だ冷淡に見える事である。

堺氏がマルキシズム宣傳を始められた頃の著作には何んな物があつたか私は殆ど全く知らないから、反對の例證を示されれば直ぐ取消す外はないが、近年の傾向丈けに依て見れば、堺氏の興味はマルキシズムの中、其唯物史觀に集注してゐると云ッて

も宜からう。即ちカウツキイ、ヘルマン・ゴルテルの唯物史觀論の翻譯がある許りでなく、マルクス「經濟學批評」の序文をも氏は隨分以前に紹介されたのを覺えてゐる。反之、マルクスの經濟學說に對しては堺氏は甚だ冷淡である。之に就ては堅く沈默を守ると云ふ程ではないにしても、唯物史觀に對する熱心に比較すれば全くマルクスの經濟學說を閑却してゐると云ツても宜いと思はれる程である。私は此點に興味を感じてゐる。何故堺氏はマルクスの經濟學說を盛に紹介しないか。

マルクスの經濟學說、殊に其價値論餘剩價値論は經濟學者批評の的になツてゐる。マルクス正統派の人々がそれを認めると認めないとは別として、經濟學者の大多數は價値論餘剩價値論を以てマルクシズムの最大弱點の一つとするに一致してゐるのである。經濟學者に取つてはボエームバエルク、ジエデンス、マアシャル等の壘に據ツてマルクスの價値論に攻擊を加へるのが一番容易い仕事だつたのである。併し好んでマルクスの價値論に攻擊を加へる經濟學者の中でも特に社會主義を硏究してゐる人は價値論の崩壞と共にマルクシズムの大伽藍全體が崩れるものなどとは信じてゐない。今日彼等は概ねマルクスの價値論は「彼れの經濟學の基礎をなしては居る。併乍ら社會主義は避け難きものであるとの證明に外ならざる彼れの社會主義說に於ては價値論は何等の役目を演ずるものでない（ヘンムコギッチ）との立場を承認してゐるのである。彼等は又エンゲルス其人が「哲學の貧困」の序文中にマルクスの共產主義的要求は決して餘剩價値論を其根據にするものではないと明言した事をも看過して居ないのである。

そこで堺氏は何故にマルクスの價値論を盛に紹介されないか。堺氏は多くの經濟學者と共に價値論をマルクスの最大弱點と認めて、是を回護する爲めに沈默するのか。或はマルクスの價値論は前述の如くマルクス社會主義系統の中で重要の地位を占めてゐないものと認めて之を閑却するのか。私は之を知り度いと思ツてゐる。

價値論を以てマルキシズム中の弱點と認めるにしても、又は閑却に値する一構成要素と認めるにしても、堺氏の立場は高畠氏の批評を受けなければならぬものである。高畠氏は所謂大和魂とマルクスの智惠とを一ツにした國家社會主義運動を創めるに當ツて、其思想上の立場を明にしてゐる。それに依れば高畠氏はマルキシストではあるがマルクスの唯物史觀は之を是認しない。唯物史觀に對してはスタムラアの批評に承服する。高畠氏がマルクスを（最も忠實に）奉ずるのは其の經濟學說にあると云ふのである。即ち高畠氏の見解に從へばマルクスの價値論

餘剩價値論はマルクス躰系の重要成素であると共に、經濟學者從來のマルクス批評はマルクス價値論の痛處を撲ツものでないと云ふ事になるのである。

「新社會」派と「國家社會主義」派との分離は運動上のタクチックスに關する意見の相違から來たものだと云ふ事だが、思想上――マルクス解釋上――に於ても堺氏と高畠氏との間に右に述べた丈けの相違はあツたのである。

併し相違はあると云ツても我邦の Marxisten は未だ（善き意味に於ても惡しき意味に於ても）マルクス紹介の時代を脫してゐない。先進國に行はれてゐるやうなマルクス正統派、修正派の論爭はまだ起ツてゐないのである。（獨乙流の集産主義を棄てゝ拉典諸國流の社會主義に轉じた大杉榮氏等の事は姑らく論外に置く）そこで根本的に我邦の社會主義者を批評し樣とすれば、進んでマルクシズム其者を批評する丈けの準備を整へてかゝらなければならぬ。私は今其用意を持つて居ない。西洋學者の助けを籍らずにマルクスに對して獨立した一家の批評を下す爲には私のマルクスに關する現在の知識は不充分である。併しマルクスの價値論、餘剩價値論に就てならば私は多くの經濟學者に從ツてこれ位の事は云へる。今日經濟學上の常識と見なされてゐる學說を頭に入れて、さてマルクスの絕對的な無條件的な抽象的勞働價値論に向ふと吾々の理解力は異常な苦しみを感じる。如何にマルクスに對する敬意を絕えず念頭に置くことに努めても、其價値論を承認するのは容易な事ではないのである。今日の經濟學を頭に入れずに直ちにマルクスに接するものは此苦痛を感ぜずに濟んでゐるのかも知れない。先入見がある爲めに眞理の了解を妨げられると云ふ例は珍らしくない。それならば先づ經濟學を頭に入れずにマルクスに向ふ者は羨むべきだらうか。今日の經濟學は大眞理の會得を妨害する有害無益の學問と認むべきであらうか。私はマルクスの價値論が吾々の頭にある從來の經濟學（從來の經濟學と云ふのは誤解を招く恐がある。吾々の頭にある經濟學說は吾々の頭に入ツた事はマルクス經濟學よりも先きであるが、その世の中に現はれた先後から云へばマルクシズムよりは新しいものである。マルキシストの經濟學上に於ける任務は陳腐なる經濟學說の撲滅ではなくて、新興學說との對抗である）と容易に相容れないのを見て直ちに之を有害無益と宣告する程從來の經濟學を輕蔑してゐるものではない。私は寧ろ其反對の事を考へるに傾いて居る。限界利用說なるものが金科玉條と認められた時代は過去の事になつてゐる。吾々はマルクスの經濟理論躰系を許して「骨牌の家」となしたボエームバヱルクに輕々しく喝采するものではない。併し、マル

クスの弟子はボエームバヱルクに對して答辯をなす可き借りがある事は否む譯に行かない。而してこの借りをマルキシストは未だに綺麗返しては居ないやうに思はれるのである。

マルクスの所謂「社會的に必要なる勞働時間」が若しマルクスの始めに記す通り資本主義社會に於ける商品の現實の交換割合Austansch verhältnisを決定するものならば、之を一旦是認した讀者は生產原費と平均利潤率とを加へた所謂生產價格が現實の商品交換割合を決するものだと云ふ後の說明を容易に理解することの出來ないのが當然である。これは吾々が一見して感ずる程の矛盾ではないのかも知れない。併し吾々は未だ快よく首肯し得る程の說明をマルキシストから受けてゐないのである。

或は又マルクス辯護者の或人々が主張するやうに勞働價値說は現實社會に於ける商品の交換割合を決定するものではなく、マルクスはたゞ是を思考上の鍵として、之に依て今日の社會に於て行はれる餘剩勞働(勞働者自存の必要以上の勞働)掠奪の事實を說明しやうと試みたものかも知れない。併し吾々の考へる處に依れば餘剩勞働掠奪の事實は勞働價値說を俟たずして說明し得る事のみである。吾々の目前の事實を見れば、社會の一部が財の生產の爲めに勞働して居るのに他の一方では全く何等の勞働に從事しないか、又は財の生產と關係なき勞働に從事する事に依て所得を得てゐる部分がある。而して所得統計に依て見れば財の生產に自ら參加しない階級と、自ら參加する階級との割合よりも前者の占有する生產物配當額と後者の受ける配當額との割合の方が高いと云ふ事實が明である。即ち後者の餘剩勞働は演繹的證明を要せざる經驗的事實である。「マルクス價値論の正しきや否やは餘剩勞働の證明の爲めにはどツちでも好い事である」(ベルンスタイン)又例へば「三鞭酒の高いのは其醸造に投ぜられた勞働量に由るのでなくて、需要に比して三鞭酒が少ないと云ふ事實に基づく、而して此事實は又更に特殊の葡萄を栽培すべき土地が限られてゐると云ふ事實に基づくのである。而かも此の葡萄栽培に適した土地の地主が收める地代は無勞所得である。従て其の勞働掠奪の結果なることに於て他の種のレントと擇ぶ處なきものである。」「勞働掠奪の事實を證明する爲めには如何なる價値論の助けをも藉る必要はないのである」(トウガン・バラノウスキイ)

から考へて見るとマルクスの價値論、餘剩價値論を容易に是認することの出來ないのはこツちの理解力が不充分な爲め許りとは何うしても思はれないのである。

私は高畠素之氏の「資本論解說」の飜譯を最も熱心に歡迎す

るもの丶一人である。それと同時に私は社會主義學者としての高畠氏の任務が甚だ重大で且つ困難な事を認めない譯には行かない。高畠氏は一方ではスタムラアスに據ツて所謂市民經濟學者等と共に堺氏を評すると同時に、他方ではカウツキイに據ツて我邦市民經濟學者の殆ど全體を退治しなければならぬ地位に立ツて居る。（同時に堺氏も亦高畠氏と共にスタムラアを評する必要を認めてゐるのであらう）我邦經濟學者中社會主義研究を以て聞えてゐるのは福田河上二博士丈けと云つても好いが、自らにして社會主義經濟學の批評となるべき著譯は其外にも公にされてゐる。ボエームバエルクの流れを汲むフィリツポヸツチ經濟原論は氣賀博士に依て譯されてゐる。河上河田二博士の譯した「ピエルソン價値論」大塚金之助教授の近業「マーシャル經濟學原理」は何れも期せずして「資本論解説」に對する批評となるものであらう。高畠氏を初めマルクス價値論　忠實なる社會主義者は是等の經濟學者に對して果して如何なる批評を加へるだらうか。

中央公論記者の問に對して私の即答し得ることは之れで盡きて居る。

▽日本の現代の社會主義者

室伏高信

幸徳事件以來、日本の社會主義運動は火の消えたようである。世界の文明國を通じて日本の如くに社會主義運動の振はないものはない。それは日本に必要がないためか。勞働者の自覺がないためか。或はまた政府の干渉のためであるか。勞働運動の適當なる指導者がないためであるか。私はこれ等の一切についてここに論ずる必要はない。況んや日本に必要があるとかないとかいふような愚劣な問題にかゝわつてゐることはできない。けれども勞働者の自覺の乏しきことの事實を楯として社會主義者または勞働運動の指導者と稱する諸君が自己の無能を蔽ふところの辯明として濟ましてゐることは決して許されるものではない。ラッサーレの運動が勞働階級の充分なる自覺の上に立つてゐたものでなくして、却つて彼れの運動が勞働者の反對に遭遇したことの事實は何人もこれを拒むことはできない。

政府の干渉については社會主義の諸君に對して深く同情すべき理由があります。それ等の諸君が法律により、警察により、またはその他の方法において、一切その言論の自由を奪はれ、

集會演說の自由を奪はれてゐるのみならず、その一身上の生活の自由についても屢々國家の名において迫害されてゐることの事實については正義の立場を維持しやうとするものの何人も默過することはできないところであります。けれども政府の責任は政府の責任である。政府の責任を指摘することによつて社會主義者がその勞働運動に對する免責の口實とされべきものではない。少くともビスマークの社會黨鎮壓令が社會黨鎮壓の効果を奏しなかつだことの事實は、日本の社會主義者の責任轉嫁——若しさう主張するものがあれば——の理由を排斥してゐます。

今日の日本の社會主義運動——運動といふほどではないが、社會主義者の中心のように思はれてきたものが賣文社の諸君であります。少くとも最も活動的であつたものはこの一團の諸君であつたと申すことができます。大杉、荒畑氏等のごとき無政府主義者——私はさう思つてゐる——をもつて社會主義者の概念のうちに包含せしめることは私の欲せざるところであります。木下尚江氏が日暮里に隱れ、安部磯雄氏が早稲田に隱れ、西川光次郎氏の消息が滅多に表面に現はれてこないものとなつてゐる以上、日本現在の社會主義者としては先づ賣文社及びこれを中心とする一團の諸君を擧げなくてはならぬ。それ等の人人のうちで私の承知してゐるのは堺利彥氏一人である(山口孤劍及び岡千代彥の兩氏には一面識がある)その他の人々には未だ一回も會つたことはない。ただ私の親友尾崎太郎君を通じて實際運動の手腕家としての茂木久平、北原龍雄等の諸氏の消息を聞いてゐるに過ぎない。けれどもそれ等の一團の人々のうちにおいて山川均、高畠素之、さうして堺利彥の三氏のことはそれ等の人々の諸論文を通じてその人となりを察し、また識見をうかゞうことの機會が與へられてゐます。堺氏は堺利彥としてまた貝塚澁六として文壇に著名であり、現在におけるわが國社會主義者の最も先覺なる一人であり、文筆の才と調和の才能とにおいて得易からざる人物であることは勿論、氏の多年の苦闘に對しては深く敬意を表しなくてはならないものがあります。われ等はその主義に對して贊成すると否とにかゝわらず氏の終始一貫したる、また極めて實際的なる態度に對して敬意を表することを忘れることはできない。山川均君は昨年來「無名氏」として論壇に認められ、その「デモクラシー殺戮論」は論壇の感興と尊敬のうちに繼續されてきたものであり、高畠君のマルクス研究者としての實力と誠實とはわが國の第一人者であると評されてゐます。山口孤劍君の文章の才能についてはいふまでも

ないことである。これ等の才能の士がわが國の社會主義者の間にあることは彼等のために意を强うするところでなくてはならない。

それにもかゝわらず日本の社會主義運動は一向に振はない。傍觀者から觀ても振はなさすぎるほど振はない。また一度勞働者の集會に足を入れて見るものはその運動が如何に幽雅低調であるかに驚きます。實際のところロク〳〵演說のできる人さへない。これでは折角の勞働運動も困つたものだと思ひます。またこれ等の事實から見ても日本の勞働運動が適當なる――偉大であれば何ほ結構である――指導者を需要してゐることの事實を見出す。そこで賣文社の諸君の態度についても勢ひ批評しなくてはならないこととなつてくる。聞くところによれば堺利彦氏は日本のバアナアド・ショウを持つて任じられてゐるとのことである。それを私は兎や角申さうとするものではないにしても、また「貝塚澁六」としての堺氏のユーモリストとして並に社會主義宣傳の巧妙なる戰術家としての價値についての讚嘆を惜まないものであることは勿論であるにしても、私の考では文學を通じての主義の宣傳といふことはフランス革命には大なる影響を與えて居る。けれどもそれは貴族またはブルジョアには役立つたものであるにしても勞働者にはどうか。勞働者はユーモアを解すべくあまりに餘裕に乏しいようなことはないか。また文學を理解するにはあまりに敎育が與へられてゐないではなからうか。私にはさういふ疑問があります。山川君の「デモクラシー殺戮論」にしてもどうもそれがブルジョア階級にだけ理解され、問題となり、話の材料となるやうなことはないか。ツマリ堺氏のユーモア、高畠氏のマルクス研究、山川氏のデモクラシー殺戮論の何れにしても、勞働階級にとつては帝劇の芝居が彼等にとつて風馬牛のものであるがごとくにこれを風馬牛のものと解せられてはゐないであらうか。

こういふことは決してこれ等の諸君を卑怯者だといふことではない。社會主義者の間には一犯一語といふことがある。大杉君のごときは六犯六語である。ツマリ六ケ國の外國語に通じてゐるのは六回監獄に入つたからだとのことであります。監獄で外國語を勉强したといふことであり、また屢々監獄へ入つたことの紀念事業として外國語の智識が豐富であるとも申すことができます。大杉君の外にも三犯三語、二犯二語等の諸君のあることは勿論です。さういふ次第だから卑怯だとか何とかいふことはもつての外でありますの私のいふところはバアナアド・ショウが

あり、カール・カウツキーがあるだけでは勞働運動は起らない。矢張りヴヰルヘルム・リープクネヒトやベーベルがなくてはだめだと申すまでのことであります。

近頃この舊賣文社の一團が分裂して別に國家社會主義を標榜する一團ができたが、私にはこの二つの分裂したるものの間にどれだけの距離のあるものであるかはまだ分らない。

（五月廿日）

▽當然起るべき社會主義

前田蓮山

所謂唯物史觀は社會構成の基礎を人類の生活を支持すべき物資の生產及び其の生產物の交易に置き、社會的改革も政治的改革も凡て終局の原因は、此生產交易の方法手段に關して起るもので、人間の智力の結果でもなければ抽象的の眞理や正義に對する識見の結果でもない。卽ち社會的改革や政治的革命の終局原因は、哲學に求めらるべきものでなく、其の時代の經濟的狀態にのみ求めらるべきものであると說く。

如何にも佛國革命はルーソーの如き哲學者の感化を受けて起つたものと考へられて居るけれども、或學者の說に依れば決して然うでなく、當時の暴民にして哲學の一端をも解して居る者は殆んどなかつた。彼等の目的は唯だパンにあつた。彼等は革命が成功すれば牛乳が無代で飮めるやうになると思ひ込んで居たと云ふ說もある。我明治維新の改革にしても、勤王論に實際の活動力を與へたものは個人の生活問題であつた。門閥制度によりて絶望の淵に沈める下級士族、長子相續制度によりて生活を危くされたる次男三男の輩は、勤王論を知ると知らざるとに拘はらず、相率ゐて奮起したものである。

命あつての物種である。然れば孟子も恒產なければ恒心なしと云ひ、是の故に明君は民の產を制して必ず仰いでは以て父母に事ふるに足り、俯しては以て妻子を畜ふに足り、樂歲には身を終るまで飽き、凶年には死亡を免がれしむと言つた。是れマルクスが物質的奴隷狀態は精神的奴隷狀態を生み出すと見たのと同一見解である。尤も孟子も恒產なくして恒心あるは唯だ士のみ之を能くすと言つた通り、哲學上の人生觀には種々の主義提唱があるけれども、唯物史觀は歷史論として確かに一面の眞理を有する。

所が現代の社會組織は人間の生活に適合して居るか、生產と交易は各人の生活を幸福ならしむべく適當に行はれて居るかと

云ふに、吾人は決して現狀に滿足することは出來ないのである。富む者は益々富んで、遊んで贅澤に生活し、貧しき者は愈愈貧しくなつて、稼いでも稼いでも生活は不安である。恐らく十八世紀の政治的革命者は、吾人に斯んな社會を遺さうとは豫想しなかつたであらう。彼等は封建制度の壓制から民衆を解放し、自由主義によりて永久の平和を創造し得たと信じたであらう。

所が結果は意外であつた。封建制度に於ける特權階級の壓制は、私有資本制度に於ける資本家の橫暴と代り、封建的罪惡は自由競爭の詐僞、瞞着、賄賂、僞善、脅喝などに代り、劍に依りての壓制は小切手に依りての壓制と代り、軍隊に依りての征服は大機械に依りての征服と代り、門閥の世襲は財產の世襲と代り、代つたことは代つたが、其の壓制や罪惡は依然として變ぜずと言ふよりも、寧ろ更に激烈となつた趣がある。斯くして有產階級と無產階級、資本家と勞働者、使用主と使用人との鬪爭が開始せられ、土地資本の共有、自由競爭の防止を主張する者が現はれた。是が卽ち社會主義である。社會主義の起つたのは當然ではないか。

吾人は社會主義の發生は世界の大勢であつて到底防止することと能はざるものと信ずる。併し其の主張の一々に贊成するものではない。第一我國體の基礎を破壞するやうな過激な變改は決して吾人の生活を安固ならしむる道ではないと信ずる。現在は過去を離れて其の存在を想像することは出來ず、將來は現在の續きである。新概念は必ず舊概念の上に築かれ、新事實は必ず舊事實から生まれる。故に吾人は歷史を離れて生活することは出來ないのである。如何に過激論者が口に急進論を唱へても其の實際生活は歷史を破り得ない。現に獨逸や露西亞の社會主義者もイザとなればカイゼルやザーと共に戰爭に從事したではないか、スパルタカスやボルセヰイキの如きも、結局止まる所を知るであらう。吾人の生涯は梯子を昇るやうなもので、手は常に上段に、足は常に下段にあらねばならぬ。若し手と足とを同時に同一階級に置けば忽ち轉倒するのだ。手は理想で足は現實である。鐵は堅くして且つ鍛へば如何やうにもなる。卽ち堅硬性と可鍛性とを備へて居る所に長所がある。人間も堅硬性と可鍛性とを有し、進步と保守との程よき調和を圖ることが、最も安固なる生活を得るの道であらうと信ずる。

要するに吾人は國家社會主義に左袒するものである。國家社會主義といふ名稱は、今や一般に認められて居るから用ゐるのであるが、此の名稱が可笑しいなら何と言つてもよい。兎に角國家の權力で社會主義の一部若くは或程度を實行しやうと言ふ

のである。是は頗る姑息の妥協として、社會主義者は勿論一部の學者にも不評判のやうであるが、實際に於ては殊に日本に於て最も適合した政策であらうと信ずる。而かも此の政策ですら日本に於ては容易に行はれないで、一方社會主義者を危險思想者として壓迫した。何と云ふ心得違ひであらう。全體危險思想とは何だ、政府は資本家の奴僕であるか、番犬であるか。社會主義は資本家に取りて危險思想であらうが、私有資本制度は社會主義者に取りて危險思想である。政府は公平冷靜に兩者の主張を聽き、國民多數の意見に從つて法律を改正又は制定しなければならぬではないか。而かも一方に對してのみ頭から危險思想とは何だ。尤も日本の社會主義は幸德一派の自暴自棄的な狂態のために禍を蒙つた。假令官憲の壓迫に激發された事情もあつたにせよ、實に無分別な暴擧で、爾來社會主義者と言へば一般國民をして戰慄せしめ、誰れ言ふとなく社會主義を危險思想と呼ぶやうになつた。政府が社會主義者を怖れ、彼等を壓迫したのも無理のない話で、今日でも彼は社會主義者であると言へば、國民以外の或物のやうに一般人の耳に響くらしい。吾人ですら一種異樣に感ずるのである。

予は彼等と直接の交際はないが、予の交際する人で彼等と交際して居るのは幾人もある。其等の人から聞いた所を總合すれ

ば、彼等の多くは頭腦もよく、研究にも熱心で、學も頗る深いと云ふ。而して彼等の多くは學資なくして正則に學校の課程を踏み得ず、力行苦學したものか、然らざれば變な功名心に囚はれて居るものである。前者は所謂繼子根性が骨までしみ込み、猜疑心と嫉妬心が強く、時に陰險殘忍な行爲をも敢てする。後者は才を恃み氣を負ひ、人の言はざる事を言ひ、人の是とする所を非とするアマノチヤク的言動を爲して獨り喜ぶ風がある。總じて人と調和せず、同情、思ひやりがない。予が聞いた所では大體這んなものであるが、當れるか否かは知らぬ。果して是れが事實とすれば、彼等は危險思想を有せずとも人は團體生活の害物として彼等を排斥するであらう。彼等の主張が實現されないのは、一面彼等自身の罪でもありはしないか。彼等は自由競爭を排して相互扶助を主張する者である。と解して宜いならば何故彼等はもつと素直にもつと寛量にならないのか。彼等は政府が彼等を壓迫すると言ふけれども、彼等にも亦た飽くまで我意を通さうとする傾向性癖がありはしないか。予は彼等の學說主義を變じて他の學說主義と妥協せよと言ふのではない。(妥協する餘地があるならば妥協するを可とするが) 又た其の主張中の或者を行ひ他を行はなければ全體の組織を破壞して却つて弊害があると云ふならば別問題であるが、吾人の見る所では必ず

しも然うではないと思ふ。果して然らば行はれるだけの事を着着行ふやうに努力するのが宜いではないか。彼等が其處まで素直に寛量になることが出來れば、政府も政治家も資本家も喜んで彼等の說を聽き、以て妥協點を發見することに努め、彼等と手を携へて社會改革に從事するであらう。時代は變じた今は資本家も政治家も醒めかけて居る。土地國有の如きは理論として反對する者は殆んどなく、直ちに之を實行すべしと說く政治家が貴族院にすらある。獨占的事業や生活に必須なる大生產事業の國營に關しては、理論として異議を挾む者はないけれども、イザ實行となれば、資本家の魔手が政界に伸びて容易に實行出來難い狀態であるが、社會主義者は先づ這んな問題から着々片付けることに努力しては何うだ。而して徒らに過激な事を論じて拘引されたり、發賣禁止に會つたりするよりも、公々然と論議される範圍で演說もし、新聞雜誌も出した方が社會改革の爲めに利益ではないか、若し夫れ社會主義の爲めに社會主義を說き、一種の功名心の爲めに過激說を唱へると言ふならば將た何かを言はん、トテモ吾人の相談相手にはならぬのである。

最後に吾人は社會主義者と共に勞働組合の組織を希望する。日本人は槪して勞働を嫌ふ傾向がある。中學校を卒業すればモウ勞働に手を觸れない。百姓や勞働者の子供は、小學校でさへも卒業すれば下級の書記や官吏にならうと望む（勿論一種の勞働者ではあるが）。是れは勞働は賤民の爲すべきもの、勞働者は牛馬の如く壓制されるものと云ふ傳習的の思想に囚はれて居るからである。是れは實に產業のため憂慮すべき事で、此の弊を救ふには勞働組合を組織せしめ、彼等を產業界の一要素として資本家に對する地位を認めてやらなければならぬ。即ち產業界をしてデモクラチックたらしめねばならぬ。孟子は恒產なくして恒心あるは唯だ士のみ之を能くすと言つたが、今日の自我に目醒めたる者は孟子の所謂『士』なるもので、單に收入が多いからと言つて人格を認められざる仕事には從事しない。一寸の蟲にも五分の魂だ、自我の尊嚴を汚されやうよりも寧ろ死せんとするのである。資本家の或者は、今日の勞働者は組合を要求して居らぬ、要求しないものに與ふる必要はないと言ふ。資本家は這んな勞働者を相手にして產業の發達を期することが出來ると思ふのか。

重ねて吾人は我國の社會主義者に國家社會主義者たらんことを勸める。國家と言へば彼等の耳には妙な風に響くであらう。國家とは壓制の代名詞の如くに響くかも知れぬ。其れは獨逸の官僚主義者が言ひ出した事であるから尙更ら悪感情を惹起するであらう。然れどもデモクラシーを實現した國家ならば、其の

權力に服從しても間違ひはなかるべき道理ではないか。吾人は日本の國體と調和したるデモクラシーを主張するのであるが、共れでもまだ日本には吾人の滿足するほどデモクラシーは實現されては居ない。是れ亦た努力しなければならぬ問題である。要するに吾人の理想はデモクラチックの國家をしてソシアリズムの政策の或程度を實行せしめようとするにある。社會主義者諸君以て如何となす、何うしても妥協は出來ないのか。

▽社會主義者の似顔

鐵拳禪

一

社會主義者、民主主義者、過激派――此の三つの者が少くとも軍閥官僚の當面の脅威となつてゐる。恐怖は幻影を生み、幻影は彼等が恐怖の搖籃に成長して、その脅威を豫想外に大きく譬へば机上の一寸法師が老眼鏡下の大入道と見えるやうな者だ。で、彼等はさもない物音にも神經を尖らせ、提灯の影にも疑心暗鬼を生じ、月夜鴉の浮かれ啼きに胸を戯かして、常に不安を感じ、何とかせねばならぬと焦慮してゐる。その焦慮は、總て取締の上に現はれ、壓制、壓迫、拘束から進んで、更に軍閥官僚の強力なる電氣化掛に由つて、それを絶滅せんとする。けれども、自由の野に育つた處の主義主張は、如何に強力なる器械力を以てしてもそれを芟除し盡すことは出來ぬ。昨勢の日光の普く降り注ぐところ、その一本でも半根でも潑溂たる生氣を失はざる限り、必ず健全なる發達を遂げるに相違ない。大都會の坦々たる甫道の中にも、一本の青草が頭を擡げる。滅さんとする焦慮よりも、生きんとする努力の方が、遙かに力強いものであることを見逃してはならぬ。限ある軍閥官僚の器械力を以てして、この生きんとする無限の力、蒼谷々も滿さんとする新緑の精を、何うして絶滅し得ようぞ。併し恐怖する者の眼から、その恐怖を取り去らざる限り、眼前の白衣の幽鬼が枯尾花であることを頷かしめることは出來ぬ。軍閥官僚の脅威者たる三つの者は、平和の社會戰に於ける敵國として彼れの眼中に逆睫毛の如く殘るだらう。

最初彼等の恐れたのは社會主義だつたが、今日では非常に民主主義を怖れてゐる。デモクラ屋といへば、彼等は毛蟲のやうに嫌つてゐる。その毛蟲の本體を理解して嫌ふのでなく、都會の婦人が自分の眉毛が毛蟲のやうであるとに氣付かずして、毛蟲と云へば本能的に嫌ふやうに、彼等はデモクラ屋に對して保

毛を探つてゐる。既にデモクラ屋を毛蟲とした彼等は、過激派の思想を忌み嫌ひ、過激派の運動を怖れ戰くこと、地震雷火事親爺の比にあらざること勿論なるも、その現象がまだ眼の前を掠めないので、泥縄式の騒ぎだけは差控へてると云ふ風だ。が、中にはデモクラ屋が飛道具を擔ぎ出せば、過激派になるものだと思ひ、民主主義即過激派と誤解してる者すらある。兎に角デモクラシーは、彼等の到底解し得ない所のものだ。尤も恩給將校の中には、このごろ國家社會主義を唱へ出した佐藤鋼次郎がゐる。何の爲に國家社會主義を擔ぎ出したのかは知らぬが、縱令恩給將校にもせよ、職業的軍人の中から、彼等の最も忌み嫌つて居た『社會主義』の四字を商標として、軍閥特製の丸藥なり散藥なりを賣出さうとするのは、確かに注目を値する。時勢に引摺られて玆まで來たのだと云ふやうな感じもある。斯うしなければ、世界思潮の中に生存し得ないと云ふ事は、何と云ふ社會の變遷だらう。併し彼等の社會主義は、眞正の社會主義と比べて、どの程度までまがひ物で無いことを得ようか。軍人などの單純な頭では、社會主義は貧富の懸隔をなくす事だと云ふ位な事は解つても、それ以上デモクラシーの思想を說いても、それは危險だとばかり絕對に排斥して、耳を傾けようともせぬ。然るに彼れは、國家社會主義の提唱者であり、老壯會の中心人物であるのだから、總ての新主義新思想に對する理解は有らう。國家社會主義は彼れの實行せんとする理想の一段階に過ぎないかも知れぬが、彼れが時事問題に對する言論等が著しく軍國主義的色調を帶びるを見ると、何うも社會主義など云ふことが其の本音で無いやうに思はれてならぬ。それでも、職業的軍人中には、彼れの主張を目して『佐藤もあぶない綱渡りをやつちやる』などと云ふ處を見ると、頑冥な軍閥に在つては、是式の事もなほ危險思想なのだ。世人の見て、黴臭いと思ふことでも、案外軍閥の刺戟劑となる。この意味に於て、彼れが丸藥乃至散藥の功能を認めることが出來よう。

二

日露戰役前後に於て、我が社會主義者は目ざましい活躍をした。目ざましい活躍と云つた處が、實際多寡が知れたものだつたが、今日のやうな眠つて居るのか、死んで居るのか分らない狀態に比すれば、確かに目ざましい活躍であつた。當時の活躍は專ら主義を宣傳する爲のものであつて、主義の實行には取掛つて居なかつたが、官僚はそれを阻止し迫害する方針の下に、所謂取締を嚴重にしたので、自然それに反抗するやうな態度に出で、過激な行動を敢てするやうになつた。治安警察法違犯や新聞紙條例違犯で、牢獄に呻吟する者が漸次多くなつた。一人

になつた。それでも今日のやうに、女の爲やら、感情の衝突やら、學説の相違やらで分裂せず、社會主義と言ふ大傘の下に團結して、一致の運動をやつて居た。尤もその時分でも、多少の派別があつたが、小異を捨てゝ大同に就くと云ふ風で、然う小ぜりあひは無かつたので、社會主義者と云へば鞏固な團結の下にあるやうに思はれたが、だんだん勢力を得るに從つて、官僚の壓迫も峻烈の度を加へ、それと共に同志者の離叛、軋轢、分裂と云ふやうな事が行はれて、表面甚だ振はなくなつて行つた。無論今日でも彼等は眠つて居るのでも、死んで居るのでも無いが、前科者として嚴重な監視の下にあるので、手も足も出ないと云ふ有樣なのだ。以前隨分隨所に集會が開かれ、その唯一の機關紙たる『平民新聞』が五六千の讀者を持つて居たのだつたが、官僚に睨まれて永續することが出來なかつた。殊に幸德事件のあつた後は、社會主義の四字どころか、『社會』とか『革命』とか云ふ文字までが忌まれ、それ等に關係ありと見做された論文、小說、詩集等が五六十種も一時に、數年前の發行の分にまで溯つて、發賣禁止を食つたものだ。第一次西園寺內閣が社會主義の取締が手溫いと、軍閥官僚に突つ込まれて、それが爲に內閣が瓦解した程、社會主義者は國本を危うする者のやうに恐怖され、

それ程に猜疑された社會主義が、それ程恐怖すべきものでも無さ相に思はれ、恩給將校の肝煎で國家社會主義の會合が出來るに至つたのは、時勢の進運にも由らうが、又民主主義の思潮が横溢し來つた爲で無からうか。この勢で進んだならば、洋行中の爲政治家尾崎行雄や後藤新平等が歸朝せぬうちに、軍閥を利用して一旗擧げんとする社會主義者、若くは潔白なる青年社會主義者の手に依つて、勞働黨の組織を見ずとも限らぬ。往年有力な社會主義者に依つて首唱された社會民主黨は、結黨禁止の嚴命でぎやふんと參つた。今後の形勢は揣摩を許さないが、國家社會黨とか、尊王社會黨とか、立憲勞働黨とか云ふものが、野心家の手に由つて組織されるでないかと思ふ。併しそれは從來の事だが、今日社會主義者と稱されるは、どんな人々だらうか。必ずしも世人の想像するやうな、前科者ばかりで無い。中には立派な學者もゐる。

往年社會民主黨の首唱者は、安部磯雄、片山潛、木下尚江、川上清、西川光二郎等だつた。片山、川上は共に、米國に去つてゐる。川上は米國の操觚界に於て、巨然たる大家となつたさうだが、今なほ社會主義の研究を棄てずに居る。片山は曾て西川と『社會新聞』を發行し、暫くして或事情の下に手を分つに至

つたが、彼れは依然として同紙の發行を續け、西川は別に『東京社會新聞』を創刊した。當時穩健な社會主義者で、赤旗などを振廻して大袈裟なプロパガンダをやらずに、實際問題に對して少しづつでも社會主義的解決の歩を進めようとする風だつた。他の過激な、華々しい活動家から見れば、至つて爺臭い地味な遣り口だつた。我が社會主義者を代表して、萬國大會に出席したりしたので、彼れの名は歐米に知られてゐる。その穩健だつた社會主義者は、今は急進社會主義に傾いて、過激な運動もやり兼ねまじき元氣だと云ふ。木下は信州の辯護士であつたが、熱烈な彼れはそれに滿足することが出來ずして、遂に社會主義者の群に入つた。彼れの筆に成つた『火の柱』とか、『良人の自白』とか云ふ數種の小説は、彼れの自叙傳ださうだから、それに由つて彼れが社會主義者となる迄の經路は略窺ふことが出來る。彼れが文章は洗錬された、精緻巧妙[illegible]のやうなもので無く、寧ろ一氣呵成のなぐり書きのやうなものだつたが、熱泉の迸騰するやうな他の肺腑を突かずに措かないやうな鋭利さがあつた。率直の中に、強い魅力が潜んで居た。その文章の如き熱辯は、又多くの聽衆を囚へた。今は死火山のやうに、靜かに東京郊外に暮して居るが、トルストイのやうな生活と云へば、德富蘆花よりも此の方がより多く然うであるかも知れぬ。社會主義其物を普及した點に於て、彼れは當時の何人よりも力あつたと云はれて居る。

　西川は牢屋疲れに疲れて、最う社會主義者を廢業したのだらうと貶す者もあつたが、或代議士は彼れを稱して、我が邦唯一の基督教的社會主義者だと云つた。彼れはその信仰の爲に、無教會の內村鑑三に適き、自由教會の松村介石に赴いた。それから社會主義に這入つて行つて、今日に至る迄には、隨分激しい運動もやつて來た。偶ま生活の爲に健康法の著述をやり、天數組で濟まさうとするので、食へない人間のやうに思はれたりする。さうした同志の盛衰を見て、大した浮沈も無く、終始一貫の態度を取つて進んだのは安部だ。彼れは同志社を出て、早稻田大學の敎授となつて居る。過般同志社大學總長の後釜を充す爲に彼れを擔ぎ出さうとしたが、彼れは總長を排斥して、その椅子を狙ふ野心家と思はれる事を恐れて、それを背んじなかつた。それ程彼れは出所進退を重んじ、輕々しい行動を取らぬやうに心掛けてゐる。だから、彼れは他の社會主義者のやうに輕擧妄動もせず、又官學に衣食する學者等のやうに變說改論もせずその志す所の研究の歩を進めてゐる。最初新渡戸稻造、田島錦治等の博士連が社會主義に頭を突込んだが、何時しか埒外に出て了つた。神戸正雄、福田德三等の博士連も、社會主義に行き

たいのだらうが、社會主義者と云はれることを怖れる風がある。その間に在つて、堂々と社會主義の看板を掲げて居るのは河上擧だ。早稲田の安部と、京都の河上は、縦令その行き方を異にして居るにせよ、一種の對照たることを失はぬ。

我が邦に勞働黨とか、社會黨とか云ふ者を組織しようとした最初の人は矢張安部であつたが、手を換へ品を換へて運動して見ても、結黨を許されないので、その方面から手を引いて、社會主義研究の書窓に向ふやうになつた。河上は『無我愛』の信仰から社會主義に這入つて、始めから書齋の人として、學究的研究をやつて居た。筆は却々達者なものだから、盛んな著述をやる。二十年間たつた一冊のノートで教授の飯を食つたなどと云ふ、所謂功勞ある官學の博士とは違ふ。讀書慾もあれば發表慾もあり、己れの書齋を社會に向つて開放すると云ふ風だから、自然人に知られて來る。安部は一個の學究で終らうとはせず、多少社會的運動をやつて見たいと思ふ肚はあるだらうが、教授の肩書で世渡りが出來る處から、都市改良の研究とか、勞働問題の研究とか云ふ事を孜々やつてるのを、無難の途なりとする。筆を執るには執るが、筆を執るよりも舌を動すことを得意とする。書齋を出て演壇に立つと、俄かに活氣づいて來る。それ程彼れに活動して見たいと云ふ、生々した赤い血が躍つてゐる。が、彼れの現状には、科學的に[illegible]けて居れば、先づ先づそれで滿足だと云ふ風だ。近來の論文では、東京市の土地市有を主張し、富豪邸宅の制限を力説したが一寸注目を値する。兎に角彼れが書齋の机上論を離れて、實際問題に接觸して、それを眞面目に研究し、解決しようと努力する所に、彼れが活學問の面目を見ることが出來る。

三

官學の河上、私學の安部は、かうして立つて行けるだけ、教授と云ふ者のありがた味はあるが、賣文社の堺枯川になると、然う自由に演壇に立つと云ふ譯にも行かぬ。集會に出席すると云ふ譯にも行かぬ。やつて行れない譯は無いのだが、彼れの身邊には絶えず警察眼が光つて居るので、少しでも活動狀態を呈して來ると、警戒網が嚴重になる。所謂手も足も出ないと云ふ境地にある。マルクスの眞骨頭を現はせば、直ぐ鐵槌を下されるから、まあ『猫のあくび』でもやつて居ろと云ふ事になる。福岡日々新聞で新體詩人の月旦を試みたのが文藝界の評判となり、萬朝報に入つた時は最う田舎記者の殼を脱して、一廉の青年評論家となつて居た。その頃同紙記者の幸徳と相知つて、社會主義の研究に沒頭するに至つたので無いかと思ふ。日露戰爭の際に於ける萬朝報の非戰論は、可なり天下の耳目を聳動したもの

だ。その中には、無論内村・幸德・堺なども居た。社會主義者の著しく危險視され、毛蟲のやうに嫌はれ出したのは、それ以來だ。今日デモクラシーを主唱する者を國賊呼はりするやうに、軍閥官僚の一味は矢張社會主義者を國賊扱にして彈壓した。軍閥官僚の勢の盛んな時は、何うすることも出來ず、反抗するより雌伏するのが得策だと云ふので、得策の方に趁つた連中も可なりあつた。併し堺等は、主義とする自己の陣地を守つて、著著と歩武を進めて行つた。それから彼等の難業苦業は始まり、一戰毎に創痍を蒙つて、到頭今日の境界にまで追ひ込まれて了つた。獨り彼れに限らず、社會主義の連中は、よく本を讀む、勉強をすると云ふ風で、絕えず新思想を攝取しようと努めてゐる。彼れは先年代議士候補に立ち、失敗を期しながらも尙よく活動して、社會主義者の存在を認めさせようとしたのだから、縱令賣文社に隱れて機鋒を斂めて居ても、今後何遍でも打つて出て、候補を爭ふだらう。學究的研究に沒頭せんには、彼れは餘りに野心があり過ぎる。大杉榮・山川均等は、その左側に立つ。

石川三四郎はカーペンターの崇拜者で、今は白耳義に行つて居るが、一時は盛んに社會主義の運動をやつたのだ。元來本鄕教會の基督信者で、或時は木下・西川等と步調を揃へて居た。又或時は福田英子と肝膽相照して居つた。然う華々しい活動の出來る男でないから、本國で屈托してゐるよりも、外國で自由な呼吸をしてるがましだと云ふ位な考で出掛けたのだらう。が、多年憧れて居た土地を踏んだのだから、幻滅の悲哀さへ無ければ、相應に研究も出來、元氣を恢復して歸ることも出來よう。

世間からは餘り騷がれないが、社會主義者の保護者として知られたのは、小泉策太郎と加藤時次郎だ。小泉は三申と號し、論文なども書いて居たが、同志者外には餘り注目されなかつた。代議士となつてから、あの時の三申は君と云ふやうな事で、政界の記憶に上つた。幸德の生活費は、多く彼れの手から出て居たと云ふ。加藤は獨逸仕込の外科醫で、平民病院の院長だ。ベーベルに心醉して、社會主義者になつたと云はれて居るが、可なり山師氣もあり、一寸何か取つて見たいと云ふ風もあつて、人に由つては毛嫌するが、他面稚氣があつて、與し易いと思はれたりする。白柳秀湖でも、山口孤劍でも可なり世話になつて居る。辯護士の山崎今朝彌なども、何程か庇護を受けてると云ふ。さうした世話好きな所が、彼れにある。社會主義者から德とされたり反感を持たれたりするのも、亦そんな所にあるのだらう。

（大正八・五・二〇）

▽賣文社の三人

白柳秀湖

堺利彦氏に會つたら一度ユックリ聽いて置き度い、後々の參考にもなるやうにと思つて居ながら未だ一度も聽き出さないのは、あの赤旗事件で堺氏が入獄した顚末である。アノ事件が起つた時、私はちやうど兵營に居たから詳しい噂はきかなかつたが、其後、或る人の話によると、錦輝館の山口氏出獄歡迎會で幸徳秋水の家に出入りする無政府主義者の一團が、赤旗を振廻して騷いだのは堺氏がどうしても無政府主義に贊成せぬので、此機會にウンと堺氏及び堺氏の仲間に當てつけようといふのでやつた仕事だそうである。處がさういふ事とは知らぬ臨監の警官が、スハこそ不穩といふので制止しようとしてトウ〳〵あの騷ぎとなつた。此說を眞として考へると堺氏は全くの卷きぞひである。無政府主義者からは當てつけられ、警察からは糞も味噌も一處にして縛つて行かれたのである。堺氏はそれを警察に行つて一言も辯解しなかつたのか、裁判所の方は何ういふ事になつて居るのか。兎に角、堺氏は赤旗事件の罪で數年を千葉の監獄に送つて又ヌウと出て來た。勿論、騷動の場所に居つては我知らず勢ひに制せられるといふこともあるから、堺氏は赤旗を[illegible]をきいて見度いとは思つて居るが、それよりも私の腑に落ちないのは、アノ話好きの堺氏が當時のことに就てはグウとも、スウとも云つたことがない。話を避けて居るとも思はれぬが、さりとて、赤旗事件の回想談だけは決してしたことがない。私にはそれが不思議でならぬ。餘り馬鹿らしくて話す氣になれぬのか、話せばくやしいから話さぬのか。

兎に角エライ辛棒である。恐ろしい忍耐力である。自殺は云ふべくして行はれぬといふが、それは普通の人の場合で、社會主義者にとつては自殺ほど樂なものはあるまいと思ふ。某々のやうに氣が違ふか、首でも縊つて死ぬか、尋常一樣のものでは首も縊らず、氣も違はぬといふ譯には行かぬ。それを氣も違はず、首も縊らず此世の中に生きながらへて兎も角も妻子を養つて居るといふことは堺君に限らない。よく〳〵エライことである。世の中にこれだけの忍耐力、これだけの辛棒を他の方面に用ゐて、成し得られざることがあるであらうか。

單に生きながらへて居るといふことだけでも偉いのに堺氏にしても、山川氏にしても、高畠氏にしても、其間に勉强をする。仕事をする。さうして其發表する所は熱心な忠實な研究の結果である。其說の是非善惡は別として、人としての忍耐、努力は眞に感ずるに餘りある。

社會主義者は二十年來の迫害になれてモウ神經が痲痺して居るといふ人もある。けれども私はさうは思はぬ。久しければ久しい程、年をとれば年をとる程迫害の辛さが身にしみて來る。そ

れが證據には、仲間の中に已れはモウ迫害が辛く、一身の都合が悪いから社會主義はやめだと云つて逃出す人があれば、堺氏は快く笑つてその人と別れる。腹の底に十分思ひやりがあるからだ。併し別れにのぞんでは、恁ういふことをいふさうだ。

逃るのもよからう。又、政府に降參して行くのもよからう。併し、逃げたとて一旦睨んだものを見遁す政府か。降參して行つたとて、オイそれと降參を聽入れる政府か。逃げても逃げても逃げ了せないのは見つともないし、又、降參してもそれを聽入れられなかつた時ほど慘めなものはないぢやないか。

堺氏がいつぞや猛然として木下尚江氏に喰つてかゝり、論難駁撃殆ど手も足も出ないほどにヤツ付けてしまつたのは、何でも木下氏が、社會主義を逃げて置きながら、或る雜誌で、跡に居殘つた連中を我利妄執の亡者のやうに罵倒したのに憤激したからである。木下氏は其時に殆ど論殺された形で、それからは、アマリ雜誌に名を出さなくなつて了つた。

堺氏は昔の平民社時代には、未だ文士氣質が多量に殘つて居て、同じく政治を論ずるにしても文學上のレフアインメントのない人間は腹の何處かに之を輕んずるといふ風があつたが、之は近頃スツカリやまつてしまつたやうである。其代り近頃では外國語の出來ぬもの、又、近代生活の基礎學問ともいふべき西洋の名著(例へば進化論の如き)を一通り忠實に讀んで居ないやうなものはテンデ駄目だといふやうな風を見せる。御無理御尤ものことであるが、堺氏は却々の凝り性で自分の道樂は是非人にもやらせ度いといふ風があるので、それが特に濃厚に人の目に付く。山川均、高畠素之の兩氏は即ち堺氏の此道樂に刺戟されて其才華を開いたもので、今や論壇第一流の人氣ものたらんとして居る。併し此道樂は堺氏としては政府から實際運動を許されぬ間のことで、實際運動を許されるやうになればソンナ事は云つて居られない。自然に止まつて了ふであらうと思ふ。

山川氏は、學問がある上に文章に自然の技巧があり、其頭腦が小氣味よい程に明晰で、而も何處かスツキリとして垢ぬけのして居る處、同じく他人の揚足取りで賣出したにしても、若宮卯之助氏の如くアクドくない。それに山川氏の揚足取りは、それを唯一の生命として乘出したのではなく、社會主義者として積極的に意見を述べることが出來ぬ處から、賣文の一方法として始めたのが偶然人氣を博したので、山川氏の才華は決して人の揚足取りを以て終始するものではなからう。高畠氏は學問に於いて山川氏と難兄難弟の間柄にあるが、文章は堺氏の系統に屬し、簡易平明、何等の奇もなく妙もない。今日の所は先づ流暢といふ程度で、堺氏のやうに枯淡の味と云つたやうなものは未だ附いて居ない。それだけに山川氏にくらべると高畠氏の方が危氣がない。危氣がないだけに俗受けは遠からうと思つたが、『社會主義と進化論』で賣出し、『資本論解説』で當てて居る所は茲元。山川氏と競爭と云つた形である。高畠氏にはサイエンスの外に哲學があり、哲學史がある。從つて高畠氏には思索の力若しくは演繹の力と云つたやうなものがキラキラと光る。山川氏の人氣は高畠氏に比較すると熱狂的であるだけに、其花盛りを如何にして永久に保持するかゞ將來の問題であらう。

評論

時論

山東問題解決の世界的背景

法學博士　吉野作造

（一）

人種差別撤廢問題の蹉跌に次いで若しやと前途の氣付かはれた山東問題が略ぼ滿足なる解決を見るに至つた事は、吾人の多數國民と同慶とする所である。而して此解決を見るまでには隨分内治も紛擾したのであるが、此間予輩の甚だ遺憾に堪へないのは、多數論者の意見が該問題の世界的背景を無視せる事である。隨つて日本内地では景氣好く通用するに拘らず、世界の眞中に行つては隨分奇怪至極と思はれたやうな事もあつたらうと思ふ。と云つて予輩は敢へて我國政府の取る立場を全然誤つて居ると云ふのではない。然し敵を知り己れを知るは兵家の要訣であつて、我に反對なる相手方の立場にも一應の理由ある事を明白に認識して懸らねば、我の立場に本當の强味が出て來ない。是までも我國の外交に敵を知らずして失敗の憂目を見たと云ふ例は少からずある。若し夫れ朝野論客の議論が相手方の立場に何等の理解を有たずして自分相手の議論を吐くが如き事あらば、之れ實に醜陋の極ではないか。此點を明かにするが爲めに、山東問題は既に解決を告げたのではあるが、又一つの新しい問題たるを失はない。

（二）

山東問題が日獨戰爭に起原し、大正四年五月の日支協約によりて既定の事實となつた事は今更ら云ふまでもない。夫の日支協約が支那側委員の云ふが如く脅迫に出でたものにしろ、兎に角支那政府の承認を經たもので、少くとも日支兩國間には今更ら爭論を繰返すの餘地は無い。唯問題は大正六年支那が新に獨

爭に參加したと云ふ事に由つて此既成の事實を破る事が出來るか何うかと云ふ點である。

巴里會議に於ける支那側委員の懸け引は、之に對する日本側の委員と同じく決して巧妙なものではなかつた。何となれば彼等は唯日本に對する多年の鬱憤を洩らすに急にして、大局より問題を打算するの明を缺いたからである。若し彼等が其發言の根據を「戰爭の參加」に置かうと云ふならば、彼等は須らく其主張を一般的ならしむべく、個別的たらしめてはいけない。支那が戰爭に參加した結果として斯ういふ一般的原則を承認して貰ひたい、其適用として山東問題は斯う處分して欲しいと云ふのなら可い。唯山東問題のみを提げて日本に食つて懸るのでは、何うしても其主張に利己的動機の痕跡を拭ふ事が出來ない。若し夫れ參戰の結果獨逸との條約が總べて無效に歸し、山東に於て獨逸の有せし一切の利權は當然支那に復歸すべしとの說の如き、又日本と支那との條約は總て壓迫の結果であるが故に之を無效と認めざるべからずとの說の如きは理に於て正しくない。戰爭は總ての條約を無效ならしむるものでない事は國際公法の教ゆる所である。壓迫を理由として條約の無效を爭はんとならば、少くとも之は巴里で主張すべき事ではない。北京と東京との間に爭はるべき問題である。尤も參戰を勸めたのは日本であるといふ點から、支那の收むべき參戰の效果を出來る丈け豐富にしてやると云ふ道德的義務を日本の負ふべきは言ふを待たないが、之を法理の問題として喧嘩腰にやつて來られては、日本としても已むなく之に應戰せざるを得ないのである。何れにしても支那側の取つた方策は決して巧妙なものではなかつたと云はなければならない。

併し乍ら支那側が斯くまで我々に反抗し來るに就ては、我々に於ても亦大に反省するの必要はある。我に猛烈なる攻擊を加ふるの故を以て前途多忙なる、學德双つながら高き顧、王諸君を罵倒してはならない。況んや彼等が徒らに某々國の煽動に乘つたと觀るが如きは、之れ餘りに自己の不見識を暴露するものであつて、予輩は寧ろ我國の操觚界の爲めに一種の屈辱を感ぜざるを得ない。

（三）

支那側の立場が公然正しくなかつたといふことは、必しも全然日本の主張が正しいといふことを意味するものではない。山東問題に就いて主として之に反對の態度を取つたのは米國であるが、之れには又相應の理由があると思ふ。世の輕薄なる論者は米國の此態度は支那側の賴みに應じた結果だとか、或は支那を支持し來り日本を壓へる爲めであるとか云ふが、その全然

誤りである事は支那側の要求と日本側の要求との間に大いなる逕庭ある事によつても解る。之は支那側は山東の直接回收を主張せるに反し、米國は一旦之を國際聯盟の手に收むべき事を主張して居るからである。支那の言ひ分は前にも述べた通り正しくないが、這の米國の言ひ分には相應の理由を認めない譯には行かない。

何を以て米國の言ひ分に相應の理由を認むべしと云ふか。之れは戰爭に關する最近の思想の變化に照し合せて考へなければならない。戰爭に關する世界の思想の變化とは何を云ふか。之れは箇別主義より共同主義に移つたことを意味する。一體今度の戰爭は勃發の當初は偶々戰爭の當事者が多數であつた爲めに、數國の一國と數國の他の一國との戰爭のやうに見えたが、理論上は實は箇々の戰爭の偶然の集合であつた。然ればこそ單獨不講和條約などといふものを結んで機械的に一致共同の便を圖つたのである。而して後に參戰した米國の如きは此單獨講和條約にすら加入しなかつた。蓋し彼は他の交戰國とは全然戰爭の目的を異にする。隨つて全然一致行動する事を約束しなかつたのである。斯くして當初は日獨戰爭あり、英獨戰爭あり、佛獨戰爭あり、米獨戰爭あつて、唯一つの世界戰爭あるのではなかつた。然れば獨逸には宣戰を布告したけれども、墺太利、土耳古には宣戰を布告しないと云ふものもあつた。然るに此點は最近一兩年以來何時とはなしに變つて來た。之を然らしめたものは戰爭目的の抽象化、隨つて又その普遍化である。之は條約などで何時定まつたと云ふ風にはつきり眼に見える段階を經て變つて行つたのではないから、明白に何時頃からと云ふ事は出來ない。唯何時とはなしに戰爭の主題が箇々の利害問題から段々に倫理的に抽象化するに隨つて、各交戰國の人民は不知不識我々は或る世界的正義の原則の爲めに此戰を戰ひつゝあるといふ風に考ふるやうになつた。尤も現代の人心が斯ういふ風に考ふると云ふに就いては歷史上に相當の理由もある。予輩は常に十九世紀百年間の歷史の結論としても現代の人心は此方向に嚮はねばならぬ事を說いて居るものであるが、詳しい事は茲に述べる遑がない。唯極めて最近に現はれた二三の出來事を數へるのでも、例へば參戰以前米國大統領の「勝利なき平和」を以て戰爭終結を見べしと云ふが如き、又露西亞の革命の結果非併合主義、無賠償主義、民族自決主義の三大平和的原則が机上の空論たる域を脫して實際政界の不可抗の勢力に成りしが如く、遂にウイルソンの十四ケ條の宣言によつて講和條件の事前の聲明といふ空前の現象を見たるが如き、皆戰爭の解決を利害の調節より移して道理の指命に移さんとする新思潮の發露に外ならな

い。斯く箇々別々に視られて居つた戰爭は、何時の間にやら一の世界的戰爭といふ如くに考へらるゝやうになつた。無論其後でも實際の問題に逢着すると箇別主義的戰爭觀がちよい／＼頭を擡げないではない。併し乍ら包括的共同主義の戰爭觀は一兩年來世界の一大底流を成して居つた事は疑を容れない。然ればこそ講和談判となれば先づ以つて國際聯盟の議とするとか、獨領占領地は一旦は皆國際聯盟の下に歸するとかいふ事に成つたのではないか。

斯くの如き新形勢は去年の春以來益々鮮明に成りつゝあつた。殊に去秋愈々平和克復を見んとするや、我同盟國の政治家が種々の議論をして居つたが、その多くは皆此新形勢の上に立つものであつた。我黨も亦此趨勢の上に立つて當時南洋諸島の國際聯盟管理案を提唱して世上の俗論に反抗したのであるが、當時殆ど顧みられなかつたに拘らず、今春に入り問題は愈々予輩の説の如くに解決されたではないか。山東問題に就ても亦此新形勢を背景として考へる事が必要である。斯う云ふ點から觀てウイルソンが山東も亦一切の戰利品と同じく一旦之を國際聯盟の手に歸すべしと主張したのは、決して不當の要求ではない。

（四）

尤も山東省は我國に取つて密接の關係あるばかりでなく、他の普通の獨領とも區別して取扱はるべき理由もないではない。尤も新聞紙の傳ふるが如く膠州灣は租借地だから普通の獨逸領とは違ふといふ日本委員の議論は何等の根據もない。租借地なるが故に日本が獨り國際聯盟の手を通さずに之を處分するといふ理窟は無いからである。

要するに山東に於ける日本の特別の立場は何等か他のもつと合理的な根據によつて主張するを要するが、唯前にも述べた世界の新形勢に照して一旦之を國際聯盟の手に取るといふ立場にはさう反對すべき理由はなかつたのである。强いて之に反對するは即ち既に廢つた箇別主義の戰爭觀を主張するものである。我國の新聞などが日支兩國間に定まつた問題を米國が愚圖々々云ふのは怪しからぬと言つたのは、取りも直さず世界的形勢の變化に盲目なるの致す所である。

唯夫れ山東は他の一般の獨領占領地と同一視すべからざるは言ふまでもない。第一に利害關係が頗る單純である。第二に一切の關係が既に當事者の間に解決を見て終つた。尚ほ其上日本が支那の承認の下に——縦令多少の壓迫を加へて得たものにしろ——相當に經營の手を進めて居る。斯う云ふ所から一旦國際聯盟に歸した上で更に特別の取扱ひを要求する理由はある。此

點を讓め主張して何等かの保障を得んことを求むるのは決して
不當の事ではない。故に我國にして山東問題に關して何等か特
別の要求を爲さんとせば、少くとも此立場を取らねばならなか
つた。唯之を主張するに急にして包括的共同主義の原則を紛亂
するが如き態度に出づるのは面白くない。此點に於て山東問題
の行惱みに憤慨した日本國民が伊太利のフューメ問題に聲援を
與へたのは大いなる失態であつたと云はねばならぬ。何故なら
ば伊太利のフューメに對する主張は全然其國民的利己主義に基
くものであるからである。若し日本が山東問題に關する主張を
強めるに就いて適當な道伴れを必要としたならば、之はフュー
メに着目すべからずして寧ろ埃及に道伴れを求むべきであつ
た。兩者の密接なる關係と其既定の事實なる點に於て、何れか
と云へば日本の山東問題は英吉利の埃及問題に該當する。山東
省は米國の主張通り一旦國際聯盟の手に渡し、包括的共同主義
の徹底に貢献する。而して國際聯命の內部に於て山東を如何に
處分すべきかと云ふ問題に就ては埃及と同一の原則に據る事に
して貰ひたい。埃及は英國其主權を回收する、山東は其主權を
支那に還附する、此問題以外日本の經濟的地步に就ては埃及と
同一の原則に據つて其承認を國際聯盟に求むるは決して不當の
言ひ前ではない。

然し之は唯予輩の一私見に過ぎない。如何なる立場から我々
の要求を主張するにしろ、兎に角世界的新形勢の趨向に着眼し
て、相手方の正當なる見解は飽くまで之を承認しつゝ、其範圍
內に於て我々の希望を達するに勗めなければならない。

（五）

兎に角今日の巴里會議は世界改造の空前の會議である。曲り
なりにも改造の大計畫に關する世界的經綸が此會合の中に動き
つゝある。遺憾ながら我に之を指導するの經綸なしとするも、
せめて我の立場を此形勢の下に何ういふ形に主張するを適當と
するかを誤つてはならない。形勢の趨向に盲目にして唯徒らに
利己的立場を主張するのは、恰も郵便局に往つて葉書をまけろ
と云ふやうなものである。講和問題問責大會などといふ景氣の
好い一杯機嫌の俗論の横行するのは、我々の太だ苦々しく思ふ
所である。幸にして山東問題は一先づ圓滿な解決を見たとは云
へ、今後我々の警戒を要すべき問題はまだ幾許も殘つて居る。
山東問題其物と雖も實は當初一部の俗論が主張したやうな形に
解決されたのでない事は、深く世上の省察を乞はねばならぬ。
是等を精密に研究するは亦以つて世界の斯形勢が如何なる壓迫
を山東に對する日本の要求に加へたかを語るものである。之を
壓迫と觀れば苦痛である。然し眞の日本國民の利益幸福は寧ろ

此新形勢に乘じ、且つ之を利導する點にあらねばならぬ。

朝鮮に於ける言論自由

朝鮮の騷擾に關し我輩が朝鮮人にも言ひ分があらう。先づ日本人自ら反省する事が問題の根本的解決の要訣であると云つたのに對し、暴徒に同情するとは怪しからぬと云ふ批難をちよいちよい受けた。妻君の酷使に惱む下女に一寸親切な言葉をかけたからとて、女中と怪しいと亭主に喰つてかゝるのは燒餅燒の女房の常である、之も昂ずればヒステリーと云ふ病人の扱ひを免るゝ事は出來ない。予輩は國民の多數が決してヒステリー患者にあらざるを信ずるが故に更に飽くまで同胞の反省を求めて國家の爲めに朝鮮問題の根本解決に資したい。

朝鮮に於て今後新たに施設するを要する事は一にして足らない。現に行つて居るもので改正を要するもの亦甚だ多いが、中にも鮮人の言論の自由を認むる事は焦眉の急務であると信ずる。固より言論の自由は絕對に之を許せと云ふのではない。內地に於ても可なり不當の壓迫を蒙つて居るのだから、多少の取締には固より異議を挾まない。予輩は元來此點に就いては可なり極端な自由論者であるが、併し朝鮮に於ては少くとも內地に於けると同じ程度の言論自由は、內鮮兩國に平等に與へらるべきものと思ふ。

此頃仁川から歸つた友人に斯う云ふ話を聞いた。先年或日本商人が鮮米を內地に輸入せんとして數名の朝鮮商人と一定の價格を定めて米穀の買入を約束した。朝鮮の商人は田舍に行つて米を買ひ集め約束の高を纏めていよ／＼契約の履行を迫つた。處が日本の商人は約束よりも遙かに安い値段を持ち出し、之でなければ買はないと言ひ出した。彼は朝鮮の商賣人には資本がない、此賣買によつて獲らるべき利益を豫想して借金して買出しに行つた事を知つて居る。値段が安いからと云つて持ち堪へ得ない內情を看破して元値以下に踏み倒さうと云ふのである。結局朝鮮商人が借金に逐はれ日本商人の云ふなりに元値以下で手放して了つた。斯くして日本商人は一攫千金の暴利を貪つた。朝鮮の成金が皆な斯んな風であるかどうかは知らない。官憲の暗默の保護が此種の日本商人に與へられたと云ふ噂は固より無稽の流言であらう。併し斯う云ふ事が決して稀な現象でない事も疑を容れない。而して此事を以て上級の責任ある官憲に訊すと、彼等は常に必らずそんな事が無い筈だ、と答へる。無い筈なのが現に有る。現に如何なる不都合が行はれて居るかを知

らずしては統治に成功する事は出來ない。而して彼等が無かるべくして而かも有つた事實を知らないのは專ら鮮民の口を箝したが爲めである。

我輩はよく朝鮮の友人から日本の官憲が道路を作るとか官衙を作るとか云つて無暗に土地を沒收すると云ふ不平を聞く。去つて之を當局者に問へば沒收では無い、鮮民が喜んで寄附したのだと云ふ。成程形は立派な寄附である。官吏が來て隣村では之れ丈けの地面を寄附して立派な道路が出來たと言つて暗に寄附を勸むれば、多年官吏を以て虎よりも怖ろしとした人民は一も二もなく寄附の勸誘に應ずる。けれども腹では木杯一箇の下賜に對して生業の唯一の基本たる地面を採られて心中言ふべからざる苦痛と不平とを蓄積する。寄附を奬勵する事が可いか惡るいかは姑く別問題として、土民が實際どう云ふ感情を之に注ぐかを知らずしては之れまた統治に成功する事は出來ない。官憲が此等の事情に甚だ迂濶であるのは畢竟彼等に自由なる意思發表の機會を與へない結果である。

（鮮民が如何に意思發表の機會を拘束されて居るかは、朝鮮語を以てする言論機關は御用新聞の「毎日新報」を外にしては只文學雜誌の「青春」あるのみである。之も定期刊行物として許されて居るのではない。單行本の繼續として事實上雜誌の形になつて居るのである。而も原稿のまゝで豫め檢閲を乞はねばならぬのであるから、之に依つて鮮民の赤裸々の感情を窺ふ事は出來ない。）

朝鮮の統治は朝鮮の山河と朝鮮の動植物を始末する事ではない。朝鮮の人民を支配する事である。統治の目的物は何處までも生きた人間の靈魂（たましひ）である事を忘れてはならない。「民は依らしむべし、知らしむべからず」を政道の要訣とした昔の支那でも他の一面に於て「群言博採」を怠るべからずとした。言論の自由を極端に抑へて統治に成功すべしとするは資本（もとで）無して商賣をするが如きものである。其必らず不成功に終る可きは言ふを俟たない。

對手方の感情を無視する政治は己れを以て人を量るの政治である。我が思ふ通りに必ず對手方の動くものと極めてかゝる政治である。自分丈けが非常に偉く、對手方を奴隷の如く馬鹿なものと見る政治である。併し生きた人間は決して自分の思ふ通りにはならない。一旦意外の出來事に逢ふと彼等は「斯う云ふ筈ではなかつたが」と云ふ。「筈」で天下は治らない。

我輩の友人に或陸軍の學校の校長がある。陸軍の學校では思想の混亂を妨ぐ爲めに新聞の閲讀を禁じて居る。斯う云ふ禁令

を出して置けば生徒は決して新聞を見ない「筈」と安心して居る。豈圖らんや彼等は日曜日に寄宿舍を出ると何よりも先に眼を注ぐのは一週間分の新聞の三面である。之では折角の禁令も何にもならぬではないかと言へば、何學校でさへ見なければ自分の職務上の責任に妨げがないと云つて居つた。對手方を活物として取扱はない政治の結果は常に斯くの如き悲喜劇に終る。否な單に悲喜劇に終るばかりではない。之に依つてどれ丈け眞摯の氣風を損ふか分らない。

予輩は日本の朝鮮統治が本當に正しい軌道に復る爲めに又斯くして本當に朝鮮人の苦痛とする所を除いてやる爲めに、更に進んで、内鮮共働の實を擧ぐる爲めに先づ第一着に朝鮮に於ける言論の自由をもつと廣く許されん事を希望する。

北京大學に於ける新思潮の勃興

北京大學に關して最近日本に知られて居る最も著しい出來事は、曹。章一派攻擊事件であるが、併し見樣に依つて、之よりも尙一層重要な意義を有すと思はるゝのは最近に於ける新思潮の勃興である。保守的思想家の猛烈なる包圍攻擊に逢うて、文科學長陳德秀君を初め、數名の教授の免職を見た事は、延いて昨今に至るまで教授學生間の物議を沸騰せしめて居る。

陳德秀君は北京大學に於ける新思潮の先驅として一兩年以來盛んに孔孟の教に忌憚なき酷評を加へて居つた。支那に於て孔孟の教に反對する事は、恰も我國に於て國體の尊嚴を非議するにも比すべきである。予輩の支那に居つた頃はまだ淸朝の盛んな時代であつたが、それでも公私の學校では孔子の靈を祀つて三禮九叩、の禮を盡すも國君の位に對して此れ程の禮を盡した事を見なかつた。革命後幾分思想上の變動を免れざるべしとは云へ、此點に關する國民の考の急に激變すべくもないと思はるゝから、大學の教授が憚る所なく孔孟の教を陳腐取るに足らずと說くを見て、世人の愕然として色を失つたのも之を想像するに難くない。中にも舊派の學者は「保存國粹」「維持禮教」を標語として盛んに攻擊の矢を放つた。中にも文學界の耆宿林琴南が大學總長蔡元培君に與へたる詰問書の如きは最も朝野の耳目を聳動した。張元奇が書を教育總長に送つて大學總長の罷免を迫り、應ぜずんば議會に於て彼を彈劾すべしと脅かすに及んで問

國は更に大きくなつた。大總統徐世昌は大いに之を憂ひ、教育界の重要人物を集めて調和の途を圖らんとしたとさへ傳へられた。結局陳獨秀を初め數名の急進派の學者の罷免を見て一段落を告げた事は前述の通りであるが、併し北京大學を中心とする思想界の動搖は之より更に大いに盛ならんとしつゝある。

北京大學に於ける此種の風潮は今に初つた事ではない。蔡元培君が總長になつて以來の事である。彼は從來の情弊に係らず歐米に留學せる新進氣鋭の士を拔擢して眞の學術の振興を圖つた。爲めに、此一兩年來北京大學に於ける學術の研究には實に生氣潑剌たるものがあると云はれて居る。之れ寔に支那の爲めに喜ぶべき現象であるが、何處の國にもあるやうに之が偶々舊式思想家の老婆心を惱ましたのである。尤も陳君一派の說に突飛に過ぐるの嫌あるは掩ひ難い。筆頭の陳君の孔孟排斥論は云ふ迄もなく、彼の所謂「文學革命」は一切の陳きものに猛烈な批評を試みて居る。又彼の有力なる一味の胡適之君の如きは盛んに言文一致論を唱へて居るが、最近まで文章を高等文官の唯一の資格として居つた國に於ては如何にも突飛に思はれたのであらう。否それよりも極端なのは一切の漢字を廢してエスペラントを採用すべしとする錢玄同君の說であらう。されば北京大學から發行さるゝ「新潮」並びに「每週評論」などは殆んど全部口語體で書いて居る。北京大學の未見の友から最近數回手紙を貰つたが、之が總て口語體で而かも橫書であるのみならず、，は勿論？！まで附けて居る。文體が斯の如くなるのみならず、內容が自由奔放の氣に富んで居る事は云ふを俟たない。中にも此等の一派と關係ある「新青年」の如きは、思想文藝の兩面に亘つて可なり極端な傾向を示して居る。併し我々の大いに注目を怠るべからざるは此等の雜誌が極端な思想を傳へると云ふ事よりも寧ろ夫が如何に多くの讀者を青年の間に有して居るかである。舊派の連中は此形勢に狼狽して、中國固有の思想を發表する機關として、「國故」を發行し、又稍々穩健な中立標榜の雜誌としては、「國民報」を發行して之に對抗せしめて居るけれども、謂はば「我國」や「新時代」のやうなもので有爲の青年の間には殆んど無勢力である。

斯う云ふ風潮から今後何物が產るゝかは今の所豫言する事は出來ないが、兎に角彼等が徒らに外國を模倣するにあらず、時代の變革に覺醒して、舊衣を脫ぎ捨て新粧を以て乘り出さんとするの意氣に燃えて居る事丈けは疑ひを容れない。不幸にして先頃の暴動事件により、教育總長並に蔡元培總長の辭職を見、

之と先の數教授の辭職と聯絡して新運動に一頓挫を來すなきやの懸念なきにあらざるも、併し學界の多數が其復職を政府に迫つて已まざるを見ればそれ程前途を悲觀すべきものでもなからう。況んや一旦時勢に覺醒したる青年の意氣は、一時の壓迫によつて永久に屈するものに非ざるをや。吾人は北京大學に起つた此思想上の新運動に對し熱心に其前途の祝福を祈る者である。

小題小言錄

●鮮服鮮語の獎勵

或日本人が鮮服を着て朝鮮を旅行した所が到る處に於て意外の虐待を受けたさうだ。朝鮮を巧く治めるには我々日本人に朝鮮人と同じ苦しみを味つて見るの心掛がなければならない。此意味からして朝鮮に居る日本人の心あるものが、進んで鮮服を着けるやうになつたらよからうと思ふのであるが、又他の一方から云ふと、此風が段々盛んになれば、鮮服を着けて居るからとて必ずしも鮮人と限らないと云ふ所から、濫りに鮮服を着けたものを虐待すると云ふ弊風も少くなるだらう。之と同じ意味に於て、否之よりももつと強い意味に於て、朝鮮で仕事をする日本人はもつと朝鮮語を使ふやうになつて欲しい。向ふが日本語に熟達して居るから朝鮮語を知らなくとも實際の用に事缺かない事は云ふまでもないが、併し其上尙此方からも鮮語を話すと云ふ事は、どれ丈け双方の親みを深くするか分らない。眞の同化は此方のものを一から十まで押しつけると云ふ事ではない。少くとも學校教師などは鮮語の習得を資格の一要件とし、其制服の如きも鮮服にすべきであつたと思ふ。

●植民地に於ける教育制度

朝鮮でも臺灣でも土民が何か騷動でも起すと當局は必らず其源因を彼等の無智に歸するを常とする。そんならば大いに教育すればいゝのに、現今の制度は、殊に又其實際の運用は出來る丈け彼等に高等の教育を與へざらんとするが如く見ゆる。此明白なる矛盾をどう始末するかは今後植民政策を考ふるものゝ見遁すべからざる大問題である。內地人は內地人なるが故に常に土民の上に立つべしとする舊式の階級思想を外にして、土民の教育を強いて低めんとする理由は何處にあるか。最近京城に辯護士會の紛擾と云ふ事件がある。二三年前內地人の辯護士會と朝鮮人の辯護士會と合併して以來、會長の選擧は常に多數を占むる鮮人に歸して居つたのを、或は當局が認可しないとか、或は各方面の壓迫が強いて日本人を會長に擧げしめんと努めたとか云ふ譯で、其度毎に紛擾が絕えない。今度も一二票の差で鮮人が擧げられたので

ゴタ〱して居るやうであるが、一體鮮人が會長になつたからと云つて日本人に何の不面目あり、何の不利益があるか。尤も今度擧げられた鮮人の辯護士は會長として適當の人でないかも知れない。眞に適當な人が内地人中にあるのに、鮮人の排日思想が自ら其人の選出を忌避したと云ふ事實があるのかも知れない。けれども一旦選擧と云ふ制度を認めた以上は、誰が會長になつたつて構はない。斯んな事にまで日本人の單に日本人としての優越を主張すると云ふ下らない面目論が、どれ丈け朝鮮の統治を妨げて居るか分らない。

●布哇に於ける日本語學校の禁止

布哇に於て日本語の學校を禁止し、又英語を知らざる日本人の、教師としての資格を認めずとする法案が大多數を以て州會の下院を通過したと云ふ報道が、神經過敏なる我國論壇の物議を釀した事は讀者の知る處であらう。人種差別撤廢問題やら、山東問題やらで、不當に米國が一部の日本の惡罵の的となつて居つた際の事とて、之れ亦新たなる排日運動の一例として米國を罵るの材料に供せられた。予は玆に何も米國を辯護するの意思はない。只事實は事實として之を明白にしておくの必要がある。予の知る範圍に於ては、米國に於ては今度の戰爭に伴つて起つた新らしい思潮に鑑み、從來の如く或外國の移民の入國を絕對に拒否し或は之に極端な差別的待遇を與ふるの道理に背くを思ひ、戰後に於ては全然此方針を一變すべしとするの議論が段々に勢力を得つつある。併しながら過去に於てあの過ちを敢てしたに就いては、又相當の理由があり、而して或種の外國移民を快く受くる事能はざるの理由は今日でも尙殘つて居る。從來はさう云ふたやうな特別の理由あるから拒絕的移民政策をとつたのであるが、どうも之では良心の滿足を得ない。其處で今度は方針を一轉するのであるが、其代り入國を許した移民に就いては從來やらなかつた新たなる積極的方針を執らうと云ふ事になつたのである。斯くして去年以來米國西部には移民政策を一變する代りに、今度は大いに積極的同化政策を執るからいゝかと云ふやうな事を言ひ初めた。通俗な言葉で言へば、之までは米國に同化しないから拒絕したのである。今度は拒絕しない代り大いに同化して貰はうと云ふのである。其結果として新たに起つた一つの運動は日本語學校の取締と云ふ事である。蓋し彼等は日本語學校の存在を以て同化に對する一大障害と見たのであらう。之に就いては彼等の參酌を要求すべき他の幾多の理由あるは言ふまでもないが、只此種の運動が前と同じ系統の排日運動でない事丈けは之を明白にしておく必要がある。現に在留同胞の識者の中には、日本語學校の廢止にはおいそれと承諾は出來ないけれども彼等の積極的同化政策乃至運動には我々日本人として大いに好意を有つて對すべきの必要を說くものが少くない。

對獨講和條件の過酷

對獨講和條件の頗る過酷なる事は衆目の視る所を一にして居る。五月上旬英國勞働組合本部の發表せる宣言書は、恐らく歐米諸國の多數の意見を代表するものであらう。彼等は曰ふ、今度の講和條件は其重要なる部分に於てウイルソンの十四ケ條の宣言、休戰當初の聯合國會議の聲明並びにベルンに開ける國際社會黨大會宣言の趣意に反して居る。のみならず、又英國勞働者の公平正義の觀念にも反するが故に我々は之に對して責任を負ふ事が出來ない。而して斯くの如き過酷なる條件を規定した所以は、畢竟するに資本主義が帝國主義と妥協して巴里會議を動かした結果であると。英・佛・伊等の實際政治家が各々其利己的立場を主張して當初の原案を支離滅裂のものにして了つた事はウイルソンと共に我々の甚だ遺憾とする所である。我國の論壇が直接我國關係の問題に就き異見を樹てたるの故を以て、ウイルソンに過分の反感を表するも、國際聯盟も歪められ、講和條件も斯くまで過酷になつた責任を英・佛・伊等の國家主義的政治家に歸するに寛大なるは決して公平の態度と云ふ事は出來ない。何と云つても最近世界に磅礴して居る主潮から云へば講和條件の標準はウイルソンの宣明せる十四ケ條を基本とせなければならない。此點は獨逸の講和會席使節ランツアウ伯も同じ意見である。彼は其堂々たる宣言に於て「吾人は諸君と協力して十四ケ條の原則を基礎とする新世界の創造に努めんとす」と言つた。獨逸を敵として再び起ち能はざるの苦痛を與へやうと云ふ軍國的競爭時代の講和的態度は、國際聯盟を曲りなりにも作らうとする新時代の精神と相容れない。過去の世界を泳ぎ拔いて來た政治家は依然として舊時代を夢想して居るかも知れないが、平和の將來を憧憬する新時代の多數國民は、あの儘で進むなら恐らく講和會議の決定に對して著しき不滿の意を表さないとも限らない。何れにしても獨逸に對する要求はもつと緩和されなければならない。聯合國の委員は獨逸委員の要求には屈すまい。けれども彼等は果たして銘々の國内に於て或は近く起ることあるべき條件緩和の國民的要求に聞かざるを得るであらうか。

小平氏の新著を推奬す

友人小平國雄君は最近「デモクラシーと帝國の前途」といふ一書を公にされた。同君は永く米國に留學し、最近歸朝せられて專心多年の研究を纒められたのが此書である。寄贈を受けてまだ精讀するの遑を有せざるも、同君の學殖と見識とより推して極めて時勢に適當なる著作たる事を信じて疑はない。之れ茲に餘白を藉りて之を世上に紹介する所以である。

未見の友人に謝す

予の本誌に於て發表せる諸論に關して國內並びに海外の友人からいろ／＼貴重なる材料を送らるゝ事がある。住所の分つて居ない分に對しては一々答禮する事が出來ない。茲に本誌の餘白を藉りて此等の未見の友に、深厚なる謝意を表する。特に米國在留の堀内君に對しては有益なる材料の寄贈を有難く感謝する。

リンコルン

□定價貳圓
□税十四錢
□菊判總布
□大冊函入

デモクラシーの眞精神は彼の思想生活に光耀し世界萬民に向つて清新潑溂たる刺戟を提供す。

早稻田大學教授文學士 **内ヶ崎作三郎先生著**

リンコルは米國の誇たると共に人類の最大光榮也。彼が悲哀、力行、信念、及び犧牲は國民の限界を超越して人類の領域に無限の感化を及ぼせり。人生の最大殉教者、人間生活の眞の鞭撻者、吾人之を彼か生涯に於て見る。全篇是れ血是れ涙、而も無限の感激を包む。英傑傳叢書第九編也。速に一本を備へられよ

◇最新刊出來◇

『校歌ローマンス』著書

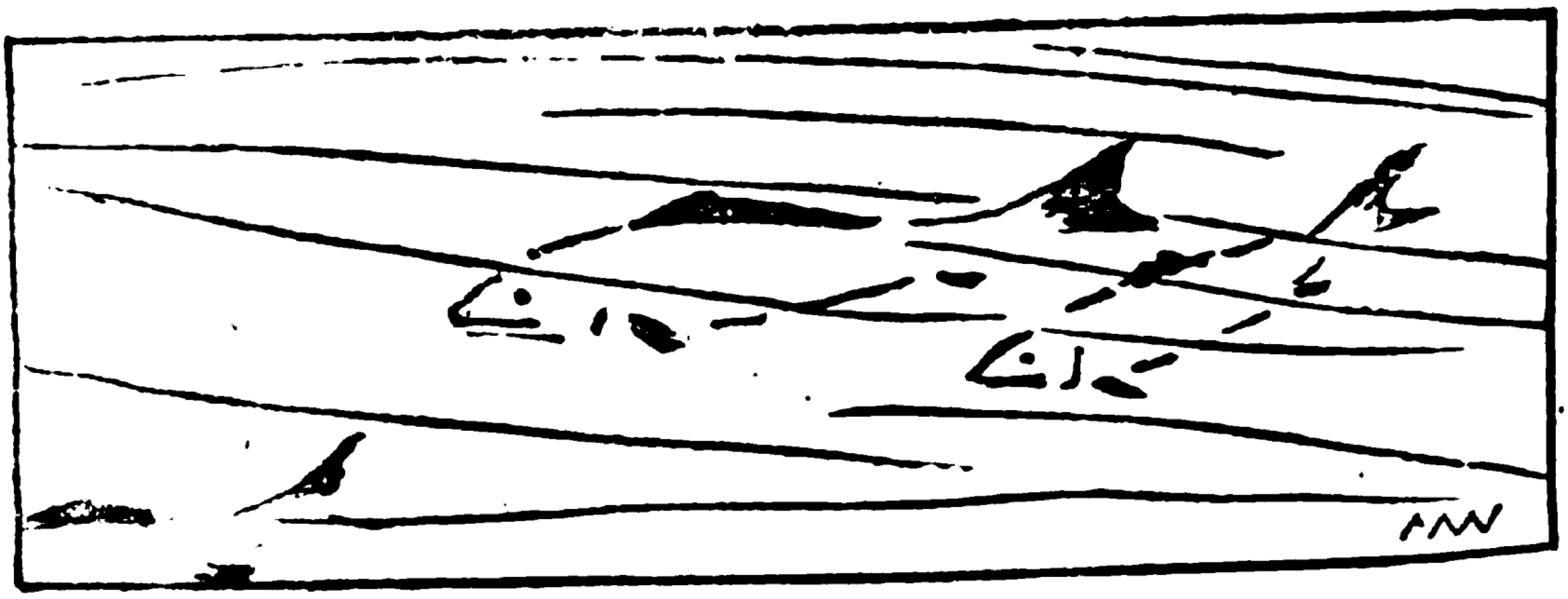
續校歌ローマンス

出口競先生著

定價壹圓 郵税六錢

前著校歌ローマンス(六十五錢郵税六錢)は好評嘖々として忽ち八版を重ねたり。前著は主として東京を中心とし、本書は東京、東北、信越方面東京以西、山陽道、南海道、北海道、九州の八部に分ち主として地方を中心とせり。全國有名なる校歌を網羅し學生の春を描いて血湧き肉躍る其文章に至ては天下一品

東京京橋南紺屋町 **實業之日本社** 振替東京三二六番



萎れた草

田山花袋

『何處か散歩して見ないか』

『散歩――僕は湯にでも入つて寢やうと思つてゐるんだ』から親友の原は眉を寄せた。

『好いぢやないか。芝居にでも行つて見ようぢやないか』

『行く氣はないね。今朝から頭痛がして困つてゐるんだもの』

爲方がないので、宗彦は『朝子さん、何してるの？』

『昨夕から、ライオンを描くなんて大騷をしてゐたつけ。まだ、一生懸命で描いてゐるだらう。見てやつて呉れ給へ』

宗彦は起つて、玄關に接した朝子の居間に入つて行つた。机の周圍には、紙や、繪具や、書籍が一杯散ばされてあたつが、宗彦の入つて來るのを見ると、朝子はいきなり机の上を袂で隱して了つた。白いエプロンは子供のやうに赤や青や黄の繪具で汚されてゐる。そのかくされた袖の下を強いて覗ふやうな氣勢を宗彦が示すと、

朝子は更に袖の上に顔を埋めて了つた。宗彦は凝とその突伏した姿を眺めた。

驚くほど長い間じつとしてゐてから、朝子は、

『あつちへ行つて下さい』

と言つて顔を擡げて笑つた。

明礬を引いた紙の上に、ライオンはかなり大きく手際よく描かれてあつた。朝子はもう見られて了つたから爲方がないといふやうにして、繪具筆を取上げて、ライオンの踏んでゐる地面のところをちよいちよいと無造作に塗り始めた。繪の具は既にところどころ塗られてあつた。

『今日は、宗彦さん、屹度入らつしやると思つてゐてよ』

『何うして?』

『今日はお天氣が好いでせう。かう言ふお天氣に、貴方は家にじつとしてゐられない性分ですもの?』

實際かれは天氣の好いのにじつとしてゐられずに出で來たのであつた。朝、床の中で眼が覺めた時、いつもと違つて非常に氣分が好いので、それで今日は天氣の好いといふことが知れた。起きて緣側に出て見た。果して空は靑かつた。朝日は庭樹を斜に紅く照らして、鳥が頻りに心持好ささうに鳴き交はしてゐた。かれは何處に行かうかと思つた。淺草の雜遝する群集の中に行つて、いかにも人生を樂んでゐるやうな人達の顏でも眺めて來やうか。それとも自分の唯一の女の友達を訪れて、久し振であの莞爾したやさしい顏を見て來やうか。しかしそれも大變だ、出て歩くと、いくら氣分が好いと言つても、矢張、疲れるにきまつてゐる。それよりも、靜かに落附いて家に寢てゐる方が好いかしら? などと思つた。その女の友達と言ふのは、他でもない、親友の原の妹の朝子で、その快活な、血色の好い顏や、小さな紅い唇

や、無造作に取結はない髪や、生々とした眼色や、さうしたものが常に宗彦の眼の前にチラチラした。砂糖のやうな甘い聲で、人を嘲弄するやうに少し唇を突出したりするその表情もかれは決して憎いとは思はなかつた。病める宗彦に取つては、殊に、此頃、さうした若い女の聲を聞くことが必要であつた。さうした若い女の聲や笑ひや表情は、熱した頭を冷めたい水で冷されるやうな快感をかれに與へた。

で、今日も遂に、朝子を見るために出かけて來たのであつた。

宗彦は室内をあちこちと眺め廻したが、小聲で私語くやうに朝子に言つた。

『芝居へ行つて見ませんか』

『さうね――』

始めは行つても好いといふ風に首を傾げて見せたが、突然、

『よしませう』

『…………』

宗彦はグッと小さな怒を胸に覺えた。かれはかうした首ない拒絶を豫想してはゐなかつたのであつた。

『行かない？』

『え』朝子はかう言つたまゝで、無頓着に頻りに繪具を紙に塗つた。

秋晴の町を此まゝ家に歸らうか、それとも何處かへ行つて見やうか、こんなことを思ひながら、宗彦はひとり靜かに歩いた。

自分の誘ひには誰も應じて呉れない。もう自分は誰にも相手にされない。かう思ふと、天地の間に見捨てられたといふやうな誇張した淋しさが犇々とかれの魂を取巻くやうに襲つて來た。女の鋭い天性で、朝子は默した自分の戀を知つてゐるのに違ひない。知つてゐて、そしてあゝした菅ない態度に出たに違ひない。それと言ふのも皆なこの身が病んでゐるためである。不治の病に罹つてゐるためである。それはかの女を見る自分の眼、または自分を見るかの女の眼ではつきりわかつてゐる。

かれはしかしすぐさうした思ひを捨てゝ了つた。あんな女が何んだ。あんな女は自分の戀に値ひしないと思つた。かれは病氣になつてから怒り易くなつたことを思つた。そしてその怒が病人によく見る執拗な毒々しいものであることを思つた。かれの考はまた朝子の方へ戻つて行つた。（俺は話は下手だ?。殊に朝子の前では一層さうである。よく吃る。よく顏をあからめる。しかし、吃つたり、體裁の好い口がきけなかつたりするのは、それだけこの唇が汚れたことを言はず、この眼が世間の汚れたいろいろなものを見ないからであつて、自分に取つてはそれが却つて、淨い口、無垢な眼であるといふ誇になる。旨く言へば、朝子だつて、内所で一緒に芝居に行く位は何でもないんだ。であるのに、躊躇した。何故だ?）その何故?に宗彥は又突當つた。屈辱と言つて好いか、女の冷淡を罵る心と言つて好いかわからないやうなものゝために焦々した。裏切られたやうにも、また人の心の頼み難いやうにも思はれた。

宗彥は胸部に少し疼痛を覺えて、輕く咳をした。それが二三遍續いた。汗が額に滲んで來た。紙に受けた痰には細い眞赤な線が入つてゐた。しかしそんなことには馴れ切つてゐるものゝやうに、無感覺な眼をして、暮秋の明るい光線の中にかれはこれを眺めた。

やがてかれは玉川の景色を見に行くことにきめた。で、電車に乗つた。また女のことが思ひ出されて來た。もう朝子

の家には行くまい。自分の戀した朔子は死んだことにしやう。そして遂に破れた自分の果敢なさを味つて見ることにしやうと思つた。ふと見ると、車内には女が二人乘つてゐた。かれはちよいちよいその方に眼をやつた。神の創造物の中では、何と言つても、女が一番美しく完全なものだと思ひながら、樂しむやうにしてかれはそれを眺めた。不幸にして、その女の美貌はその聲の音樂を持つてゐなかつた。（これで、もう少し好い聲の持主であつたなら、何んなに好いだらう）などゝかれは思つた。朔子がまた思ひ出されて來た。で、いよ〳〵かれは失戀したことにきめたが、それにしても、その失戀をこの二人の女の前にさらけ出して話したなら、二人は何と言ふであらうかと思つて見た。笑ふだらうか、それとも憐むだらうか。こんなことを考へてゐる中に、かれの眼には、衰へたかれ自身が映つて見えた。何の情熱もなくなつた眼と、溝のやうに皺り立つた額と、血の氣のすつかり失せ果てた唇と、ぼんやりして一ところをじつと見詰めてゐる姿とを持つたかれが――。

切符に乘換の鋏を入れに來た車掌に、かれは年寄のやうに低い衰心した聲で、「澁谷！」と答へた。氣が附くと、二人の女は何處かで下りたと見えて、そのあとには、請負師のやうな男と土工らしい股引をはいた男とが乘つてゐた。

かれは依然として大きな悲しみの下にあつた。大勢の人達の中にゐても、かれは全く孤獨であつた。電車の終點から玉川電車まで行く間をすら、かれはとぼとぼと足を引摺るやうにした。

玉川電車の方では、風が少し出た。何處からともなく冷めたい風が車内に吹込んで來た。それを宗彦は非常に嫌つて、いつそ家に戻らうかしらと何遍も何遍も思つた。それに、電車の動搖も市內の電車と比べて烈しかつた。今にも座席から振り落されはしないかと思はれるほどである。坂の上に來ると、行手に白い富士が見えた。

宗彦には、玉川は初めてであつた。電車だけの狹いレイル路が、阪にそつて勾配が急になると、前にはひろひろした

眺めがあらはれ出して來た。天高く、地濶しといふ感じが簇々と胸に上つた。やがて、電車を下りて、路でないやうな小さな飲食店の前を眞直に向ふに行くと、もう其處は河原で、石のごろごろした間に、綺麗な水が透き通るやうに日の光線を織り込んで流れてゐた。飲食店の前の畑には、霜にしほれた黄菊が叢を成して澤山にかたまつて咲いてゐた。宗彦はひろびろした川原を少し歩いて見たが、すぐ疲れて、そのまゝ水の流れる端に、風を避けるやうにして休んだ。

川原では、砂利を選つてゐる人足達が大聲に饒舌つたり怒鳴つたりしてゐるのがさびしくあたりに響きわたつてきこえた。宗彦はじつと水を眺めた。秋の碧い清い水は日を帶びてキラキラと美しく光つて流れた。

暫しはのんきにそれを眺めてゐたが、あまり暖かなので、かれは羽織を脱いだ。顔がのぼせて、頬があつく、胸がわるくなつて來た。熱が出て來たのであつた。かれは歸らうと思つて靜かに起上つた。

再びもとの處に來て、電車に乘つた。空には灰色に濁つた雲が出て、あたりは何となく陰氣になつた。かれは飽滿したやうな不快を絕えず胸に覺えて、堪らないほど手足を靜かに延ばしたくなつたが、しかもかれを乘せた電車は相變らず激しく動搖した。否、そればかりではなかつた、單線のために、ある停留場では、長い間もどかしく電車を待ち合はせなければならなかつた。あまりに焦れつたさに、かれは下駄で床を踏み鳴らしたりした。

ふとある光景がかれの眼に映つた。

山茶花の白く赤く咲いてゐる垣があつた。そこから尾の長い一疋の可愛い小犬が出て來た。始めはぼんやりして遠い地平線の上を見てゐたが、ふと、その鼻の先に、黄い羽蟲があらはれ出した。小犬は匂ひをかぎながら、激しくその羽蟲を追ひ廻した。羽蟲は低く低く飛んで行つたが、やがて急に、高い高い空の方へ舞ひ上つて行つた。小犬は急に吠えた。さながら羽蟲の急に見えなくなつたのに腹を立てたといふやうに——。それが宗彦には、言ふに言はれない無邪氣

さを感じさせた。小犬は猶二三度吠えたが、それで満足したかのやうに、やがて尾を下げて、再びもとの垣の中に入つて行つた。此處ですれ違ふ筈の電車の遠い唸りがやがてきこえて來た。

家に歸つて來たかれは、十里の道でも歩いたやうに疲れてゐた。腹が空いてゐないやうな氣も一方ではしたが、しかも夕飯はかなりに旨く食へた。唯冷めた燒魚がいくらか胸に觸つたやうな氣がした。暫し經つてから、かれは湯に出かけた。湯屋の浴槽からは、高い硝子窓を透して、碧い空の一部が見られた。かれは湯に浸りながらいつもそれを眺めた。しかし、その日は生憎曇つてゐた。

郡部に近い湯屋の午後は、日曜でも客は少く、大きな水槽に滴たり落ちる水の音は、がらんとした浴場に高くさびしく規則立つて響いた。宗彦は病氣にも拘らず、熱い湯に自分の肉が熔けて行くと思はれるほどそれほど長く入つてゐることが好きだつた。かれは長い間靜かにじつとして浸つてゐた。

湯から上ると、汗が止度もなく流れた。かれはそのまゝぴたりと洗場に坐つて了つた。脈搏が自分にもきこえるやうに高く高く躍つた。ダラリと膝の上に置いた手には、青い血管が際立つて太く蚰蜒のやうに走つてゐるのが眼についた。ふと痰が咽喉に支へたやうな氣がしたので、洗場の細い溝のところへとかれはやつて來て、つゞけて二つ三つ咳をした。と、いつもの痰とは違つて、水のやうなものが咽喉の奥から舌の上へと流れて來るのを感じた。吐き出すと、それは赤い血であつた。

かれはギヨツとした。

しかし何うすることも出來なかつた。かれはそのまゝ、板の間に腰を据ゑ、胸を押へて、出來るだけ落附かうと試み

た。成るたけあたりの浴客にも見せまいとした。しかし血はあとからあとへと出て來た。口から出さぬやうにしても、鼻孔の方に廻つて、そこからタラタラとかれの胸の上に滴つて落ちた。かれは暫くそこに蹲踞んだ。

かれの心はしかし冷靜であつた。外科醫のやうに冷靜であつた。かれは口や胸の血を綺麗に拭ひ、それが終ると、靜かに着物の脫いであるところへとやつて來た。體からは、汗がまだ流れてやまなかつたけれども、それを拭ふだけの動作でも、咯血を誘ひはせぬかと危まれたので、そのまゝ濡れた身體に着物を着せて、湯屋から出て來た。

『とうとう出たな』

かう思つたが、それと同時に、さびしい笑ひがかれの口の邊に漂つた。かれは冷めたい鐵か何かにでも觸つたやうな氣がした。やがて口の中に腥いものが一杯にたまつて來た。それをかれは辛うじて家まで押へに押へて戾つて來た。

格子戶を明けて上り端に來るや否、そこにあつた新聞紙の中にそれを吐いた。激しく咳が出て來た。（もう家だ。氣兼はいらない）かう思ふと、毒々しい血が咳と共に一杯に出て、あとには黑い血の塊のやうなものが續いた。窒息するばかりの苦しさが總身を震はせた。

かれは上り端の三疊に仰向けになつた。

『枕！　枕！』

かうかれは叫んだ。

奧から母親は慌てゝ出て來た。冷めたい鑛泉のために胸をわるくしてもどしでもしたのかと母親は思つた。その前に、かれはすべて鮮かな生々しい血を新聞紙にかくした。

『胸をわるくしたのかえ？』

母親はかう訊ねた。

宗彦は何かそれに答へやうとしたが、腥い液體がまた舌の上に流れて來たので、唯默して點頭して見せた。枕を頭の下にかつて貰つてから、そつと血を口から新聞紙に移して、

『氣持がわるくなつた、急に！』

『もどしでもしたのかね』

かう母親は心配さうに訊ねた。

『少し』

『燒魚がわるかつたんだらうね。先生に來て貰はうかね』

『もう大丈夫です。足が冷えるから、足袋を穿かせて下さい』

母親の觸つたかれの足は、死人のやうに冷めたかつた。それに、曇つた日の光線の惡い室内に、顏も蒼白く、額の長い髮の生え際に汗を光らせて寢てゐる姿は、唯事ではないやうに母親に思はせるに十分であつた。

『先生を呼んで來やう！』

かう言つて母親は起上つた。

『まア、そツとして置いて下さい。先生を呼ぶよりも何よりも、ソツとして、容態なんかきかないで置いて下さい』

かう宗彦は言つて、新聞紙も、塵箱に捨てずにすぐ前の溝川に流して下さいと頼んだ。母に咯血を見せたところで爲方がないと思つて、『中は見ない方が好う御座いますね』と附加へて言つた。

母親は新聞紙の丸めた包を持つて立つて向ふに行つた。宗彦に取つては、咯血の量の夥しかつたことが、しかもそれ

が悪い塊であつたことが、少なからず意外に感じられたが、しかも、すぐ醫師に來て診て貰はうとは思はなかつた。醫師も、これを何うすることも出來ないのをかれは豫めよく知つてゐた。

幸ひに、家の內はしんとしてゐた。かれは靜かに仰臥した。

かれは一時目をつぶつたが、再び明いた時には、曇つた日の軟かな光線が臺所につづいた女中部屋に流れるやうにさし込んで來てゐて、そこの柱にかけてある肴屋の通帳がさながら浮き出すやうに際立つてはつきりと見られた。と、毎日やつて來る肴屋の姿がはつきりそこに浮んで來た。それは二十五六のいなせな男で、眉毛の薄いのを氣にして、いつも墨で黑く塗つてゐるが、時には地まで眞黑にしてゐるのを見ることなども尠くなかつた。腹掛の丼の中には、いつも小さな鏡が入つてゐて、人のゐない所でそれを出して、顏を映して見たりした。宗彦は肴屋の通帳に目を留めてから、心の中に、"Death stares me in the face." などと繰返した。と、死の冷めたい呼吸がそのまゝ顏にかゝつて來るやうな氣がした。自分は最早此世にゐなくなつても、肴屋は矢張やつて來るだらう。今日は？　と怒鳴つてやつて來るだらう。そして奥から人の來ない間、鏡を出して引眉毛の自分の顏を映して見るだらう。その柱にかけられてある通帳も、いつものやうに母親と肴屋の手を往つたり來たりするであらう。かう思ふと、肴屋のぼての中の荷をあれかこれかと見廻しながら、安くつて旨い總菜の肴を母親が選んでゐるさまが歷々と眼の前に浮んで見えた。と、自分の體はたわいもなくふわふわと空中に浮動して行くやうな氣がした。心もそれと共に輕く輕くなつて行つた。睡眠(ねむり)がひとり手にかれにやつて來た。

再びかれが眼を開いた時には、肴屋の通帳は、夕暮近い灰色の光線の中に半ば埋まられたやうになつてゐた。かれは非常に長い間寢たやうな氣がした。再びこの肴屋の通帳を見たといふことが、何だか二度と見られぬものでも見たやう

な喜びをかれに誘つた。自分はまた生きてゐるのである。的確に生きてゐるのである。かれは靜かに自分の脈を數へて見た。七十五しかない――そんなわけはないと思つて、もう一度やつて見たが、矢張同じであつた。それに、さつきとはちがつて、頭もはつきりして、健康の折と少し違はないやうな氣がした。體にもまだ十分力が殘つてゐて、眠むる前のさつきのあの咯血は、遠く過ぎ去つた悪夢か何ぞのやうに思はれた。何をさし置いても、頭が晴々としてゐるのが心丈夫であつた。

『何うだえ？　心持は――』かれの起き出して行つたのを見て、母親はかう訊ねた。

『大變好い……』

『さつきつあの足の冷めたかつたこと！　私は吃驚した。餘り熱い湯に入つてのぼせたんぢやないか』

『さうでせう、吃度……。もうよくなつた。思つたより早く治つた……』

『今日は先生に診て貰ふ日だね』

『さうです。ちよつと見て貰つて來ませう』

歩いて見ると、流石に醉つたものゝやうに體がよろよろした。咳は成るたけ腹に響かないやうに、やうにと心がけたが、痰は矢張眞赤で、氣分の好いのも當てにならないやうな氣がした。

醫者はすぐ近所であつた。『如何ですか？』かう莞爾してかれの顏を見た。

成るたけ内輪に、咯血の話をかれはした。醫師は『フム、フム』と言つて聞いてゐたが、しかも別段それに重きを置いてゐるやうな様子も見えなかつた。

脈を見ながら、『食事はいけますか』

『食慾はありません』

『フム』

醫者はかれの咽喉を調べてから、肌をぬがせて、胸と背とに聽診器を當てゝ見て、さて指の尖でコツコツと叩き始めた。空虚から發して來るやうな音、餘韻の短かい音、雜駁の濁つた音などが、一しきりしんとした靜かな診察室に際立つてきこえた。醫者は背中の下の方を叩き終ると、思ひ當つたことでもあるやうに『フム』と言つて自から點頭いて見せた。宗彥はしかし別に何事をも聞かうとはしなかつた。醫者はかうやつてすつかり飮み込めたやうな顏をして見せるけれど、果して何れだけ本當にわかつてゐるのであらうか。かれは今までに、既に餘りに多く醫師の治療に信頼し、且つ失望して來た。

『成るたけ靜かにしてゐなければいけませんな』

『矢張、喀血したのは、餘り動いた故でせうか』

『さうですな』

『今日玉川の方へ遊びに行つたりなんかしたものですから』

『歩くのは、餘り好くありませんよ。ぢつとしてゐなければいけません。澤山血の出るやうなことがあつては大變です。それでは、今日は藥を替へて差上げませう』

長く藥を飮んでゐると、藥の替るのは嬉しいやうでもあり、また厭なやうなものでもあつた。苦い藥でも、親しみを持つて馴れて來ると、段々好いところが出來て來た。かれは藥局の窓から出された藥瓶を不安さうに眺めた。それは少し紅味を帶びてゐた。

その夜はかれは穩かに眠ることが出來た。晝間もあゝして寢たに拘らず、床に就くと、すぐぐつすり熟睡した。朝起きた時も、昨夜寢たまゝの仰臥の姿勢であつた。氣分も好かつた。唯、腰から下が非常に冷えた。

眼がさめると共に、今日は會社へ出たものか、何うかといふ考が逸早くかれの胸に上つて來た。かれは自分の生命のもう數へられてあるのを思つた。そして、その數へられてあるといふことに悲傷せずに、靜かに、男らしく、その日の近いて來るのを待たなければならないと決心した。最後の力まで働いて、そして靜然として死に面するほどそれほど悲壯なことはあるまい。かれはかう考へて會社に出勤することにした。

朝風はもう寒かつた。かれは震へながら電車を待つた。電車は來るには來ても、どれもこれも滿員で、大抵は停車せずに素通りをした。丈夫な時なら、飛び乘りでも何でも出來るのだが、今はそんな勇氣はなかつた。漸くちよつと留つた電車に乘るには乘つたが、あとからあとからドシドシ人が乘込んで來て、押倒されないためには、かれは死力を盡して入口の扉の上部につかまらなければならなかつた。かれの眼は擴大し、かれの鼻孔はおのゝいた。しかし、かうした忙しい朝毎の雜遝も、ぢき自分には見られなくなるのかと思つた。

平生無口なかれは、會社に行つても、碌々同僚と口をきかなかつた。かれは唯默つて仕事をした。仕事は馴れ切つてゐるので、別に面倒なこともなく、體を疲らせるやうな憂ひもなかつた。しかし、昨夜の喀血以來、何となく胸に大きな空洞が出來たやうな氣がして、何ぞと言ふと、そこからまたあの恐ろしく黑い血の塊が出て來はしないかと危まれた。咳をするにも氣が置けた。

晝飯がすむと、いつもの如く、人々はてんでに煙草盆を引寄せて、煙草をふかしながら雜談を始めた。話はいつも變

らず、人間の運不運や幸不幸や榮枯盛衰で持切られた。中でも、來年の高等文官の試驗の準備をしてゐる大野といふ男の話した『無教育で、無一物で、ぶらりと東京に出て來て、二三年で巨萬の富をつくつた好運の男』の話が人々の心を惹いた。

『何うしてさう旨く行くんでせう。』かう大野は言つた。

『矢張、さういふ人は豪いからですよ』宗彥はかう傍から口を出した。

『豪い、何が豪いもんです。伜の戀人を自分の妾にしたり何かして、丸で獸のやうな奴ですもの』

『しかし、金を拵へたところは豪いぢやありませんか』

『併し、金を拵へただけでは、人間として、豪いといふ理由にはなりますまい』大野は烟草の烟を吐いた。

『いや、理由になりますとも……。金をためて、そして長命するといふことは、人間として一番偉いことです』

『そんなことはないでせう。長命も人間としては豪い條件になりますまい』

『なりますとも――』宗彥は思はずから擘を立てた。『東京のやうな生活の激しい處では、單に食ふ、單に生きるといふだけで、それで大變な問題です。君や僕のやうに、自分の肉を削るやうにして、それに由つて生活する者に取つては、長命は甚だ覺束ないことゝは思ひませんか。偉くなければ出來ないことゝは思ひませんか。私はいつも思ふ。天壽を全うするといふことは、生物として最も偉大なることで、東京見たいなところで、五十年以上生きた人は、何んな人間でも本當に偉い人間だと私は思ふ』

これだけ饒舌るにも宗彥は咽喉のイライラするを覺えた。

大野は面倒臭いと思つたらしく、『それもさうだね』などと言つて、すぐ話を他へ外して了つた。

宗彦は平生餘り餘計な口をきかないだけに、議論などをすると、いつも自分から先づ激した。今もあれだけのことで、何か大事件にでも打突りでもしたかのやうに夥しく胸が躍つた。しかし、一方には、自分から旨いことを言つたものだと思つた。

午後になると、頻りに寒氣がして、熱が出て來た。しかし、氣分は別にわるくなかつたので、時間までゐて、そしていつものやうに歸途に就いた。

われながら體の衰へたのを感ぜずに宗彦はゐられなかつた。會社から電車の停留場まで僅かに一二町、それにすらかれは疲勞を覺えて、電車の踏段に上るにも、老人のやうに膝を手を置いて、そして辛うじて上つた。閉つてゐる入口の扉を明けるのも容易でないほどかれは弱かつた。かれは疾病のいかに迅速に體力を消耗させるかに喫驚して、自分で自分を見るやうにした。二三の停留場を過ぎると、電車はやがて滿員となつた。車體の動搖、車輪の轟き、停留場毎に起る乘客の混雜、それが疲れ切つたかれの神經に名狀することの出來ない苦痛を與へた。辛うして家に歸つた時には、丸で難破した船の水夫でもあるかのやうな氣がして、膝の接合點は離られるやうにだるく、體は綿のやうに疲れて、そのまゝ疊の上にごろりとならずにはゐられなかつた。かれは母親に熱い湯を一杯貰つて飲んだ。

夕飯だけは食ふには食つたが、何うしても起きてゐる元氣はないので、そのまゝかれは床の上に横つた。この體のだるさも、この熱も、このなやみも、明朝にさへなれば、何うにかなるだらうとかれは思つた。若い者に取つては、睡眠はこの上なき療養である。春の夜なのに、枕を濡すほどの悲しい戀の涙を流しても、一夜すぎて朝になれば、遠い夢か何ぞのやうになつて了ふことがよくあるものである。こんなことを思ひながら、かれは間もなく眠りに落ちた。

しかしその夜はいつものやうに安眠することが出來なかつた。眼を覺す度に、體は氷のやうに冷えてゐるのを感じた。

初めは、氣候の寒い故かとも思つて見たが、それは矢張多量の血液の損失から來た結果であることがやがて獨りで理解された。で、うとうとと半眠半醒のさまで曉に及んだ。

會社は休むことにした。

その日は朝から雨が降つて、濡れた山茶花の紅白が美しく硝子障子を透して見えた。宗彦は終日床の上にうとうとして暮した。心は限りなく鎭靜して、時には眠り、時には覺めてゐたが、その現ともなく夢ともない狀態は、さながら鐵路を走る汽車の次第に速力を緩めて行くさまに似てゐた。それはいつか停止せずには置かないのにきまつてゐたが、しかもその停止はまだいつともわからないやうな靜かな靜かな氣分であつた。障子を透して來た雨の日の光線すら、かれの衰へた眼には强すぎるやうに思はれた。

雨は靜かに音もなく降り頻つた。

宗彦には喜びも悔みもなかつた。かれは唯靜かに死を待つた。二三日の間、かれの頭は丸で白紙のやうであつた。澄んだ靜かな心には、何の影も掠めて通つて行かなかつた。何か思ひ出すことがあつても、それを思ひ廻らすのが面倒である位に、かれは弱く弱くなつた。このまゝ死んで行くなら、死も好いものだなどゝも思つた。

何處となく霜が白く降つだ。庭の楓はいつか眞赤になつて、病床の障子を明るくした。晝間眠るのは心持が好かつたが、夜寢られないので成るたけ起きてゐるやうに心がけた。夜が更けて——夜が明けて行くのに眠られずにゐるのは辛いものであつた。かれは曉近く戶外に吹き出した風の音などを幾夜か聞いた。

眠ると、盜汗がびつしよりと寢衣を濡した。この盜汗、この不愉快な盜汗、今夜もまたそれが出るのかと思ふと、夜

の近寄つて來るのが恐ろしいやうな氣がした。けれど、明方健なる眠を貪つてからの午前の心持は、何とも言はれず好い氣分であつた。生れたばかりの赤坊のやうな氣分であつた。あたりのしんとした朝の室の内に、線を成してさし込んで來た初冬の午前の日の光線を浴びながら、靜かに床の上に仰臥した心持は、何とも言はれなかつた。

かれは障子を隔てた外の忙しさなどををりをり頭に浮べて見た。

ある日の午前には、初冬の日の麗らかに暖かい四疊半の方に床を移した。

『大丈夫ですよ。まだその位の力はありますよ』

かう言つたもの丶、矢張、母親の力を借りなければならなかつた。

かれは靑空を寢て眺めながら、若い女――美しい女を思ひ浮べた。母親の慈愛に比較して考へては罪深い事であるが、もし、かれの世話をして吳れるものが、母親でなしに、若い美しい女であつたならば？　生きた戀に包まれてゐる身であつたならば？　しかし、そんな幸福は、この世では、かれには遂に遂にやつて來ないものであつた。悲しくても、また他から見て可哀相に思はれやうとも、何うもそれは止むを得なかつた。

しかし、かれは思ひ返した。さうした樂しさうな結婚生活、その生活とて、決してさう大した幸福なものではないに相違ないと思つた。妻を持ち、子を持ち、年老いて、矢張、同じく死んで行く人間の一生を考へて見ると、自分の若い死もそれと比べて五十步百步に過ぎないやうな氣がした。

ふとかれは枕元に置いてある一冊の書物を取つた。それはメレジコウスキイの『先驅者』であつた。字が細かいので、眼が疲れて澤山は讀めなかつたが、それでも、昨日あたりから、あの多能多才なレオナルドの痛々しい衰頽のところにか丶つた。いろいろなことがかれの心を惹いたが、中でも、あ丶した天才さへ、死に面してはじつとしてゐられなかつ

た苦悶のさまが、かれに言ふに言はれない驚きを誘つた。宗彦はをりをり本を傍に伏せては、長い間、默つて凝と空間を見詰めた。

それに比べると、かれの死なぞは、唯徒らに腐つて行くやうなものであつた。今までにもかれは何物をもこの生命の流の中につかむことが出來なかつた。否、將來生きてゐたからとて、矢張同じやうに何も捉むことは出來ないに相違なかつた。しかもその平凡が、却つてかれに平靜な心を齎らして來てゐるのであるのに氣がついた時には、かれは不思議な心の衝動を覺えた。大才なればこそ、その死に對する苦悶――あのやうな慘ましい苦悶があつたのであつた。レオナルドなればこそ、あれほどさまざまの生效のある事業に一生を打込みながら、死に面して自分の生涯の徒勞であることを痛感したのであつた。宗彦は何もないかれの一生、さびしい平凡なかれの一生が、何の理由、何の緣因があつて、この永久の生命の流の中にひよつこり浮んでそしてまたひつよくり消えて行つて了ふかを考へて見た。

暫くしてかれは再び『先驅者』を取上げた。



黑王の國

上司小劍

一

ロードの卵を十個ばかり持つて來てやると言つた奴が、なか〳〵姿を見せない。待てど暮らせど、といふ言葉が、最も適切にこの場合を形容してゐると、人間といふ怪物――飼主といふ暴虐な男――は思つたらしい。

貧しい顔をした名古屋コーチンの牝が、遠い國の誰れが生んだとも知れぬ古い卵を、たゞ一つ抱いて、クツク、クツクと唸りつゝ、母としての愛を集注してゐる。思へば痛はしいことだ。眞ツ白な殼の、見事に大きい地中海沿岸系統の卵であるけれど、母の胎内を出てから、一年ぐらゐは經つてゐるらしい。上海の港からお船に乘つて、遙々この國へ渡つたとおぼしい其の白い殼には、防腐劑を塗つた痕が艶々しく光つてゐる。船を下りて、箱から出されて、八百屋の店に盛られて、不味い玉子燒きにされるのを危く免がれて、異國の名古屋コーチンに抱かれてゐる。思へば妙な運命の卵である。

石塊にひとしい死の卵を抱いた名古屋コーチンは、人がそれに近づくと、逆毛を立てゝ、クウー、クウーと唸りつゝ防禦の嘴を尖らして憤つてゐる。お尻が腐るまで抱いてゐたとて、雛になる望みのないものに、斯くまでも熱い愛を注いでゐる彼女の愚かさを思ふよりも、其の心根が愍然ではないか。

自分の生んだ二十足らずの卵は、もう疾くに人間といふ怪物の餌食になつて、自身は何處の何者が生んだとも知れぬ古卵を抱いてゐる。恐らくはそれが素直に遠國の土の上に孵化してゐたならば、或は自身よりも長けたものになつてゐるかも知れぬ古卵を抱いて、母としての愛を傾けてゐる。

この名古屋コーチンの屬する雞の國では、僅かに四羽の群れを有するに過ぎない。國王は黒色オーピングトンの圖拔けて大きな奴で、それと同種類の牝が正妃に備はつてゐる。雞の國では男系以外の群れの支配權を認めないので、國王は必ず牡に限られてゐるが、しかし牡の模型は牝の撰擇によつて進化したゞけに、其の見事な赤い雞冠から、長い尾、美しく藍色がゝつて光つた羽色や、太く見事な脚までが、皆牝の理想に隨つてゐる。

この外にもう一つ、白色レグホーンの牝がゐる。彼女は名古屋コーチンと同じく、同種の友に別れて、縁もゆかりも遠いイギリス産のオーピングトンの支配を受けてゐるのであるが、巧みに逃げ廻はつて、一度も王の爲に貞操を汚がされてはゐない。

産んだ卵を掠奪するのに都合が好いやうに、いや〳〵成るだけ多くの卵を其の口腹の慾に充てたい爲めに、純白な彼女の種類は、人間といふものによつて、其の母となるべき性能を除かれて了つた。思へば恐ろしいことだ。卵を産む能力が加へられて、雛を孵化す天性が全く滅されて了つたのである。自個の種類の繁殖の爲めの産卵ではなくて、人間の口腹を養ふ爲めの徒らな努力になつた。

それを彼女は知るや知らずや、オーピングトン大王の與ひかゝるのを、巧みに逃げかはして、まだ一つも卵を産まぬ。體質がさう作られて、進退飛躍の輕快な彼女は、大王が羽根を垂れ足を摺つて寄り添ふのを、飛びちがへてパツと避ける。さうして一尺か二尺の小高いところがあると、それへ躍り上れば、肥滿し過ぎた大王には、もう寄り添ふことが出來ない。性慾は男性ばかりのものでもあるまいに、この純白な女性は何うして戀を知らぬのか。人間ならば知つて振つて〳〵振り抜くといふやうにして、彼女は大王を嫌つた。しかし戀愛關係を離れては、彼女もよく黒い大王に馴れ親しんでゐる。大王が香餌を見付けて、クツ、クツ、クツ、クツと叫びつゝ異性を呼ぶ時、眞ツ先きに馳け寄つて其の太い嘴から美味を與へられるのは、いつも白蓮の名にふさはしい彼女である。

人間界の女性が、資本家と男性とによつて、二重の支配と壓迫とを受けてゐるが如く、この雞の國の牝性は、牡性と人間とによつて、矢張り二重の支配と壓迫とを受けてゐる。けれども雌雄の關係は人間の國よりもこの國の方が根底に於いて進步してゐる。前にも言つたやうに、この國に於ては、他の高等動物と同じく、雌から雄を撰擇するので、雌雄淘汰の必然上、雄は其の強さと美しさとに於いて、著しい進化を見せてゐる。さうして種族の模型は、雌の理想に從つてゐる。されば此の國に於ては、私有財產制あつて以後の人間社會に於けるが如く、進化の法則を逆轉して、男性から女性を撰擇するやうなことはない。それだから、牡性の醜劣な欲求に迎合する爲めに、牝性が卑屈な隨済を現はすこともなく、更に種類全體の模型が低下することもないとしてある。しかしながら、此處にもまた人間の欲求と壓迫とが、重荷の如く加はつて來て、たゞ卵を求むる爲めに、雜種の出生を強ひられる。さうして種類の模型を見苦しいものに押し落されることがある。

この國の白蓮が、黒い大王の與ひかゝるのを逃げ廻はつてゐるのも、黒白だんだらの醜い雜種の孵化するのを恐れて

ゐる爲めかも知れぬ。

二

憐れな名古屋コーチンは、疾くに精子の死んでゐる石塊の如き上海卵も一週間も續けて抱き温めてゐた。一日に一回、或は二日に一回、少量の食物と水とを求むる爲めに、其の柔かい巣を飛び立つ時にも、クツク、クツクと、母の愛の籠つた唸りを立てゝ、たゞ一個の上海卵をば、天にも地にも二つとないものとして、いつくしんでゐる。

其の柔かい巣は、何から出來てゐるか。藁と鳥の羽根とであるが、其の黄色い羽根は、この新らしい母となるべき名古屋コーチンに取つて、痛ましい思ひ出であらねばならぬ。郊外の或る小ひさな雞舍の中で、去年の眞夏に孵化つたコーチンの一群れから、雌雄二羽が拔かれて、この家の後庭に養はれた。もう鷄ほどの大さにはなつてゐたけれど、其の當座この二羽の幼雛は如何に高く聲を揚げて、母と兄弟姉妹とを呼んだとであらう。さうして幾ら呼んでみても、其の聲が自分たちの戀ひ慕ふものゝ耳に入らぬことゝ諦めてからは、兄と妹とが、行末は夫と妻とに變るべく馴れ親んで、賴りつゝ賴られつ、何から何までを共にして成長して來た。

ところが、この兄と妹とは――生れた順序と孵化つた前後とがハツキリ分らぬけれど、姑らく人間並みにかう呼んでおく――夫婦にならぬ前に別れなければならぬ惡い時が來た。それはこの兄と妹とが、餘ほど成長してからであつた。けれどもまだ甚だしくは其の本能性に刺激せられるまでには達してゐなかつた。彼等及び彼女等は、たゞ其の本能に伴ふ活動だけさへあればよいので、蝶や蜂の如き小動物に媒介して貰ふ必要もなければ、風や水なぞに結び合はせられるのを待つのでもない。さうしてまた人間のやうに、政治とか經濟とか、いろ／＼面倒な形に捉へられて、兩性關係もまた難かしくなるといふやうなこともなく、人間ならば原始時代の血族的な小ひさな國を營んでゐるのである。そこでこ

の名古屋コーチンの兄と妹とがアダムとエヴとになつて、まさにこの國を創めようとしてゐる矢先きに、突然闖入して來たのは、頭髮が蓬々として、寒空に襯衣をも着けない惡魔のやうな人間であつた。さうして彼れの小脇には山女の手提げ籠と汚ない風呂敷包とを抱へてゐた。

其の惡魔の如き人間は、手品師のやうな手つきをして、先づ手提げ籠の蓋を開くと、中からは大きな黒色オーピングトンの牝が出た。次ぎに風呂敷包みの結び目を解くと、一層大きな同種類の牡が、眞紅の鷄冠を振り立てゝ現はれた。同じ漂流者ではありながら、もうこの國の土着のやうに思つてゐた名古屋コーチンの兄と妹とは、驚きの眼を瞪つて、新たに漂着した異種族の雌雄を見てゐなければならなかつた。

飼主と稱する彼等及び彼女等の征服者は、直ぐに其處へ立ち現はれて、惡魔のやうな男と、彼等の複雜な早口な國語で、嬉しさうに何事をか語り合ふと、今まで名古屋コーチンに對しては一度も呉れたことのない美味な米粒を撒いて、黒王の雌雄に與へた。

隅の方へ寄つて、小ひさくなつてゐたコーチンであつたけれども、兄は流石に男性の勇氣と反抗心とを振り起して、だん〳〵に眞ん中へ進み出で、一心に米粒を拾つてゐた黒王の牝の頭に、先づ嘴の一擊をくれた。しかし黒王の牝は格別痛さうにもしないで、ククツと一つ啼いたゞけ、逃げもしないで、地面に啄んでゐた。スルと横合ひから大きな黒王の牡が出て、コーチンの兄に戰を挑んだ。二つの牡の鬪ひはこゝに始つたが、惡魔と人間との保護は既にこの時から黒王の上にあつた。

『雞冠を傷けるといけないから……』と、惡魔は言つて、其の垢に汚れた長い手を伸ばすと、バタ〳〵鬪ひに夢中になつてゐるコーチンの兄を押さへ付け、いきなり黒王の牝の乘り物であつた山女の手提げ籠の中へ窮命させて了つた。

『何うしたらいゝでせう、其の牡は。……』と、この時人間の雄は惡魔に問ふた。

『こんな牡、仕樣がない、殺して喰べて了つたらいゝでせう。』と、惡魔は冷かで殘忍な微笑を其の黑い顏に浮べながら言つた。幾日にも剃刀を當てたことのないらしい其の頰には、疎らな髯が伸びて縮れてゐた。

『それも可哀さうですね。』と、人間の雄は其の圓く肥えた顏を此方に向けながら言つた。

『牝の方はまだいゝけど。……』と、惡魔は、俄に兄を失つて、隅の垣根の三角に曲つたところでしよんぼりとしてゐるコーチンの牝を、ギヨロリと光る其の氣味のわるい眼でヂロリと見やりながら、『こんな念入りにわるい牡、世界中の鳥屋を皆探したツて、滅多にありませんよ。』と、今度は山女の手提げ籠の方へ眼を向けて言つた。

『何うせ潰ぶし屋から來たんですからね。』と、人間の雄は言つて、つく〲と二羽の黑王に見入りつゝ、『これを見ると、コーチンなんぞ見られませんね、實に堂々としてること。』と、さも感心したやうに言ひ足した。

到頭コーチンの兄は惡魔と人間との餌食になることに話がきまつたけれど、惡魔は其の形相の恐ろし氣なのに似もやらず、心は案外に弱いと見えて、自分に手を下すことは出來ないらしかつた。其處へ行くと、人間の雄の方が、却つて惡魔の本性に近かつた。彼れの太い手はぬツと伸びて、山女の手提籠にかゝつた。籠の中に蟄伏させられて、驚きの聲を揚げつゝも、なほ時々はクツク、クツクと其の妹を呼んでゐた兄は、人間の雄が細目に籠の蓋を開いたのをば、恐ろしい誘ひの手だてとも知らずに、自由を得たい一心から、急いで首を出すと、平和な姿をした山女の籠は、其のまゝ、古來幾多革命の戰士を殺したギロチンに早や變りして、コーチンの兄は其の食道と氣管とを無殘も締め付けられた。羽を搏き足を藻搔いても、大きな人間の雄の力には敵し得ようもない。

かうやつて、人間の餌食となつた兄の羽毛が、今こゝに妹の産褥を柔かく溫かにする爲めの巢としての材料に、惡と

ともに用ゐられてゐるのである。

三

白色レグホーンの牝がまた一羽、この國へ歸化して來たのも、それと同じ頃であつた。アダムを亡なふたエヴは、新たに大きな黒王の支配を受けて、其の下に寂しく活きてゐることになつたのである。殊にも嫉妬心の强い黒王の妃は、何かに付けて、コーチンとレグホーンとをいぢめ拔いた。

白蓮の名にふさはしいレグホーンは、其の輕捷な體軀で、巧みに王妃の鈍重な嘴と肢を避けること、宛も黒王の挑みか〵るのを逃げるのと同じやうにしてゐたから、王妃の抑壓は其の嫉妬心と〵もに、白蓮の上には甚だ輕かつた。さうして其の重荷が獨りコーチンの上にのみか〵つて來た。

生得溫順で素直なコーチンは、其の原産地たる安南の交趾の名で呼ぶよりも、黄珍夫人と言つた方がよいように、黄色く柔かであつた。さうして、黒王の寵を斥ける力もなしに、第二夫人の務めをしなければならなかつた。人間の腹を肥やした亡兄の妻にふさはしい彼女は、もとよりこの大きな黒王の妃となるに適しなかつた。第一其の體格が釣り合はないで、王の重量に堪へ得なかつた。王の太い趾は、黄珍夫人の背の羽毛をば殘らず摺りつぶして了つて、遂には皮を破り、肉を傷つけて、赤い血がだら〱と流れるやうになつた。爪に血を塗つた黒王は、かくして自個の慾望の滿足に嘯いてゐた。このオーピングトンの種類は、雞の種族の中でも溫和で聞えたもので、其の體軀の肥大に過ぎたのと、其の動作の鈍重なのとで、或る種類の人間に愛され、肉卵兼用種として、英國産の實利的な特長を誇つてゐるのであるが、黄珍夫人の眼には、其の重くるしく、はき〱しない態度が、厭やらしく、忌はしく見えてならなかつた。白蓮もまた

一つはそれを嫌つて逃げ廻はつてゐるに違ひない。

黒王の妃と黄珍夫人とは、前後して卵を産み始めた。巣箱が一つきりないので、黄珍は常にそれを王妃に讓つて、自分は後で入ることにしてゐたが、意地のわるい王妃は、黄珍が巣に入るのを見ると、喧しい叫び聲を立てゝ憤つた。しかし、この場合には、たゞ憤りの聲を高く揚げるだけで、嘴や肢で何うするといふことはしなかつた。それが爲めに自分にも大事な巣を損ふことを恐れたのであらう。それでも其の高い憤りの聲に耳を刺されるやうな思ひをしながら卵を産まなければならない黄珍の氣辛さツたらなかつた。彼女は時として、お産を中止して巣から飛び出したことがあつた。

スルト直ぐに、黒王が挑みかゝつて追ひまくり、それを逃げ避ける途端に、王妃の嘴が、厭やといふほど彼女の頭を見舞つた。黄色の彼女の頭の羽毛は、黒王に銜へられるのと、王妃に突つかれるのとによつて、尼の如くに禿げてゐた。

卵を二十は産まないうちに、早や巣に着いてそれを孵化したくなるのが、黄珍夫人の天性であつた。けれども産む後から直ぐ人間の長い手に浚はれて、其の腹を肥やしてばかりゐたので、孵化さうと思つても、卵は巣の中に一つもなかつた。彼女は空しき巣に獅嚙み着いて、腹部に起る熱の衝動と全身に湧き出して來る母としての愛に、悶え〳〵てゐた。

勿論大きな巣は王妃の爲めに明けておかなければならなかつたので、人間が別に黄珍の爲めに小ひさな巣箱を一つ拵へて與れた。兄を死刑に處して其の肉を食らふた彼れも、妹に對しては、氣味わるく親切であつた。さうして間もなく、上海卵の古いのを一つ持つて來て巣の中へ入れて與れたのである。

四

黄珍の巣に着いたことは、誰れよりも第一に、あの惡魔のやうな人間を喜ばした。彼れはほく〳〵笑ひながらやつて來て、其の蓬々と伸びた頭髮を春風——其の時はもう春であつた——に弄らせつゝ言つた。

『巣鳥はコーチンに限ります、直ぐロードの卵を持つて來ますから、抱かして下さい。それまでは模造卵でも何んでもいゝから抱かしておいて下さい。』と、飼主の雌に言つた。スルと飼主の雌が横から口を出して、

『オーピンの卵を一つ抱かしといたらいゝぢやありませんか。』と、これも嬉れしさうにして言つた。

『勿體ない、抱かしとくと、喰べられなくなりますよ。』と、惡魔は惡魔らしいことを言つて、垢の溜つた爪の先きで、雲脂だらけの頭を掻いてゐた。

　惡魔と人間との間にかういふ約束が結ばれてもう十日の餘にもなるのに、ロードの卵はなか／＼來ないのである。惡魔の姿が見えないのである。

『何うしたんでせうね、あの人は。』と、人間の雌が雄に言つてゐた。

『卵がうまく手に入らないんだらう。それとも自分の方が、何處かの雌を追つかけるに忙しくッて、雛の卵どころぢやないのかも知れない。』と、人間の雄はまたそれ相應なことを言つて笑つた。そんなことを言つてゐるうちに、人間の雌は八百屋から上海卵を取つて、其の一つを貴珍に抱かして吳れたのである。

『まさか、卵を一つ取るわけにも行きませんから、五つだけ取つて見たんですが、家の卵とは比べものになりませんね。見たところは却つて、八百屋の卵の方が立派なくらゐですが、喰べてみると、まるで味が違ふんですもの。厭やになつちまう。』と、人間の雌は故らに眉を顰めて、自分の產んだ卵でゞもあるやうなことを誇り顏に言つてゐた。

『仕方がないから、若しロードの卵を持つて來て吳れなかつたら、家のオーピンの卵を五つほど溜めて、それに仁兵衛さんところから雜種の卵を五つ讓つて貰つて、それを抱かさうぢやないか。』と、人間の雄は考へ／＼言つた。

　それからまた五日ほど經つたけれど、ロードの卵はまだ來なかつた。『仕方がない、さうしよう』といふことになつて、

黑王の卵と仁兵衛の雜種の卵とが相混つて、黃珍に抱かれる段取りに進んだ。

仁兵衛といふのは、人間の中での善人であるけれど、雞に取つては、矢張り小惡魔であつた。たゞ雞の良否を知らないで、雜種ばかり飼ひ慣れて、卵さへ掠奪すればよいと思つてゐた。

早速に五個の種卵は仁兵衛のもとから送り屆けられた。さうして孵卵用の大きな桶が、仁兵衛自身の手で運び込まれた。何うされることかと、眼をパチクリさして、人間どものすることを見てゐた黃珍夫人は、今まで大事に一つの上海卵を抱いてゐた蜜柑の空箱から移されて、十個の卵の見事に集つた桶の中へ坐らされた。クック、クック、クッタと唸りつゝ、母としての愛を籠めて、黃珍は其の十個の卵を抱かなければならなくなつた。しかし、今まで一個の卵を抱いてゐた癖が附いてゐて、十個の中から一個だけ取り出してそれを抱かうといふ氣持ちになつたのではあるが、樽の中に藁を詰め、其の上に席を敷いて、自然の窪みに十個の卵があるのだから、一個だけを抱かうとすることは、兎ても出來なかつた。

クッタ、クックと唸りつゝ、黃珍は翼を搖つて、十個の卵をまんべんなく其のお腹で溫めることにした。

『これは初めてにしちやア、なか〳〵上手でございます。』と、仁兵衛は言つて、黃珍の素振りを見詰めてゐた。飼主の雄は、今まで黃珍の抱いてゐた上海卵を振つてみて、『これはまだ喰べられるでせうか。』と、下司張つたことを言つた。

『腐つて了つたでございませう。』と、仁兵衛が言つたので、飼主は惜しさうにしながら、思ひ切つた風で、其の上海卵を地上に落すと、殼が破れて、ぷんと惡臭のする中味は濁つた色をして流れ出た。

黃珍は桶の上から蓋を被ぶせられ、希臘の哲學者のやうな風をして、薄黑く窶れた顏に、鋭くなつた眼を光らしつゝチツト納つてゐた。

鼠王に率ゐられた王妃と白蓮とが、いつの間にか、氣樂さうな顏をしてやつて來たが、破れた上海卵の殼を啄んでは、變な顏をして喰べてゐた。

『この白いの、まだ産みませんでございますか。』と、仁兵衛は赤い鷄冠の垂れ曲つた白蓮を、其の汚なく荒れた手で指さしつゝ、飼主に問ふた。スルと飼主の雌が横合ひからしや〳〵り出て、

『まだ産まないんでございますよ。もう疾くに産まなければならないですが、ほんとに何うしたんでございませう。』とさも〳〵怪しからんといふやうな樣子を作つて言つた。

『今に産むでございませう。雞冠の色を見ても、もう産まなければならないんでございますが、何處かへ産んでやしませんでございますか。』と、仁兵衛はヂツト眼を据えて、白蓮ばかりを、氣味のわるいほど見詰めてゐた。

『いゝえ、産まないんでございますよ。それにこれはあの牡を嫌つて、何うしてもかゝらせないんでございますから、其の故もあるか知れませんでございますね。』と、飼主の雌の眼もまた白蓮の上にばかり光つてゐた。

『いゝえ、牡がかゝらないでも、卵を産むだけならよろしいんでございます。今に産み始めると、乾度どつさり産むでございませう。』と、仁兵衛は慰める風に言つた。

『この牡、ほんとに下手なんでございますよ。』と、飼主の雌は、年に比らべて長過ぎる袂を、娘のやうに振りながら言つた。

五

ボール箱を汚ない風呂敷に包んで、大事さうに提げながら、あの惡魔のやうな男が、まだあの時から剪刀も入れぬ頭髮、剃刀も當てぬ頰や腮、恐らくは風呂にも入らぬらしい煤けた顏をして、のツそりとやつて來た。

『卵を持つて來ましたよ。』と、彼れは急にいそ〳〵として言つた。

『おほかた、そんなことになるんぢやないかと思つてたんです。物事といふものは、何うしても、意地わるく、工合ひわるく行きたがるもんだから。』と、飼主の雄は、嘆息するやうに言つた。

『何うしたんです、コーチンがもう巣から離れたんですか、まだ十日や二十日は大丈夫な筈だが、一度孵化して、直ぐ二度目を抱かせることも出來るくらゐですから。……』と、惡魔は不思議さうな顏をした。

『あんまり、いつまでも古卵を一つ抱かしとくのも可哀さうだと思つて、四五日前、オーピンの卵五つと、雜種を五つと抱かしてやつたんですよ。』と、飼主の雄は、早口に言つて、惡魔の提げて來たボール箱を見た。

『それ、棄てちまつて、この卵を入れてやらうぢやありませんか、惜しいのはオーピン五つだけで、雜種は孵化つたつて仕樣がありませんよ。』と、惡魔は其の本性を現はしかけつゝ言つた。

『棄てちやァわるいでせう、仁兵衞さんに。――折角讓つて下すつたんですもの。』と、飼主の雌はまた眉を顰めつゝ言つた。

『困つたなア、それは。折角いゝ卵を持つて來たのに……。』と、惡魔は例の汚ない爪で、雲脂だらけの頭を搔いた。

『ロードですか。』と、飼主の雄は首を伸ばして、ボール箱を覗かうとした。

『ロードが七つと、ダツキングが七つです。外にまだイスパニツシユとランシヤンの卵があつたんですけど、ハリソン系の單冠ロードアイランドは、僕の外にさう純なのを持つてる人が尠ないから、少し殖やしとかうと思つてるんです。』と、惡魔は得意氣に言つて、ニヤリと笑つた。彼れの口元が何うやら鷄の嘴に似て來たらしく、其の頸を伸ばして物を言ふさまも、何んとなく雞くさかつた。

『ダツキングといふのは……。』と、飼主の雄はまた首を伸ばした。

『綺麗な鳥ですよ。純粋の愛蘭雞で、鳩ぐらゐの大きさですが、こんな卵です。』と、悪魔は玉手箱のやうにしてゐた共のボール箱の蓋をば、漸くにして開いた。中には籾糠にくるまつて、大きなロードの卵が七つと、小ひさくはあるが細長くて、矮雞(ちやぼ)の卵ほどの重みは必ずありさうな、ダツキングの卵とが、ズラリと並んでゐた。

『そんないゝ鳥なら、何うかして、これを孵化したいんですね。』と、飼主の雌は、慾の深かさうな眼を光らして、ボール箱の卵を見詰めた。

『ダツキングの卵の出來るのを待つてたんです。ロードの卵はいつでもあるんですが、ダツキングは一年に一度、春先きに十個(とを)ばかり産むきりなんですから。……』と、悪魔はボール箱の蓋をして了つた。

『仁兵衛さんとこに巣鳥が一羽居るかも知れませんから、借りて來ませうか。』と、飼主の雌は追つ立て尻をして言つた。

『さうか、それなら早くさう言へばいゝのに。』と、飼主の雄が呟くやうに言つてゐるうちに、雌はもう立つて、ちびた日和下駄を引つかけつゝ、臺所口から出て行つた。

『雜種ですね、軍雞(しやも)がかゝつてゐるから、少し荒らいかも知れないが、熱は高さうだ。』

やがて飼主の雌が抱いて歸つて來た雉子色の牝雞を眺めやりつゝ、悪魔は星をさすやうに言つた。

『二度目だから、上手だらうと、仁兵衛さんが言てましたよ。』と、飼主の雌は言つて、一先づ其の雉子色を庭に放した。

不思議な顔をして、眞紅の雞冠を傾けつゝ、新たに來た異性に見惚れてゐた黒王は、雉子色の足が地に着くのを持ち兼ねて、早くも翼を垂れ、脚を摺つて、それに挑みかゝつた。急に異國へ連れ込まれて、大きな王の前に放り出された雉子色は、何が何やら分らないで、兎にも角にも王の摺り寄るのを避けつゝ、ボカンとして周圍の光景を眺めてゐた。

黑王の妃は其の肥えた胴軀を、むく／＼と震はして、背後からこの新しい戀の敵に搏ちかゝつた。不意に驚いた雉子色は一飛びに物置の前まで逃げ延びて、そは／＼しながら、直ぐ前にある香餌を拾はうともしなかつた。

白速までが首を突つ立てゝ、憤りの色を見せつゝ、この新米の異種を排斥しようとする氣振りを見せた。

『野蠻な軍雞の血が混つてるから、ほんとにやつたら、喧嘩ぢや負けないんだが、落ち着かないもんだから、逃げてゐやがる。』と、惡魔は笑ひながら言つて、續けさまに紙卷煙草に火を點けては、膝に落ちかゝる灰を拂ひもせずに、すぱすぱと吸つてばかりゐた。

雉子色は物置にあつた黄珍夫人の元の巣箱の跡へ入つて、ペタリと坐つて了つた。

『うまい、うまい。よく巣に着いてる。それぢや此方の桶の方がいゝから、これへこの上等の卵を入れて、あの雉子色に抱かし、コーチンは彼方の箱へ入れてやつたらいゝでせう。』と言つて惡魔の指圖で、ごた／＼と巣や卵の移動が行はれた。

『あッ、しまツた。』と、惡魔が紙卷煙草を銜へたまゝの口で叫んだのを、飼主の雌雄が何事かと見やると、桶の中に置いた十四の卵を抱かされる途端、氣象も動作も粗野で荒々しい雉子色が、ゴツ／＼した肢の爪先きにかけて ダッキングの愛らしい卵を一つ踏み潰したのであつた。

『これや、いけないや。』と、惡魔は唸るやうに言つて、矢張り紙卷煙草の吸ひさしを銜へたまゝ、雉子色を抱き取つて、潰れた卵を除き去り、黄味や白味に塗れた他の卵を、一つ／＼微溫湯で洗ふやら、席を取り換へるやら、大騷ぎを始めた。

六

黄珍夫人は羞恥しくて、身體も重く、嘴や爪先きも險しいから、ダツキングの若々しい卵も、踏み潰すことは、いけないと、頭腦が考へた末、またも雌群の移動が行はれて、新らしい十四個を、黄珍が抱くことになり、雉子色は今まで黄珍の抱いてゐたのを十個其のまゝに引き受けることになつた。

黄珍は桶、雉子色は蜜柑箱と、漸くまた落ち着く場所が定まつた。抱く卵が幾度變つても、熱烈なる母としての愛に變りはなかつた。人間の世に古く行はれてゐる言葉に、『腹は借り物』といふのがあるが、雞の國ではそれが直に、『母は借り物』であつた。インドやジヤバに繁殖を始めた遠い祖先の野雞時代には、人間の昔しと同じく、純然たる母系制度であつたが、漸く人間に征服されてからは、卵によつてのみ其の系種を存續する丈けで、母の愛が正しく自身の種の上に注がれるとはきまらなくなつた。中古の人間は、人間同志の被征服者に對して、征服者自身に都合の好いやうな何やかやを拵へ上げて、うまく奴隷を作つたやうに、それが一層甚だしく露骨な力となつて、雞の國へは向つて來た。人間の慾望と便利乃至娯樂と利益といふことより外に、雞の國には雞自身の憲法がない。全く人間の自由に任せ切りなのだ。生殺與奪の權は、最も完全に、何等の支障なしに、人間の手で握られてゐる。王はあつても、それはたゞ性慾の全部と、食慾の一部との支配者だ。

人間の世の古い文書に、『中臣之祓』といふのがあつて、其の中に『鳥獣犯せる罪』と申すのを讀ふ詞がある。けれども、群婚の制度を今も其のまゝ維持してゐる雞の國では、人間の國の干渉によつて、それが大抵一夫多妻となり、一個の牡性を其のまゝに群れの支配者に推し、見事な肉冠を直に王冠に見立てゝゐるだけで、性慾の方面では、其の外に何處からも何等の抑壓を加へられては居らぬ。靈妙な衝動から、一身を宇宙の氣力精氣と化合させ、こゝに種族の繁殖を完ふする力を養ひ成すといふことは、今時の人間よりも、遙かに自然に、また自由に行つてゐる。

人間は、萬づの生物はもとより、自然の一部までを捕へ獲たやうに思つて、いゝ氣に納つてゐるうちに、却つて己れ自身に捕へられて了つた。この活きた事實に對しては、さま〳〵の例證を擧げることが出來るけれど、其の第一は、本能といふ自然性と、道徳といふ物との一大衝突である。それが後世に至つて、なほさら劇しくなつた。性の輝きといふものは、太陽の光の如く、あらゆる生物に對して、まんべんなく透き通つて、何んの滯りもなく調和を得てゐるのに、人間の世だけが、それに就いて、衝突と混亂とを見るのは、雞の國なぞから見て、實に〳〵不思議な次第である。

人間には性慾を不潔とし、肉體を汚穢とする心が蟠り起つてゐる。それを一たび情緒に轉化し、偶像に變形させない限りは、愛の神聖も、美の純眞も認め得ないのである。かうした矯飾と虛僞とが、果して人間をば萬物の靈長とする所以であらうか。昔しアリアン人種の歌つた曙の歌には、そんな僞りがなかつた筈である。

空しき僞りの羞恥心をもつて、清淨にして崇高な肉體を蔽ふといふことは、人間の弱味ではあるまいか。衣服といふものは防寒の用意でなくて、迷信の產物であるといふことは、人間の中の哲人とか稱するものも言つてゐる。高尚な大則に不潔の意義を附し始めたのは、人間の世に於て隨分古くからのことで、それを元へ戾して、自分に自分を捕へた堅い繩の結び目を解くのは、またこれから幾千萬年の歲月を重ねなければ、人間業の到底性急には出來ないことであらう。人間が人間自身を解放して、影日向なく自然の惠みに浴し得るのは、遠い遠い後の世のことゝ見なければならぬ。

人間には捕へられながらも、却つて自然からは人間以上に解放され、自然といふ優さしい老翁の手によつて、十分に孚くまれてゐる雞は、春の溫い光の下に、嬉々として遊んでゐる。

「コケコッコー。」

我が黑王は、快く羽ばたきをして、高らかに戀愛の歌を歌つた。

外に遊んでゐる黑い王妃も内妻も、母の務めを完ふする爲めに、巣の中で卵を抱いてゐる黄珍も雉子色も、皆共の喜悦を共にした。

七

二十一日經つて、雉子色の抱いてゐる卵――初め黄珍の抱いてゐた――が、十個ながら皆孵化つた。卵に其のまゝ肢を生やしたやうな愛らしい雛は、早やピイ〳〵と食慾の衝動を訴へつゝ、母の翼の下に動き始めた。

母雞も雛も人間の手で、別の箱に移されたが、それは母の寢所と、雛の遊び場とに劃られてゐて、母は格子の外から頭を雛の遊び場に出し得るだけで、窮屈に俯伏してゐなければならぬのであるが、愛らしい雛の爲めになら、火水の中にでも飛び入り兼ねまじき彼女は、自分の飢ゑと窮屈となんぞは、もとより何んとも思つては居らぬ。動物性の愛情なぞと、人間は笑ふか知らぬが、これだけの熱烈な愛を、人間の母は子に對して恐らく有つてゐないであらう。

生れて十二三時間、雛に食餌を與へてはならぬといふことを、雛の母もよく心得てゐるらしかつた。食を求めて已まぬ雛を、彼女はクツク、クツクと宥め賺かして、大空を高く飛ぶ鳶までを、片目で睨んで警戒してゐる。

人間の手で、水に浸した粟粒が雛の食餌として、ハート形をした紫萎の葉とゝもに用意された。それを雛が黄色くなひさな嘴で啄み始めたのは、翌日の朝からである。

それから四日おくれて、黄珍の方の卵も孵化つた。しかしこれにはいろ〳〵のゴタ〳〵があつた。

殼の柔かなダツキングの卵は、母に抱かれながら、ロードの卵に壓されて、一つ潰れて了つた。それを母が餌を拾ひ

に巣から立つた時發見した人間は、大騷ぎをして、また〳〵微温湯で他の卵を洗ふやら、敷き席を取り換へるやら、雌雄四本の手は忙しかつた。潰れたダッキングの卵の黄味と白味とは、母の體温に凝結して、玉子とぢといふ人間の料理のやうに、他の卵の殼へこびり附いてゐた。

そんなことが二度あつた。『これはもう駄目だ。』と人間は溜息とゝもに言つた。

ほんたうにもう駄目かも知れないと思はれた。ダッキングの卵の潰れる度に、他の卵はぬら〳〵したものに氣孔を塗り塞がれて、呼吸が止まつたであらう。しかし日限になると七つのロードだけは恙なく孵化つた。――ダッキングの卵は其の後また潰れることの危險を想はれて、巣から取り除かれた上、人間の口腹を肥やして了つた。

ダッキングは駄目であつたけれど、ロードは悉く孵化つた、といふ報を得たあの惡魔のやうな人間は、まだ鋏刀を入れぬ蓬々とした頭髮を振り亂して、早速に飛んで來た。

『雜種は下司張つてゝ、荒いからいけない。こんなものと一所にしといたら、折角のオーピンが惡くなるから、別にしなければいけませんよ。』と、先づ雉子色に連れられてゐる十羽の雛を一瞥して、惡魔はほざいた。さうして、黄珍に孚くまれてゐる七羽のロードを念入りに見た。

成るほど軍雞の血を受けてゐて、鬪ひの好きな――雛のうちからもう鬪ひの眞似をして喜んでゐる――雜種は、野卑で鬪々しくて、荒つぽかつた。

人間は惡魔の教へに從つて、夜中密かに、五羽のオーピングトンを雉子色の羽がひの下から、黄珍の羽がひの下に移して、高尚な種類を二つ合はせて了つた。さうして、野卑で鬪々しい五羽の雜種を、同じ種類の雉子色の羽がひの下に孤立させて了つた。

朝起きると黃珍夫人は、毛色の變つた黑いのが、自分の黃色い羽がひの下から五つも現はれたのを、得意な顏して見てゐたが、溫厚な彼女は、この不意の養子を虐めることもしないで、ロードに對すると同じやうに愛を傾けてゐた。

上品なのと下卑なのと、生活の段階は日增しに甚だしくなつて、ロードとオーピングトンとの一群れは、餌の喙みかたからしてが、おツとりと物靜かであるのに、雜種の粗野はます〳〵目立つて來て、人間にさへ爪彈きされることが多かつた。

やゝ成長すると、兩方とも靑竹の籠へ別々に伏せられてゐたが、五羽だけしかゐない雜種の群れは、十二羽一組のロード、オーピングトンよりも、ずツと〳〵騷がしくて、其の下品な、さうして、頑固らしい頭を、籠の編み目から突き出して、自ら引ツ込みが附かぬのに、ピヨ〳〵と濁つた卑しい叫びを揚げて騷いでゐる醜さもあつた。水壺を己れの脚で顚覆へして、渇に苦んでゐる愚かさも見えた。

八

『白いのは何うしても產みませんね。』

飼主の雌は、根氣負けがしたやうな調子で言ひ續けた。

『殺して喰べて了つたらいゝでせう。』と、惡魔は赤い口を開いて言つた。

『それも可哀さうだね。』と、飼主の雄は憐愍の深さうなことを言つてゐたが、或る日白蓮夫人が、人間の厨に侵入して、五目飯の殘りを盜んださもしい行ひと、其の時飼主に追はれて逃げる機みに、大きなドンブリ鉢を落して壞した罪とが、飼主の雄の暴君式な怒りを挑發して、それに勇氣を添へ得たらしい雄は、いきなり棕櫚箒で白蓮を押さへ付け、人間の雌の赤い襷で白蓮の細首を締め上げて了つた。

バタ〳〵と翼や肢を跳ねて、幾分間かの苦悶の後に、白蓮は其の白い身體をダラリと、物置の前に横たへた。眞紅に垂れ下がつた女性の肉冠は紫色に變つて、綠の眼は永久に閉された。

羽毛を抜くのと、肉を解くのとは、居合はせた惡魔のやうな男の役であつた。

『こいつは産卵雞だから、筋が多くて不味いんですよ。』と言ひ〳〵、惡魔は鋭い庖丁を手にして、赤裸々にされた白蓮夫人の肉に向つた。黒玉も王妃も知らぬ顔をして、彼方に遊んでゐる。

其の夥しい脂肪には、惡魔も驚きの眼を瞠つてゐた。臀部はもとより、内臓一帶が、殆んど盡く黄色い脂肪で埋つてゐた。

『脂肪過多で、石女になつたんですね、こいつは。……』と言ひ〳〵、惡魔は先づ翼と肢とを切り離し、内臓を開いて直に子宮を見たが、それは全く空のまゝに収縮してゐて、葡萄状の卵子の聯珠は、子宮外に堆かく、爛れたやうな色をして潰れかけてゐた。卵子の潰れたものと思はるゝドロ〳〵した液が、肝臓の一部にまで附着してゐた。

『病氣ですね、これは子宮外姙娠ですよ。これぢや、いつまで經つても産めツこはありやしない。もツと早く喰べれや好かつた。……しかし、脂肪が多いから割合ひに可味いかも知れませんよ。……この鳥はすツきりしてゐて身が輕いから、脂肪は殆んどないのが普通なんですがね。』

惡魔は血に染んだ庖丁を笏のやうに持つて、外科醫者のやうなことを言ひながら、だん〳〵雞に似た恰好になつて來る首を傾けて言つてゐた。其の黒い額にも、血汐が撥ね着いてゐた。

この夜、人間の家では、珍らしく豐富な晩餐會が行はれた。

惡魔のやうな男は、其の後も毎日のやうにやつて來て、いろ〳〵と、生きてゐる雞の世話をした。

雞の國は惡魔に頼つて榮えて行く。

―一九一九年五月二十三日―



催眠術師

岩野泡鳴

一

『和、こんどアまいねい――とても見込みアない。この家も引き移らねばまいねいでば。』賢三は自分の顔の色も少し青くなつてるかと思へた。

いつも治療をやりに行くうちから全く失望して歸つて來るが早いか茶の間へどツかりあぐらをかいたが、自分の妻が人仕事をしてゐるのに向つては、この宣告のやうた物がかの女へ氣の毒にも感じられた。

『また引ツ越して今度は何をするの？』かの女もこちらの樣子を見て取つたか、縫ひ物の手をやすめて心配さうにかしこまつた。その圓い顔の愛嬌にも陰鬱のかげをさしてゐるのは、近ごろ珍らしくなくなつてゐたのだけれども――。

『矢張り、催眠術の先生か？』賢が斯う答へた時には、自分で自分をあざけるやうになつてゐた。が、背に腹は替へられぬところから、二日のあひだも方々を探しまわつて、やツと安直な住まひを發見して、どこに相變らずの『心理研究所』と云ふ看

板を掛けた。

神田の方から來ると、その電車を曙町で下り、右の横丁へ這入つて、少し行つたところだ。材木屋と云つても殆ど名ばかりで、貸間をして喰つてるうちの一と間を借りたのだ。が、便利にも家の横手に研究所の効能を書き並べた大きな看板にかかげられて、その下をくゞつて這入つて行くと、家の向きとは横ざまに格子戸つきの狹い土間がある。そこをあがつて、左りの六疊を渠は占領した。右の六疊にも、奧の三疊にも、また二階の六疊にも借り手は這入つてゐたが、この商賣に對する客を受けるには、こちらの占領してゐる部屋が丁度一番都合がよかつた。が、不幸にも、ここでも、ひやかしの客はあつても、本氣で治療を賴んで來るものが殆どなかつた。

妻のお初が割り合に裁縫の達者な爲め『仕立て物仕り候』を以つて少しはかせいで呉れるので、どうやら斯うやらその口をしのげて行けたのだが、それもやがてさうは行けなくなつた。と云ふには、自分の妻の氣ぶんが變化して來たのは姙娠の爲めだと云ふことが醫者の診斷によつて分つた。自分はそれを喜ぶより寧ろ呪ひたいほどに貧乏であつた。『おいらも物好きであつた、なア』と、渠は自分で津輕言葉まる出しの歎息を發したこともある。考へて見ると、まるで貧乏をしに東京へ出て來たのも同樣だ。國で歌を詠んだり、近ごろ流行の散文詩を作つたりして、小い雜誌など出した時は、まだ獨りであつたとは云ひながら、のんきであつた。が、職業としての小學校敎員には行く末の見込みがなかつた。如何に多く敎育書を研究して行つても、敎員の俸給には分り切つた制限があつた。やがて三十歲に達しようとするものが、たとへ校長になれたとしても、狹い偏僻な地方のあちらこちらを轉任してまわつてゐるのでは、いつまで行つても、わが國の中央へのり出せる機會のないにきまつてた。さうかと云つて、好きでやつてる歌や詩にも自分の中央文壇に對する確信などはなかつた。

で、あれかこれかといろんな書物を自分の手にをへる範圍で讀んだうちに、法律や經濟や政治の書もあつた。が、或時、地方新聞の廣告を見て、ふと讀みたくなつた催眠術に關する著述を一つ註文して見た。それはほんの小さな安い本で、竹內楠三と云ふ人の編著であつたけれども、自分はこれを讀んで催眠の暗示と云ふことに餘ほど興味をおぼへた。そしてこの新らしく得た知識を以つて、早速、當時貰ひ立ての妻に應用して見た。そしてかの女がうまく假りの眠りに這入つたのを見きはめると、自分は思はず一層の興味に乘つて、

『お前はげやろになつた』と云ふ誘言的暗示を與へた。

『……………』かの女は新潟のものだけれども、既にこのげやろなる言葉を知つてゐたので、坐わつてゐたのが兩手を疊に突くと直ぐ、その兩手の肱をそとへ張つて、前の方へ這ひ初めた。そのさまがさながら引きがへるで、突き出した口でくわツ、くわツと鳴き初めさうだ。餘りに滑稽であつたと同時に、これが自分の女房であるかと思ふと、ちよツと薄氣味が惡かつた。自分はあたまで知りつつも新たにこの意外なことを實驗したので、また思はず身をよこに引くと、かの女はそのあとを這つて行つて、壁のところで方向を轉じ、部屋中を這つてまわつた。けれども、自分はいい加減のところで眠りを解いてやつた。そして自分は

『こりや實に驚くべきことだべ』とかの女にも語つて、そこに初めて自分の天才を發見したと思つた。それから、普通心理學や催眠心理の書物を隨へ研究して、自分自身で一種の心理治療法を思ひ付いたのである。そしてこれを以つて妻と共に東京へ出て來た。

初めのおほ家さんが非常に信じて與れて、自分はその人によつてかのいはゆる『御殿』へ紹介された。催眠の器具を製造しておほ成金になつた屋敷のことだが、職工あがりの主人は無學で朴訥なだけに前後九ケ月間もこちらへそのひど

い神經衰弱のからだをまかせてゐた。こちらもそれから殆ど月給のやうにして生活費を得てゐた。が、どうもその結果が思はしくなかつたので、向ふも失望し初めるし、こちらも亦氣の毒になつて、自分から責任上手を引くことにした。

自分としては、初めて職業的に責任ある患者を引き受けて置きながら、九ケ月間も經て而も不結果に終はつたのである。それが爲めにこの術の効能をばかりでなく、自分自身をも疑ふやうになつた。卑怯な自分本來の性質としては、とても斯う大膽にやれる筈がない。ましていろんな競爭者も多いこの大都會眞ン中に於いては！　さうだ、人をこの術で治療するどころか、

『わいもじよしき自分で催眠術にかかつてゐただけで。』斯う、自分の妻だけにはこツそり白狀もして見た。さうでなければ、實際、こんな不結果のものに熱中して、自分から求めて貧乏に飛び込む筈はなかつた。けれども、今となつては仕かたがない。妻は姙娠の爲めに十分生活上の手助けもできないし——自分からの生活費をかつ〳〵にでも出す爲めには、どうしても、この半ば習慣ともなつてゐる、そして半ばは詐僞とも思へることを看板にして置かねばならなかつた。さうして置けば、たまには僅かでもその料金は取れるのだが、もう、自信も何もなくなつてるのであるから、術に於いてはます〳〵いい結果を得られなかつた。ただそのうちに何か別にうまい金儲けをとばかりあせつた。

二

渠は先づ秘密出版と云ふことを考へ出したのである。これなら、たとへ直接に世間へ向つては卑怯な自分でも、別に公けに顏を出さないですむから、隨分思ひ切つたことをやれないでもなかつた。

けれども、秘密物を秘密に多くの人々に買はせるにはどうした方法を以つてすればいいか？　そこに考へが行き詰つてしまつた。で、せめては新聞へ廣告ができる程度の物にして、成るべく人の心をそそりさうなのを工風した。歌や詩

を作る時のやうな思ひを凝らして、先づその書からとする書物の表題をきめた。『夜の明くる迄』、『愛の盃』、並びに『秘密の樂しみ』と云ふのがそれであつた。そしてその中へは夫婦間の情愛や用語や衛生的注意などを成るべく奇麗な言葉を以つて書き入れた。三つが三つとも別に大した特色も出なかつた代りに、さう秘密にするまでもないまじめな物ができ上つた。そこに、もう、おほ儲けができてしまつたかのやうな意氣込みを減じて、

『こら、見たまい』と、つい、ふと、自分の妻に向つて同學の友にでも對する言葉つきが出た。それをあわてて自分の顏や口ぶりで訂正しながら『男女間の道徳書と云つてもよかべおん。立派なものだべ。』けれども、自分がかの女にわざわざ讀んで聽かせた文句のうちに、『女はいつも男のした手に出るべきものなり』とあつた。

『…………』かの女はそれを矢ツ張り秘密のことに關する文句だと聽き取つたのであらう、直ぐその顏を赤らめて、ただにたりとしてこちらを見た。『そんなことを書いて！』

『さう云ふ意味では無くてあつただばて――』こちらも計らず顏が赤くなつたと思へた。けれども、別に自分の心ではこの文句が讀む人にさう云ふ意味にも取れるなら、却つて賣れ行きには都合がよからうと考へられた。自分のよそ行きや妻の博多帶などを質屋へぶち込んで、そのかねを以つて四號活字四十頁、三十五錢の赤本が三種百部づつでき上つたので、『男女草紙』叢書として、廣告を小いのだけれども、先づ試みに都新聞に、出して見た。ところが、何等の反應もなかつた。再びやまと新聞へ廣告しても、また一部の注文さへ來なかつた。その爲めに夫婦は二度目の失望に落ちたと共に、一層かねの融通がつかなくなつた。ふたりは努めて外米を喰つてゐたけれども――。

もう、年の暮れになると云ふのに、その用意どころか、或は、その日の釜の下を燃やす物がないと云ふ騷ぎであつた

身もちの妻を朝ッぱらからまた質屋へ行かせるの[illegible]びないので、賢三は自分で思ひ切つてまき屋へ出かけて行つて見た。けれども、自分がおもてに立つて人を說いたり、かけ合ひをしたりすることは至つて不得手なのを知つてるので、かの成り金御殿へ治療に行くことだッて、おほ家さんにすッかりお膳立てをして貰つてから行つたほどであつた。それを辛抱してと思へば、なほ更ら口がきまり惡さの爲めに澁つてしまつて、――それでも、さう、した手には出ないで、『おい、キ、君』と、ふところ手をしながら、いきなり、そこの主人らしい人へ呼びかけた。國でなら、へいへいと云ふところを、君と出るのさへ苦しかつた。『マ、まきを、シ、四五本、カ、貸して呉れないか? ダ、代金は、ニ、二三日のうちに、ハ、拂ふ。』

『お斷わりします。』一言のもとにはね付けられてしまつた。

『……』これでも十分妥協的な態度を取つてゐたつもりが、くわッと俄かに取りのぼせた氣味になつて、ぷりぷりしながら歸つて來た。

この不平を隣りの中田さんが聽いてゐたかして、兩手の掟りへ白い息を吐きかけながら、ちよッと顔を出して、

『そりやあなたがへたですよ』と、年したの人だが親切にも注意を與へて呉れた、まきを一わ持つて來させて、そのうちを默つて使つてしまつて、代金は今ないからあとで取りに來いと云へばよかつたでしよう。』

『しまつた、な。』賢三はにが笑ひに轉じて妻の顔を見た。

『仕かたがないから』と、かの女はいつよりもまじめになつて、『わたし、また行つて來ます、わ。』

『……』言葉には、默つてかの女のするがまゝにさせて置くよりほかに道がなかつた。もう五ケ月の腹を隱すやうにしてかの女が淋さうな風で質物の包みを以つて出て行くのをじッと見送つてから、今のはなしからそれとなくお互ひに

障子の明けッこをしてあつた隣りの人に向つて、『中田さん』と笑ひながら呼びかけた。『何かよいかね儲けはありへいねか、な?　斯う貧乏してゐちややり切れません。』

『こりやお互ひですよ。』

『然し、キ、君はまだ獨身ですから。ボ、僕など夫婦もので、而も一方がこれですから。』腹を手で大きく見せてもう、何も包み隱す必要はなかつた。

『僕もあるのですが、國に置いて來ました。つれて來ても、どうせまだ喰へません。』

『君も細君おありですか?』

お互ひに斯うした親しみをまじへるのはこれが初めてであつた。而も、こちらは向ふにも細君のあるのを知つて、これまでの警戒をゆるめてもいいのであつた。

『僕は郵便局に勤めてをりますが』と、中田さんは云つた、『君もどうです、今、年賀狀のために人が澤山入るやうですが?』

『そだ、な――』こちらの氣は一も二もなく動いた。歸つて來た妻に相談をかけて見たのもほんのおもて向きばかりのことで――自分の心は最初からきまつてゐた。中田はまだ人を推薦する位置にはゐないので、わざと知らぬ顏をしてゐるからと云つた。自分はひとりで初めから口を利くのが少しいやであつたけれど、その日、直ぐ行つて手ッ取り早く採用されることになつた。そして直ぐ事務に就いて晩に歸つて來ると、

『うまく行つたの?』妻は嬉しさうに立ち迎へた。

『中田さんとは違つて臨時やとひのことだばてい』と、こちらも久し振りのにこ付きを見せて、『これでも信用を得てあと

までも殘るやうになれば、まア、お前のお產がすむまででも安心だべ。』

『さう、ね。』妻もその氣になつてゐた。

その夜、お禮の意味ともなく菓子を買つて、中田さんをお茶に呼んだ。すると、中田が催眠術のことを興味ありげにそれからそれへと根問ひするので、

『それでは、一つ君に說明がてらかけて見ましようか』と云つて、先づ渠の承諾を得た。これはすべて催眠術師の最初の用意であつて、承諾もしない者にかけたと云はれては實地の規則に違反するからであつた。

渠と自分とは安瀨戸の火鉢を一つさし挾んで互ひにそれをかかへるやうにしてゐたのだが、自分はそこにさしてある鐵の火ばしを二本取つて、先づ渠の兩手に持たせた。そしてその火ばしのさきとさきとを渠の目の前で二寸ばかりに接近させた。

『………』渠は隨分きまじめにこちらの云ふ通りになつて、その先きを見つめてゐた。

『これがひとり手にもツと接近します！』と云つた時、そばで微笑しながら見てゐる自分の妻と自分はちよツと顏を見合せた。が、直ぐ自分もまじめになつて、『さア、接近します。――今少ししたへば接近します。――そら、して來ました。――段々と、して來ました。――そら！』いよ／＼接近したかと思ふと、またそのさきとさきとが遠く離れてしまつた。どうもこの人に限りうまく行かないやうだから、それと感づかせないやうにしてそツとだが、こちらの兩手を以つて兩方から向ふの兩手をちよツと押さへて、これも一種の暗示を與へるやうにして見た。が、矢ッ張り、駄目であつた。

この人はわざとこちらの暗示に反抗してゐると云ふことが分つた。けれども、專門家がそんなことにうち勝てないと

云はれては駄目だと思つて、なほ何喰はぬふりで——もう、無理に、不自然にだが——その暗示を加へて見た。

『一向かからんぢやないか？』

『どうも君は虚心平氣になれないはでいきへん。』これは、然し、今のこちら自身に對しても云ふべき言葉であつた。とどの詰りは自分の斷念してゐる所から、かかる反抗心ある人をも催眠狀態に入れるだけの力が出て來よう筈はなかつた。向ふから賴んで來るものとは違つて、而もわざとにも反抗しよう、しようと思つてるのを從へるのは六ケしい。まして、こちらにつよい熱心のなくなつてる今日に於いてはだ。それを自分ながら知つてゐないでもなかつたけれども、自分の商賣がらとして私かになほいま〳〵しかつた。『では』と、妻の方を見せて、『こいつをかけて見せましよう。』

『また、わたしいやだ、わ！』

『…………』こんな時に所天の加勢をしないとはと云ふ意味で、自分の妻の逃げようとして立ちあがりかけたのを心で怒つて、思はずちよツと睨みつけた。すると、もう、それでかの女は半ば暗示を受けてゐた。さうだ、思ひ出すと、最初から素直で、これにかかり易いたちであつたが——引きがへるになつてをかしな風をして歩いたと云ふことをあとで聽かせられた時、それでも、眞ツ赤になつておこり出し、

『わたしは、ね、これでも人間ですよ。そんなことをして、若し、そんなら、ね、をなごが人の奧さんだと云はれて、その眞似でもするやうになつたら、あんたはどうします』と云つたツけ。

『そんな暗示を二度とかけさへさないばよかべ。』

『でも、若し人がかけたら——？』

『他人にやア承知しなけりや——』さうだ、暗示にかかるにはその本人の承知不承知が先決問題だと云ふことを學理上

からもよく說明して聽かせてやつた。兎に角、生活までを共にしてこちらを信用して來たをんなのことでもあり、そして商賣上の必要に應じては、安心してこちらの術をかける一つの無くてならぬモデルにしば／＼なつて來たをんなだ。容易にこちらの自由自在になるのは當り前であつた。はたから見れば餘りにそらぞらしく、前以つて申し合はせをしてあつたかのやうに、かの女は催眠の狀態に這入つた。

『不思議です、な』と、それでも、中田はまじめになつて、その襟を正した。

『……』こちらは中田のそのやうすを見て、自分ながら自分の普通人とは違つた力を有してゐると云ふ誇りを再び恢復しないではゐられなかつた。

三

かの女に向つて、

『お前をこれから國さ歸してやる』と命令すると、少しも別に嬉しさうな顏つきにはならないけれども、その手では不斷着をよそ行きに着かへるやうなことをし初めた。それから、また切符を買つて汽車に乘り込むやうすをした。やがて汽車を下りてかの女の新潟なる県へでもいよ／＼歸つた段になつたかと見ると、お辭儀をするが早いか、肱を張つてその兩手を腰のあたりへ置き、優しからぬ聲まで出して、

『よう歸つた、ね。』

『……』こちらが驚いたことには、かの女はいつのまにか男性の聲や態度を取つて、催眠心理學上の變性狀態に這入つてゐる。自分としては、そんな暗示を與へたおぼえもないのに。かの女が國へ一度歸りたい、國へ歸つて母に會つて來たい、來たいと、——妊娠を意識してからは、殊にさう——云ひつづけてゐたので、試みにその望みを滿足させる

爲めの暗示であつた。だから、國と云へば新潟市のことを意味したつもりだが、かの女はそこへ途中を下りなかつたらしい。どこか別な驛――いや、新津で下りたにきまつてる。

『達者でゐたか、ね？――東京は南部のヅウ／＼と違つて、ね、結構だらう？――結構なところではないツて、それで歸つて來たのか？』

『……』畜生、畜生！　全くこちらに對するうら切りの言葉をでもかの女はかげで云つて、その男にひやかされてゐるやうすだ。男の聲がてツきりかの女のいとこのだと分つた。と云ふのは、かの女がこちらへあまへた時、一度、その聲つきをして聽かせたことがある。その聲は無邪氣のやうだが、ふとかつた。新津には、その聲のぬし――さうだ、かの女が寢もの語りでよくあまへると、

『わたしの好きな、好きないとこ』と云ふ、その男が或石油會社に勤めてゐるのである。『ほんまは、ね、子供の時から好きであつたけれど、ね、いとこ同士は鴨のあしと云ふでしよう――？』

『馬鹿！　そりや味がえいと云ふことだべ。』

『あら、さう？』かの女はこの時如何にも耻かしさうにその顏を特別に赤らめた。『わたし、また、矢ツ張り、結婚してはいけないと云ふことかと思つてをりました、わ！』なほ、こちらの不機嫌をからだに手をかけてなだめるやうにして、

『だから、ね、別に關係なんかなかつた、わ。』

『……』そんなことは、然し、今の場合、どうでもよかつたが――こちらも、實は、いたづらにかの女の國を思ひ出した心の底には、まだ會つたこともないのに名を聽くのさへ毛ぎらひしてゐるそのいとこが潜在してゐたのである。それを、而もおそろしいことには、かの女はこちらの暗示のうちに感じ取つたものらしい。だから、催眠のうちにだと

は云へ、所天とその友人との見てゐる前でおほぴらに會見してゐるのだらう。御叮嚀に、而も、かの女がその本人の位置にまで立ち變はつてだ！　餘りのねたましさに、――どうせ、中田には何のことだか分つてる筈もないのに安心して――こちらは胸をどき付かせながら、じツと、かの女のさまを見つめてゐた。眠りを解かないうちに、もと、實際には關係があつたかも知れぬと云ふ疑ひに對する確かめの證據をでも握れないかと思つてだ。

　すると、被催眠者はなほ引き續いて鹿爪らしい挨拶ばかりを云つて、別に婦人を侮辱するやうなことばも、女をわが物にしたやうなこともなかつた。して見ると、矢ツ張り、かの女は身の白狀通り無事な交際だけにとどまつてゐたのか知らんと、こちらも少し心を落ち付けた。

　やがてかの女はすツくと立ちあがつた。そして矢ツ張り、太い聲で、

『こら、小わツぱめら！』手あしをひろげて往來の眞ン中にでも立ちふさがるかたちになつて、右や左りを急がしさうに防ぎとめてゐるやうすだ。つまり、向ふからをんなの兒がつれ立つて來たのを、自分ひとりが大將がほで喰ひとめ、その手のしたを右から左りから渠等のくぐりぬけようとするのに對抗でもしてゐる樣子さながらだ。

『……………』こちらが見てゐると、お初もその可愛いおかツぱのひとりであつたに相違ないが、その時のことに就いてかの女がそのいとこを思ひ出してゐるのだとすれば、一層罪のないことであつた。一時くわツとしたこちらのあたまもすツかり冷やかになつた。『もう、よかべ、よかべ』と、つい、非科學的だと思へる言葉が出た。

『……………』かの女は今度は仰向いて高いところをでも見てゐたが、『なつてるぞ、なつてるぞ』と叫んだ。そして木のぼりをして、何かの實を取つて喰ふ眞似をしてゐる。これもいとこが子供の時にしたことであらうが――。

『…………』こちらはちよツとかの女を呼びさます機會を失つてしまつて、中田と顏を見合はせてにツこりすると、中

田さんはやッと今氣が付いたかのやうに、

『男の子になつてるのです、な』と云つた。

『さめろ！』こちらはわざとにもおごそかな態度を中田に見せてかの女に命令したつもりだが、一向に通じなかつた。

『…………』かの女は一生懸命に走るやうすをしてゐる。

『もう、よかべ――さめろ！』

『…………』なか〳〵にそれが通じないのであつた。

『どうしただべおん？』低い聲で斯う、ひとり言のやうに云つて見たのだが、それは自分には度を失つたかと思はれるほどの失敗豫想とそれに對する恐怖とが含まれてゐた。自分の暗示がへぼくたになつたのだとすれば、自分の命令以外の潜在意識までがうまく向ふへつたはるわけがなかつただらう。して見ると、かの女の方に於いて現在ただならぬからだが禍ひして、こちらの暗示から離れてまでもおのれ勝手な眠りに耽つてるのか？ 斯う思ふと、實際にどうしていいのか、ついぞこの術に於いて經驗したことのない心配をおぼえた。そして立ちあがつて行つて、『おい、さめろ！ もう、よかべ！』術としては如何にもまづいが、かの女が手と足とだけをからだも走つてるやうに動がしてゐるその脊中へぽんと一つひら手を與へた。

『…………』かの女はそれでやッとさめて呉れた。そしてそのさめた時の姿勢のままで先づにッこりして見せた。

『馬鹿！』と、つい、こちらは苦しかつた喉までこの言葉を込み上げて來させたが、口には出さないでまた飲み込んでしまつた。かの女のとは違ひ、却つてこちらはいやな顔をしたに相違なかつた。不斷はあんな優しいやうすをして見せてゐながら、心の奥では――この頃のやうに生活が行き詰つた反動としてか？ ――また他の男を思ひ出してゐるのか

と思ふと、こちらとしては、ただ自分の催眠術が殆ど役に立たなくなつたばかりの不愉快ではなかつた。

が、――かの女がこちらの顔いろを少しは見て取つたかして、ちよツと心配さうに、

『何かをかしなことをして』と聽いたのに對しては、わざとにもゑがほを見せて、

『上できだ――でき過ぎたほどだべ。』これは、かの女によりも、中田に向つて、自分の術が決してへたではなかつたことを――學術上ではなく、寧ろ處世策の上から――暗示したのであつた。

『僕はこんな不思議なことは初めて見せて貰つたのです。』

『さうでしよう。』これでこちらは自分の專門的商賣のことは向ふも十分に納得して呉れたゞらうと見えたので、『然し』と、今度は全く別な方へうち解けて行つて、『とても、これでは喰へません。段々聽いて見ると、催眠術の本は商店の小僧さんだちによく賣れたことがあるさうですが、それは何か誰れにでもできるうまい手があつて、それで以つて若いめらすを自由にできたらと云ふ、ほんの、空想的な好奇心から讀んだものです。な、實際はこれで以つてさう惡いこともできず、極まじめな物に違ひありませんが――』この時、少し私かに相手の氣を引いて見るつもりで、『世の中はまじめばかりではとほれないと思ひますが？』

『無論です。』中田さんも、横を向いてだが、そこへ大分にちからを入れて返事した。それから、まだ少しはとぼけてゐるやうにしてだが、こちらを見て笑ひながら、『まだ、その好奇心の小僧さんのやうな人間がうぢや／＼をりましよう。』

『それで、ねす、秘密出版もやつて見ましたが――。』

『あんな物を！』妻はまた何を思ひ出したのか、赤い顏になつた。大體から云つて、別に耻づべきこともなかつたのに。

『やりかたが拙かつたのでしよう。』中田はこちらの思ひ通りに乘り氣を見せないでもなかつた。そこへ催眠術に於いて

云へる釣合ひとでも云ふべき物を突ッ込んで、

『では、一つ、一緒に何かやりましようか、な？』

『何かやりましよう』と、中田も答へて呉れた、『どうせあの郵便局の仕事などはほんの一時の腰かけですから。』

『さうです、な。あれが、キ、君にも一時なら、ボ、僕にはもッと情けないわけでしよう、新年までの臨時やとひですから、な。』さうだ、その臨時を間がよくば妻のお產まで延ばすやうにしたいものだが、それまでにも、ほんとうに何かよいことを思ひ付きたかつた。ところで、その自分自身としては、どうしても誰れか別にあひ棒がなければ何事もできない性分がこころ寂しかつた。東京へ決心して出るには、——そして自分ばかりにではなく、世人一般にも、新らしいだらうと思つたその術を商賣にするには、——自分の妻がそのあひ棒であつたからよかつたが——。

四

もう、冬の夜も大分に更けてゐた。賢三が氣が付くと、けふは午前から手紙のより分けと云ふ慣れない仕事をやつて、既に宵のうちから勞れてゐたのであつた。催眠術のでき榮えにゆるみがあつたのも、一つには、その勞れの爲めではなかつたらうか？　果してそれなら、自分の腕もまださう見限つたものではなからう。

中田さんがその自宅へ歸つて行つてからのこと、

『もう、寢べアい』と、こちらは獨りで火鉢を占領して、少し腰を浮かせたもも引きばきの膝と膝とのあひだへまた火をしながら、自分の妻に向つて見ると、またいつも通り目くらむやうな感情がからだ中にみなぎつて來た。そして何だかあかじみたにほひをそれが即ち人間その物の『カマリ』であると見て、もう、自分はかの女が催眠中にその好きな男に戀ひしたことなどは左ほど重大な事件には數へなかつた。ほれ[illegible]、ただかの女をからかふ冗談として、それを語り出し

たのであつた。そしてその最後に『矢張り、お前のいとこに對する戀がお前の意識の奥に潜在してゐるべいおん』と附け加へた。

すると、かの女は僅かにその微笑を取り消したと同時に、一つしかない床を取つてゐるその手をやすめた。そしてよりく〱しながら、

『わたし、これから催眠術にかかることはお斷わりします。』

『どうしてだべい』と、こちらは笑ひながらとぼけて見せるより仕かたがなかつた。

『だツて』と、かの女は最も恨めしさうにこちらを見つめた。その目には涙をさへ浮べて、『だツて、わたしの知らないあひだをげやろにされたり、子供の時のことを云はせたりするのですもの！』

『そりや、然し、おれの命令では無くてあつた。お前ひとりでどし〱なつて行つただべい。』

『そんなおそろしい物はわたし、これから全くお斷わりします。』

『……』こちらはかの女の氣性を知つてるので、いやだと云へばまだそのいやを押しとほすのだらうと思へたが、臨時にでも郵便局員になつた自分には、もう、少くとも當分のうち、そんなことはどうでもよかつた。

十二月の二十三日、四日、五日とは無事に勤めたが、その二十五日の晩おそくの歸りが寒かつたので、かぜの氣味になつた。そして世界かぜにでも取りつかれたかと心配しながら、二十六日、七日と休んで、二十八日の朝、熱も幸ひに取れたので出勤して見ると、もう、自分の席は人がそれを占領してゐた。

『無斷で缺勤するやうなものは二度とやとひません。』

『……』馬鹿！　斯う一つ、局を出る時に怒鳴つてやりたかつた。まだそんな經驗もなかつたものが、よく說明さ

れてゐない限り、――ふる狸のお化けぢやアあるまいし――缺勤屆けを出すことなど知つてるものか！　主任の贔屓がほんのヘッぽこ官吏のくせに高慢ちきな顏をして、威張つてるのが最初から氣に喰はなかつたのだ。

賢三は自分の妻がゆふべぷりぷりしたのよりも、もッとぷりぷりして、まだ多少は病後の氣持ちが惡いからだで寒い風を勢ひよく切りながら、家へ歸つて來た。

すると、お初は何だか知れない老人と云ひ合ひをしてゐた。

『新聞の勘定はみそかときまつたものぢやアございません。』

『…………』みそか？　今年今月のみそかはしあさつてだ。

『それはさうかも知れませんが――』

『なんだへ？』いきなり、こちらは怒鳴つた。まだ格子のそとにゐたけれど――。

『なアに、ね――』妻はその所天を見てやッと心が落ち付いたと云ふ風で、『新聞代を取りに來たのですよ。』

『…………』そんなかねがあるものかと私かに考へながら、『何新聞だ？』

『讀賣です』と、老人が少しおだやかになつて答へた。

『讀賣を取つてゐると云つたのか？』これには少からず一種の暗示が這入つてゐた。

『…………』かの女はこちらを見あげて躊躇した。が、もう、術にはかからぬと云ひながらも、馬鹿ではない女としてこの暗示には直ぐかかつたものと見え、『さうでした、ね。うちぢやア讀賣は取つてゐないのですよ。』

『うちのは萬朝だべ。』こちらは中田さんのを、面倒くさくなれば、借りて見せてやつてもよかつた。

『取らないのに、帳簿へついてるわけがないが、――』老人は不審さうに獨り言になつた。

『そりや帳簿が消えてゐないのだべ。先月は取つてゐたが、な、ちやんと斷わつた。』

『さうですか？　ぢやア、今一度よく調べて見ましよう』と云つて、老人はしぶ／＼ながら歸つて行つた。

そのあとをふたりは互ひに顏を見合はせてにツこりしたが、お互ひに直ぐまた去つた老人のよりも澁い顏になつた。郵便局の失敗が報告されたからである。

『困るぢやアございませんか』と、かの女はその圓い顏を少しがめて、『おツ母さんはのん氣だから東京のお正月から見て置きたいと云つて來たし？』

『手紙で斷われればよかべ。』

『もう、まに合ひますものですか？』

『お前これになつたのを知らせてやるはでい――』斯う云つて手を自分の腹へ持つて行つた時には、こちらは一番自分の顏がしわんだと思へた。

『でも、仕方がないぢやアございませんか？』かの女には、然し、こんな苦しいあひだでも、情愛のうへの恥しみが見えた。尤も、かの女のつもりでは、產み月になつて母が來て呉れればそれでもよかつたのだらうが――。

『…………』こちらはそのかの女の爲め、またかの女の孕んでる兒の爲め、また／＼かの女の呼んだ母の爲め、どうしても何かにあり付かねばならなかつた。『わい、きらひだばて巡査志願でもすべ。』

さうだ、實際は、教員の時から、もう、習慣のやうに毎日取つてゐて、教育のことや文學のことで一日でも見ないではゐられぬその讀賣新聞紙上で、巡査の募集があることをも見て置いたのだ。

直ぐその手續きを警視廳までしに行くと、歲が明けての七日にならないではその試驗がないとのことであつた。で、

願ひ書だけを書いて置いて來た。

『おッ母さんに來さう〳〵からこんな貧乏くさいところを見せたくありませんから』と云つて、妻はまたその自分の物を持つて質屋へ行つた。そしてお正月の餅をまで一斗ばかりあつらへた。

『そさないでもよかべに。』こちらは妻の物を失つても、つまりは、自分の責任に歸するのだと考へた。

『でも』と、妻は答へた、『あんたの恥ぢになるぢやアございませんか？』

『……………』さう言はれると、然し、一言もなく自分の不平を押さへてしまはねばならなかつた。

五

おほ雪の爲めに信越線が途中でとまつてたからと云つて、母は三十日のゆふがたになつてこちらへ到着した。

賢三は初めてかの女に會ふわけだが、さすが、お初の母だけに色が白く、その顏のかたちまでが――痩せてるのが違ふだけで――先づ、その娘そツくりだと思へた。最初母が座敷――と云つても、茶のま兼寢室兼用のたツた一つしかない――に坐わつた時には、じろりと一と目低い天井までも見まわして、

『こんなところに住んでゐるのか』と云はぬばかりの不平がほを見せた。そして初對面の挨拶になると、人が惡いのかと思へるまで切り口上になつて、これが五十を越えた母とは見えないほどはき〳〵してゐる。いや、あまりに向ふがはき〳〵してゐるので、こちらは會はぬさきからこころ頼みにしてゐたのがそれてしまつたやうな氣もして、何となく自分の妻を奪はれて行くのではないか知らんとも思へた。で、自分の妻の顏やしてゐることを返り見てはゐられぬほどの寂しい氣持ちに堅くなつて苦笑しながら、伏し目がちに母のはなし相手をして暫らくの間、

『は――どうも――は――ねす――わい〳〵――ぱて――はで』と云ふやうな、自分の地方言葉を連發してゐた。よそ行

のたましひが全く拔けて居たやうに━━。

然し、それに活を入れたやうにこちらを正氣づけて呉れたのは、母のお國なまりらしいのであつた。まことにきりりとした言葉であつた。

『人間は、ね、何を致しましたツて、ね、夫婦滿足して暮して行けさへすりやそれでよろしいのでありますさかい。』

『さうです、さうです！』こちらは向ふの機嫌を取るやうに斯う思はず叫んで、ちよッと愉快であつた。が、ただ、藝を志願してあることは云つてもいいのか━━但しは、まだいけないのか？　この場合、まだお初と相談して置かなかつたので、云ふのをさし控へた。

ふと考へて見ると、自分の妻はその所天の故郷なる黑石にゐた時には可なり津輕ことばを使へたし、東京へ來ては直ぐまたうまく東京語になつてゐる。そしてその娘の親だけに、母もなかなか利口のやうだ。ふたりが貧乏してゐるのをさへ淡白に承知して呉れれば、こちらも母のゐるあひだはいろいろな意味で賴み甲斐になるのであつた。

『うちには番僧をひとり置くやうにもなつたし』と、母はその留守の心配がいらないことをお寺生れの娘に語つてゐた。

然し、その娘が暫らく見えないのを、『どこへ行きましたか、な？』

『買ひ物にでも行きしたか？』

『かまはんでもえいのに。』母は半ば獨り言でだが、一段低い聲で投げ出すやうに云つた。

そのうちに、お初が歸つて來た。

『おツ母さんはお酒をお好きでしたさかい』と、もう、母のやうなお國言葉を出して、母のゆふめしの膳へ、かの女自身の計らひで買つて來たところの酒をまでお燗して乘せた。そして日ごろの苦しみを忘れてしまつたかのやうにいそ

いそして、近來にない晴れやかな笑ひ顔を漏らしてゐる。
『まア、御主人に。』母は遠慮らしくかしこまつた聲をしてその娘に目くばせした。
『飲めないのですよ。』お初はにこ付きながら顔を横にして肩を下げ、少しうわ向き加減に母の顏を見た。
『………』そのかの女の優しさに感じて、こちらはかの女の母のおつき合ひをしなければならぬやうに思へた。『まア、初めてのことだけで、相手しましよう』と云つて、自分の手を無格恰につき出して、母が手早く取り上げて渡す猪口を受けて、妻に酌をさせた。
それから、また二三度の取りやりがあつて、こちらはいつに無くのぼせたやうになつたところ、妻の計らひで誰れよりもさきへ御飯にさせて貰つた。
『結構でありますよ。わたしのやうにお酒を好きでも困りましよう。』
『なに、飲めるに越したことァありますまいが――。』
『何よりも好物でありますさかいい』と、母は微笑しながら、『わたしにだけは仕かたございません。』
『おツ母さんは憎らしいほど醉はないのですもの。』
『さうでもない』と云つたが、母はなほ娘を相手にして、久しく積りつもつたらしい話をしながら、獨りでちびり〳〵とつゞけてゐる。お銚子も三度は取りかへられた。
『………』こちらは、これから毎晩こんな風にやられては、お初だツて溜るものぢやアなからうと云ふ想像が、私かに、自分の心に經濟的心配を浮べないではゐなかつた。
そのうち、貸し蒲團屋が蒲團を一と組持つて來たのを見て、

『どうするの』と、母は醉ひにただよつてるその月を以つて、今、娘が立つて蒲團を受け取つてる右を見上げた。

『…………』お初はその母と顏を見合はせたが、云ひにくさうにしながら、『あんたのに――』

『借らんでもえいではないか――お前ので？』

『でも、一と組しかないのですもの！』

『…………』さうだ、お初がとついで來た時には新らしいのを持つて來た。が、それは成るべく荷物をへらす爲めそして國を出る時の旅費や何かに貸つてしまつた。斯うなると、どうせいつまでも母の手まへを取りつくろつてゐることはできないのであつた。

『では、わたしが借り賃を出すことにします。』

『それにア及びません』と、兎に角、こちらは云ひ添へずにはゐられなかつた。

その翌日、母は正月の餅がつけて來てもその他の用意がなければ見ツともないと云つて、お屠蘇やその道具や三つ組のふた物などを自腹を切つて――而も、東京の買ひ物に慣れない爲めに途方もなく高い價段で――買つて來た。それからまたこんな見すぼらしい住まひには釣り合はぬほど立派なのであつた。

『おツ母さんは自分のうちにゐるつもりだすかい』と、お初は自分の財布の中をでも使はれたかのやうに不機嫌を見せた。

『では、どうしたらえいのだ？』母は詰らなさうな顏つきをして、ちよツと困つてた。

『…………』賢二はただ差し出ぐちを控へて、親子がこころやす立てからの最初の衝突を默つて見てゐた。そこへ、このおほつごもりの日にも拘らず、珍らしくもひとりの患者が附き人をつれて車で飛び込んで來た。ひといリヨウマチを

直して吳れろと云ふのだ。例の如く眠らせて、『お前の病氣はあすの今ごろまで直つた』といふ暗示を與へた。而も、あすまた來たら、今度は二日間の、そしてまたその次ぎは三日間、五日間、十日間と、段々日にちを延ばして行くつもりであつた。そして最後には、もう全く直つたと云へるやうに。

眠りからさめた男は、

『大變に氣持ちがようございます』と喜んだ。そして先づ最初のお禮として包みがねを置いて行つたのを、あとで夫婦が待ちかねてひらいて見ると、十圓札が一枚這入つてゐた。

『さうかね持ちのぢイさとも見えないであつたばいて』と、賢三は母へも自慢するつもりでにこ付きながら妻の方を見た。『これだはいてこの商賣もやめられないでばい。』

『あんなことで病氣が直るなら』と、母はまだ疑はしさうにして微笑を半分その口びるでゆがめ殺しながら、『誰れでもらくなものだが、な。』

『そこが』と、渠は自分の妻にもちから添へを賴むつもりの微笑を浮べて、『わたくしの催眠術の得意なところですから。』

『自分ながらも不思議なものです、わ。』かの女も斯う簡單にだが專門家らしく說明して吳れた。

兎に角、思はぬかねが這入つたので、これで以つて母の蒲團を買ふことにして、この年が全く過去にならうとする眞ぎはの時間を見計つて、渠は母や妻と共に出て行つて、中ぶるのを一と組安くねぎり落した。そしてそれを一緒に家まで持つて來させた。

『東京の買ひ物はすべてこんな風にします。』渠は母よりもここには故參なのを誇りがに感じたと同時に、店の云ひ値か

ら二圓五十錢も負けさせたのが愉快で――今夜こそもツとかねさへあれば、何か必要な物を今一度買ひに行きたかつた。

『今夜なら、何でも安く買へますが、ね』と、妻もなほ未練がありさうに云つた。

隣室の中田がまだ起きてたので、こちらへ呼び込み、母に引き合はせて、

『わたしの一番親しい友人ですから』と說明した。賢三としては、何かかね儲けを一緒にしたいと考へてるからであつた。そしてひるまのうちにをんなどもがあすからの用意の一つに拵らへたところの屠蘇を持ち出させて、皆でまだ早い新年の前祝ひをひらいた。

『僕も寄附するものがある』と云つて、中田はするめを二枚持つて來た。

『では、わたしも』と云つて、母はまた酒を自分からおごることになつて、お初がその代理でわざ／＼買ひに行つて來た。

『寒いの、ね。――新潟だツて、これよりやア寒くないでしよう――?』

『なに云ふてるのだ』と、母はその娘をちよツと輕くたしなめるやうに、『こちらはまだ雪もないくせに!』

『そりやア、ね。』

『寒いとおもやどこまでも寒いべ。』

『まるで貧乏人同士の持ち寄りぢや。』中田は自分で火に當ててたするめを小さくちぎり初めながら、この時、斯う云つてこちらを笑はせた。

『來年は何かうまいことがあるだべに――。』

『腕によりをかけて叩いて、な。』

『そだべい、おん。』

『催眠術のモデルにも』と、妻も笑つた、『もう、飽き／＼しました、わ。』

『たアに』と、母は中田に向つても最も樂天家のやうであつた、『若い時にや苦勞して置くのが却つて藥りになります。』

『………』賢三には、然し、それを聽いてゐると、母がありがたくもこちらの貧乏をよく推察して、まだうち明けないうちからかばつて吳れてゐるやうに受け取れたので、それが爲めに涌き出る自分のあまい淚を人知れず自分の胸に飲み込んだのである。

六

明けて三ケ日のあひだに尋ねて來たものと云つては、例のリヨウマチ患者が一回あつた切りで、その他には誰れもなかつた。それもその筈で、中田さんのほかには友人が獨りもないのだ。東京へ來てから、たまに治療をしてやりに出て行つたことのほかでは、たツた一度藩主の津輕伯爵を訪問しただけであつて——それも友人となつて吳れるには餘りにかけ隔つてる關係だ。

『東京のお正月ツて詰らないがんだ、な』と、母は娘にがツかりしたやうな言葉ぶりを發してゐた。

『そりやア、御親類づき合ひも、ね』と、お初は答へた、『友達づき合ひも、ね、ないのだすかい。ですから、御馳走なんかして置いたツて無駄よ。』

『それも却つて物入りがせんでえいがんかな？』

『………』賢三はそんな話を默つてにやり／＼しながら聽いてゐたのだが、ます／＼自分の寂しさを感ずるばかりであつた。三日の日に來なければならぬ患者が四日、五日になつても顏を見せないのを見ると、あんなに切れ離れがいい

やうに見せてゐても、こちらへ拂ふかねを惜しくなつたのでもあらうか？　それとも、たツた一回の說明暗示が利いて、もう直つたのかも知れない。自分としては、まだ自分の腕におぼえが殘つてるやうに思はれるので、その患者はきツと直つたのだと信じたかつた。同時に、また、かかる自分を信じて多くの依賴者が集つて來ない世の中と云ふものを呪はしかつた。

『どうせ隱してゐたツても、ね、長いあひだには分つてしまうことだから――』お初はその母が錢湯へ行つた留守に、ちちに向つてうちわ同士での見えを張ることなんかやめようと發議した。

『そだべ、そだべ』と、渠も容易に贊成した。『おらだきや苦しいばかりだはで。』そして巡査を志願してあることをも母にうち明けてしまつた。

『何をしたツて世の中だすかい』と云つて、母は別に氣にかけないやうすであつた。

正月の用意が每日ちびり〳〵と家族にばかり喰ひへらされて行つて、六日目になつた時、殘して置いてもどうせ無駄だからとあつて、その晩、母の發議で以つて中田さんをも呼んで、皆で一席の宴會をひらいた。酒は矢ツ張り母のおごりで、それを中田は大分にお相伴した。そしてその醉ひに乘じてその生まれ故鄕なる紀州の盆踊り歌などを無器用に歌つた。

すると、母は三味線をひきたくなつたかして、おほ家の小さい娘が持つてるのを借りて來させた。そして先づお初にそれを持たせたが、かの女はそれを膝の上でいじくりながら、

『もう、忘れてゐますさかい』と云つて、ただきまり惡さうにばかりした。

『では、借して御覽。』母は三味を娘から受け取ると、手早く調子を合はせて、口のうちでだが、端唄とやらをつづけて

二つばかり歌つた。が、賢三にはオルガンに合はせて歌ふ『君が代』やその他の小學唱歌のほかは耳慣れてゐないので、渠は冗談に首をふりながら、

『おれには全く日本の音樂ア分らぬ』と云つた。

『少しおッ母さんに教へて貰つたら、わたしも――』お初は母の下に置いた樂器をこわごわらしく手に取つて、ちよツと何かの曲を考へ考へひいてるやうであつたが、口には低い聲も出さなかつた。

いよ〳〵七日になつたので、賢三は試驗を受けに巡査教習所へ行つた。が、掛りの人にあたまからはね付けられてしまつた。

『君の目つきが餘りきよと〳〵してゐる。それに、あまりどもり過ぎる。巡査にはとても向かない。巡査はもツと大膽な人物でなければなれるものぢやアない』と云はれてだ。

『…………』渠はまた考へ込んでしまつた。ぢやア、どうしたらいいのだ？ 人まへに出てどもるのは決して自分の生れ付きではない。成るべく國のなまりを出さないやうに努めるのが、つい、さうなるのである。目つきだツてもさうだらう――尤も、自分はさう大膽な男だとはうぬぼれてゐないが、巡査ぐらゐになれないほどの卑怯ものではなからう。目はきよと〳〵してゐるかも知れないが、それは催眠術において患者の顔つきをよく注意する爲めに絶えず目をくばるその習慣が、或は、自分のくせとなつたのだらう。『それを――なんだ、馬鹿くさい――人物ができてゐないッ！』

『さう〳〵しないでも――』母は大して失望もしないで慰めて呉れた。

『…………』渠は獨りで部屋にゐる時、こツそり妻の手かがみを取つて自分の顔を寫して見た。生活上の心配の爲めに少し色が青くなつてるかと思はれるだけで、――長おもての顔にはりりツとしたうはひげもあつて、兩方の目はじツと落

ち付いて光つてゐる。この光りが患者に對する暗示力をうまく助けてゐるに相違はないのだ。して見ると、自分の心の引け味などがどこにもあらう筈はない。左りの鬢髮にわかしらがの一と固まりがあるので、それを隱くすやうに髮を眞ン中から分けてはゐるが、それはそれでかまはないではないか?

餘りに『氣さ悪りい』し、きまりが悪いし、二三日は中田と顏を合せても試驗の不結果などはまだ曖昧にしてゐた。

『何とか云ふて來ませんか』など云はれても、こちらはにが笑ひをしながら、

『まア、何とかなるべい』とばかり答へた。が、中田も亦郵便局が不首尾になつてしまつたのを知つた時、『實は、僕も巡査を落第でした』とうち明けた。

『僕はまた』と、中田は語つた、『郵便局に鼠が出て郵便物をかじると云ふ實例を擧げて、遞信省で出す雜誌に投書したのです。表題は「郵便局員の注意すべき事」と云ふのでしたが、一等賞を得ましたところ、局では僕が不都合にも自分のつとめてゐる局のあらを素ッ破拔いたと云ふのです。』

『分らないことを云ふものです、な』と、母はそれにも驚いてゐた。

『世間は一般に皆そんなものだべい。』こちらは斯う云つて失敗のあひ手ができたのをこころ丈夫に思つた。そして毎日、毎晩のやうに、向ふへ行くかこちらへ來るかして、無職同様の男がふたり顏をつき合はせては、何かいいかね儲けがないかと空しく語り合つた。が、もう、お初の腹も六ケ月になつてゐるし、何とか少しでも落ち付かせることにしなければならなかつた。

『若い時は苦勞した方が』と云ひ〳〵する母も、餘りたよりにならないことが分つた。さう云ふ言葉を楯に取つてゐるかのやうにして、苦しいのを見ながらも、なか〳〵かねの補助はして吳れない。自分の喰ひたい物を自分で買つて來て

酒のさかなにはするが、その娘にさへただ申しわけのおすそ分けをして呉れるだけだ、

『なか〱水くさいの、ね』と、お初も私かにこちらへその母のことを不平さうにささやいたことがある。

止むを得ず中田と相談して、ふたりの持つてる本を賣る爲め淺草の公園へ古本店を出すことにした。水族館のすぢ向ふには、ひるまを寒いから風が吹いてるにも拘らず、歌の本、鼠取り、ゴム風船、南京だま、目がね、金の入れ齒、かんじんよりにうるしを掛けた花立てなどを別々に賣つてゐた。その間にまじつて、しぶ紙を先づ地べたに廣げ、その上へ毛布を敷き、そしてふたりの本をばら〱に並べた。

中田のには文學書が多かつた。いまだに渠は散文詩を作つて雜誌などに投書してゐるので、こちらは、

『僕も國で歌の雜誌を出してゐましたが――』と云ふやうなことが、一つには、またこのふたりの貧乏生活を一段と結び付けるわけになつたのだ。こちらのにも歌や詩の本もあつたが、もとの名殘りとしては敎育書もあり、ここ一二年のには心理學に關するものが多かつた。

それらをずらりと並べて、かたみ替りに番をすることにした。大の男がこんな小い店にふたりもかかつてると見えては却つて價うちがないからであつた。中田がそこに坐わつてるあひだを、賢三は他の商賣人どものやうすを視察するつもりで公園内をぶら付いた。ところが、野師のやつてることが渠自身には一番おもしろかつた。たとへば、法律の本を賣つてる男は大學生の風をしてその本の効能を述べ立ててゐるうちに、家賃の貸し倒れの話などをする。

『借り主が家賃をためてなか〱に拂はない。家主は自分の家だから威張つてそれを追ひ出しまして、たまつた家賃の請求を裁判にかけた。すると、その裁判が六ケ月も七ケ月もかかつてやツと落着したかと思ひますと、何のことだ、こツちが負けになつた。それもその筈でして――法律によりますと、その家を立ちのかせるには先づ以つて三ケ月以前に

通知を發して置かねばならぬ。すべてさう云ふことが詳しく叮嚀に分るやうにこの書物には書いてありますから、たッた二十錢で人間一生の儲けができる。諸君、實に安いものではありませんか？』

『………』こちらは默つて、雜誌屋の店さきで雜誌を明けるやうにしてちよッと調べて見ると、定價五十錢としてあつた。それを二十錢でも恐らく十五六錢は儲かるだらう。

『一册もらをか？』田舍もの見たやうな男が代價を出して買つた。が、そのやうすをこちらが多少くろうと側のものとして觀察してゐると、決してほんとうのお客ではなかつた。同じ穴のむじならしかつた。かう云ふまわし者でもッと滑稽なのは、かたの凝りその他すべてからだの痛みに利く藥りを賣るのにあつた。人が大分にたかつた時を見すまして、

『わたしにも利きますだらうか』と云つて、とぼけたやうなお婆アさんがひとり横の方からおづ／＼と聲をかけた。

『あなたはどこが惡いのです？』

『ここですが、な。』かの女は兩手をおろして、それで以つて左右からをかしなところを示めした。

『わッはッは』と、何も知らないものは笑つた。

『いや、それはおかどの違ふ病氣だらうが、な。』藥り屋はすましたものだ。ちよッと笑ひながら、『この藥りはさう云ふところへは塗り込めませんよ。』

『わッはッは！』

『ここも痛むのです』と、お婆アさんはまたその兩手を自分のかた／＼の肩へ持つて行つた。

『いや、それには持つて來いだ。一つ拾錢安いものです。』

『………』さう云ふこともお客に對して一種のへたくそな暗示をかけてゐるのだと、賢三には愉快にうなづかれた。

そして自分の店へ立ち戻つて來ると、五六名の人だかりがあつたので、自分も客のふりをして作文の本を一つひねくつて見た。

『ぢやア、負けときます――全くそれではもとが切れますが』と、中田も如才なくとぼけてゐた。

『………』そのおかげで、お客どもの目をかすめる爲め、また急いで一とまわりして來なければならなかつた。そして再び戻つて來ると、自分のむかし壹圓八拾錢も出して買つたところの民法論がたツた五十錢で賣れてた。

『安かつたけれど、仕かたがなからう』と、中田は附け加へた。

『さだべか？』斯う云つて、こちらはちよツと顏をそむけた。これには少しく自分の不服を云ひ含めたのであつたけれども、この簡單な言葉の意味が通じなかつたかして紀州生まれの中田は平氣でゐた。が、こちらはまた渠の平氣でゐるのを、ひよツとすると、高く賣つて置きながら、二三十錢をこツそり懷中したのではないか知らんと疑はれた。で、中田と入れ替つてから、こちらも渠の大きな國語辭典を六十五錢に賣つて、たツた四十五錢にしかならなかつたと報告した。

そんなことも幸ひに知れないで、その翌日も一緒に出たが、中田の方は二日目のがすむと、

『どうせ賣れただけ喰つてしもつて、もとにも何もならぬから、やめちや』と云つて、出るのを斷念してしまつた。

『………』賢三はそれにも拘はらず獨りで三日目にも出て行つて見たが、氣のせいか、獨りだけではお客も餘り立たないやうだし、何だか自分ばかりが馬鹿らしく人にじろ〳〵顏を見られるやうだしして、とても、この寒さに堪へ切れなかつた。そしてどことなくただ〳〵心ぼそくなつたので、いつもの時間よりも早くそこを切り上げて歸つて來た。

七

然し、何かを企てて見なければ自分も安心してゐられないし、妻をも安心させて置けないので、これも矢ツ張り自分の

催眠術から敷衍したところの、
『自由自在』と割り註した『氣合術心得』と云ふ物を書いた。そして賢三は中田に頼んで印刷屋へ持つて行つて貰つた。そしてそれが思つたよりも早くでき上つて來た時には、その千部に對してかねが一文だツてなかつた。
『いま無くてあるから、今度渡す』と云つて小僧を歸した。が、その小僧は直ぐ引ッ返して來て、
『そんなら印刷物をそれまで預つて置きます』と云つた。
その時には、もう、丁度二百部ばかりを中田とふたりして折つてしまつてた。
『これだけあつたら結構ぢやないか』と、中田に云はれたので、賢三はその氣になつて、あとの八百を何喰はぬ顔して返してやつた。
新聞大の紙を三つに折つて、たツた十六頁の刷り物だが、これに定價三十錢と附けて、實際には十五錢に賣らうとするのだ。それにはいろんな用意があつた。かたな――かな棒――かわら――。そしてほかの人のやつてるふり合ひを見ても、かたなは白ざやでなければ面白くないのだが、生憎、うちに持ち合はせのは黒ざやであつて、それを取りかへるだけの費用もなかつた。
『…………』賢三はそれを妹にちよッと立てかへて置いて貰ひたかつたのだが、かの女はその娘と目くばせして、
『このままでえいいねッか、ね』と答へた。そしてそのやうすがこちらの必迫に何等の同情もなささうに見えた。
『では、ふくろを縫つて呉れないか?』渠は斯うむッつりしてお初に命令した。そしてかの女は急いでうこん木綿の袋を縫つた。
『…………』これを拔いて見せる時には『えいッ』と一度振つたりして、紙などを切つて見せてから、親ゆびと人さし

ゆびとにかたなの脊と刃とを挟んでかたなを垂らし、段々としたへすべらせて行くと、挟んでる兩ゆび、段々とさきの方へあがつて行く。惡辣な野師になると、その刃を指が切れないやうに途中まであらかじめ鈍らせ置いて、紙の切れるさきの方へ來ると直ぐ、ちよツと指を離してかなたの兩はらをつまんでしまう。が、氣を落ち付けてじようずにやれば、正直にやつても決して指のはらを切るやうな恐れはない。この秘訣としては、

『急がず、あわてず、かなたを搖れぬやうにして、じわり〳〵としごいて行くべし。そこに精神が指の腹に緊張して決して切れるものにあらず』と云ふ文句を入れた。

次ぎには、二本のかな棒だが――太い二尺五寸の方のは磐石力を證明する爲めに使ふのである。かた手に棒の眞ン中を握つてかまへると、大の男が二人で兩端をちからまかせに押しても泰然として動かないのである。このかまへのことをこの本に斯う書き込んだ、――

『棒を握つた手は握りを下の方へ向けて十分に突き出し、他の手を下向きに左りの腰に當て、右足を前方へ折つて左り足を十分に後方の地上へ踏みこたへべし。斯くの如く構へる時は、萬人の力を以つて棒の兩端を押し來たるとも、子供一人で磐石の如く能く是を支ふることを得べし。』

また、ほそい方の二尺棒はこれを火に熱して眞ツ赤にし、そしてこれを手でぢかに握りしごくのであるが、

『はツと思ひ切り氣合ひをかけてしごけば、何のこともなし。但し、この時には必らず燒けどうはせぬと云ふ信念を有せざるべからず。この試探を經へると直ぐその手を水につければ、手を裏に些かのあとも殘らぬものなり。』

次ぎに、かわらで――これは自分で自分のひたへにうち付けて割つて見せるのである。その秘訣と云つては、これも讀ませてしまへば何でもないことだが、

『かわらはその平面を額にぴたりと當たるやうにせざるべからず。若し少しでも額と瓦の平面との間に角度を置いて打たば、必らず摺り剝き傷を生ぜしむる爲め最も注意すべし。兩方の平面がぴたりと當たりさへすれば、如何に强く當たるとも擦傷を生ぜぬものなり。』

すべてさう云ふことを書き込んであるだけだから、本を買はせるまでは成るべく秘密にして、こちらが先づその實例――と云つても滅多に六ケしいのはせず、一番自分にも容易なのでも――を見せてやらなければならぬのである。その爲めの棒やかたなだが、新らしいかわらだけがちよツと見つからなかつた。

『どうしたきやよかべか？』渠は一緒に行つて貰ふ中田にこのことも相談した。すると、中田は何の苦もなささうに、

『あすこのを一つ盜んで來ようぢやないか』と云つて、近處に一ヶ所かわら屋があることを告げた。

『そだべ、そだべ！』こちらはそれに乘つてうち喜んだ。

『ぬすとしないでもえいがんに』と、母は少しおそろしさうにしてとめた、『買うて來たほが――？』

『一枚や二枚、分らないだらうすかい――』妻は別に氣にもしなかつた。

『…………』賢三は中田と一緒に行つて、さきの物を夜にまぎれて盜んだが、そこの物に一つ手がさわつたかと思ふと直ぐ、先づ自分は何も云はないで驅け出した。そして半丁ばかり戾つて來たところで、あとからこれもおツ驅けて來た中田と一緒になつて見ると、自分はたツた一つしかひらたい瓦を持つてゐないのに、一方は三つ持つてゐた。そして、

『どうせ盜むなら、一つも三つも同じぢや』と、息を切らしながら云つた。

『君はえらい！』こちらは斯う半ば獨り言にしたが、自分の心では一方を自分の相棒としてまことに賴母しいと思つた。

さて、いよ／＼その日となつた。中田は相變らず書生風のままであつたけれども、賢三は俄かづくりの野師その物の

本人として多少でも違つた風をしなければならなかつた。ところが、茶盆じまのした着に千すぢのうは衣や羽織（すべてガス）を着込んで、セルのはかまはまだしもいいけれども、

『帽子だけはおかしいさかいそれをおやめなされ』と、母は忠告した。

『さうですよ、見ツともないから。』『妻も訴へるやうにしてとめた。

『そんなに、君、いばだに見べか？』斯う中田に云つて、渠自身は今一度トルコ帽を澄ましてかぶり直して見た。氣安い患者のうちで貰つて來た切り、かぶりもしないでしまひ込んであつたのを思ひ出して、自分はこんな時にこそそれをかぶつて行くつもりになつてゐた。

『然し』と、中田は答へた、『おツ母さん達がいやがつてとめるものをあながちかぶつて行くにも及ぶまい。』

『では、やめだ。』賢三もとうとうそれは斷念して、玄關の土間へおりてから、中折れを持つて來させた。如何に自信あることをしに行くにしても、自分に補助者がついてるのを一層たよりに思つて、久し振りの元氣を以つて家を出た。そして『あべ、あべ』と中田を自分からうながしながら、自分も分け持つてゐる荷物をさげて足を電車停留所へ急がせた。

八

殊に寒い日で、おまけに曇つてはゐたけれども、丁度、ひる頃に淺草公園へ着いた。かみなり門を這入つて、觀音堂を向つて左りへ行くその左りの角（乃ち、水族館があるがわの一番觀音堂に近いところ）が最も多くの人を喰ひとめるに都合のいい場所だ。こちらもそこを當てて來たのだが、既に他の野師が占領してゐた。

『困つた、な。』中田はこちらを返り見て私かにささやいた。

『そだ、な』と、賢三も低い聲で苦笑しながら『今少し早く來てあつたへば——』

これだけしか言葉は取りかはさなかつた。そして榮は中田と共に可なり重い荷を分け持ちながら、別々に突ッ立つて、見物のやうになつて見物の後ろからさしのぞいて見た。

四十餘りの男だが、かんぬしのやうなかんむりを戴き、辯護士風のころもで胸に白いすぢのあるのを着込んで、こよみを賣つてるのだ。地面へ圓を畫がいて、その中へ、キのへ、キのトとか、カのト、カのへとか書き、それを說明しながら、何々に當たるものは何の何年生まれで、本年は何歲であるなどと云つてゐる。

『わたしは明治八年の生まれで、本年取つて四十五才ですが、性はどうでしよう』と尋ねたものや、

『一つ吳れ』と、わざとらしく意張つて買ふものがあつても、それはすべてうちわのものらしかつた。

『定價は五十錢ですが、けふは特別のお負けとして僅かに二十錢』と云ふのが、暫らく客待ちがほにしてゐたけれども、ほんとうのお客を得なかつた。そして人の顏々がまた新らしくなつたのを見て、また同じやうな說明を初めた。その辯舌だけは如何にも流暢に達者で、とてもこちらが眞似さへもできようとは思へない。

『…………』こちらは、つい、それに釣り込まれて、われ知らずつま立ちをして、人の後ろからのぞき込んでゐた。そして自分の手の重いのに氣が付くと、自分もあア云ふ風にしてこのさげてる荷を開展したいのであつた。が、どう云ふやうにすればその仲間へ入れて吳れるのか、それが分らなかつた。

そのうちに、そのこよみ賣りは、

『どうもこれぢやア商賣になりませんが』と云つた、『あとにまだ澤山順番の人が控へてをりますから、わたくしはお若いのとさし替はります。』

『諸君、僕のは眞實な法律書であります。』全く澄つた口調を以つて、殆どすきも見せず直ぐどこからか現はれ出でて喋りかけた人々をも喰ひとめたのは、例の大學生風の男だ。

『…………』さう云ふ具合ひでは、とてもこちらが飛び入りをするをりもないのであつた。さうかと云つて、重い物をさげていつまでも順番の終はるのを待つてもゐられなかつた。低い聲で『まア、一と休みすべア』と告げて、中田と共に奥の方へ進み、觀音堂うらの噴水のそばへ行つて、荷をおろし、そこの鐵柵にもたれかかつた。

ふたりの目前をはすかひに、千束町の方へ行く人とかみなり門の方へ行く人とが急がしいはたのをさを成して往き來してゐる。が、そんなに寒さうにして無頓着に過ぎて行く人々にも何だかこちらの顏を見られるのを嫌ひな氣がして、賢三は暫らく中田に向つて自分からの發言をすることもできなかつた。

あたまのうへを氣まぐれに仰ぎ見ると、たきないてふの木がそびえてゐて、その冬枯れしてゐる高いえだえだにから風が當つてひゆうひゆう云つてゐる。そしてセルの袴やもも引きをはいてゐても、地べたを這ふ風がまた下から吹き込んで自分のからだぢうをふるえさせた。

自分がつれて來た中田のことだから、自分から先づどうすべきかの相談をかけるべきであるが、發言しようとすると、それに先き立つて自分の齒が奥齒からがくがくし初めるのだ。但し、これは寒さの爲めばかりではなかつた。

『あいべ、あいべ』など氣安く云つて家を出た時の元氣が自分に今やなくなつてゐた。折角たよりにしてつれて來た中田も、こちらが物を云はないのをしほにして默つてるのは、てツきり、その方が先づ以つてがツかりしたらしいからである。して見ると、こちらも何もできなくなるのは當り前ではないか——丁度、おもい荷物をおろしてがツかりしたやうにすべてのことも?

さうだ、それに違ひなかつた。默つてると、中田は多少こちらを馬鹿にしたやうな、甚だたよりない口調で、突然斯う尋ねた、

『君はほんとに鐵の棒をしごく勇氣があるか？』

『…………』鐵の棒と云へば、ただの棒ではなからう。必らず赤く熱した棒であらう。そのことをさう、全くあかの他人のやうになつて面と向つて聽き糺されると、實は、こちらもただ／＼固くなつてしまつて、やアわりとあたたかに自分の確信をいだいて見せることができないのである。こちらは自分の發見だと思ふ催眠術的氣合ひの眞理から云つて――これはまだ實行して見たことはないのだが――熱鐵をしごくことでも、かなたの刄を渡ることでも、その他なんでも皆、やつてできないわけはないと云ふ自信がある。然し、それをそばにゐて手助けして呉れる約束で來た者までが、先づ、自分よりも機敏な野師どもの爲めに何もしないうちから厭倒されてしまつては、こちらも獨りで張り合ひぬけがするではないか？　で、家を出る時には、自分の強い確信と共に持つて出たと思ふ勇氣だが、それが實はいつのまにか無くなつてゐるのをおぼえた。一つには、人は皆あア云ふ風に辯舌が達者なのに、自分は國なまりが意識的に邪魔になつて、どうもうまく口が利けぬと云ふ豫感がさきに立つからである。さうかと云つて、然し、この場合、苟しくもこれで商買をしようと云ふ自分として、その通りには答へられなかつた。わざとにもから元氣をつけて、簡單に尤もらしく、

『あるでば！』

『では、やつて見るか？』

『うん、やるでば！』然し、實際は、そんなことまでして見せるには及ばないと思つて、火をおこす用意などを怠つて來たのだ。どんなおほ野師でもさう六ケしいことはわざ／＼しこ見せないので――。

で、火鉢をどこかで工面して來るからと云つて、中口には荷物の番をさせた。そしてまた他の野師のゐる前をとほると、私かにどんなことをしてゐるか見て置きたかつた。またのぞいて見ると、ごろつき書生のやうなものが十人ばかり、皆柔道の稽古着をつけて、これも鐵の棒をやつてゐた。

『この棒を獨りでに立てて見せろとおつしやるなら、いつにても立てて見せます』など云つてゐる。

『……』そんなことも氣合ひの極致に至れば理論上できないでもなからう。が、どんな名人でもそれは——できても——實際には一生に何遍と數へるほどしか實行すまいとこちらが思つてると、果してその男は棒の握りをひよいと上へ放してその目の前を離れた方へ棒を引ツくり返し、おのれの方へ飛んで來たその一端をちよいとその手に受け取つた。

それから、石をうへへ投げてその方へ顔をあふ向け、鼻のさきに於いて棒で以つてじようずに受けとめた。それから、また、賣り本の或ページをひらき、そこを見物中の子供を一名えらんでこッそり見せて讀ませ、

『分つたか？　分つたら、さア、やつて見ろ。決していいこともあぶないこともねい——大丈夫だ。』

『……』こちらが見てゐると、その子供は微笑しながら見物の輪をはづれて中へ這入り、見物に向つて自分の喉を突き出した。そしてまた別な見物人の一名をして棒を以つてその喉を突かせた。それでもあとへはすさらないと云ふのである。そのかまへは丁度こちらが棒の眞ン中を握つて突き出し、その兩端を見物に押させようとする時のかまへと同じだが、ここでは子供が少しでもちから負けをしてあとへ引く氣味になると、後ろにゐる男がそれと目に立たないやうに指のさきで加勢した。のみならず、その子供と云ふのもうちわの者でなければさう大膽に喉を貸しはしなかつたらう。

九

次ぎには、同じ組のものが石油を入れた竹づつのさきに火をともし、そのもえる火で以つて兩方の腕などをこするのだけれども、少しも燒けどうをしないのである。これも容易にできることで、こちらも自分が印刷して持つて來た本に書き入れてある。

『から云ふ秘密はすべてこの本に』がそこでは定價三十錢を十錢までに下げてゐた。して見ると、こちらのを十五錢で賣らうと考へてゐたのは高過ぎるのであつた。

その棒の組がすんでしまうと、そのあとへ直ぐまた源水のこま廻はしが現はれた。それは見てゐたくもないので、賢三はそのまま中田の待つてゐるところへ戻つて行つた。そして、

『とても割り込めさうではなくてあるべ』と告げた。そして一方が火鉢のことに就いて問はないのを丁度仕合はせだと思つた。もう、自分としてはやる氣が全くなくなつてゐたのである。あんなごろつき書生どもとこちらは獨りで當の競爭をしなければならぬかと云ふことだけを考へて見ても、相手のおそろしさが先きに立つた。そして、きツと、自分の見物に向つてしやべり出さうとする所の口が、丁度この噴水のはたでがく／＼してゐるやうに、矢ツ張り、その時もがく／＼するだらうと云ふことが像想された。そしてまた寒さと云ふものも人を不斷よりも卑怯にみち引くところの一つの暗示だと云ひたかつた。

ところが、中田はそれをまだ聽かないのに心で感づいてか、そんなことでは承知しないぞとでも云ふやうな顔つきをして、

『割り込め――なければ――別な――ところで――やつても――えいぢやないか』と、ぽつりぽつり言葉を切りながら、むツつりとして云つた。餘ほど不平らしかつた。

『そだべア。』こちらは苦笑を見せてだか、ことと更らに手輕く贊成するふりをした。暫らくまを置いてから、中田の機嫌を取るつもりの笑ひを——自分の顏へきまで出たかと思はれるほど、にやりと——して、『では、ねい、針を一つ用意さないでば』と云つた。

自分がやらうとしてゐたことを他人もやつてるのが分つた時、鐵棒などはやめて、手に大きな針を突き刺すことをしよう。そしてそれでも血の出ないのを見せれば、人は一層驚くだらうと考へた。その思ひ付きに必要な針を、今、買つて來るからと云つて、再び噴水のはたを離れて行つたのだが——もう、自分はほんのただ中田のそばを逃げてゐて、時間の過ぎるのを待つのであつた。火鉢の時はまだ多少の本氣があつて中途からそれが消えたのだけれども、今度は全く初めからうその口實に過ぎなかつた。

若し近處にぐづ〳〵してゐるのを中田に見られては、今度こそはおこり出すかも知れぬと思はれたので、わざと渠によく見えるやうに眞ッ直ぐにずん〳〵と觀音堂わきをとほつて、かみなり門を出た。そして直ぐ門ぞとに在る御飯つき三品四十五錢の料理店の少しさきの角から右へまがり、その通りの飾り窓や大道あきんどの店を見ながら、ゆッくりと、ずッと活動寫眞小屋の多くある一廓へ出た。

そして兩がはの繪看板を仰向いて一つびとつ見て歩き、それから、その方の大きな池のはたなる屋臺みせの喰ひ物のいろ〳〵や、江川の玉乘りの看板などを見てゐると、ぷんと香ばしい雀燒きのにほひなどが鼻を突いて、忘れてゐた食慾が動き出して來た。そして自分らはけさ餘り元氣づいて、はや晝さへ喰つて來なかつたことが思ひ出された。

『たべて行けばえいがいに』と云ふ母の新潟辯をも亦思ひ出したが、自分はそれに對して、

『よかべ、よかべ』と、相變らず氣安い國なまりを以つて答へた。

もんなだからこそあれでもかまはないだらうが、自分は男子として、而も野師や大道あきんどにならうとするものとして、これではどうしても困るのである。けれども、それが直せない。そして直さうとすれば、それだけ言葉がもつれて物を云ひにくくなる。それが苦しいばかりではなく、それが爲めに自分を生れ付きよりも一層卑怯にする。けふのことだツて、云ひかへれば、他の狡猾な野師どもの爲めに自分らは店を明けぬうちから壓倒されたのだ、威壓されたのだ。そして儲けたものはただこの空腹に過ぎなかつた。自分ひとりでこツそり何か安い物を喰つてやらうかとも考へたけれども、そのかねさへこころ細かつた。

然し、考へて俄かに嬉しくなつたことには、もう、中田もいい加減に往生してゐる筈だ。ぱツと世界が明るくなつたかと思ふと、自分の周圍にどこもかも電氣がついたのである。

十二階の前へ突き當つてからまた右へまがり、花屋敷の前をとほつて戻つて行くと、果して中田も斷念したと見え、むツつりとしてだが、こちらを見るが早いか、反對の横を向いて、

『もう、歸らうぢやないか』と云つた。

『まいねい、まいねい！　けふは、もう、歸るべア。』

また荷物を別々に分け持ちしてそこを引き上げた。が、觀音堂の後ろに當つては、今ついた瓦斯燈の光りをたよりにして、まだ一名の藥り賣りが——前に見たのとはまた違ふが——肩の凝り、痛みどめのくすりに多少の人を集めてゐた。そして暫らくこちらが見てゐるうちに、十錢のものを二つも賣つた。が、それを買つたものはよく見るともうちわのまわし者とは見えなかつた。して見ると、いまだに殘つてゐるのも割り合に賣れる爲めで——恐らく、けふの野師どものうちでいい儲をしたのは、

「このすとだけだべか？」

『斯うして見れば、實際、何が儲かるか分らぬ、なア』と、中田も歩きながら、感心したやうに云つた。

『…………』こちらもまだ初めぬ商買をだが、もう、私かにそんなのに乘り替へようと考へてゐた。そして電車の乘り場までやつて來た。

電車に乘つて、ふツくらした上へ腰をかけると、渠は自分の精神ばかりでなく、肉體までもがツかりしてゐるのをおぼえた。そしてこんなに意久地なく無駄ぼねばかりをたび〳〵折つてゐてはと、俄かに泣き出したくなつた。

『わたしは、もう、おなかの兒が六ケ月ですから、ね』と、ゆふべ、自分の妻がその母のぐツすり寢入つた時に自分に語つたのを思ひ出したからである。

そら、兒が生まれた――かねはない！　その時の用意がこんなことではいつできるか分らないのであつた。いや、自分は腹の大きくなつた妻と共に――質屋などを當てにしないと――けふ、あすをも喰へないのだ。

一〇

氣合術心得の印刷物はおもて向きではすツかり返したことになつてるので、かねを拂はないでもよからうけれども、中田に對するかけ引きと妻やその母に向つての遠慮との爲め、渠はその翌日も淺草へ行つて見たいやうに語つた。そしてあすにも何かのきツかけを得て、初めてそれを斷念して見せることにしたかつた。

すると、ひるまから怪しいとも思へたそらが、幸ひにも、その夜なかから雪になつた。そして三日間も降りつづいた。

そのあひだに、蝦蟇（がま）仙人と云ふのが場末のよせへ出て、いろ〳〵の不思議を演じて見せてから、うまく藥りを客に買はせてゐるが、ひび、あかぎれを直す藥りだと云ふことを賢三は錢湯へ行つて聽き込んで來た。

『それは確かにジャガいもにうどん粉をまぜた物だすかい』と、母はまだ見もしないのに直ぐ云ひ當てたのである。

『……………』賢三はそれをまた不思議に思つたので、母を說いて自分と自分の妻とをそのよせへおごらせた。ついでに、中田もついて行つた。そしてその仙人の藥りを買つて來てよく調べて見ると、果して母の云ふ通りであつた。『どうして知つたべか』と、自分は母にも聽えるやうに自分の妻に聽いて見た。

『そりや越後の寺では』と、母が直接に受けて、『人助けによう作ります。』

『そだべか？ そんなら、おれもそれをやるべ。』斯う云つて、やツとのことで、氣合術の本賣りよりは藥りの方が見込みの多いことを云ふことができた。それから、母に手傳つて貰つて簡單なひび藥りを製造した。そしてしじみ屋からあさりのかひのからを貰つて來て、これに詰め、一とかひ十錢とした。

もう、中田の相手を借りなかつた。たとへ一緒に行つても、相手が先づこころを弱くすれば、それが暗示のやうになつて、こちらまでが卑怯を見せるからである。渠は天氣がよくなるのを待つて、今度は獨りでまた淺草公園や他所の夜店へ出た。そして見物に向つて熱鐵をやがてしごいて見せる、見せると云つては、いつまでもただ眞ツ黑な鐵の棒をしごきつつ、その藥りの効能を說いた。たまには少し賣れる日もあるが、とてもうまい商賣にはならぬことが分つたので、それをも一週間ばかりでやめてしまつた。

その一週間を渠は自分でも餘ほど俄かに中田に對して冷淡であつたことが分つた。そしてそれが分つたのは、また自分獨りでは矢ツ張りたよるべき相談相手がなくて、まことにこころ寂しいのが分つたからである。母は母自身のことばかりしてゐるし、妻はます〱姙娠の爲めにおもやつれまでがして來た。

『確かに男の子に違ひない』と、母は云つてゐる。

『…………』けれども、やがて生まれるときまつてるその兒に對しての用意などはまだ少しもできて行かないのであつた。

『早く何かしないでは、ね――』妻に斯う遠慮がちに云はれれば云はれるほど、渠は寧ろ何とかもツときつく自分を叱つて貰ひたかつた。そしてこの叱りの籠つた意見を中田さんから聽かれるやうな氣がして、再び一週間以前の通りに接近して行つた。

『…………』この接近で思ひ出すと、さうだ！　こちらが自分の術を向ふにかけようとした時、中田は少しもその兩手に持たせられた火ばしと火ばしとを接近させないでしまつたツけが――。

『印刷屋の註文取りをやつて見たからどうです』と、今度の中田さんは注意して呉れた。

『それもよかべか、君と一緒なら――』どうも自分はそんな慣れない仕事を自分だけではやれようと思へなかつた。渠なら、一度、その友人のところで活字をいじくつたと云ふ經驗もあるのだが――。

そのうちに、中田はかねを工面して國へ歸つてしまつた。そのあとで賢三は自分自身で小いあら本屋をやらうと云ふことを思ひ付いたが、それには十圓と三十圓に對する二人の保證人を立てなければならなかつた。小口の方はおほ家さんに頼むことにしたが、大きい方になつて呉れる人の當てがないので、中田がかねを拵らへて來ると云ふのをたよりにして、もう、歸つてはゐないか、まだか〳〵と、何度も活字を持つてゐるその友人のところへ尋ねに行つた。そしてやツと歸つて來たのに會つて見ると、中田自身の金策もあてがはづれて、ほんの、ただ小さい印刷屋へ割り込むことになつただけであるさうだ。そして前とは打つて變つた他人口調で、

『君は假りに、まア、以前のとは別な郵便局へでもつとめたらどうです？』

『さうしましようか、な』と、こちらもまだ親しみのない人に對するやうな言葉を使つた。實に、自分はそんな人にたより切つてかねの話をしたのがその場で直ぐ後悔にもなつた。

『そのおつもりなら、僕の知つてる人がをりますから、これから印刷所へ行くついでに寄つて紹介しましよう。』

『…………』別によろしく頼むとは返事しなかつたが、中田が用ありげに立ち上つたので、こちらもそれについて其の友人の家を出た。そして渠の知人がゐると云ふ局の前まで來たが、去年の暮れに於けることを思ひ出すと、たとへ別な局ではあつても、這入る氣にはなれなかつた。

暫らく一緒に立ちどまつてたあとで、中田が先づその前を歩き出したので、こちらもまたついて行つた。すると、やがて印刷屋の前へ來たところ、こちらがまだ何も云はないうちに、向ふは、

『では、ここで僕は失敬します』と云つて、そのうちへこちらを見向きもしないで這入つてしまつた。

『…………』賢三はなほ暫らくぼんやりとして、まだ云ひ殘したことがあるやうに思ひながら、そこに突ッ立つてゐた。が、ふとわれに歸ると急に自分はゐても立つてもゐられない氣がした。たツたひとりの心だよりにも見放されたのだ。そしてそれも止むを得ない、自分の少し調子がいいと思つた時には、自分もこちらから思はず渠をおろそかにした。

ぞツと自分は身ぶるひをした。そして、『何をしたッて世の中だ、すかい』と母が云つたその世の中は、もう、全く自分の獨りぼツちだと云ふ覺悟を得た。

人を怒つて見る氣にもなれないで、足を自分の家の方へ向けた。そしてあら本屋をひらけなければ、また大道のふる本賣りにでもならうと決心した。

――大正八年五月廿四日――

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　京橋區西紺屋町　良明堂
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

〇定價　金四拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數／國別	內國	外國
六册	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二册	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信頼社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢　（集金委託料及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正八年五月三十一日印刷納本
大正八年六月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（長小石川一四四　小石川三四二〇）電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.